

安仁屋トゥンヤマ遺跡

一下級下仕官隊舎建設に伴う緊急発掘調査報告一

1992年3月

沖縄県教育委員会



上：発掘区の状況 下：検出されたビット群

序

本報告書は宜野湾市所在の米軍基地（キャンプ・フォスター）内にある安仁屋トゥンヤマ遺跡の調査成果をまとめたものであります。

近年、世界的な軍事情勢のあわただしい変動の中、県内に所在する米軍基地においても宅地造成や燃料貯蔵タンク設置、さらには建物の建て替えなどの諸開発が多くなってきています。このような状況はリゾート開発などの大型開発の波の中にある県内各地の状況と似てきており土地に根ざした埋蔵文化財の破壊が危惧されています。このような状況の中、基地内にある埋蔵文化財の取り扱いについての協議・調整も多くなってきており、当該市町村で基地内の文化財の把握にとりくんでいます。

本報告に収めた安仁屋トゥンヤマ遺跡も隊舎建設に伴うもので、破壊される部分に限って記録保存の措置を講じたものであります。発掘調査は平成2・3年度の2年度に亘って実施されました。

本遺跡の所在する地域は戦前安仁屋部落があったところであり、近くに押所もあると聞いております。発掘調査の結果、一帯はかなり造成されており、旧来の地形が大きく変わっていることやグスク～現代までの生活の痕跡が残されていることがわかり、かなり古い時期から生活の場として利用されていたことが判明しています。

このような成果をまとめた本報告書が、文化財の記録保存としての任はもとより、教育・文化および学術研究の資料として、また、開発協議・調整の資料として広く活用されることになれば幸いです。

末筆になりましたが、発掘調査はもとより資料整理の面で御指導・御助言を賜りました各先生方、御協力をいただいた宜野湾市教育委員会および地元関係者に対し、厚くお礼申しあげる次第であります。

平成4年3月

沖縄県教育委員会

教育長 津留健二

例　　言

1. 本報告書は平成2・3年度事業として実施した「安仁屋トゥンヤマ遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査は宜野湾市の米軍基地（キャンプ・フォスター）内における下級下士官の隊舎建設に伴うもので、那覇防衛施設局の委託を受けて沖縄県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際し、宜野湾市教育委員会の協力を得た。
4. 本書に掲載した1/2500地形図は宜野湾市発行のものを使用した。また、グリッド設定図は隊舎建設の一般平面図（1/300）に加筆したものである。
5. 磁器（白磁・染付）、獸・魚骨、石質の同定は下記の方々による。記して感謝申しあげる。

磁　　器　　手塚　直樹（鎌倉考古学研究所所長）

獸・魚骨　　金子　浩昌（早稲田大学）

石　　質　　神谷　厚昭（県立那覇高等学校教諭）

なお、本土産陶磁器については大橋康二氏（九州陶磁文化館）の御教示を得た。明記して感謝申しあげる。

6. 本書の執筆は下記のように分担し、編集は大城聖子の協力を得て島袋が行なった。

大城　聖子　　第2章、第4章第3節ナ・ノ

島袋　　洋　　第1章、第3章、第4章第1節・第2節・第3節イ～ネ・ラ～ヰ・オ

7. ピット内出土遺物については、時間の都合で割愛した。後日あらためて報告したい。

8. 発掘調査で得られた資料はすべて沖縄県教育庁文化課資料室に保管されている。

目 次

序

例 言

第1章 調査に至る経緯	1
a. 調査に至る経緯	1
b. 調査の体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章 調査経過	5
第4章 調査の概要	9
第1節 層 序	9
第2節 遺 構	13
第3節 出土遺物	21
イ. 青 磁	22
ロ. 白 磁	36
ハ. 染 付	43
ニ. 褐釉陶器	53
ホ. 瑞璃釉	55
ヘ. タイ陶器	55
ト. 本土産陶磁器	56
チ. 須恵器	61
リ. 沖縄産陶器	66
ヌ. 土 器	87
ル. 陶質土器	95
ヲ. 瓦質土器	102
ワ. 土 製 品	102
カ. 貝 製 品	102
ヨ. 骨 製 品	102
タ. 玉	103
レ. 砥	103
ソ. 石 製 品	103
ツ. 滑石 製 品	103
ネ. 石 器	106
ナ. 円盤状 製 品	113
ラ. 煙 管	114
ン. 鉄 製 品	118
ウ. 青銅 製 品	118
ヰ. 古 錢	118
ノ. 貝 類	120
オ. 脊椎動物 遺体	122
第5章 調査の成果と今後の課題	126

挿図目次

第1図 安仁屋トゥンヤマ遺跡と周辺の遺跡分布	4
第2図 発掘区（斜線）とグリット設定	7
第3図 検出された遺構の配置	8
第4図 層序（Dライン東壁）	10
第5図 層序	11
第6図 溝状遺構上部	14
第7図 溝状遺構下部	15
第8図 土留め石積みと上段のピット群	16
第9図 下段のピット群	17
第10図 青磁碗（第1類：1～11、第2類：12～16、第3類：17・18、第4類：19・20）	25
第11図 青磁碗（第4類：21～25、第5類：26～29、第6類：30～33）	27
第12図 青磁碗 底部	31
第13図 青磁皿	33
第14図 青磁（盤：71～73、壺：75・76、香炉：78）	35
第15図 白磁碗（a：1～7、b：8～20、c：21～25）	37
第16図 白磁碗d（a種：26～34、b種：35～46）	39
第17図 白磁（皿：47～59、杯：60・61、瓶：62・63）	42
第18図 染付碗（a種：1～12、b種：13～17）	45
第19図 染付碗（c種）	47
第20図 染付（碗：31～42、鉢：43）	49
第21図 染付（皿：44～57、杯：58～61、合子：62、瓶：63・64）	51
第22図 褐釉陶器	54
第23図 瑞穂釉：1、三彩：2、緑釉：3、タイ産鉄絵：4・5	55
第24図 肥前系（染付：1～7・9・13・15、白磁瓶：16～18）伊万里系（染付皿：8、瓶：14）	58
第25図 唐津系（碗：19～21）・肥前系（碗：22～26）、瀬戸・美濃系：27、产地不明：28	60
第26図 須恵器壺（口縁部：1～5、胴部：6～15）	62
第27図 須恵器（壺胴部：16～23、壺底部：25～28、碗：24）	63
第28図 須恵器壺 底部	64
第29図 灰釉陶器（碗：1～19、鉢：20・21、蓋：22・23）	67
第30図 白釉陶器（小碗：1～17、碗：18～25）	71
第31図 黒釉陶器（1～23）、鉄釉陶器（24・25）、掛分け（26～34）	75

第32図 無釉焼き締め陶器 壺・瓶類	77
第33図 無釉焼き締め陶器 水甕	78
第34図 無釉焼き締め陶器 底部	79
第35図 無釉焼き締め陶器 (手水鉢: 39、こね鉢: 40~42、香炉: 43~46)	80
第36図 摺り鉢a種	83
第37図 摺り鉢 (a種: 15~19、b種: 12~14)	84
第38図 摺り鉢 (a種: 20・23・24、b種: 21・22・25・26)	85
第39図 摺り鉢底部 (a種: 28~31・33・35、b種: 27・32・34・37、不明: 36)	86
第40図 第I類	88
第41図 第II類鍋形 (第1種a: 4・5・9~11、第1種b: 6~8、第2種a: 12~19)	91
第42図 第II類第2種a (鍋形: 20~22、壺形: 23~31)	93
第43図 第II類第2種a: 32~37、第2種b: 38~43	94
第44図 陶質土器鍋	97
第45図 陶質土器 (火舍: 18~31、手水鉢: 32~34)	99
第46図 陶質土器 (瓶: 35・急須: 36~49) 瓦質土器: 50・51	101
第47図 土製品: 1、貝製品: 2、骨製品: 3・4、玉: 5、硯: 6、石製品: 7、滑石: 8~12	105
第48図 たたき石	108
第49図 磨り石: 7~9、砥石: 10~12	109
第50図 凹み石: 13・14、石皿: 15・16	111
第51図 用途不明	112
第52図 円盤状製品A類: 1~6、B類: 7~12	115
第53図 円盤状製品B類: 13~17、C類: 18~25	116
第54図 煙管 柱形状: 1、パイプ形 (磁器製: 2、陶製: 3~5、青銅製: 6・7)	117
第55図 古錢	118
第56図 青銅製品: 1~7、鉄製品: 8	119

表目次

第1表-1 ピット群出土一覧	18
第1表-2 ピット群出土一覧	19
第1表-3 ピット群出土一覧	20
第2表 遺物出土状況	21
第3表 類別出土状況	22

第4表	類別出土状況	28
第5表	器種別出土状況	43
第6表	本土産陶磁器出土状況	56
第7表	須恵器出土一覧	65
第8表	類別出土状況	87
第9表	石器出土一覧	106
第10表	円盤状製品出土一覧	113
第11表	貝類出土状況	121
第12表	ニワトリ出土状況	123
第13表	イヌ出土状況	123
第14表	ウマ出土状況	124
第15表	イノシシ出土状況	124
第16表	ウシ出土状況	125
第17表	ヤギ出土状況	125

図版目次

図版1	発掘区近景（上：北東側より、下：北側より）	131
図版2	上：発掘区南東側のトゥンヤマ、下：発掘区から北谷城を望む	132
図版3	層序（上：A-8・9 東壁、下：D-7～10西壁）	133
図版4	発掘風景	134
図版5	発掘風景	135
図版6	作業風景	136
図版7	A・B-9 ライン検出の溝状遺構	137
図版8	上：ピット群と土留め石積み、下：土留め石積み	138
図版9	上：1～3 ラインのピット群、下：6～8 ラインのピット群	139
図版10	青磁碗（上：第1類～第4類、下：第4類～第6類）	140
図版11	青磁碗底部	141
図版12	上：青磁皿、下：青磁盤・壺・香炉	142
図版13	白磁碗（a、b、c）	143
図版14	白磁碗d	144
図版15	白磁皿、杯、瓶	145
図版16	染付碗a種、b種（上：外面、下：内面）	146

図版17	染付碗c種（上：外面、下：内面）	147
図版18	染付碗、鉢（上：外面、下：内面）	148
図版19	染付碗、皿、杯、合子、瓶（上：外面、下：内面）	149
図版20	上：褐釉陶器、下：瑠璃釉・三彩・綠釉・タイ産鉄鉢	150
図版21	肥前系・伊万里系	151
図版22	上：唐津系・肥前系、下：須恵器（口縁部・胴部）	152
図版23	須恵器（上：胴部・底部、下：底部）	153
図版24	灰釉陶器碗（上：復元資料、下：口縁部）	154
図版25	灰釉陶器（上：碗底部、下：鉢底部・蓋）	155
図版26	白釉陶器（上：小碗、下：碗）	156
図版27	上：黒釉陶器、下：鉄釉陶器・掛け分け	157
図版28	無釉焼き締め陶器 壺・瓶類	158
図版29	無釉焼き締め陶器 水壺	159
図版30	無釉焼き締め陶器 底部	160
図版31	上：無釉焼き締め陶器（手水鉢・こね鉢・香炉）下：摺り鉢a種	161
図版32	摺り鉢a種・b種（上：外面、下：内面）	162
図版33	摺り鉢a種・b種（上：外面、下：内面）	163
図版34	摺り鉢底部a種・b種・不明（上：外面、下：内面）	164
図版35	土器第I類・第II類	165
図版36	土器第II類	166
図版37	陶質土器 鍋	167
図版38	上：陶質土器（火舎、手水鉢）、下：陶質土器（瓶・急須）、瓦質土器	168
図版39	上：土製品・貝製品・骨製品・玉・硯、下：石製品・滑石	169
図版40	上：たたき石、下：磨り石、砥石	170
図版41	上：凹み石、石皿、下：用途不明	171
図版42	円盤状製品	172
図版43	上：煙管、下：青銅製品、鉄製品、古錢	173
図版44	貝類	175
図版45	上：貝類、下：獸骨類	177
図版46	ウマ	179
図版47	イノシシ	181
図版48	ウシ	183
図版49	ヤギ	185

第1章 調査に至る経緯

a. 調査に至る経緯

県内の約12%を占める米軍基地、その中でも本島中部地域においては、より大きな割合を占めて横たわっている。近年、世界的な情勢の中、一部の基地の返還や基地内の整備も活発になってきている。また、人的な移動などにより建物の増・新築なども多くなってきていている。

宜野湾市教育委員会ではこのような動きに先立って、市内にある普天間基地及びキャンプ・ズケラン基地の文化財分布調査（註1、註2）を実施してきている。

このような状況の中、那覇防衛施設局から宜野湾市教育委員会の方へキャンプフォースター内で下級下士官の隊舎建設に係る埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。内容は現在の3階建ての建物を取り壊し、新しく4階建ての建物をつくるというものであった。早速、市教育委員会では先に実施した分布調査の成果から、当該計画予定地の近くに安仁屋トゥンヤマ遺跡が近接していることを回答するとともに、その延長部の可能性が想定されるため事前の試掘調査を行ないたいと申し入れた。

市教育委員会は試掘調査の結果、若干の遺物の確認ができ、当該計画予定地は安仁屋トゥンヤマ遺跡の延長部にあたる旨の通知を那覇防衛施設局に行ない、その取り扱いについて協議を行なった。市教育委員会としては新しい建物を建築する前に発掘調査の必要があるものの、他の事業との兼ね合いから、那覇防衛施設局とのスケジュールの調整がつかず、県教育委員会文化課を交えて、3者により再度協議・調整を行なった。

市教育委員会、県文化課、那覇防衛施設局の3者協議により、那覇防衛施設局からの委託により県文化課が発掘調査を実施することとまとまった。県文化課と那覇防衛施設局は本調査に先立ち計画予定地内の全体的な状況の把握を行なうために試掘調査を実施した（1990年6月）。その結果、埋蔵文化財の延びは計画予定地内の南部全域に及んでいることが判明した。この結果を踏まえ、県文化課は8月から3ヶ月間の予定で本調査を実施することになった。

註1 「普天間基地内文化財調査報告」宜野湾市教育委員会 1979年

註2 「キャンプ・ズケラン基地の文化財」I 宜野湾市教育委員会 1981年

b. 調査の体制

今回は調査は下記の体制により実施された。

調査主体 沖縄県教育委員会

教 育 長 高良 清敏（平成2年度）

教育長 津留 健二 (平成 3 年度)
文化課課長 宜保栄治郎 (平成 2・3 年度)
〃 課長補佐 上江州 均 (平成 2 年度)
〃 〃 知念 勇 (平成 3 年度)

調査事務 文化課文化振興係
係長 仲里 哲雄 (平成 2・3 年度)
主事 仲里 富代 (平成 2 年度)
〃 玉村 良子 (平成 2・3 年度)
〃 上間 尚子 (平成 2・3 年度)

調査担当 文化課史跡・埋蔵文化財係
係長 安里 喬淳 (平成 2 年度)
〃 大城 慧 (平成 3 年度)
専門員 島袋 洋 (平成 2・3 年度)
〃 金城 龜信 (平成 2 年度)
〃 上地千賀子 (平成 2 年度)
嘱託調査員 大城 聖子 (平成 2 年度)
〃 安次富智子 (平成 2 年度)

調査協力 宜野湾市教育委員会文化課
課長 伊佐 英彦
主事 児屋 義勝

発掘調査作業員
宮城フジ子、与座 正夫、比嘉 俊夫、仲宗根 朝宜、喜瀬 真栄、安村 荣徳、
渡久知吉子、田場 信子、吉原 トシ、大川 キク

資料整理作業員及び協力者
小嶺 禮子、石橋 朝子、仲嶺 朋恵、外間 峰子、備瀬枝美子、浜元 春江、
照屋 利子、新城さゆり、大城 聖子、池原 直美、高良三千代、金城 礼子、
手嶋 永子、金武 雅子、川満美賀子、譜久村郁子、座間味美津子、源河 透子、
玉寄智恵子

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

安仁屋トゥンヤマ遺跡の所在する宜野湾市は、沖縄本島の中部に位置している。

六市町村(北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市)と接しており、今日では、那覇市～沖縄市に広がる那覇広域都市計画圈を構成する市の一つである。市域は東西4km、南北4.5kmのやや長方形をなし、総面積18.60km²、そのうち35%の6.44km²が軍用地となっている。軍用地(普天間飛行場)は、市の中心部にあるため市街は基地を中心とした楕円形のドーナツ状を呈している。

自然環境からみると地質的には、島尻層群及び部分的には石灰岩部層や国頭れき層で構成されている。地形には典型的な海岸段丘の形成がみられ、段丘の縁辺には井泉が多く低地(標高0～5m)である伊佐・大山・真志喜・宇地泊では、豊富な水量を利用して田芋の耕作が行われている。

歴史的には、宜野湾間切の新設は1671年14村をもってなされている。新設の事由は、浦添間切の土地の広さ及び人口の多さにあった。宜野湾間切の14村の内訳は浦添間切の10村に中城の2村・北谷の1村を加え新たに1村を設けたものである。

その後、1908年『沖縄県島嶼町村制』の施行により、従来の間切は村に、村は字に改められ、宜野湾村となった。1939年、従来からの14行政区(野嶽・普天間・安仁屋・新城・喜友名・伊佐大山・真志喜・宇地泊・大謝名・嘉数・我如古・宜野湾・神山)に7行政区(真栄原・志真志・長田・愛知・赤道・仲原・上原)が新設され21行政区となり、さらに、1943年真栄原部落より、佐真下部落が分離して22行政区として編成された。

1945年4月の米軍の沖縄本島上陸と共に宜野湾村においても多くの人命と共に文化遺産も壊滅的打撃を被った。しかも、戦後は市の大半が米軍基地の中にあって、収容所のおかれた野だけ部落、普天間部落の東原で住民の多くは他部落民との雑居生活を強いられていた。1948年以降区画整理が行われ軍に接收された地域の住民を除いて徐々に自らの故地に帰住を許された。

その後1962年には人口の急激な増加によって市に昇格し、23自地会20行政区によって編成されるようになった。

安仁屋トゥンヤマ遺跡は、普天間と伊佐を結ぶ県道30号線の北側に広がるキャンプズケラン内に所在する。北谷町との境界に程近い丘陵の高まりに形成されたグスク～近世の遺跡であり、遺跡周辺には、拝所・古墓・井泉などがみられる。丘陵からは眼下に北谷前の浜の広がりが眺望できたであろうか、現在では埋立地の広がる風景である。米軍基地の影響をもろに受けた遺跡であり、周辺には兵舎が立ち並ぶ。

宜野湾市は、地理的・地形的状況及び歴史的変遷のなかにあって、那覇市と中部一帯をつなぐ要衝の地として発展をつづけている。



第1図 安仁屋トゥンヤマ遺跡と周辺の遺跡分布

宜野湾市文化財情報図 平成二年版(上り)

第3章 調査経過

今回の調査は米軍の下級下士官の隊舎建設に係るもので、1990年8月1日から開始した。6月に実施した試掘調査の結果から、旧建物に伴う造成土の除去から始めた。北東側では30cm前後の厚さであるが、南東側では3m前後と非常に厚く堆積している。旧建物に伴う造成であり、1m以上もあるような大きな石灰岩礫なども混在しており、その除去作業にはユンボやダンプを使用した。

ユンボによる造成土の除去作業終了後、作業員によりその残土をかたずけ造成土下の面をきれい露出させる。それと並行しながらグリット設定を行なう。グリットの設定には隊舎建設のために打たれている杭を利用し、発掘調査対象区域（隊舎建設予定地）に4m四方を単位とする方眼を組んだ（第2図）。グリットには東から西の方向へアルファベットを付し、北から南へは算用数字で表した。呼称は北東側の交点によって行ない、A-1、B-3、C-5などとした。

ただ、隊舎建設予定地の北側は旧隊舎建設に伴う造成の際に削られており、琉球石灰岩の岩盤やその風化土である赤土（マージ）が露出している。そのため、隊舎建設予定地の北側は今回の調査対象区から除外し、南側を調査の対象とした。

調査は北東側のA-4・5グリットから始めた。青灰色土（水田に利用されたものか）が部分的にみられ、その下層の淡灰色土層を30cm前後掘り下げると琉球石灰岩の風化土である赤土（マージ）が露出する。この赤土面をひとつの目安にして、北側のA-3・2・1グリット及び南側のA-6・7・8グリットへ発掘面を広げ、さらに西側のB・C・Dラインの方へも掘り進めていった。A-3南側で東西方向へ走る石灰岩礫の帯び状の集中部がみられ、B～Dラインへも続いている（第3図）。はっきりしたものではないが、周りには石灰岩がみられずその部分に集まったような状況を示していた。

1・2ラインのほとんどは岩盤の琉球石灰岩が露頭あるいはすぐに露出し、岩盤の一部ではその時の方形状の掘り込みも検出され、旧隊舎建設の際に大きく削られたものと考えられた。

また、B～D-2・3ラインにおいては、赤土面に円形状の落ち込み部が多く検出された。層序的には3ラインの南側を東西に走る石灰岩礫の集中部を境に若干の違いがみられる。すなわち、北側（1～3ライン）では青灰色土層（厚い所で30cm前後）の下に直接地山の赤土が露出するが、南側（4ライン以南）では青灰色土層と赤土の間に大体20～40cmぐらいの淡灰色土層がみられる。

青灰色土層も淡灰色土層も本来的には全面的に広がっていたものと考えられるが、旧隊舎に伴う造成の際にほとんど削られたよう本来の厚さは判然としない。しかし、残っている状況

からすると、いずれも南側へ傾斜して堆積している。

AラインとDラインは土層の堆積状況をみるために先に地山の赤土まで掘り下げた。Aラインは8グリットの北側までは淡灰色土層が20cm前後の厚さでみられ、赤土（ゆるやかに南側へ傾斜）になる。以南は若干の擾乱部を挟み青灰色土層になり、南端部で赤土が露出した。

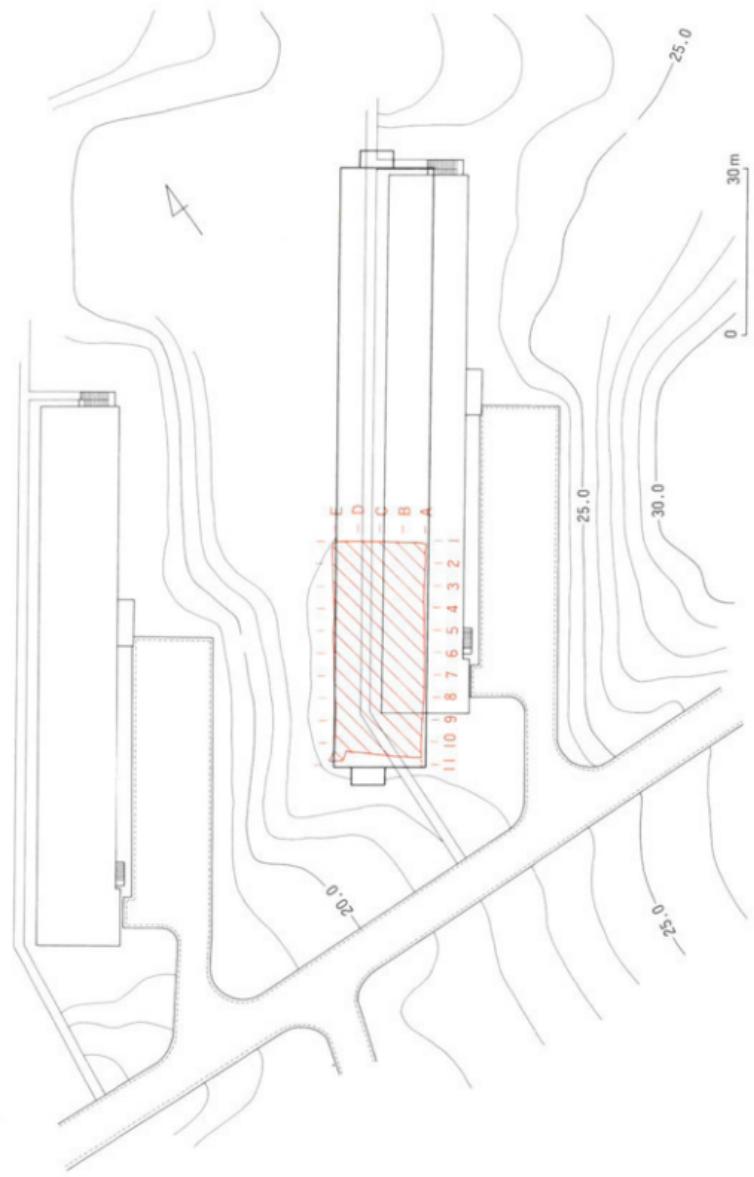
Dラインは6グリットまでは淡灰色土層（厚さ20cm前後）下は赤土になる。上層の青灰色土層は4グリット付近まで見受けられる。6グリット南側から淡灰色土層の下に暗灰色赤土粘土混じり土層（厚い所で40cm前後）の堆積がみられる。やや南側へ厚くなりながら傾斜しているその部分では赤土面が若干階段状になり段差がみられる。8グリット中央近から暗灰色土層がみられ、南側へ厚く堆積している。その部分からは赤土面がややきつい傾斜を示して、南側へ向かう。

今回の調査区の全体的な層序の堆積状況が把握できたので、4・5ラインから順次南側へ淡灰色土層・暗灰色赤土粘土混じり土層・暗灰色土層の順で掘り下げていった。後2者の土層はBラインまでみられ、Aラインには及んでいない。2層とも南西隅を頂点とする扇形状の広がりがあり、赤土面は東北側から南西側へ傾斜している。

赤土面が比較的フラットになっている2・3ライン、5～7ラインでは柱穴様のビット群が集中的に検出された。明確なプランはつかめないが、概ね長方形状になるかと考えられる。ほとんどのビットから陶質土器が得られており、近世の時期のビット群と考えられる。

今回の調査の結果、本調査区は東側から西側へ傾斜する斜面部にあり、北東側から南西側への傾斜が顕著な場所であることが判明した。このような場所を平坦に造成し、隊舎が建てられているため、北東側はかなり削られたようで琉球石灰岩の岩盤が露出した状態であった。調査区の南西側（低くなった部分）にグスクの遺物を包含する土層、それを覆うように近世の時期の遺物を多く含む層、その上層に近世の遺物を中心とする層、近代の水田？層そして旧隊舎建設に伴う造成層という堆積土の状況であった。

最後にビット群の掘り下げ、図面の作成、完撮写真を撮って今回の発掘調査を終了した。調査の最中に二度の台風や雨の日などもあり、予定期間より3週間ほどオーバーした。



第2図 発掘区(斜線)とグリット設定



第3図 検出された遺構の配置

第4章 調査の概要

第1節 層序

今回の調査により基本的に4枚の層が確認された。いずれの層も北側から南側へ傾斜している。発掘区の北側はすぐに琉球石灰岩岩盤が露出し、かなり削り取られ造成されたものと推察される。堆積層の全体的な状況から、本地区は丘陵斜面の中腹あたりになるかと考えられる。

以下、確認された層序について簡記する。なお、発掘区の4面の層序を第5図に、Dライン東壁の層序を第4図に示した。

第1層—旧隊舎建設の際の造成層。北東側は10cm前後と薄く、南西側で約250cmと厚くなっている。直径が100cm近くあるような大きな琉球石灰岩や40~50cm大の琉球石灰岩が下部に多く、上部は拳大の石灰岩やコーラルなどで構成される。遺物は見受けられない。

第2層—青灰色の粘土層で、基地以前の水田土と考えられる。造成により上部が削られており、本来の層厚は不明。4ライン以北と発掘区の南東側に残るほか、Aラインでは部分的にみられる。近世以降の遺物に混ざり、グスク時代のものも若干見受けられる。

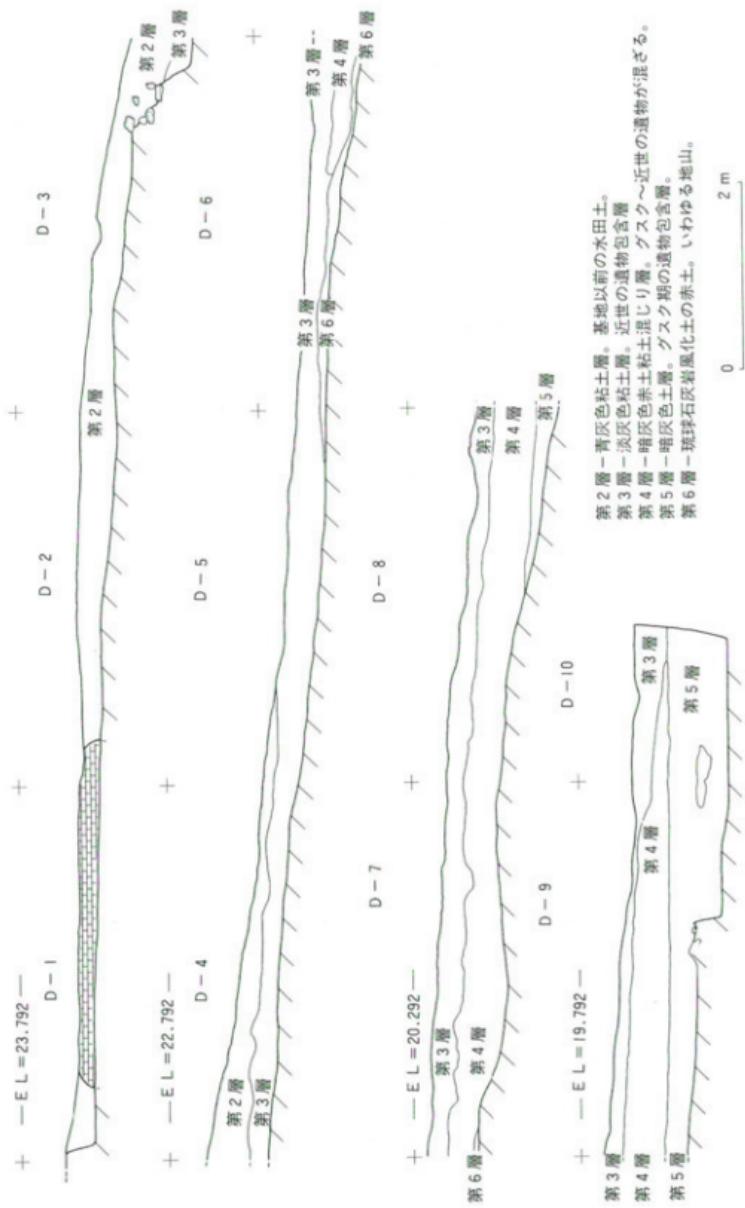
第3層—淡灰色の粘土層で、近世の時期の遺物包含層である。上部が削られたところもみられるが、大体20~40cmの厚さで南側にゆるやかに傾斜している。3ライン以北にはみられない。遺物の出土量が最も多い。

第4層—暗灰色で赤土粘土粒が多く混ざる層で、赤土粘土粒が混ざることで後述の第5層と区別される。しかし、第5層とは同じような色合であり、境界はかならずしもはっきりしているわけではない。層厚は40~50cmで、南側にゆるやかに傾斜している。

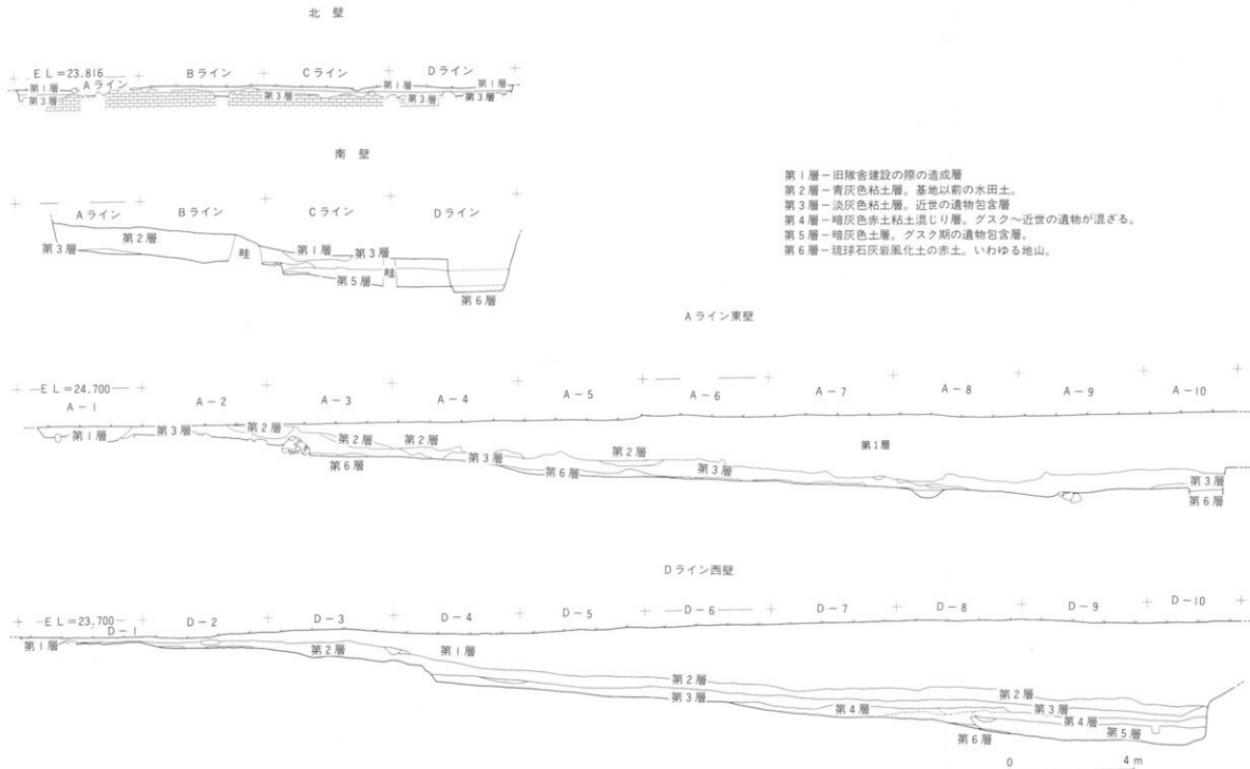
6ライン南側から以南にみられ、また、Aラインの西側で切れ、発掘区の東壁に及ばない。グスク~近世の遺物が得られ、若干グスク時代の遺物が多いようである。

第5層—暗灰色土層で、発掘区の南西側にみられる。南西側へ厚くなってしまい、発掘区以外へさらに延びる。厚いところでは約70cmを測る。比較的しっかりとしたグスクの時期の層であるが、上部は第4層からの近世の遺物が混ざる。

第6層—琉球石灰岩風化土の赤土。マージと呼ばれる無遺物層。3ライン南側で段差がみられ、その北側（上段）と南側（下段）は比較的平坦になっている。7ラインの南西側から西側へ傾斜が急になる。平坦な場所には柱穴様のピット群や方形状の落ち込みが検出された。



第4図 層序 (Dライン東壁)



第5図 層序

第2節 遺構

今回検出されたものは土留め石積み、溝状遺構、柱穴様のピット群などで、いずれも近世以降のものと考えられる。それぞれについて概略を記す。

・溝状遺構（第6図・第7図）

発掘区の南東隅（A・B-10グリット）で検出されたもので、東西方向へ延びるものである。本遺構も発掘区外へ延びており、全長は不明。幅約100cm、深さ約60cmで、底面部はナベ底状に丸味を帯びる。縁部には石灰岩礫を並べて補強していたようである。もともと若干の凹地であったところを利用したようである。

本遺構の上面には炭化したススキの層が薄くみられ、それを青灰色土層が覆っている。そのことから、一帯を水田として利用した頃に埋められたものかと考えられる。南側の疊集中部は青灰色土層に伴うもので、近世の沖縄産陶器なども混在してみられる。

・土留め石積み（第8図）

赤土面を幅約60cm、深さ約40cm掘り込んで、20cm前後の大きさや挙大の琉球石灰岩を整然と積んでいる。上部を覆う青灰色土層面では小礫が帶状に集中するだけの状況であったものが、青灰色土層を除去して確認された石積みである。A-3北側からD-3南側へ直線的にみられ発掘区外へも延びているようで全長は不明。B・C-3グリットの南側にみられる掘り込み部により中央付近は壊されている。

本石積みの北側（上段）と南側（下段）の平坦面には柱穴様のピット群が検出されており、同じような時期につくられたものと考えられる。

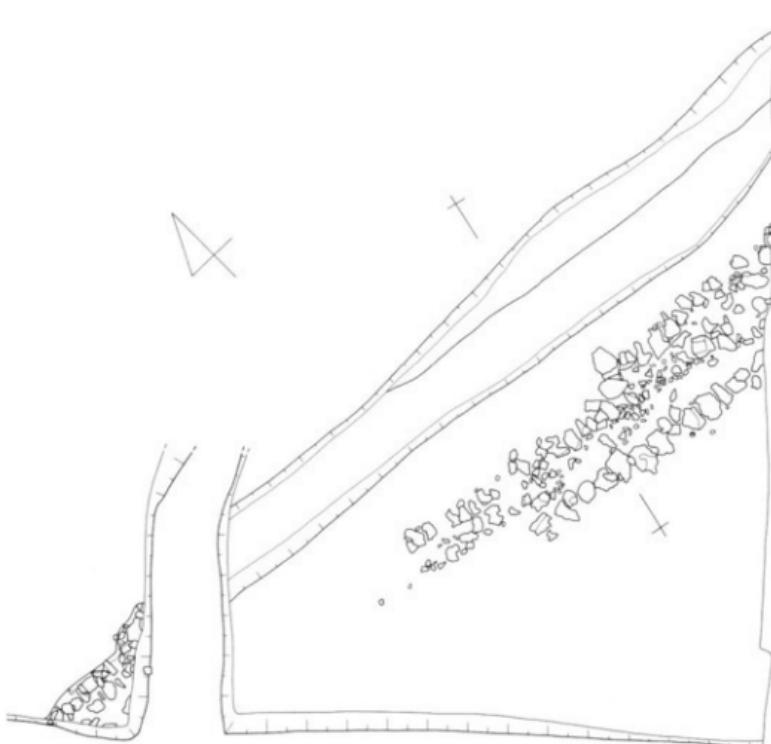
・ピット群（第8図・第9図）

C・D-2・3グリットを中心に検出された箇所（発掘区北側）、6～8ラインで検出された箇所（発掘区中央部）の2ヶ所で集中的に確認されている。両者の間に先述した土留め石積みがあり、前者を上段、後者を下段とすることができます。いずれも発掘区外へさらに広がるようで、全体的な状況はつかめない。上段は円形状のピットがほとんどであるが、下段は不定形の大きな落ち込みもみられる。このような異なる状況はどういう意味なのか判然としない。

この掘立柱の建物は出土遺物などからすると、住居になるようであるが、平面的なプランのつかめるものは見受けられなかった。ピット内から陶質土器や沖縄産陶器など近世の時期の遺物が得られており、時期的には近世のものと考えられる。



第6図 溝状遺構上部

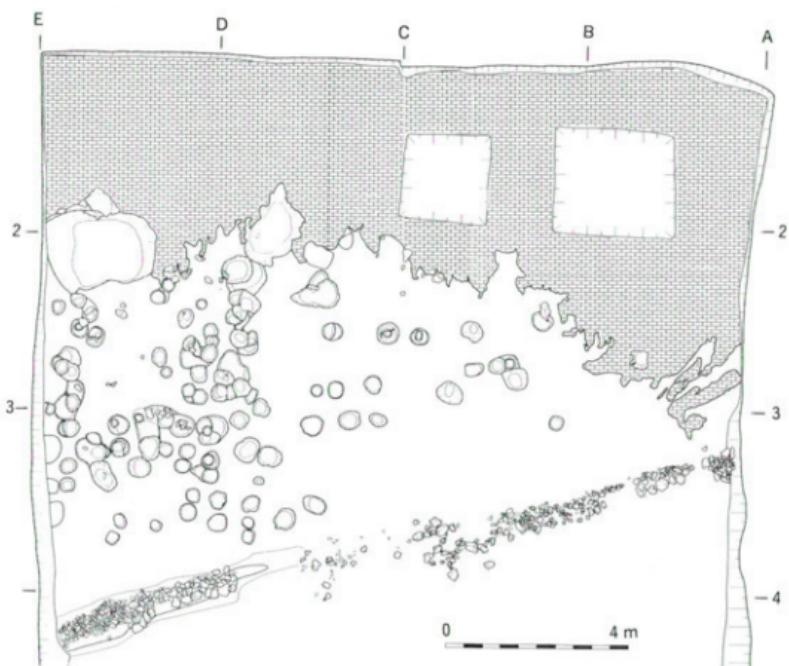


+ E L = 21,826 +



0 2 m

第7図 溝状遺構下部



第8図 土留め石積みと上段のピット群



第9図 下段のピット群

第1表-1 ピット群出土一覧

単位はcm

No	法 量			形 状	出 土 遺 物	No	法 量			形 状	出 土 遺 物	
	長径	短径	深さ				長径	短径	深さ			
1	44	41	23	円 形	沖縄産陶器、土器	34	38	35	15	不 定 形	土器	
2	54	48	37	隅丸方形	沖縄産陶器、白磁、鉄片	35	47	46	27	円 形	青磁	
3	33	29	21	〃	染付	36	26	26	15	円 形		
4	47	41	36	円 形	褐色陶器、青磁	37	31	24	15	円 形	土器	
5	40	27	21	楕	円 形	沖縄産陶器、白磁	38	41	37	19	不 定 形	土器、白磁、染付など
6	55	48	63	円 形	沖縄産陶器、須恵器、青磁など	39	39	35	15	円 形	沖縄産陶器、土器など	
7	39	35	27	円 形		40	38	35	10	円 形	白磁、骨	
8	48	46	53	円 形	沖縄産陶器、骨など	41	31	29	25	円 形	骨	
9	39	36	26	円 形	沖縄産陶器	42	37	30	8	不 定 形		
10	36	30	22	不 定 形	白磁	43	40	40	35	円 形	青磁、骨	
11	106	62	21	不 定 形	白磁、染付、骨	44	37	30	12	円 形	青磁	
12	43	37	44	円 形	土器、青磁、白磁など	45	34	34	13	円 形	沖縄産陶器	
13	40	32	18	円 形		46	32	30	38	円 形	瓦質土器	
14	47	40	14	円 形	染付	47	20	20	24	不 定 形		
15	26	25	9	円 形		48	36	—	19	楕	円 骨	
16	49	44	19	不 定 形		49	49	49	13	円 形	土器、陶質土器、白磁	
17	146	123	27	不 定 形		50	48	34	26	円 形	沖縄産陶器、土器、白磁	
18				不 定 形		51	19	19	16	不 定 形		
19	48	37	12	円 形	土器、青磁、白磁、染付など	52	52	44	24	不 定 形		
20	68	63	33	不 定 形	沖縄産陶器、染付	53	50	44	30	円 形	土器、染付	
21	48	46	38	楕 円		54	33	23	15	円 形	沖縄産陶器	
22	32	32	41	円 形		55	29	29	30	隅丸方形		
23	36	32	25	楕 円		56	38	36	20	楕 円		
24	41	40	30	円 形		57	40	36	30	不 定 形	土器、青磁、白磁、染付	
25	66	66	21	円 形	土器、白磁、染付など	58	28	19	33	不 定 形	石器	
26	44	35	27	隅丸方形		59	34	26	20	不 定 形	石器	
27	43	42	50	円 形	沖縄産陶器、青磁	60	30	24	30	不 定 形		
28	38	23	32	不 定 形	染付	61	65	40	15	不 定 形		
29	39	38	15	円 形		62	25	24	12	不 定 形	骨	
30	42	40	19	不 定 形	染付	63	43	31	28	円 形		
31	55	53	27	不 定 形	青磁	64	40	33	34	円 形		
32	53	43	28	円 形	沖縄産陶器、土器、骨	65	22	22	29	不 定 形		
33	22	18	9	不 定 形		66	29	27	19	円 形	鉄片	

第1表-2 ピット群出土一覧

単位はcm

No	法量			形狀	出土遺物	No	法量			形狀	出土遺物
	長径	短径	深さ				長径	短径	深さ		
67	30	30	16	円 形	沖縄產陶器、青磁	100				不定 形	白磁、染付
68	34	33	27	円 形	沖縄產陶器	101	57	56	12	円 形	
69	32	30	17	円 形		102	19	18	7	円 形	
70	30	18	22	円 形		103	50	47	36	椭 円	沖縄產陶器
71	45	38	24	円 形		104	118	117	30	椭丸方形	沖縄產陶器
72	31	18	18	円 形		105	35	32	11	円 形	
73	34	30	38	円 形		106	38	37	17	円 形	
74	39	31	31	不定 形	沖縄產陶器、陶質土器	107	28	28	8	円 形	
75	39	31	13	不定 形		108	62	38	24	椭丸方形	
76	39	32	34	円 形	土器、褐釉陶器、石器	109	43	40	27	椭丸方形	
77	55	49	23	椭丸方形		110	55	54	11	椭丸方形	土器、染付
78	25	20	32	円 形		111	52	52	17	円 形	沖縄產陶器
79	20	—	31	不 明		112	42	34	20	円 形	
80	47	40	28	円 形		113	26	23	18	円 形	
81	45	41	15	円 形	沖縄產陶器	114	67	53	17	不定 形	沖縄產陶器
82	41	41	24	円 形		115	25	25	7	円 形	
83	32	25	24	不定 形	青磁、染付、土器	116	60	44	12	不定 形	
84	35	34	23	不定 形		117	18	16	5	円 形	
85	64	51	26	不定 形	土器、骨	118	80	57	3	椭 円	
86	37	33	14	円 形		119	81	65	58	椭 円	
87	34	31	11	円 形		120	66	62	33	不定 形	沖縄產陶器、陶質土器など
88	32	28	14	椭 円		121	65	60	30	円 形	沖縄產陶器、陶質土器
89	30	28	27	椭丸方形		122	83	76	22	円 形	
90	25	24	21	円 形		123	27	23	6	椭丸方形	
91	66	48	17	椭 円		124	57	56	24	不定 形	沖縄產陶器、土器
92	55	47	13	椭丸方形		125	45	38	15	不定 形	
93	27	26	30	円 形	滑石、沖縄產陶器	126	80	56	30	不定 形	
94	66	54	19	椭 円	青磁、白磁、陶質土器	127	35	32	13	円 形	沖縄產陶器、青磁
95	161	94	14	不定 形		128	48	33	24	不定 形	
96	32	30	29	円 形		129	87	59	33	椭丸方形	楕(プラスチック)、平瓦
97	78	53	27	椭 円		130	52	44	47	椭丸方形	沖縄產陶器
98	71	57	39	椭 円	沖縄產陶器、土器	131	36	35	18	円 形	
99	20	17	19	不定 形		132	57	57	40	椭丸方形	沖縄產陶器、土器

第1表-3 ピット群出土一覧

単位はcm

No	法量			形状	出土遺物	No	法量			形状	出土遺物
	長径	短径	深さ				長径	短径	深さ		
133	30	26	16	不定形	染付	166	119	113	8	楕丸方形	
134	27	26	22	不定形		167	33	28	14	円形	
135	56	40	25	楕丸方形		168	36	28	30	不定形	
136	36	35	3	不定形	沖縄産陶器、青磁、白磁など	169	65	38	8	不定形	
137	45	41	25	円形		170	34	31	15	不定形	
138	26	26	8	不定形		171	49	48	24	円形	沖縄産陶器、青磁、染付
139	38	31	17	不定形		172	50	39	41	不定形	
140	33	30	13	不定形		173	43	37	40	不定形	染付
141	36	28	14	楕丸方形	沖縄産陶器	174	33	31	31	円形	沖縄産陶器
142	98	50	39	楕円	沖縄産陶器、陶質土器など	175	53	45	12	楕円	沖縄産陶器
143	25	17	30	楕丸方形		176	35	33	27	円形	鉄滓
144	44	42	5	楕丸方形		177	—	—	—	不定形	
145	46	40	35	不定形		178	48	44	18	楕丸方形	
146	64	47	21	楕丸方形	沖縄産陶器	179	67	59	12	円形	
147	54	40	17	不定形		180	97	74	35	楕円	
148	49	35	21	不定形		181	32	27	23	円形	
149	55	37	38	不定形		182	39	31	19	円形	
150	45	35	30	楕円	陶質土器	183	48	46	15	円形	
151	116	61	21	不定形	沖縄産陶器、土器など	184	28	23	11	楕円	沖縄産陶器
152	37	37	31	円形	沖縄産陶器、土器など	185	19	19	7	円形	
153	72	66	51	円形	沖縄産陶器、陶質土器など	186	56	50	32	円形	
154	30	30	22	円形	沖縄産陶器	187	48	46	12	円形	
155	128	93	25	不定形		188	100	63	19	不定形	
156	38	33	15	楕円		189	40	36	23	楕丸方形	沖縄産陶器、陶質土器など
157	47	31	23	楕円		190	103	49	42	楕丸方形	
158	59	44	19	楕円		191	47	37	14	楕円	
159	106	93	19	楕丸方形	陶質土器、染付、沖縄産陶器	192	61	40	26	楕丸方形	
160	—	—	—	沖縄産陶器							
161	60	55	25	円形							
162	74	56	33	楕丸方形	沖縄産陶器						
163	57	54	26	陶丸方形	沖縄産陶器						
164	41	27	15	楕円							
165	60	49	34	楕円							

第3節 出土遺物

今回の調査で得られたものはグスク～近世・近代にかけてのもので、量的には近世のものが多くの得られている(第2表)。また、明確に基地以後のものと判別するものは除外した。種類別にみると青磁・白磁・褐釉陶器・染付けなどの中国産陶磁器、タイ産陶磁器、本土産陶磁器、須恵器、沖縄産陶器、土器、陶質土器、土製品、貝製品、石器、瓦、円盤状製品、煙管、鉄・青銅製品、古錢などの人工遺物の他、貝類や獸・魚骨などの自然遺物が得られている。

土器はほとんどのグスク時代のものであるが、それよりやや古くなるかと考えられるものも若干含まれており、注意される。以下、それぞれの製品について略述する。なお、瓦は近世以降の赤瓦だけで、小破片のものばかりが得られており、図や説明は割愛した。

第2表 遺物出土状況

種類 部位 層序	青 磁			白 磁			染 付			褐釉陶器			陶質土器			三 彩			綠 軸			色 絵		
	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底
表 採	4	15	3	6	3	9	5	14	7	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第 1 層	7	32	3	16	22	7	16	60	8	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第 2 層	13	29	7	13	26	21	32	27	13	1	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第 3 層	52	177	33	60	90	51	80	124	36	3	89	2	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1
第 4 層	28	68	15	22	32	23	35	56	26	1	66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第 5 層	22	31	12	20	18	12	17	19	5	2	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	126	352	73	137	191	123	185	300	95	7	208	2	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1
種類 部位 層序	タイ陶器			本土産陶器			須恵器			沖縄産陶器			土 器			土製品			貝製品					
	口	胴	蓋	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	蓋	口	胴	底	口	胴	底	土製品	貝製品			
表 採	0	0	0	6	2	0	0	1	1	27	137	43	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0
第 1 層	0	1	0	7	18	2	1	6	0	58	203	40	0	1	22	17	0	0	0	0	0	0	0	0
第 2 層	0	1	0	7	13	7	1	3	0	143	438	156	0	0	43	14	0	0	0	0	0	0	0	0
第 3 層	0	0	0	18	33	8	2	16	6	435	1031	197	6	11	144	21	1	1	1	1	1	1	1	1
第 4 層	1	0	1	8	12	3	2	15	2	28	150	48	0	7	130	9	0	0	0	0	0	0	0	0
第 5 層	0	0	0	2	6	1	0	20	3	21	102	23	0	20	338	53	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計	1	2	1	48	84	21	6	61	12	712	2061	507	6	39	680	116	1	1	1	1	1	1	1	1
種類 部位 層序	陶 質 土 器			瓦質土器			骨 製 品			玉 琥 瑞			石 製 品			滑 石			石 器			圓 盤 状 製 品		
	口	胴	底	蓋	口	胴																		
表 採	12	28	5	10	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	1	1	1	1	1	1	1
第 1 層	16	51	4	9	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
第 2 層	23	100	52	14	5	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	6	2	6	2	2	2	2	2
第 3 层	128	344	117	79	3	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	14	3	3	3	3	3	3	3
第 4 層	5	19	10	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9	3	0	0	0	0	0	0
第 5 層	0	10	7	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	12	1	1	1	1	1	1	1
合 計	184	552	195	113	8	22	2	1	1	1	1	1	1	1	1	5	42	25	8	8	8	8	8	8

口：口縁部　胴：胴部　底：底部

* 鉄・青銅製品及び古錢は除く

イ. 青 磁

比較的多く得られている。ほとんど小破片の資料で、全形の窺えるようなものは見受けられない。確認できる器種は碗・皿・盤・壺・瓶・香炉などである。量的にみるとほとんどが碗の資料で、他のものは少ない。皿が20点たらず、盤・壺・瓶は数点づつで、香炉は1点だけ得られている。これらの資料は、概ね13~16世紀頃のものである。以下、器種別に略述する。

碗

最も多く得られているが、全形の窺えるものは得られていない。特徴的な口縁部・底部について略述する。

口縁部

得られた資料を文様・器形などで下記のように分類した。

第1類—蓮弁文を配すもので、口縁部へ直線的に開くものやほぼまっすぐのものが見受けられる。蓮弁文の状況でさらに細分される。

a種—中央に比較的明瞭な稜を有すもので、いわゆる鎌蓮弁文と呼ばれるもの

b種—中央の稜が消え、蓮弁文がやや丸味を帯びるもの

c種—弁幅が細く細線で描かれ、全体的に細長く尖った感じのもの

d種—弁先が連続的に描かれ、それから弁を直線的に細線で描くもの

e種—弁先の表現がなくなり、直線で描かれる弁だけがみられるもの

第2類—雷文を配すもので、それほど開かずに口縁部へ向かう。雷文により2種に細分される。

a種—ヘラ書きにより雷文を表すもの

b種—スタンプにより雷文を表すもの

第3類—その他の文様を配すもので、口縁部の方へ直線的に立ち上がるものの

第3表 類別出土状況

類 層序	第 1 類					第 2 類		第3類	第4類	第5類	第6類	合 計
	a	b	c	d	e	a	b					
表 採						1				1		2
第 1 層			1	1	2				1		2	7
第 2 層				4	2				1	1		5 13
第 3 層	2	1	1	6	4	1	3	2	4	1	12	37
第 4 層		1	1	7	3			3	5		8	28
第 5 層	1	1	2	1		2	1	2	2	5	17	
合 計	2	3	4	20	12	2	5	7	13	4	32	104

(口縁資料だけ)

第4類—無文の資料で、口縁部を外反させるもの

第5類—無文の資料で、口縁部が直口状を呈すもの

第6類—無文の資料で、口縁部を玉縁状に肥厚させるもの

以上の6類である。出土状況は第3表に示すとおりで、量的にはそほど多くない。類別にみると第1類が多く、次いで第6類、他は若干の出土である。以下、類別に概略を述べる。

第1類

今回得られたものの中では最も多い。特徴的なものを第10図1～11に示した。描かれる蓮弁文の状況により5種に細分可能である。以下、種別に簡記する。

・ a種

1・2に図示したもので、2点とも小破片のため全体的な状況は不明。2は弁先だけが描かれるものようである。開き気味に口縁部の方へ向かうもので、口唇部は1がやや尖り気味、2は舌状を呈す。釉は青緑色の比較的透明度があるものをわりと薄く施釉している。いずれも灰白色でやや細かい素地のものである。

・ b種

3～5に示すもので、3・4は間弁を有す。3・4は口縁部が外側へ開く器形のもので、5は直方向へ立ち上がる。口唇部は4が尖り気味になり、3・5は丸味を帯びる。3・4は口径の推算ができ、それぞれ約15cmと約17cmを測る。釉色は3・5が深緑色を呈し、4は暗緑色を呈す。3点とも比較的厚く施釉しており、3は両面に細かい貫入が密に認められ、5は粗い貫入が若干見られる。3・5は白濁色のやや粗い素地で、4は灰白色のやや粗い素地である。

・ c種

6に示すもので、蓮弁はひとつひとつ間隔をあけて配している。口縁部が外側へ開き気味になり、口縁部上端で若干の凹部を設ける。口唇部はやや丸くなる。推算口径は約12cmである。釉は淡緑色で透明度があり、薄く施釉されている。両面に細かな貫入が認められる。胎土は灰白色のやや粗い素地である。

・ d種

7～10に示すもので、いずれも直口状の器形を示し、口唇部は舌状をなす。7・8は弁先が鋸歯状になり、9・10は弧状を呈するものである。前者は後者のものより弁幅が狭い。7・8は弁先と弁を表す直線が比較的あうように描かれるが、9・10はわりと無頓着のようである。

釉は7・8が暗緑色、9が深緑色、10が灰緑色を呈す。8だけが透明度のある釉で、他の3点は失透性のものである。また、10以外の3点は表裏面に細かい貫入が密に見受けられる。いずれも灰白色の胎土であるが、8はやや細かく、他はやや粗い素地である。

・ e種

11に示すもので、器形的にはd種とほぼ同じようである。灰緑色の失透性の釉を薄く施釉し

ている。貫入は見受けられない。胎土は灰白色の粗い素地である。

第2類

雷文帶の碗で、特徴的なものを第10図12～16に示した。ヘラ描きのものとスタンプのものが得られており、前者をa種、後者をb種とした。以下に略述する。

・a種

12・13に示す2点が本種に属す。12は小破片のため全体的な状況は不明。13は比較的滑らかなタッチで描かれている。2点とも口縁部が若干外側へ開き気味になり、口唇部は丸味のある仕上げとなっている。13は口径の推算が可能で、約14cmを測る。釉はどちらも失透性のもので、12が暗緑色、13が灰緑色を呈す。13は表裏面に粗い貫入が見受けられる。胎土は12が暗灰白色でやや粗い素地、13が灰白色でやや粗い素地のものである。

・b種

本種に含まれるものを見14～16に示した。いずれも口縁部が若干開き気味になり、口唇部を丸くつくるものである。16は口縁部上端がやや厚くなる。3点とも外面の口唇直下と内面の口唇下約1cmのところに雷文を配している。15だけが口径の推算可能ななもので、約17cmを測る。釉は14・15が青緑色で失透性のもの、16は暗緑色のやや透明度のあるものを施している。15・16は表裏面に細かい貫入が密にみられる。胎土は3点とも灰白色的やや粗い素地である。

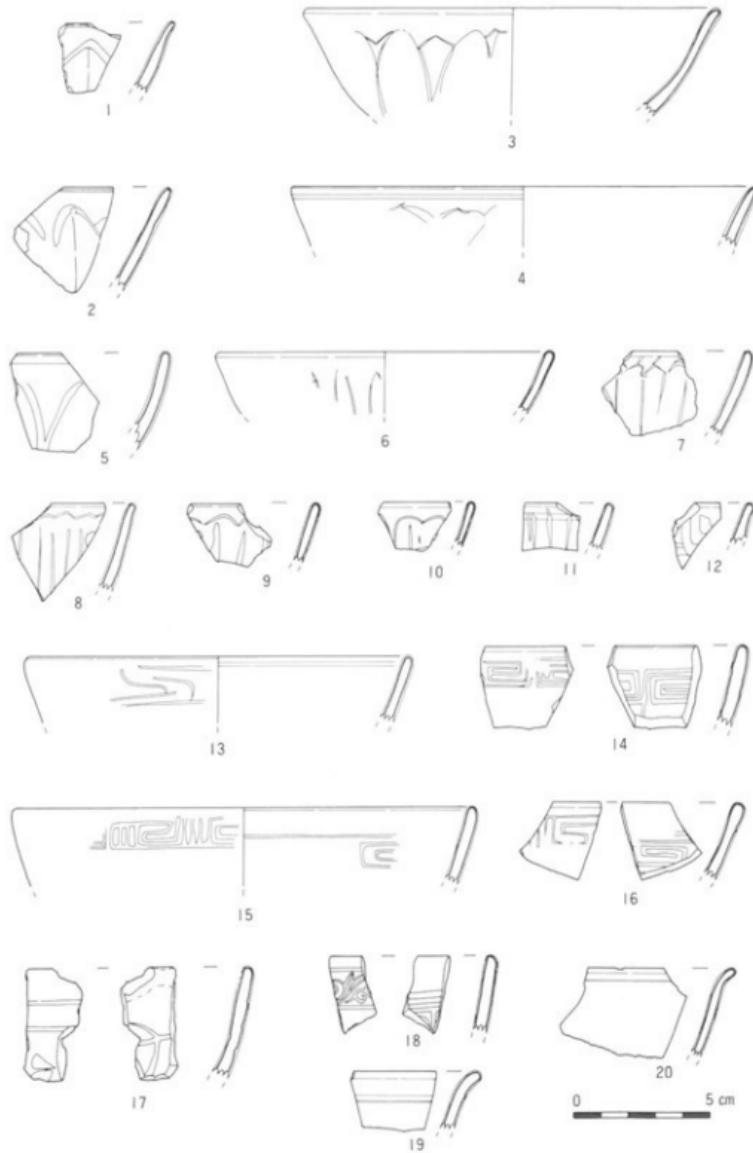
第3類

7点得られており、特徴的な2点を第10図17・18に示した。2点とも口縁部がほぼ直口状になり、口唇部が丸く整形されるものである。17は表面に2本の圓線様の沈線とその下方に草花文の一部、裏面にゆるやかな曲線が認められる。しかし、小破片のため全体的な構図は不明。18は外面の口縁部上端に2本の圓線の間に草花文を配する文様で、内面の口唇下約1cmのところに雷文を施している。本資料は第2類の中で扱うべきかと考えたが、外面の文様が違うということをここに示した。

釉は17が深緑色を呈す失透性のもので、18は暗緑色のやや透明度のあるものが施されている胎土は17が灰白色的細かい素地で、18は灰白色的やや粗い素地である。

第4類

13点得れているものの、外反の度合いには若干のばらつきがみられる。特徴的なもの7点を第10図19・20及び第11図21～25に示した。口縁部がやや開き気味になり、口唇部を丸く仕上げるという同じような器形のものがほとんどである。しかし、23は口唇部がやや平坦になり、24は外反部で僅かに段差をつくり肥厚口縁のようにみせるものである。21だけが口径の推算ができる、約16cmを測る。



第10図 青磁碗（第1類：1～11、第2類：12～16、第3類：17・18、第4類：19・20）

釉は青緑色でやや透明度のあるもの（20・22・24・25）と失透性のもの（19・21・23）が見受けられる。20・22・25は表裏面に細かい貫入が密にみられる。胎土は24・25が白濁色のやや粗い素地のもので、他の5点は灰白色のやや粗い素地のものである。

第5類

4点とそれほど多くない。大き目のものから第11図26～29に示した。26は口縁部がほぼまっすぐに立ち上がってきるもので、口唇部は丸く整形している。他の3点は口縁部が開き気味のもので、口唇部は27が丸くつくり、28・29は平坦に仕上げている。29は口唇部が狭くなり、尖った感じになっている。26～28の3点は口径の推算が可能で、26が約14cm、27が約13cm、28が約16cmとなっている。

釉は失透性のもので、淡緑色を呈すもの（26・29）と青緑色を呈すもの（27・28）がみられる。28は口縁上端に釉溜まりがみられるほか、内面には部分的に釉のかからない箇所も見受けられる。また、29は口唇部の釉を搔きとっている。26～28の3点は表裏面に細かい貫入がみられる。胎土は灰白色の粗い素地であるが、28は橙褐色を呈す部分も見受けられる。

第6類

総数32点と第1類に次いで多く得られており、特徴的なものを第11図30～33に示した。推算口径の算出できるようなものは見受けられない。いずれも口縁部がやや外側へ開くもので、口唇部は丸味を持って仕上げている。丸い肥厚を示すもの（30・32）や扁平気味になるもの（31・33）がみられる。31は内面の口縁部上端で若干の凹面をつくるため、不明瞭な稜線が廻る。4点とも釉は淡緑色の失透性のもので、30・31は表裏面に細かな貫入が認められる。胎土はいずれも灰白色のやや粗い素地である。

底 部

比較的多くの資料が得られているものの、完全に高台が残るものはほとんど見られない。また、口縁部との関係も判然としない。得られた資料を施釉の状況や高台の形状により、下記のように分類した。

第1類—高台外面まで施釉する。高台は方形状につくり、低く幅広い。

第2類—高台脇まで施釉する。高台は逆台形状につくり、低く幅広い。

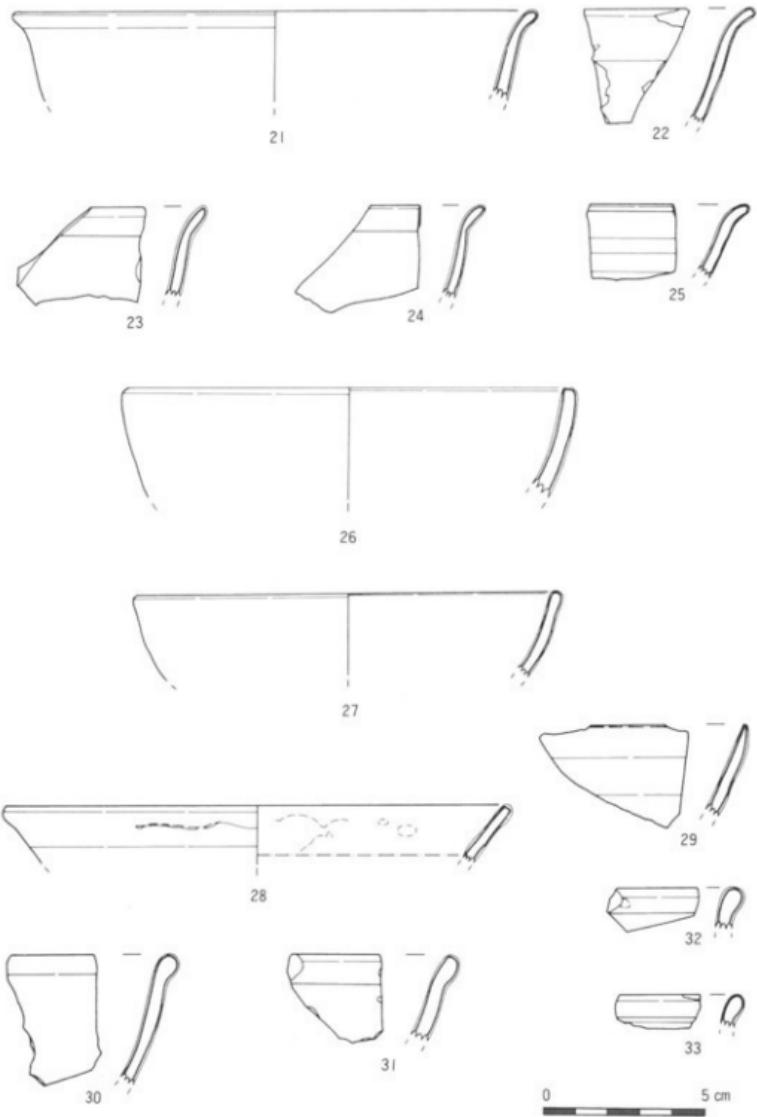
第3類—高台外面まで施釉する。高台は方形状につくるが、外底面の削りが浅い。

第4類—高台際まで施釉する。高台は方柱状につくり、外側を斜位に面取りする。

第5類—高台外面まで施釉する。高台は方柱状につくり、外側を斜位に面取りする。

第6類—高台外面まで施釉する。高台は方柱状につくり、疊付けを斜位につくる。

第7類—高台内側まで施釉する。高台は方柱状につくり、外側を斜位に面取りする。



第11図 青磁碗（第4類：21～25、第5類：26～29、第6類：30～33）

第8類—全釉のあと外底面を蛇の目状に釉を搔きとる。

第9類—外面は高台際まで施釉し、内底面を蛇の目状に釉を搔きとる。

以上の9類で、出土状況は第4表のとおりである。第5類が多く、他の類はそれほど多くない。特徴的なものを第12図34～52に示した。以下、類別に簡記する。

第1類

34に示すもので、疊付けは平坦にしている。内底面に「金玉満堂」の文字が明瞭に読める。文字を囲むようにみられる細線から、文字の彫られた面は2.2cm四方の大きさのスタンプであったことが窺い知れる。底径は推算6cm。釉は青緑色で比較的透明度がある。胎土は灰白色でやや細かい素地である。内底面に同じようなスタンプを配するものが阿波根古島遺跡（註）でも報告されており、割花文碗の底部とされている。

第2類

35に示す1点で、腰部があまり膨らまずに胴部へ向かうものである。内側は底面と胴部の境目に若干の段差を設けている。疊付けは平坦にし、底径の推算は約6.5cmである。内底面に文様は認められない。釉は暗緑色でやや透明度のあるものを薄く施釉している。内底面には細かい貫入が密に見受けられる。胎土は暗灰白色のやや粗い素地である。

第3類

36に示すもので、高台外面の削り出しからすると内側の削り出しが浅い。疊付けは平坦につくる。施釉の範囲からは第5類と同じだが、高台外面の面取りがないので分けてみた。内底面に文様の一部が認められるが、破損しているためどのようなものか不明。推算底径は約5cm。釉は暗緑色を呈す失透性のもので、内外面に細かな貫入が著しい。胎土は暗灰白色のやや細かい素地であるが、外底面は部分的に橙褐色を呈す。

第4表 類別出土状況

類別 序号	第1類	第2類	第3類	第4類	第5類	第6類	第7類	第8類	第9類	不明	合計
表採										2	2
第1層										2	2
第2層				1	2		1		1	3	8
第3層				1	6	1		2	2	16	28
第4層			1		3	1		1	1	1	8
第5層	1	1			1				2	4	9
合計	1	1	1	2	12	2	1	3	6	28	57

第4類

37・38に示す2点が本類に属するもので、高台外面や疊付けまで釉が流れている。若干腰部が膨らむものと、37は疊付けを平坦につくるが、38はやや内側に傾斜している。37は疊付けの中央部に沈線様のものが廻る。38は第3類のように外底面の削りが浅い。2点とも底径の推算ができる、いずれも約6cmである。37は内底面に印花文とその脇に小さく「平」の字が配されている。

釉は37が青緑色の失透性のものを、38が暗緑色でやや透明度のあるものを施釉している。38は表裏面に細かい貫入が密に見受けられる。胎土は2点とも灰白色のやや粗い素地である。

第5類

4点を39～42に示した。いずれも胸部への立ち上がりは判然としない。39は高台内側が丸くなり、40は高台外面の面取りが大きい。4点とも疊付けは平坦にしている。41の疊付けは擦られている。いずれも底径の推算ができる、39・41が約6cm、40・42が約5cmである。内底面には39が「竈」の字が記され、40・41は印花文が認められる。42は内底面の釉を蛇の目状に搔き取っている。

釉は40が失透性のもので、暗灰緑色を呈す。他の3点はわりあい透明度があり、39・42は青緑色を呈し、41は暗緑色を呈す。後者の3点は表裏面に細かい貫入が密にみられる。胎土は39が暗灰白色や橙褐色を呈すやや粗い素地で、40・41は灰白色のやや粗い素地、42は白濁色のやや粗い素地のものである。

第6類

特徴的な2点を43・44に示した。43は腰部がやや膨らむものである。44は高台内側が外側に開く感じで斜めに削られている。推定底径は43が約6.5cm、44が約5cmを測る。43は内底面に文様を配しているが、破片のため全体的な構図は不明。44は内底面の中央部を円形状に釉を搔き取るものであるが、若干の凹部には釉が残る。

釉は43が淡緑色の透明度のあるもので、44は青緑色で失透性のものを施釉している。44は外底面に釉が流れている部分があり、胎土目の溶着が認められる。胎土は43が灰白色のやや細かい素地で、44は灰白色のやや粗い素地のものである。

第7類

45に示したものである。腰部はそれほど膨らまず、ゆるやかに弧を描きながら胴部へ向かうものである。高台内側は立ち上がったあとすぐにやや斜め方向に削っているため、疊付けの方へ細くなる。推定底径の算出ができる、約6cmを測る。文様は認められない。釉は青緑色の失透

釉である。胎土は橙褐色のやや粗い素地である。

第8類

3点を46～48に示した。47は若干腰部が膨らむものようであるが、他の2点は破損しているため不明。いずれも豊付けは平坦に仕上げている。47は豊付けが擦られている。3点とも底径の推算ができ、46・48が約6cm、47が約7cmを測る。46は内底面に圓線と印花文を配す。

釉はいずれも深緑色であるが、46・47はやや透明度があり、48は失透性のものである。46は内底面に貫入がみられる。胎土は3点とも灰白色のやや粗い素地であるが、47・48は外底面に橙褐色を呈す部分が見受けられる。

第9類

49～51に示すものは本類に属するものである。49・50をみると高台際からほぼ直線的に開きながら胴部へ向かうものようである。高台は低く、幅広くつくり安定感がある。51は高台外面の斜位の面取りが大きく、他の2点に比べると不安定な感じを受ける。49は高台際に平坦な面をつくっている。また、高台の内外面に1本の沈線様のものが廻る。50の底面は中央部へ高くなっており、51は内底面だけが中央部の方へ高くなっている。3点とも底径の推算ができ、49は約7cm、50は約8cm、51は約6cmとなっている。

釉は3点とも灰緑色の失透性のものを施釉しており、51は高台外面まで釉が流れている。胎土はいずれも粗い素地のもので、49は胴部が灰白色で外底面が赤褐色を呈し、50は黄白色、51は灰白色を呈している。

皿

量的にはそれほど多くなく、全形の窺えるような資料も得られていない。得られたものを文様や器形を中心に下記のように分類した。なお、底部については劃花文のものだけを分類の項目にいれ、他の底部は分類からはずし一括して扱った。

第1類—内底面に櫛描き文を施すもの

第2類—蓮弁文を施文し、口縁部がほぼ水平に折れ曲がるもの

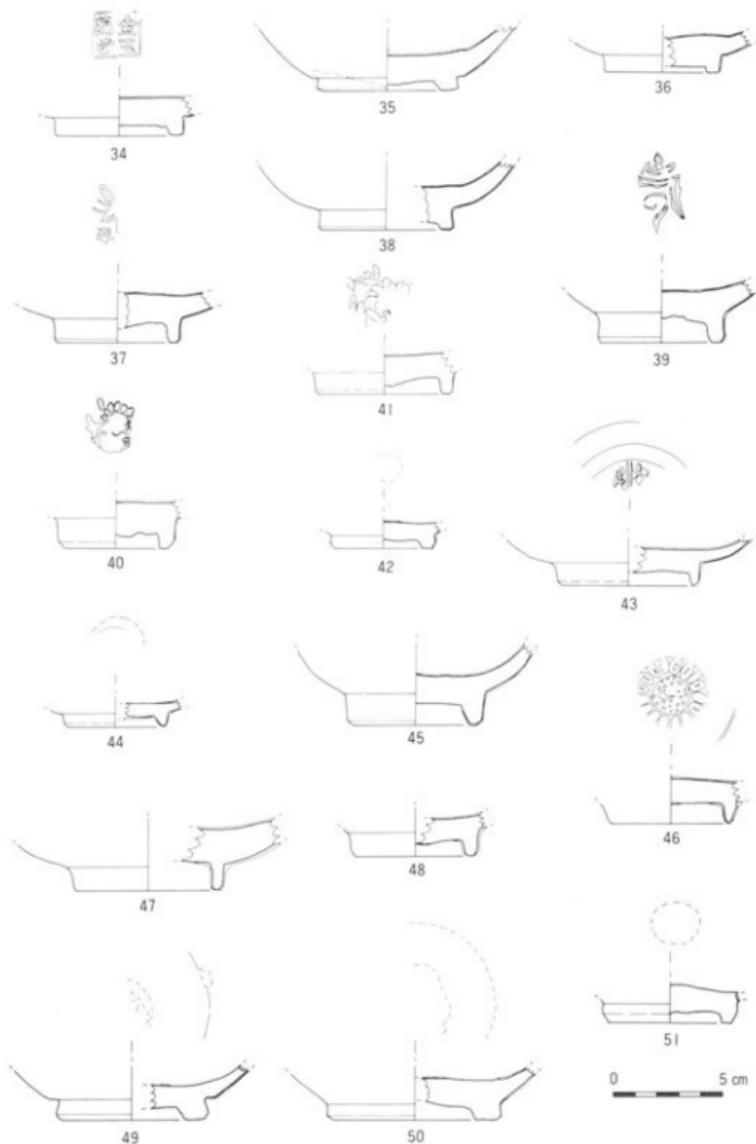
第3類—蓮弁文を施文するもので、直口口縁のもの

第4類—無文の直口口縁のもの

第5類—外面は無文で、口縁部が外反し、口唇部が波状を呈すいわゆる稜花皿

第6類—無文の外反口縁のもの

以上の6類である。量的な傾向はつかめないものの、第1類が数点得られていることは注目される。特徴的なものを第13図1～16に示した。以下、類別に簡記する。



第12図 青磁碗 底部

第1類

劃花小皿で、一般に同安窯系とされるものである。52～55に示すものがそれで、55は口縁部、52～54は底部の資料である。55の口縁部は直線的に開く器形のもので、推算口径が約8cmを測る。口唇部は平坦につくるが、口唇部外側の角を斜めに削っているため、全体的に丸味を帯びた感じである。内底面に移行する際で凹線状のものを廻らしている。

52～54はベタ底のものである。52は底面からの立ち上がり部を斜めに整形し、そこから口縁部へ向かうものであるが、他の2点は底面から直線的に口縁部へ向かうものである。

釉は4点とも透明度のあるもので、52・53・55は青緑色、54は深緑色を呈す。いずれも表裏面に細かい貫入が見受けられる。内面は全釉であるが、外面は底面からの立ち上がり部に無釉の部分を設けるもの（52・53）と、底面からの立ち上がり部まで施釉するもの（54）がみられる。胎土は4点とも灰白色のやや細かい素地である。

第2類

56・57に示すものであるが、2点とも小破片のため全体の状況は不明。56は57よりも厚くつくられ、折れ曲がる部分の内側の棱もより明瞭である。56は外面に蓮弁文の一部が認められる釉はやや失透性のもので、56が黄緑色、57が青緑色を呈す。两者とも胎土は灰白色のやや細かい素地である。

第3類

58に示すもので、口唇部は丸くつくる。外面の蓮弁文はヘラ彫りによって描かれている。釉は青緑色のやや透明度のあるもので、胎土は灰白色のやや粗い素地である。

第4類

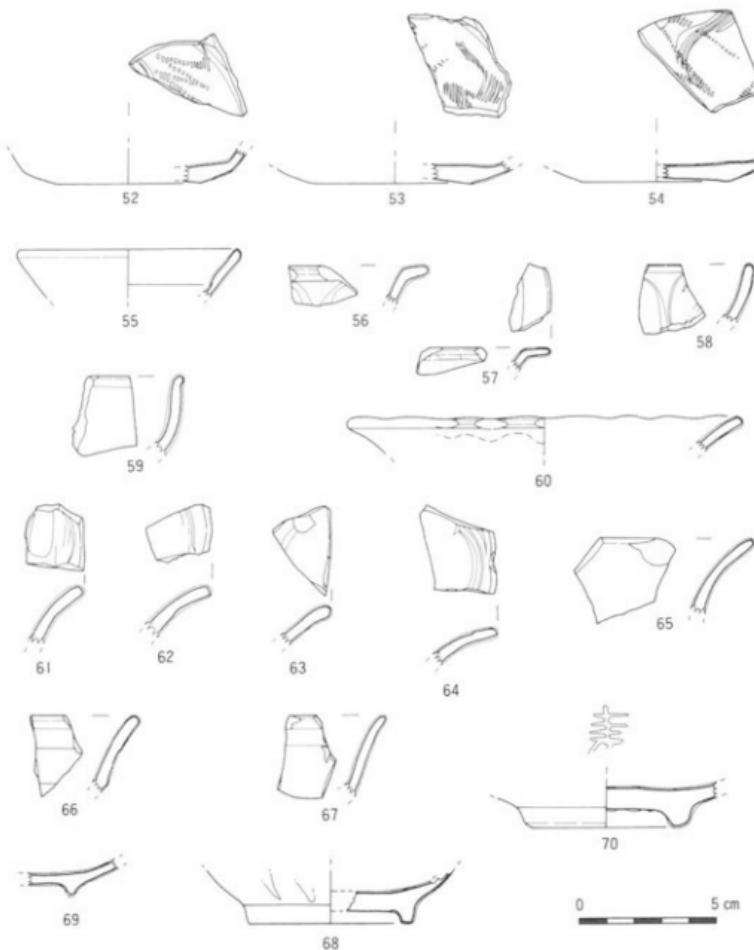
59に示すもので、口縁部上端を若干外側へ折り曲げたようなつくりである。釉は深緑色のやや透明度のあるもので、厚く施釉されている。胎土は灰白色のやや細かい素地である。

第5類

5点を60～64に示した。いずれも小破片であるが、60は推算口径の算出ができ、約14cmを測る。61～64は内面に文様の一部が認められるが、60は無文のようである。60だけが失透性の釉で、他は透明度のあるものを施釉している。61は黄緑色、64は深緑色、他の3点は青緑色を呈す。61～64は表裏面に貫入が見受けられる。胎土はいずれも灰白色のやや粗い素地である。

第6類

65～67に示す3点が本類に含まれる。3点とも口唇部を丸くつくるもので、65はゆるやかな弧を描いて外反する。66は外面に若干の段差や稜を有するもので注意される。釉は65が暗緑色で透明度のあるもの、66が灰緑色で透明度のあるもの、67は青緑色の失透釉を施釉している。65・66は表裏面に貫入が認められる。胎土はいずれも灰白色のやや粗い素地である。



第13図 青磁皿

底 部

68～70に特徴的なものを示した。68は外体面に蓮弁文を施すもので、推算底径は約6cmである。高台は方形状につくり、豊付けは平坦である。豊付けの外面を斜位に面取りしている。内底面に文様の一部が認められる。深緑色のやや透明度のある釉を施釉し、全釉のあと外底面の釉を搔き取っている。胎土は灰白色のやや細かい素地である。

70も推算底径が約6cmを測るもので、高台のつくりは68とほぼ同じものである。内底面に文字が配されるが、そこで破損しているため判然としない。釉は暗緑色でやや透明度のあるものを、高台内側まで施釉している。しかし、釉が外底面まで流れている部分もあり、そこでは胎土目の溶着もみられる。表裏面に貫入が認められる。胎土は灰白色のやや粗い素地である。

69は逆三角形状に小さな高台をつくるもので、豊付けの近くだけを露胎にしている。体部がやや波打つ感じであり、蓮弁文をかたどったものかもしれない。釉はやや透明度のある青緑色を呈すものであるが、外底面は青白色の釉を施している。胎土は白濁色のやや粗い素地のものである。

盤

数点得られている。3点を71～73に示した。71・72は鉢縁の口縁部資料で、内側の稜は両方とも比較的明瞭である。2点とも内体面には蓮弁文の一部が認められる。71は釉がやや失透性のもので、青緑色を呈す部分と黄緑色のところが見受けられる。胎土は粗い素地のもので、場所によって橙褐色の部分と灰白色を呈すところがみられる。72は釉がやや透明度のある深緑色のもので、胎土は灰白色のやや粗い素地のものである。71は細かく密な貫入が、72は粗い貫入が表裏面にみられる。

73は底部の資料で、小破片のため大きさなど不明。高台は方柱状につくり、豊付けは平坦にしている。高台外面を若干斜位に面取りする。内底面の外周に稜線状のものを廻らしている。釉は深緑色の失透性のもので、胎土は灰白色の粗い素地である。

壺

75・76に示した2点は、いずれもそれほど大きくないものようである。75は頸部の破片で頸径の推算は約6cmを測る。肩部はそれほど張らずに、頸部はほぼまっすぐになっている。文様はみられない。釉は深緑色の失透性のものが表裏面に施釉されており、細かな貫入がみられる。胎土は灰白色の粗い素地である。

76は肩部の破片で、外面に文様が配されるが全体的な構図は不明。釉は青緑色のやや透明度のあるもので、表裏面に施釉されている。胎土は灰白色のやや粗い素地である。

瓶

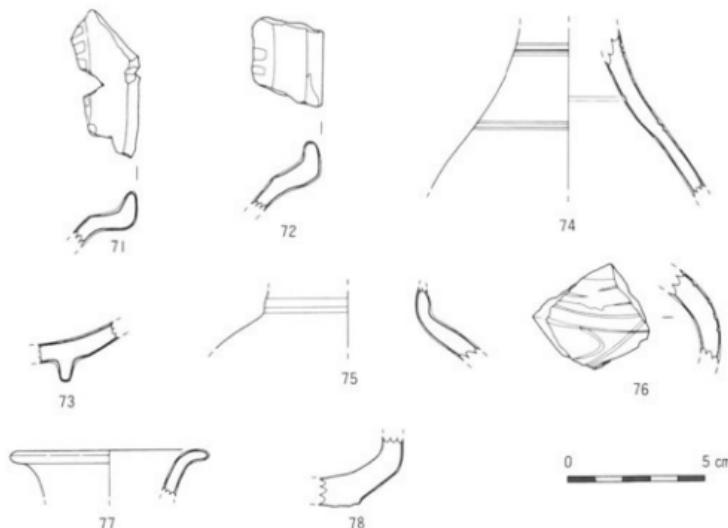
2点得られている。74・77に示したもので、77は口縁部、74は頸部の資料である。77は外反口縁で、口唇部は舌状を呈す。推算口径は約7cmを測る。文様はみられず、破片の全面に施釉されている。釉は青緑色の失透性のもので、胎土は灰白色のやや粗い素地である。74は破片上端の推算径が約4cm、下端部の推算径が約10cmを測る。上端に3本の圈線、胴上部に2本の圈線を配している。黄緑色の失透性の釉が表裏面に施され、細かい貫入が密にみられる。胎土は灰褐色のやや粗い素地である。

香 爐

78に示す1点で、底部の資料である。高台は破損しているものの、高台際を斜めに整形しそこからほぼ直線的に立ち上がっていく。釉は灰緑色の失透性のもので、表面にだけみられる。胎土は黄白色のやや細かな素地である。

註

「阿波根古島遺跡」—那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告— 沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会 1990年3月



第14図 青磁（盤：71～73、壺：75・76、瓶：74・77、香炉：78）

口、白 磁

460点余りと比較的まとまった出土量である。しかし、小破片の資料がほとんどで、全形の窺えるものは第17図56に示すものだけである。確認できる器種は碗・皿・杯・瓶の4器種で、量的には碗が圧倒的に他を凌駕している。これらの資料を時期的な面からみると、13世紀頃の玉縁の碗や口禿げ皿など古い時期のものも見受けられるが、いずれの器種も17世紀以降のものが主流のようである。特徴的なものを第15図～第17図に示した。

以下、器種別に簡記する。

碗

最も多く得られている器種である。13世紀～近代までのものが含まれるようである。時期的な面から、下記のように分けてみた。

- a. 13世紀頃のもの
- b. 15世紀頃のもの
- c. 16世紀頃のもの
- d. 17世紀以降のもの

先述したようにdが主流をなす。以下、それぞれについて簡記する。

- a. 13世紀頃のもの

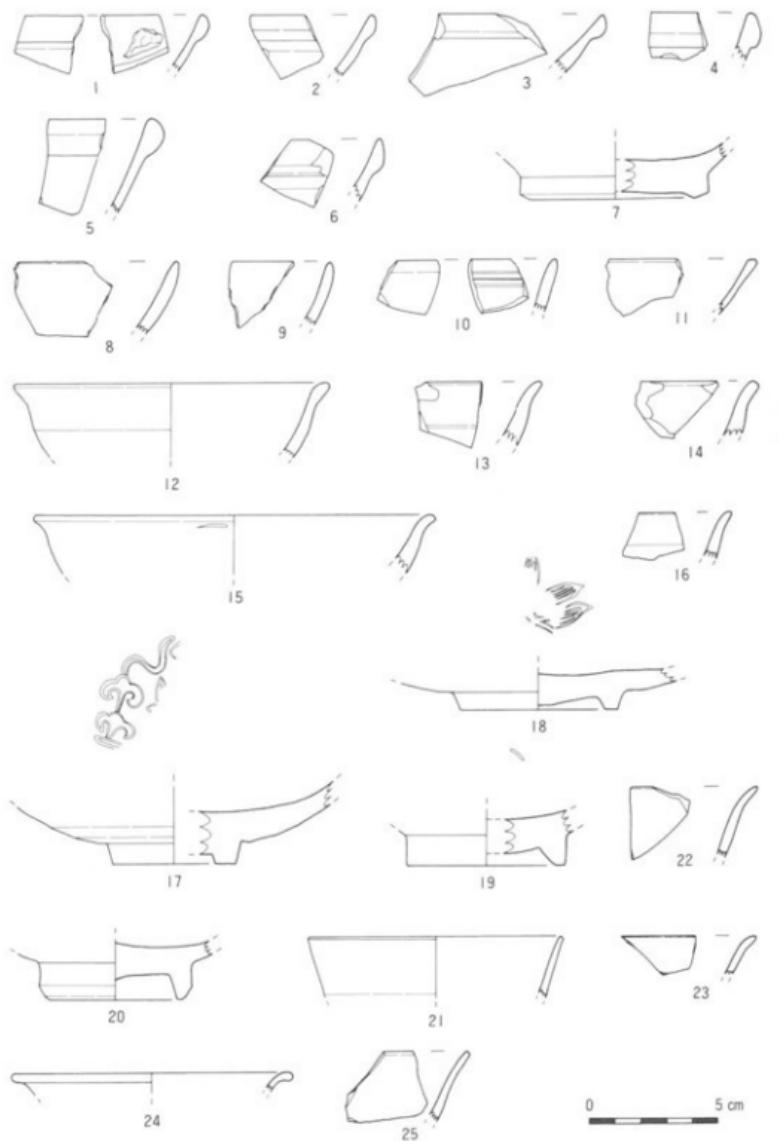
第15図1～7に示したものである。口縁部が玉縁状に肥厚する、いわゆる玉縁口縁碗のグループである。1～6は口縁部の、7は底部の資料である。口縁部の資料をみると、いずれも直線的に外側へ開くものようである。玉縁の状況は1～3がわりと小さ目のもので、4～6は大きな玉縁をつくる。1・5は断面がカマボコ状を呈し、他は三角形状を呈す。1・2は玉縁を意識するように、直下に若干の凹線を廻らしている。また4・6は玉縁の最も膨らむ部分を平坦に削っている。いずれも小破片のため大きさは窺えない。

7は推算底径が約7cmを測るものである。外底面の削りが浅く、高台内側は斜めに削り出している。覺付けは斜位につくるため、内側だけが地につく。

釉はいずれも失透性のもので、1・2・6が淡灰色、3・5が灰緑色、4・7が白濁色を呈す。1は内側に胎土目様の溶着物がみられ、4は表裏面に細かく密な貫入が見受けられる。胎土は1～3・7が灰白色の細かな素地で、4は黄白色の細かな素地、5・6は灰白色のやや粗い素地である。

- b. 15世紀頃のもの

第15図8～20に特徴的なものを示した。8～16が口縁部、17～20が底部の資料である。口縁部の形状をみるとやや内湾気味のもの（8・9）、口縁部が直線的に開くもの（10・11）、外反するもの（12～16）の3種が認められる。量的には外反するものが多い。これらの口唇部をみ



第15図 白磁碗 (a : 1 ~ 7、b : 8 ~ 20、c : 21 ~ 25)

ると内湾気味のものは両者とも舌状を呈し、直線的に開くものは10が平坦で11は内側を斜めに成形している。外反するものは12・13が舌状、14・16が尖り気味、15が平坦に成形している。

12・13は推算口径の算出ができ、約12cmと約16cmである。釉は比較的透明度のあるものを施しているが、15は失透性のものである。大体縁味をおびた灰色のものであるが、12・15は青味をおびた灰色を呈す。9～13・16は表裏面に貫入がみられる。胎土は10が暗灰色のやや細かい素地で、他は灰白色のやや細かい素地のものである。

底部の資料は4点とも底径の推算可能なもので、17・20が約5cm、18・19が約6cmである。17・18は腰部が膨らむ器形のようである。17～19は高台を逆台形状につくるもので、17は外底面の削りが浅い。20は高台を方柱状につくり、疊付けの外側を斜位に面取りするものである。17・18は内底面に印花文が配されている。

釉はいずれも失透性のもので、17～19は高台際まで、20は高台内側までの施釉である。17・18は淡灰色、19は若干緑がかかった灰色、20は青灰白色を呈す。19・20は貫入が著しい。胎土は17・18が灰白色のやや細かい素地、19・20が灰白色のやや粗い素地のものである。

c. 16世紀頃のもの

第15図21～25に示したもので、口縁部の資料である。22以外は比較的薄手のものである。21は直口口縁、他は外反口縁である。21～23は口唇部が尖り気味になり、24は舌状、25は平坦に成形している。21は口径の推算ができ、約10cmを測る。釉は25だけが比較的透明度のあるもので、他は失透性のものである。21は白濁色、他の4点は淡灰色を呈す。25だけが表裏面に細かく、密な貫入が認められる。胎土は25が乳白色のやや粗い素地、他は灰白色のやや粗い素地のものである。

d. 17世紀以降のもの

ここで扱うものは17世紀～近代までの幅広い時期のもので、細かな特定ができずここで一括した。そのため、今回得られたグループの中で最も多い出土量となっている。ここに含まれるものを見ると、器形・大きさ・素地・釉の状況などの特徴から大きく下記の2種に分けることができる。

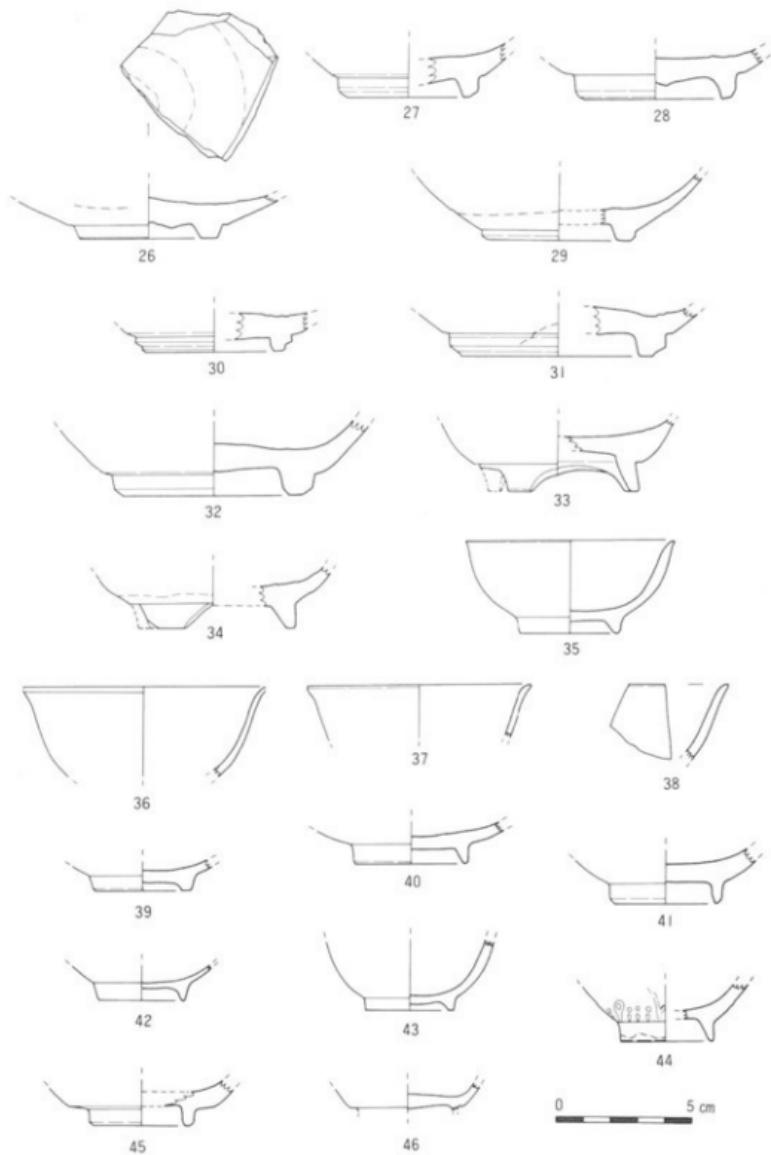
a種—諸特徴が前述した15・16世紀頃のものに近いグループ

b種—小型化し薄手で、乳白色で細かく密な素地を用い、非常に光沢のある釉を疊付けと口唇部を除いて施釉するグループ

以上の2種で、量的にはb種が多い。全般的な状況からするとb種は後出のものかと考えられる。特徴的なものを第16図に示した。以下、それぞれについて簡記する。

・a種

第16図26～34に示すもので、いずれも底部の資料である。立ち上がり部がわりと残る29・32をみると、高台際から直線的に開きながら口縁部へ向かうものが含まれるようである。高台のつくりも特徴的で、29・31・32は外底面を深く削り、疊付け外面を大きく斜位に面取りしてい



第16図 白磁碗 d (a種:26~34、b種:35~46)

る。そのため、外側からみると低い高台で、疊付けを平坦にする。

26～28・30は高台の内外をほぼ同じように削るものである。26はもともと低い高台で、27・30は疊付けの外面を大きく斜位に面取りしているため、低く見える。28はやや高くつくり出されるもので、疊付け外面の斜位の面取りは小さい。疊付けは平坦に成形しており、27は内側に平坦面が若干みられる。

33・34は高台に大きな抉りを設けて足をつくるもので、2点とも3足のようである。33は高台の輪郭を残すものの、34は抉りが深く足がうきたつ感じの形状になっている。33は外底面を深く削っている。2点とも約1.5cm幅で、疊付けの部分が剥げている。

いずれも高台径の推算が可能で、26は約5cm、27は約4cm、28～30・33・34は約6cm、31は約8cm、32は約7cmとなっている。6cmぐらいのものが主流であったかと推察される。

26は内底面を蛇の目状に釉剥ぎするもので、他は内底面を露胎にしている。32のように体部下方までしか施釉しないものも見受けられる。外面は31・33の2点は高台際まで施釉するものであるが、他は体部下方までの施釉で、以下を露胎にするものである。

釉は26・31・32は白濁色の失透釉が薄くかけられ、27～29は灰緑色の失透釉、33・34は青灰色の失透釉がかけられている。30は施釉の部分が見受けられない。胎土は26・30～32が黄白色のやや粗い素地、27～29が灰白色のやや粗い素地、33・34が乳白色のやや粗い素地である。

・ b 種

特徴的なものを第16図35～46に示した。細かくみると、さらに分けられるようであるが、今回は一括する。35は全形の窺えるもので、推算口径は約10cm、推算底径が約3cm、高さ3.5cmを測る。腰部が丸味をおび、口縁部へほぼまっすぐに向かうものである。口唇部は尖り、高台は逆三角形状につくる。

36～38は口縁部の資料である。3点とも口縁部上端が僅かに外反するもので、腰部は丸味をおびるもののがある。口唇部は尖る。36は口径の推算ができ、約10cmを測る。

39～46は底部の資料である。いずれも高台径の推算ができる、大体3～5cmの大きさである。高台際から胴部へ移行する部分をみると、丸味をおびるもの(43)、直線的に外側へひらくもの(44)、折れ曲がる感じになるもの(45)などが見受けられる。高台は39・42・43のように低くつくるものや41・44のように高くつくるものなどがみられ、疊付けは尖り気味につくるものが多い。39・40・45のように平坦なものは少ないようである。

39・45は素地や釉の状況などからするとa種と同じようであり、その中の小型碗として扱うほうがよいものかもしれない。

III

量的にはそれほど多くない。本種も13～14世紀頃の古手のものから17世紀以降のものまで得られている。第17図47～59に特徴的なものを示した。47～49は13世紀頃のベタ底の資料である

が、底面が若干上方へ弧を描く。47は底面からの立ち上がり部を斜位に面取りし、それから胴部へ移行するものである。48は底面からそのまま立ち上がるるもので、49はどちらになるか判然としないものである。いずれも立ち上がり部は明瞭な棱を有す。47・49は底径の推算ができ、47は約5cm、49は約4cmを測る。48は内底面に印花文がみられる。

施釉状況をみると48は外底面の際まで施釉しているが、47・49は外面に釉は認められない。釉は3点とも比較的透明度のあるもので、47・48は灰緑色を呈し、49は灰白色を呈す。48は外面に細かな貫入がみられ、49は内面に細かく密な貫入が見受けられる。胎土は47・48が灰白色のやや粗い素地で、49は灰白色の細かな素地である。

50～53はいわゆる口禿げ皿の資料である。50・51は口縁部で、ほぼ直線的に外側へ開く器形のようである。口唇部は尖り気味につくり、内面の口線上端を約5mm幅で釉剥ぎしている。釉は白濁色の失透性のもので、胎土は灰白色のやや細かい素地である。

52・53はベタ底の資料である。底面から丸味をおびて立ち上がるもので、立ち上がり部の稜はそれほど明瞭ではない。内底面の外周には四線様のものが廻る。52は底径の推算が可能で、約6cmを測る。47～49のタイプよりやや大き目になっている。釉は2点とも失透性のもので、52は灰緑色、53は青灰色を呈す。貫入は見受けられない。胎土は両方とも灰白色のやや粗い素地である。

54・55は外反口縁の皿で15世紀頃のものようである。2点とも口唇部は舌状になる。釉は失透性のもので、54は灰緑色、55は白濁色を呈す。胎土は灰白色のやや細かい素地である。

56～59は16世紀頃のものである。56は全形の窺えるもので、他は底部の資料である。56は底部を甚簡底にするもので、口縁部へゆるやかに外反するものである。口唇部は丸味を帯びる。推定口径は約12cm、底径は推算6cm、高さは3cmを測る。全面施釉の後、疊付けの部分を削り調整している。疊付けの周辺には砂粒の溶着が著しい。釉は白濁色の失透性のもので、胎土は灰白色のやや細かい素地である。

57～59は底部の資料である。57・58は甚簡底状に小さな高台をつくるもので、59は前二者に比べると大きな高台のものである。3点とも逆三角形状の高台で、疊付けは尖る。疊付けの周辺部を露胎にし、他は全面に釉が認められる。器形は判然としない。57・58は高台径の推算ができ、それぞれ約7cm、約5cmを測る。いずれも釉は白濁色の失透釉で、胎土は灰白色のやや細かい素地のものである。

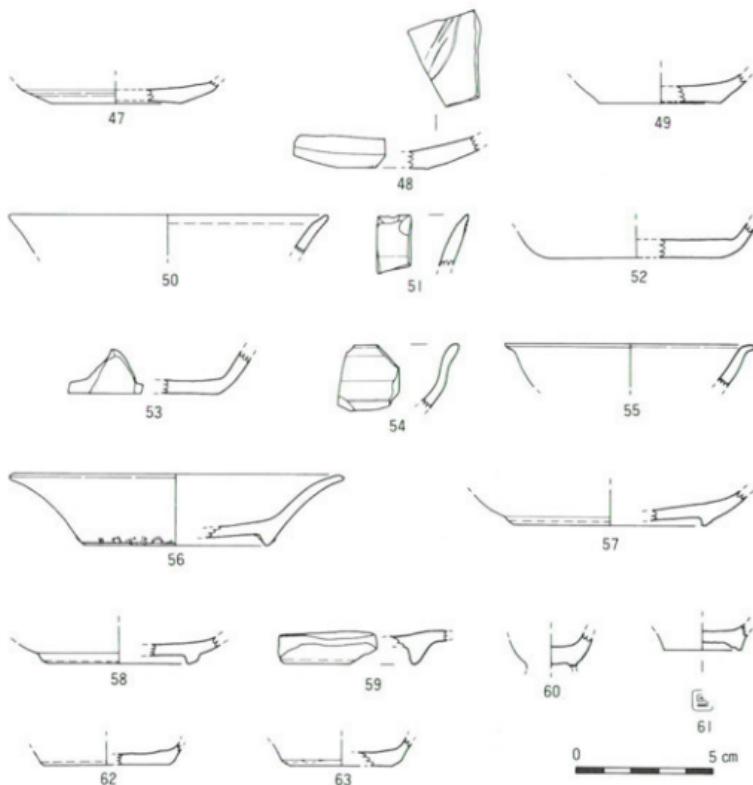
杯

第17図60・61に示す2点で、17世紀以降のものである。小杯になるもので、推算の底径は60が約2cm、61が約3cmである。2点とも器形は判然としないが、60は腰部がやや丸くなるものようである。高台の形状は61が内側に段を有するもので、60は不明。61は外底面にスタンプが押されているが判然としない。61は疊付けの部分だけを無釉にしている。60も同じような施

釉範囲のものと考えられる。2点とも乳白色の失透釉で、胎土は白濁色の細かな素地である。

瓶

第17図62・63に示すベタ底のものである。両者とも17世紀以降のもので、推定底径が62は約3cm、63は約5cmを測る。それほど大きくはないようである。63は底面からの立ち上がり部を斜位に面取りするもので、62は底面からそのまま立ち上がる。2点とも立ち上がり部の稜は明瞭である。両者とも外面は底面際まで施釉し、内底面は蛇の目状に釉剝ぎしている。63は釉が乳白色の失透性のもので、胎土は乳白色の細かな素地である。62は釉が白濁色の失透性のもので、胎土は黄白色のやや粗い素地である。



第17図 白磁（皿：47～59、杯：60・61、瓶：62・63）

ハ. 染付

総数580点と中国産の陶磁器では最も多く得られている。しかし、ほとんど小破片のもので全形の窺えるような資料にはめぐまれていない。第19図18に示す碗の資料は全形が窺えるもので、推定復元を試みた。

確認できた器種は碗・鉢・皿・杯・合子・壺の6器種である。量的には圧倒的に碗が多く得られており、他の器種は僅少である(第5表)。これらの資料のほとんどは16世紀以後の所産のようで、特に17~18世紀頃のものが多く得られている。特徴的なものを第18図~第21図に示した。以下、器種別に略述する。

碗

最も多く得られている器種で、第18図~第20図に特徴的なものを示した。時期的な面から下記の3種に分けてみた。

a種-16世紀頃の所産と考えられるもの

b種-17世紀頃の所産と考えられるもの

c種-17世紀以降のもの

以上の3種である。量的にはc種が圧倒的に多く得られている。以下、種別に簡記する。

・a種

第18図1~12に示すもので、1~7は口縁部の、8~12は底部の資料である。まず、口縁部からみる。いずれも小破片のため大きさは知り得ない。1~4は直口口縁の資料で、口縁部の方へ直線的に開き気味になるものである。口唇部は平坦につくられるが、両側の角が明瞭でなく丸味を持って成形されている。2は3mmぐらいの厚さの薄手のもので、他の3点は5mm程の厚さを有す。

5~7は開き気味に口縁部へ向かうもので、上端が外反するものである。7は大きく折り曲げるようにつくるもので、器厚は約6mmと他の2点に比べ厚手である。

文様は1~3が口縁部に集約されるもので、1・3は波濤文、2は下端が連続弧を描く幅広

第5表 器種別出土状況

器種 層序	碗			鉢	皿	杯	合子	瓶	合計
	a	b	c						
表採	5	8	11		2				26
第1層	16	37	25		4	2			84
第2層	8	21	35		6	1		1	72
第3層	36	70	113	1	16	3		1	240
第4層	24	34	48		9	1		1	117
第5層	6	16	12		5	1	1		41
合計	95	186	244	1	42	8	1	3	580

の線状の文様を配している。3は文様帶の下部に2本の界線を廻らしている。2の資料は破片の下端部に呉須の部分が僅かに認められ、外体部にも施文したものと考えられる。4・5・7は外体面に施文するもので、4・5は口縁上端に2本の界線を配し、外体部には草花文を施文するものである。7は文様の構図が判然としない。6は外体面を小さな渦巻き文で埋めしており、内体面にも施文するが判然としない。いずれの場合も内面の口縁上端には1~2本の界線を廻らしている。

呉須の発色はほとんどが鈍く、釉は青味がかった透明釉である。1は外面に粗い貫入が、7は両面に細かく密な貫入が認められる。胎土は乳白色のやや粗い素地である。

8~12は底部の資料で、いずれも底径の推算が可能である。8・10・11は約6cm、9は約5cm、12は約7cmである。高台は疊付けの方へ細くなるようにつくり、8~10は比較的厚味があり、11・12は薄くつくられている。疊付けは11だけが尖り気味にしており、他は平坦に成形している。8・9は疊付けの外側を、斜位に面取りしている。破片のため器形は判然としないが、8は高台際で若干折れる感じになっている。また、8・9は内底面の中央部へ若干凹むように成形されている。

文様は、全体的な状況はつかめない。8・12は外体面に文様の一部が認められる。10~12は高台際や高台外面に1~2本の界線を廻らしている。12は外底面にも2本の圈線と文様の一部が認められる。内底面はいずれも文様が施されており、8・9は渦巻き状の曲線を主体とするもので、圈線はみられない。10~12は圈線を廻らすもので、10はその内側を蛇の目状に釉剥ぎしている。さらに内側に呉須が僅かにみられることから、文様が配されていたようである。11・12は圈線の内側に花文を描くようである。

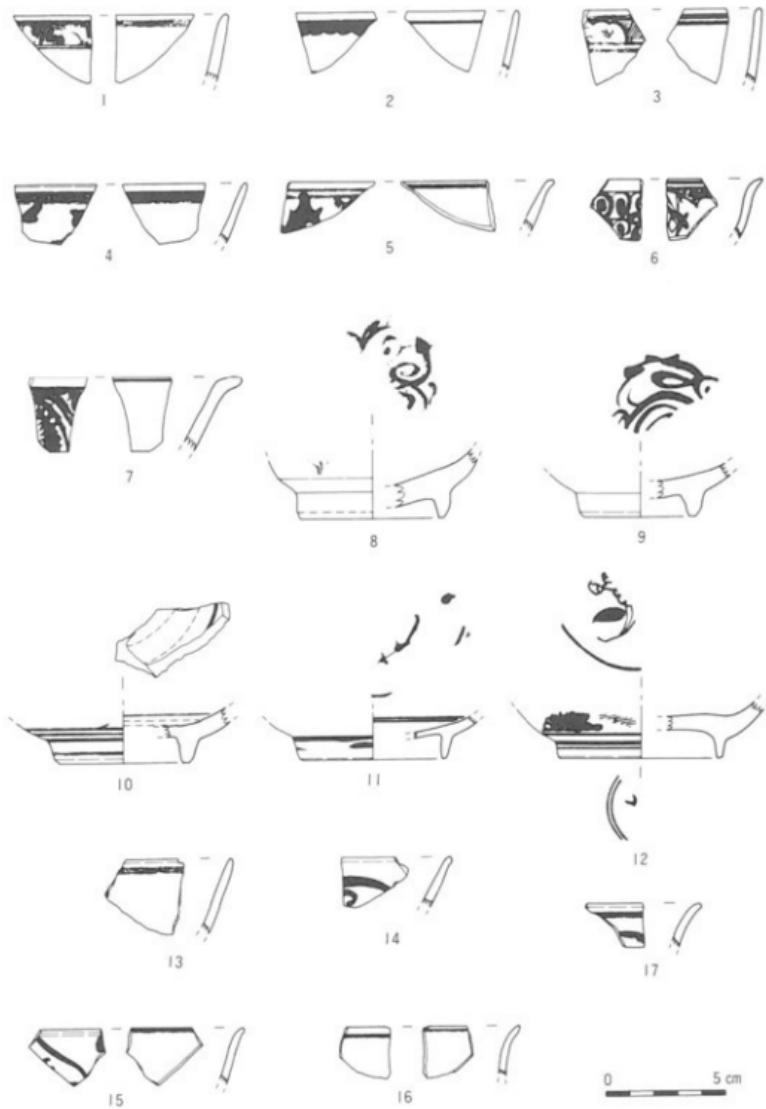
釉は12が青白色、他は淡青白色の透明釉を施している。施釉範囲をみると8は疊付けとその周辺を無釉にし、他は全釉である。9・10は高台の外面まで施釉し、疊付けおよび外底面は露胎にしている。11・12は疊付けだけが無釉である。胎土は8・9が灰白色のやや粗い素地で、10は黄白色のやや粗い素地となっている。12は灰白色の細かな素地で、11は灰白色のやや粗い素地である。11は他の資料にくらべると薄手のものである。

• b種

特徴的なものを第18図13~17に示した。13~14は直口口縁、15~17は外反口縁の資料である直口口縁をみると、2点とも口縁部の方へ直線的にやや開くものである。口唇部は丸味のあるつくりであるが、14は比較的平坦に成形している。

文様は13が外面の口縁上端に1本の界線を廻らし、外体面に施文するものである。14は界線はみられず、外体部の文様だけが施文されている。外体面の文様は判然としない。

呉須の発色は鈍い。釉は淡青白色の透明なものであるが、14はやや失透性のものである。13は表裏面に細かく密な貫入が認められる。胎土は14が灰白色のやや粗い素地で、13は黄白色のやや粗い素地である。



第18図 染付碗 (a種: 1~12、b種: 13~17)

外反口縁の15~17の3点は口縁部の方へ開き気味になり、上端を若干外反させるものである。15・17は口唇部を平坦につくるが、16は尖る。文様をみると15は外体面に構図の判然としない文様がみられ、口唇部から内面の口縁部上端には1本の界線が廻る。16は表裏面の口縁部上端に1本の界線を廻らし、17は外面の口縁部上端に1本の界線、その下に文様の一部がみられる。内面は無文。3点とも釉は淡青白色で、異須の発色は鈍い。胎土は灰白色でやや細かい。

・c種

最も多く得られている。しかし、ほとんど小破片のもので、全形の窺えるものは第19図18に示す1点だけである。特徴的なものを第19図・第20図31~42に示した。第19図18~30、第20図31~33は口縁部の、第20図34~42は底部の資料である。

口縁部の資料をみると全形の窺えるものや口径の推算できるものが合わせて11点あり、器形や大きさから先にみていく。まず、器形をみると概ね3種認められる。即ち、①口縁部の方へ直線的に開くもの、②若干内湾気味になるもの、③口縁部上端が僅かに外反するものの3種である。量的には①・③のものが多く、②は僅少である。①・③の器形を示すものが普通につくられていたかと推察される。

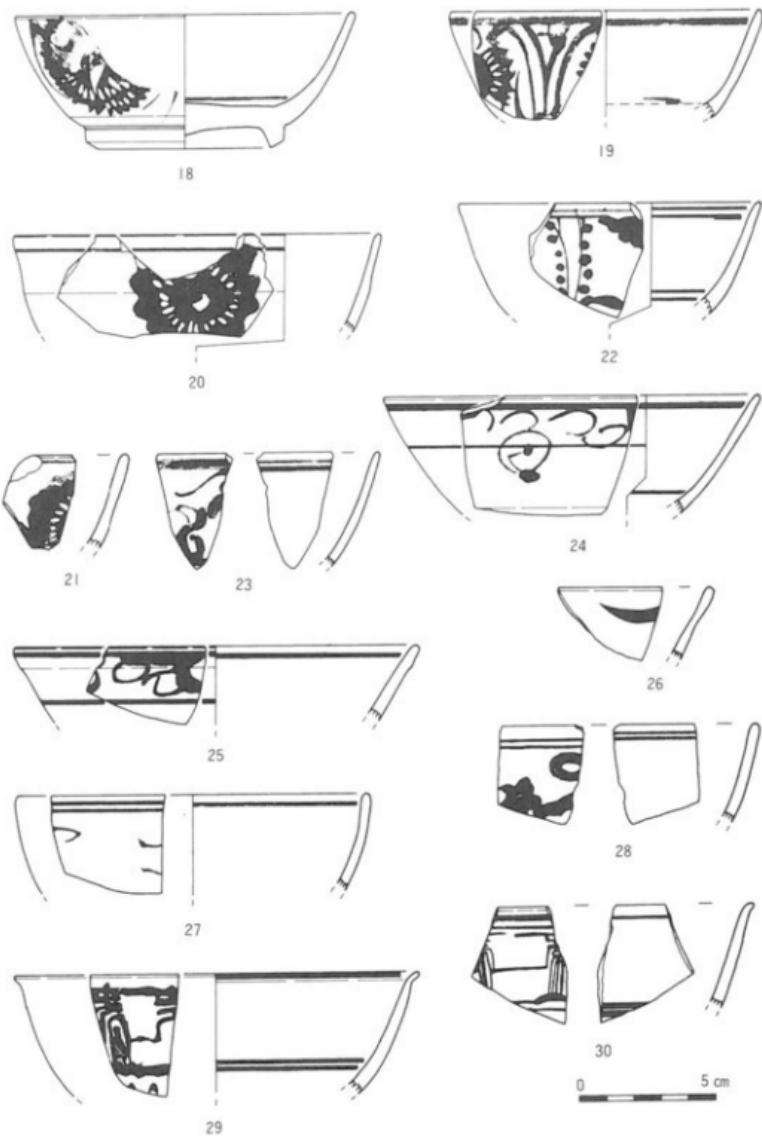
高台の形状をみると疊付けの方へ細くつくられるものが多く見受けられる。疊付けは斜めに仕上げるもの(18・34~36・38・40)と平坦につくるもの(37・39・41・42)の2種がみられる。前者は内底面を蛇の目状に釉剥ぎし、外底面も施釉するものが目立ち、後者は内底面・外底面とも露胎にするものが多い。41は疊付けを斜めにし、内底面を蛇の目状に釉剥ぎするが、外底面を露胎にするという中間的なものである。

次に大きさについてみる。全体の大きさが明確なものは1点だけで(第18図20)、推定口径の算出できるものが10点、推定底径の算出できたものが、9点である。推算口径をみると11cm前後のもの(19・22)、12cm前後のもの(18)、13cm前後のもの(20・24・27)、15cm前後のもの(25・29・31~33)などが見受けられる。①・②の器形を示すものは若干小さ目で、③の器形を示すものはやや大き目のグループになっている。

推算底径をみると7cm前後のものが多く、一般的であったかと思われる。8cm前後の若干大き目のもの(34・40)や6cm前後のやや小さ目のもの(36・41)なども見受けられる。これを高台の形状などと合わせてみると、大き目のものは疊付けを斜めにし、外底面施釉のものである。小さ目のものは疊付けが平坦で、外底面無釉のものである。ひとつの傾向を示しているかと考えられる。

高さについては第19図18に示すものだけが判明するもの(4.9cm)、一般的な高さについては明確にし得ない。しかし、この時期の他遺跡のものなどを参考にすると、この時期は口径や底径に比べ低くなる傾向がみられるようである。

以上のことからすると、第19図18はこの時期の一般的な器形・大きさを示している資料のひとつと考えられる。



第19図 染付碗 C種

文様は内外両面に施すが、外面の方により主眼が置かれるようである。外面の文様は花文・溝文・唐草文などのほか縦字文を配すものがみられる。また、界線を廻らすものも多く、外面では口縁部に、内面では口縁部と内体面の下部にそれぞれ1~2本配するのが普通のようである。

具須の発色は鈍いものが多く、色合も数種見受けられる。釉は乳白色のやや失透性のものが目立つものの、青白色の透明釉を施すもの（24・31・32・39）なども見受けられる。施釉は内体面および外体面は全釉である。底部において内底面を蛇の目状に釉剥ぎし外底面に施釉するものと内底面および外底面とも無釉にするものがみられる。内底面に重ね焼きの際の痕跡を残すものが多くみられる。

31は内外面とも体部下半部が無釉になるようで、他の資料とは異なる施釉方法である。また細かな貫入が見受けられるのも本資料だけである。33は口唇部の釉を削り、いわゆる口紅を施しているものである。

胎土は乳白色のやや粗い素地のものが多く見受けられるが、黄白色の粗いものや灰白色の粗いもの、白濁色の粗いものなども見受けられる。

鉢

第20図43に示す1点だけである。口縁部の方へ聞きながら向かい、口縁上端でやや立ち気味になる。口唇下約1.5cmの箇所で凹む感じになり、断面がゆるやかなS字状の形状を示す。凹み部の下方は比較的明瞭な稜を有す。この部分は蓋受けの可能性も考えられる。口唇部は尖り気味につくる。

大きさは判然としない。文様は内面にだけ認められる。口唇直下に幅広の界線を1本廻らし凹み部の下方に直径7mm前後の円形状のものを配すが、全体的な状況はつかめない。

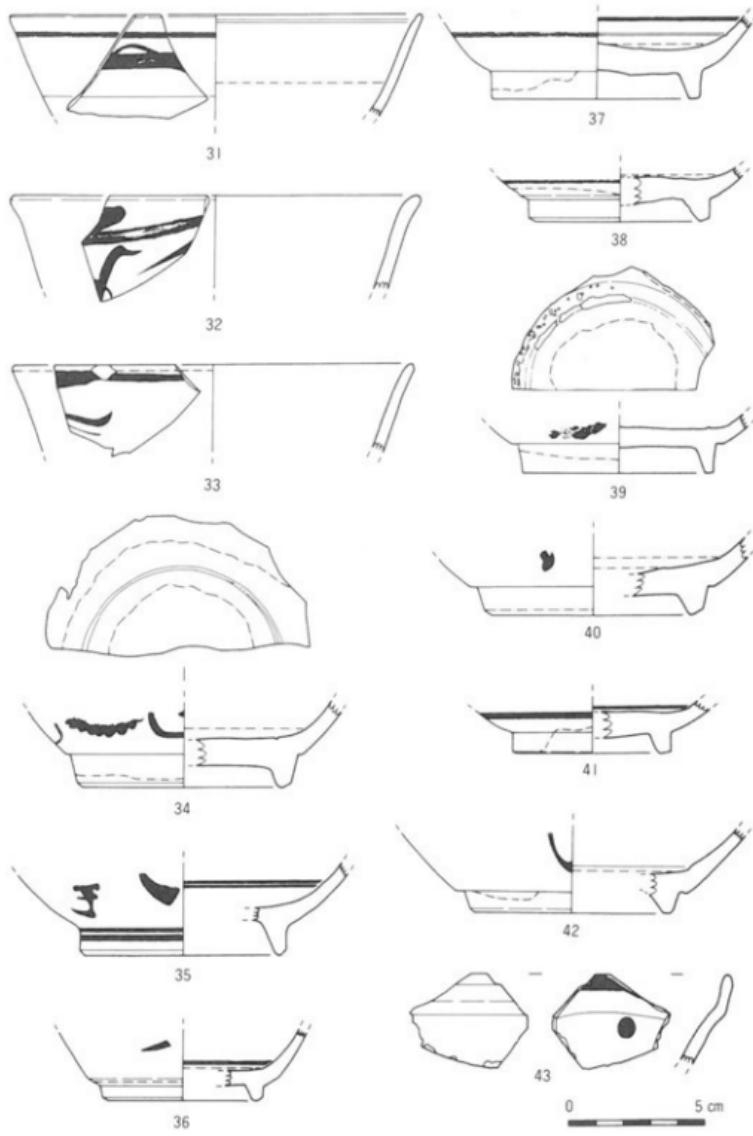
具須の発色は鈍く、釉は灰白色の失透性のものである。内外面に細かな貫入が密にみられる胎土は黄白色のやや粗い素地である。

皿

量的にはそれほど多くないが、16~19世紀と幅広い時期のものが得られている。主流は17世紀前後のものようである。量的には少ないものの、基筒底の資料や角皿の資料など注目される。特徴的なものを第21図44~57に示した。以下に簡記する。

44~51に示すものは16世紀前半~中頃のものである。44~47は口縁部の、49~51は底部の資料である。底部資料の50・51は基筒底の底部である。

44は全形の窓えるもので、推算口径は約10cm、推算底径が約6cm、高さが2.5cmを測る。腰部が若干丸くなり、口縁部がほぼ水平方向に外反するものである。口唇部は尖り、高台は細くつくる。豊付けは平坦にしている。文様は口縁部に1本、高台外面に2本の界線を廻らし、外体面に唐草文を配している。内面は口縁外反部に1本、内底面の周囲に2本の界線を廻らし、内



第20図 染付（碗：31～42、鉢：43）

底面には十字花文を施文している。釉は青白色のやや透明度のあるもので、呉須の発色はやや鈍い。疊付け周辺の釉を搔きとり、他は全釉。胎土は乳白色のやや細かい素地である。

48・52は44と同じような特徴を有するものである。ただ、52は高台が若干低くなり、疊付けを斜位に成形している。

53・54は基筒底の資料で、内底面に草花文を配している。外面は文様の下部が残るが、全体的な施文の状況は不明。両者ともやや失透性の釉（53は青灰白色、54は青白色）で、疊付けとその周囲を露胎している。いずれも呉須の発色は鈍く、53はやや黒味が強い。胎土は灰白色のやや細かい素地である。

49・51・55は16世紀の後半から17世紀の前半頃の所産と考えられるものである。49・51は底部の55は角皿の資料である。これらは青白色の比較的透明な釉を施し、呉須の発色はやや鈍く、胎土は灰白色のやや細かな素地のものが多々みられる。

51は薄手のもので、腰部が丸味を持って口縁部へ向かうものである。高台は低くつくり、疊付けは平坦にしている。外底面には削り痕が明瞭に残る。文様は高台際に1本の界線がみられるが、外体面には見受けられない。内面は内底面に草花様の文様を配し、その周間に1本の界線を廻らす。呉須の発色は比較的良好である。疊付けと外底面を除き全釉である。高台外面には砂粒の溶着がみられる。

49は底面部の資料で、内底面には動物と草花文を配し、外底面のほぼ中央には四角の枠の中に文字様のものを書いている。

55は角皿の資料である。全体的な大きさは不明だが、高さは約2cmを測る。高台際で段を有すように外側へ張り、直線的に外側へ開きながら口縁部に至る。口唇部は舌状に仕上げる。高台は低く逆台形状につくり、疊付けは平坦にするが若干斜めになっている。文様は内面にだけ認められる。口線上端に1本の界線を配し、体部および内底面に施文するが、全体的な構図は判然としない。疊付けを除き全釉である。疊付けには砂粒の溶着もみられる。

45は17世紀末～18世紀頃の所産かと考えられるもので、口縁上端をほぼ水平方向に折り曲げる外反口縁の資料である。体部はゆるやかなカーブを描き、口唇部はやや平坦にする。大きさは不明。文様は内外面に施す。外面は部分的に施文するようで、全体的な構図は不明。内面は口縁部に1本、体部下方に2本の界線を廻らしている。釉は青白色の比較的透明なもので、呉須の発色はやや鈍い。胎土は灰白色のやや細かな素地である。

56は18世紀の所産と考えられる底部の資料で、草花文捻花が施されている。外底面には2本の界線と中央にマーク様のものがみられる。全体の器形は窓えないが、高台は低く、逆三角形状につくる。疊付けは平坦にし、斜めに成形している。高台径は約9cmを測り、比較的大き目のものである。釉は青白色の透明なもので、呉須の発色は比較的良好である。疊付けの部分を除き全釉で、胎土は乳白色の細かな素地である。

57は18～19世紀頃のものと考えられる。腰部からやや丸味を持って口縁部に至るようで、直



第21図 染付(皿:44~57、杯:58~61、合子:62、瓶:63・64)

口口縁の資料である。口唇部は平坦にしており、その部分の軸を剥ぎとっている。文様は内面の口縁部に2本の界線が認められる。軸は乳白色の透明なもので、呉須の発色は淡い。胎土は白色の細かな素地である。

杯

小杯の資料が8点得られている。17世紀後半～18世紀のものが1点で、他は16世紀末～17世紀初頭のものである。後者の特徴的なものを第21図58～61に示した。58～60は口縁部の、61は底部の資料である。いずれも軸は半透明なものでやや青味がかった白色を呈し、呉須の発色はそれほど良好ではない。胎土は乳白色の細かな素地である。

口縁部の資料をみると59・60は外反口縁で、58は直口口縁である。58は腰部が小さなカーブを描き、そこから若干開きながら直線的に口縁部に至るものである。他の2点は全体的な器形は窺えない。口唇部はいずれも平坦にしている。59は口紅を施しているが、他の2点は施釉されている。文様は59が外面に施し、口縁部に2本の界線と体部に施文する。60は内外面の口縁部に2本の界線、58は内外面の口縁部と内体面の下方に1本の界線がみられる。59・60とも外面にも施文しているが構図は不明。59は口径の推算ができ、約4.5cmを測る。

61は全体の形状や高台の形状が不明なものである。高台際の推算径が約2cmを測る。文様は高台際に2本の、体部下方に1本の界線が見受けられる。

合子

蓋の資料が1点確認でき、第21図62に示した。縁部を平坦にし、その部分とそこから内側約7mm幅で露胎にしている。他は全軸。中央に凹線様のものが走ることからすれば花形をイメージさせるような形状のものかと考えられる。外面には縁部に接して松葉文が描かれ、その上方に界線様のものが1本みられる。軸は青白色の透明なもので、呉須の発色はやや淡い。胎土は白濁色の細かな素地である。16世紀の所産と考えられる。

瓶

3点得られており、いずれも16世紀のものである。特徴的な2点を第21図63・64に示した。63は大きく外反する口縁部の資料で推定口径は約7cmを測る。口唇部は尖り気味につくる。外面に界線と芭蕉文の一部が認められ、内面の口縁部に1本の界線を廻らしている。軸は青白色であるが、風化により濁った感じになっている。全面に施釉されている。胎土は乳白色の細かな素地である。

64は頸部の資料で上端の推算径が約3cm、下端の推算径が約5cmである。外面に施文されており、上方から芭蕉文・雷文帯・如意頭文が施されている。以下の文様については不明。両面に青白色の透明軸が施釉され、呉須の発色はやや鈍い。胎土は乳白色のやや細かな素地である。

ニ. 褐釉陶器

300点余りの出土であるが、ほとんど小破片の胸部資料で、口縁部や底部の資料は非常に僅少である。これらはほとんど壺形の資料のようで、明確に他の器種になるものは見受けられない。口縁部では断面方形状のものがやや目立ち、胸部でも両面施釉のものが主体をなす。特徴的なもの8点を第22図に示した。以下に略述する。

第23図1～3に示すものは断面が方形状を呈す口縁部の資料である。3点とも肥厚直下で破損しているため、以下の形状については不明。口縁部外面に粘土紐を貼りつけて、口唇部を広くしている（1は約2.5cm、2・3は約2cm）。1・2は口唇部を水平にするが、3は外傾している。1は口唇部の内側寄りに約5mm幅の凹線様のものを廻らしている。

肥厚部外端は丸味を持って仕上げ、内側は下部と段を有すほど上方を深く削っている。3点とも推算口径が算出でき、1は約16cm、2は約18cm、3は約19cmを測る。釉は破片の全面にみられるが、3は釉が剥げ落ちている部分がみられる。また、1は口唇部と内面の肥厚部下端は釉剥ぎしている。2・3は施釉の前に白化粧を施しているようである。

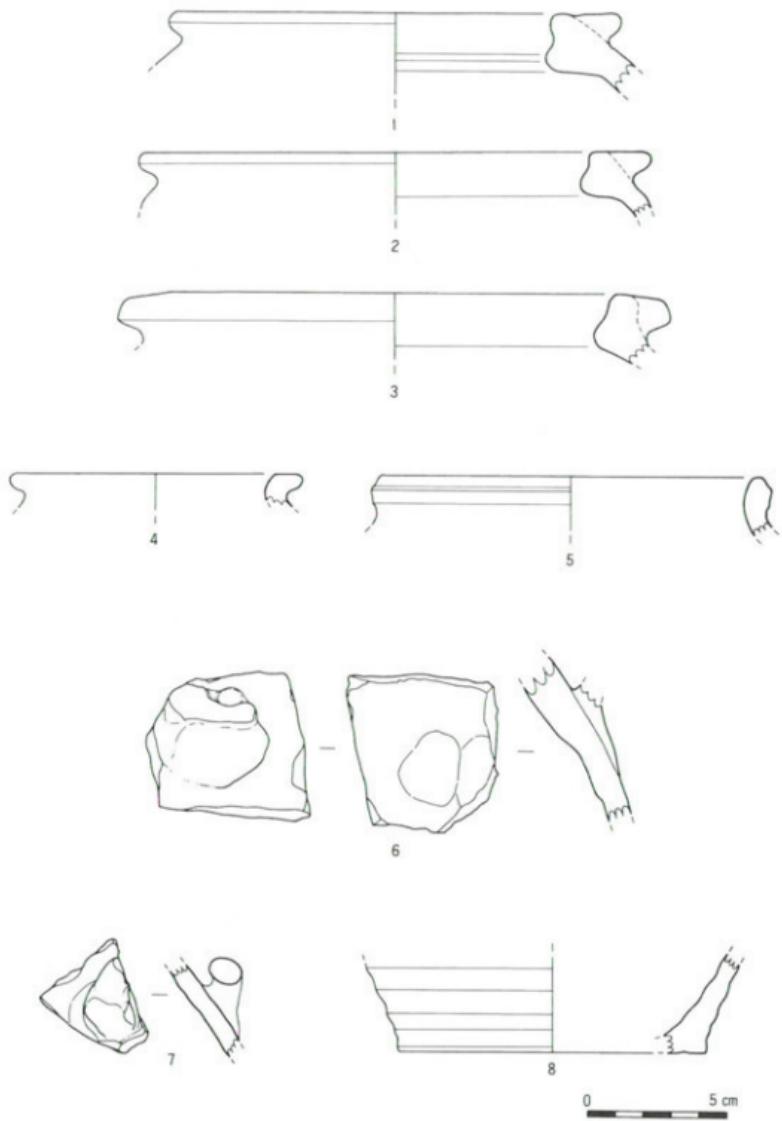
3点とも釉は暗黄褐色を呈し、3は細かい貫入が密にみられる。1は風化が著しく、気泡が集中的に見受けられる。胎土は1がやや赤味をおびた灰褐色の比較的粗い素地で、石英粒などが散見される。2・3は灰白色のやや粗い素地で、石英粒のほか黒色鉱物なども散見される。

4は推定口径が約11cmと比較的小型の壺である。本資料も肥厚部直下から破損しており、以下の形状については不明である。口縁部が外側へ張りだすように肥厚するもので、口唇部は平坦に成形している。黒味の強い釉を施釉している。胎土は灰褐色の粗い素地で、石英粒が散見される。

5は口縁部を長方形状に若干肥厚させるもので、口唇部外側を斜めに削って成形している。斜めに削られた面は若干の凹面となっている。口唇部は平坦な箇所と尖り気味の箇所がみられる。口径の推算ができ、約14cmを測る。現資料に施釉の箇所は認められない。胎土は暗灰褐色のやや粗い素地で、白色の微砂粒が多量混入されている。

6・7は外耳を有す胸部の資料である。ブリッジ状の横耳で、6は大型の、7はやや小さき目の壺のものかと考えられる。両者とも施釉は表面だけで、裏面は無釉である。釉は黒味の強い暗緑色のものであるが、7は風化が著しい。胎土はやや赤味をおびた灰褐色で、石英などの微砂粒が僅かに見受けられる。

8は底部の資料で、推算の底径は約11cmを測る。底面から5mmほどまっすぐ立ち上がり、そこから外側へ開いていく。両面とも成形の際の調整痕を明瞭に残す。現資料は両面とも露胎となっている。胎土はやや赤味をおびた灰褐色の粗い素地で、石英の微砂粒や黒色鉱物などが多く含まれている。



第22図 褐釉陶器

ホ. 瑞璃釉

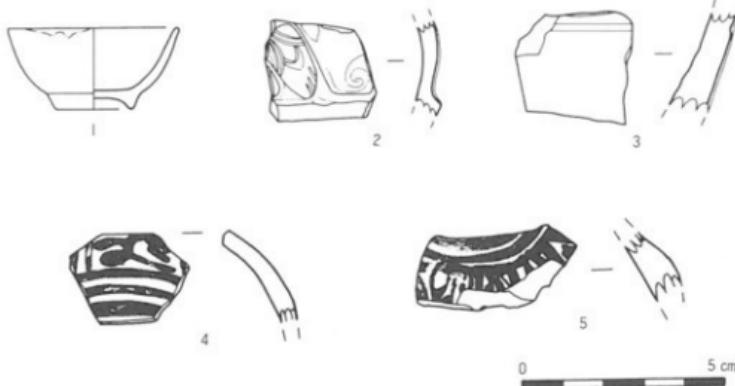
小杯の資料が1点だけ得られており、第23図1に示した。半欠品のもので全体形の窺える資料である。高台を逆三角形状に作り、高台際から若干丸味を帯びて口縁部へ立ち上がる。口縁部上端を僅かに外反させる。型成形の資料で、推算口径が約4cm、推算高台径が約2cm、高さ2cmを測る。外面に瑞璃釉、内面に白磁釉を施す。口唇部の釉を搔きとっているほかは全釉である。高台疊付けの周辺に砂粒の溶着部も見受けられる。17~18世紀頃の所産と考えられるB-7第3層の出土。

以上の中国産陶磁器以外に中国産の三彩（1点）、緑釉（1点）、色絵（3点）の資料が得られている。第23図2・3に示したもののが三彩・緑釉の資料であるが、いずれも小破片のため詳細については判然としない。15~16世紀頃のものようである。色絵は小破片の資料で、図は割愛した。18~19世紀頃のものかと考えられる。3点とも第3層から得られている。

ヘ. タイ陶器

4点得られている。鉄絵の資料（合子と蓋）と内面に緑味を帯びた釉を施した碗の資料である。後者の2点は胴部の小破片で図示はひかえた。第23図4は鉄絵合子の資料で身として示した。上部に数本の縦線により区画された部分に花？の図柄を描き、その下方に横線を廻らしている。横線は3本確認できる。5は蓋になるようで、円形状に若干盛り上がる部分もみられるが、全体の様相はつかめない。文様についても判然としない。

2点とも黒味の強い釉で文様を描き、その上に透明釉を施している。細かい買入が密に認められる。内面は露胎。胎土は灰白色のやや粗い素地で、黒色の鉱物を多く含む。15~16世紀頃の所産かと考えられる。2点とも第4層から得られている。



第23図 瑞璃釉：1、三彩：2、緑釉：3、タイ産鉄絵：4・5

ト. 本土産陶磁器

100点余り得られている。これらの資料をみると肥前系・伊万里系の磁器を中心に唐津系の陶器や瀬戸・美濃系のものが若干含まれているようである。ほとんどは染め付けの資料であるが、白磁の瓶になるかと考えられるものも若干見受けられる。時期的には17世紀～近代に至るまでのものが得られているようで、主体は17世紀所産のものようである。

器種的には碗の資料が多く見受けられるが、瓶・鉢・皿・小杯など割とバラエティのある出土状況を示す。このような状況は国学・首里孔子廟跡（註1）などでもみられる。これまで本土産磁器は古墓などから出土する瓶や小杯などが主であったが、松田遺跡（註2）など近世遺跡の発掘例が増加するにつれ、碗・皿・鉢などの日用的な器種も増えてきている。

得られた資料の中から特徴的なものを第24図及び第25図に示した。肥前系、伊万里系、唐津系、瀬戸・美濃系のものの順に略述する。

・肥前系

今回得られた資料の大半を占める（第6表）。染め付けと白磁が見受けられるが、後者のものは第24図16～18の3点だけである。また、前者のものは17世紀頃のものから近代の型紙摺りのものまで見受けられる。

第24図1～7は碗の資料で、1～4は口縁部、5～7は底部である。前者は推定口径の算出が可能なもので、後者は推定高台径の判るものである。全体的には割と小振のものが主流のようである。口縁部の資料をみると4点ともやや外側へ開く直口口縁で、1・2は外側への開きがやや強い。口唇部は尖り気味につくるが、4はやや丸くなる。

推算口径は1が14cm前後で、他の3点は11cm前後のものである。4は高台際まで残るもので高さが5cm余り、高台径が4cm前後のものになるかと想定される。

文様は1・3が内外面の口縁上部に界線を廻らし、外体面に龍文を配す。2は外面の口縁上部に界線を廻らし、外体面には松文が描かれる。4は外面の高台際に1本の界線を廻らしているだけである。1はやや黒味のある発色となっている。

釉は4がやや失透性のもので、他は透明のものである。2・4は細かな貫入があり、みられる胎土は1が灰白色のやや細かな素地で他は白濁色のやや粗い素地のものである。

底部の3点をみると5は高台がやや外側に開く感じでつくられ、6・7はやや

第6表 本土産陶磁器出土状況

種 層 序	肥前系	伊万里系	唐津系	瀬戸 美濃系	合 計
表 採	8				8
第1層	26	1			27
第2層	23	4			27
第3層	51	5		1	57
第4層	14	7	4		25
第5層	9				9
合 計	131	17	4	1	153

内側へ向いている。高台は5・7からすると疊付けの方へ細くなる逆三角形状を示すものかと考えられる。腰部の状況からすると5はほぼ直線的に外側へ開き、6・7はやや丸味を帯びる。7は腰部の脹らむ、割と大型のものが想定される。推算の高台径は5・6が約6cm、7が約7cmを測る。

文様はいずれも内体面の下方に2本の界線を廻らすもので、高台外面にも界線を廻らしている（5・6は1本、7は2本で、5は失透性の軸のためみにくい）。その他の部分の文様については判然としないが、7は内底面に荒礎文を配している。

軸は5が失透性のもので、6・7は透明なものである。いずれも呉須の発色は鈍く、7は外面と内面の発色が若干異なる。7は内外面に細かく密な貫入が認められる。胎土は灰白色のやや細かな素地である。

9・10は鉢の資料で、9は口縁部、10は底部である。9はやや外側へ開く直口口縁の資料で口唇部は尖り気味につくる。推算口径は約19cmを測る。文様は外面に2本の界線と草花文、内面の口縁部に雷文帯を配している。呉須の発色は比較的良好で、透明な軸を施している。胎土は白色の細かな素地である。

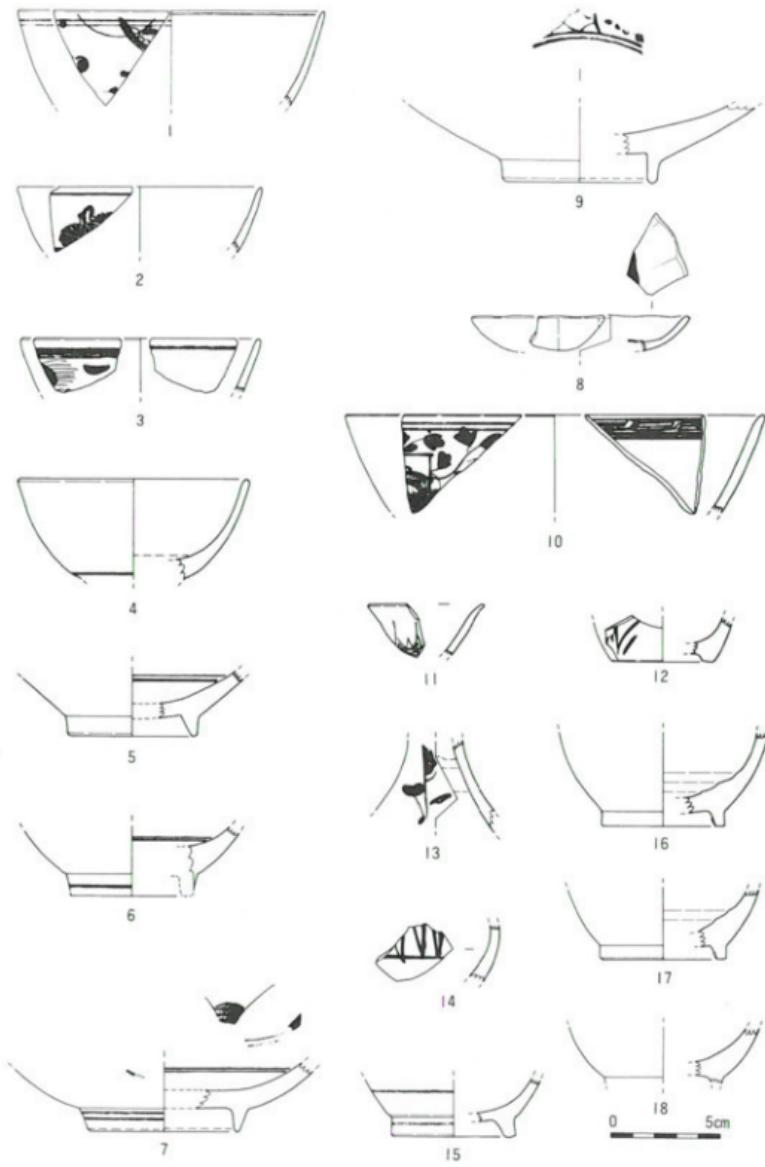
10は内面全体に文様を廻らす、芙蓉手鉢の底部資料である。高台際から直線的に外側へ開くものである。高台はほぼまっすぐに疊付けまで同じような厚さでつくる。疊付けは丸くつくりその部分だけ無軸である。内底面及び外体面に文様は認められない。割と透明な軸が施され呉須の発色は比較的良好である。胎土は白色のやや細かい素地である。

11は小杯の資料で、外面に蕉葉文と満巻き文を連続的に施している。口縁部は外反し、口唇部は尖る。呉須の発色はやや鈍く、全体に透明軸を施している。胎土は乳白色のやや細かな素地である。

12・13・15は瓶の資料である。13は胴部の、12・15は底部である。13は破片の上端の推定径が約2.5cm、下端の推定径が5.5cmを測る。外面には草花文が認められる。外面は全軸のようであるが、内面は口縁部付近までの施軸で、以下は無軸である。

12は基筒底の資料で推定底径は約4.5cmである。若干脹らみ気味に立ち上がるもので、外面に草文を配している。軸は失透性のもので、内面は無軸、外面は全軸である。しかし、疊付けの部分は軸が剥がれた感じの所も見受けられる。15は高台を有するもので、高台径の推定は約5.7cmである。体部の下方と高台外面に1本づつの圓線がみられる。軸は風化し白濁色になっており、疊付けと内面は無軸である。

第25図22～26は明治～大正の所産と考えられるもので、型紙摺りの資料である。ほとんど碗になるようで、明確に他の器種と判別するものはみられない。口縁部の資料をみると直口口縁のもの（22）、外反口縁のもの（23・24）がみられる。26に示した底部は疊付けまで同じような厚みの高台をまっすぐにつくり、若干丸味を帯びて立ち上がっていく。23の推算口径が約13.5cm、26の推算高台径が約4.5cmである。



第24図 肥前系（染付：1～7・9～13・15、白磁瓶：16～18）、伊万里系（染付皿：8、瓶：14）

文様は外面と内面の口縁部が主要な施文部位のようである。呉須の発色は比較的良好で、透明釉を全体に施釉している。しかし、26の底部をみると、疊付けは無釉のようである。胎土は白色のやや細かな素地のものが多い。

第24図16～18は白瓶の底部資料である。いずれも腰部が若干丸味を持って立ち上がるもので、内面と疊付けは無釉である。16・17は失透気味の白濁色の釉を施釉し、疊付け周辺に砂粒の溶着がみられ、胎土に黒色の歯物が混ざるなど似たような特徴を有している。また、推定高台径も約5.5cmと同様であり、同一個体の可能性もある。18は高台部が破損しており、高台の状況は不明。高台際の推算径が約5.5cmを測る。乳白色の釉が施され、胎土は白色の細かな素地である。

・伊万里系

ほとんど小破片のもので、2点を第24図8・14に示した。8は皿の、14は瓶の資料である。8は皿の口縁部で、推算口径は約10cmを測る。丸味を帯びて口縁部にむかう。平面形は弧を連続的に廻らした形状のようで、口唇部には鉄錆を塗っている。内底面には文様の一部が認められるものの、どのような図柄が不明。釉は白濁色のやや透明なもので、胎土は灰白色の細かな素地である。14は網目文を配す瓶の胴部資料で、県内においては比較的類例の多いものである。透明釉を施釉しており、呉須の発色は割と良好である。内面も上方に釉のかかる部分がみられる。外面には細かな貫入も認められる。胎土は白色のやや粗い素地である。

・唐津系

第25図19～21の3点で、いずれも17世紀後半～18世紀前半に内野山窯でやかれたものである阿波根古島遺跡（註3）などでも報告があり、類例資料は増加しつつある。3点とも碗で、口縁部、胴部、底部の資料である。19・20は銅緑釉と透明釉を掛け分けるもので、19の口縁部は外面に銅緑釉、内面に白磁釉が施されている。20はその逆になっている。

19はやや丸味を帯びた腰部からほぼ直方向に口縁部に向かうもので、口縁上端が僅かに外反する。口唇部は割と平坦に仕上げている。推算口径は約11.5cmである。

21は前2者に比べ淡い色合の釉を内外面に施釉するが、外面は体部下方から外底面にかけては露胎にしている。内底面は蛇の目状に釉を搔きとっている。高台は疊付けの方へ細くつくり疊付けは平坦にしている。腰部はそれほど脹らまない。推定高台径は約4cmである。3点とも胎土は灰白色のやや粗い素地である。

・瀬戸・美濃系

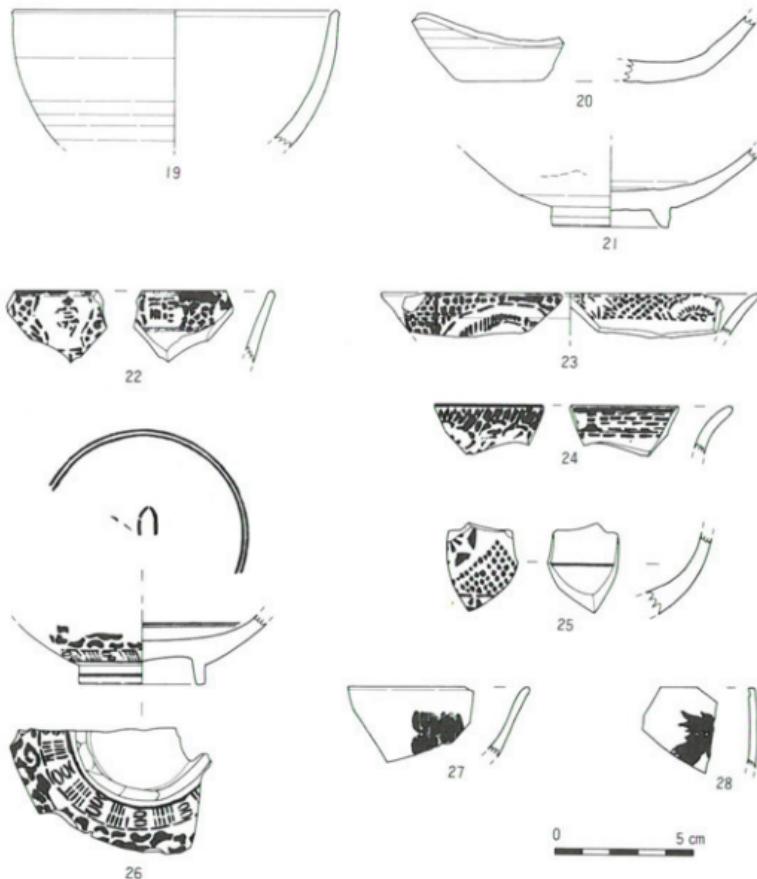
第25図27に示したもので、幕末～明治のものと考えられる染め付け碗である。外側へ開きながら口縁部に向かうもので、上端部が若干外反する。透明釉が施釉され、光沢を有す。小破片のため全体の状況は不明。胎土は白色の細かい素地である。

28は産地が特定できないもので、染め付け蓋物の資料である。19世紀頃のものかと考えられるが、小破片のため詳細はつかめない。胎土は白色のやや細かい素地である。

註1 上原釋・島袋洋「国学・首里孔子廟跡の調査」『文化課紀要』第7号 沖縄県教育委員会文化課 1991年3月

註2 「松田遺跡」——般国道329号改良工事に伴う緊急調査一 沖縄県文化財調査報告書第76集 沖縄県教育委員会 1986年3月

註3 「阿波根古島遺跡」——那覇・糸満千道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告一 沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会 1990年3月



第25図 唐津系（碗：19～21）、肥前系（碗：22～26）、瀬戸・美濃系：27、産地不明：28

チ. 須恵器

総数79点得られている。全て小破片の資料で、全形の窺えるようなものは見受けられない。これらの資料のほとんどは徳之島にあるカムイ焼き古窯跡（註1）からもたらされたものかと考えられる。県下の多くのグスク時代遺跡から報告されており、かなり入り込んでいたようである。すでにその特徴的なことについてふれられている（註2）。本遺跡に近いところでは喜友名山川原第6遺跡（註3）から報告されている。

今回得られたものは器種的には壺形のものがほとんどであるが、第27図24は碗形になるかもしない。特徴的なものを第26図～第28図に示した。以下に概略を述べる。

第26図1～5に示すものは口縁部の資料である。いずれも外反するものである。1は口縁端部を上方につまみあげるもので、その部分の外面には細い凸帯を廻らしている。そのため口縁部は三角形状に肥厚するように見える。口唇部は平坦にし、斜めにつくる。外端の棱の部分に浅い凹線を廻らしており、口唇内側の棱に向かって弧を描く感じである。

2・3は口縁部の断面が三角形状を呈すもので、口唇部は尖る。2は口縁部外面が若干くぼむもので、3も上端部にその痕跡を残す。4は比較的強く外反せるもので、口唇部は平坦につくる。5は口唇部を丸く仕上げている。

いずれも文様は見受けられない。器面は比較的滑らかな仕上げでよく保持されているが、4は器面の剥離が多い。1・5は黒灰色の器色で、芯部も同じような色合である。白い微砂粒が見受けられる。2～4は灰色味が強いもので、前記の2点とは異なる感じである。

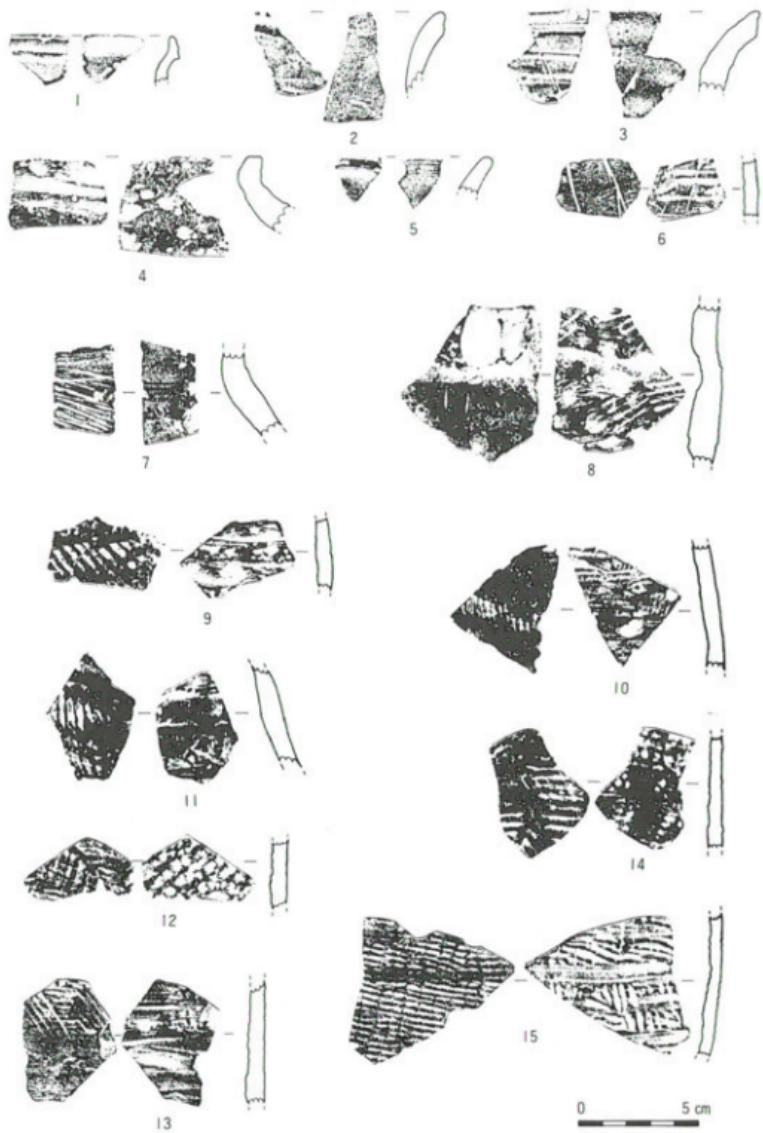
第26図6～15および第27図16～23は胴部の資料である。6は唯一の有文の資料であるが、2本の斜位の沈線が約2cmの間隔をあけて施されているだけで、全体的な状況は不明。器色は暗灰色で、芯部が茶褐色を呈す。白色微砂粒の混入も見受けられる。

7は破片の下部に右傾の斜線が密にみられるもので、上部や裏面はよくナデされている。器面の状況や胎土などの特徴から3に示す口縁部と同一のものかと考えられる。

8は把手がつけられるもので、県内では報告例をあまりみない。カムイ焼き古窯跡の報告によると、壺形の胴下半部に把手のつくものがあり、それに類するものと考えられる。表面にはたたきの痕はみられず、裏面に数本単位の短い斜線が雜に見受けられる。また、裏面には粘土のつなぎめの痕もみられる。表裏面は灰褐色を呈し、内部は茶褐色になる。白色微砂粒も散見される。

第26図9～15および第27図16～23に示すものは胴部の資料である。9～19に示すものは白色の微砂粒を混入する細かな胎土で、5～8mmの厚さを有し、粘土をたたきしめたあとナデ調整を行ない器面を整えている。という同じような特徴を有すもので、ひとつのグループの中で捉えられるものかと考えられる。

胎土に混入される白色の微砂粒は南島から出土する須恵器によくみられるものである



第26図 須恵器臺（口縁部：1～5、胴部：6～15）



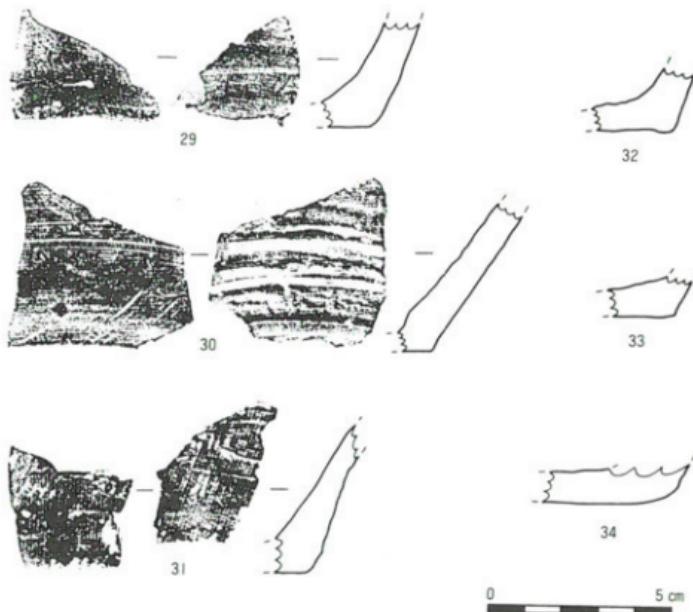
第27図 須恵器（壺胴部：16～23、壺底部：25～28、碗：24）

厚さは部位により若干のバラツキが考えられるので、部位の違う破片によっては器厚に若干の差がみられるようである。器面の状況をみると表面にたたき具、裏面にあて具の痕跡が残るものがほとんどである。

表面のたたき具をみると1~2mm幅の短沈線が数本単位で一組になり、それが斜め方向に残るもの(9~11)、多方向に重なりあうように残るもの(12・13・17)、主に横方向に残るものであるが、部分的に他方向のものと重なるもの(14・15)などが見受けられる。しかし、最終的な調整により消えかかっている部分もある。16は部分的に羽状を呈するたたき痕が残るものである。

裏面のあて具の状況はヘラ状の工具による調整痕で途切れたり、消えかかってたりしている。11・13・17はあて具の痕跡はみられない。形状の確認できるものは方形状のくぼみが数本で一組になるもの(12・14・16・18)で、10・15・19は沈線様のものが認められるが、形状はつかめない。また、18・19のように表面は丁寧なナデにより滑らかに仕上げられているものも、裏面にあて具の痕跡がみられることから、たたき具の使用が推察される。

器色は黒灰色のものがほとんどであるが、13・17は暗灰色を呈す。また、内部が茶褐色のも



第28図 須恵器壺 底部

の（9・11・12・14・15）、表面側と裏面側で色の異なるもの（10・13・16・18・19）に大きく分けられる。17は内部が暗灰白色になっている。

20～23は上記のものからはずれるものである。20は器厚が3mm前後の薄手のもので、表面には長方形状のくぼみが連続的に密にみられ、裏面には沈線状のものが認められる。器色は灰白色を呈し、混入物に黒色や白色の微砂粒が見受けられる。

21は器厚が10mm前後と厚手のもので、表面には1～2mm幅の短線状のものが斜め方向にみられ、裏面は弧状の沈線が多方向に重なりあっている。器色は暗灰白色で内部も同じような色合を呈し、混入物に黒色や白色の微砂粒が散見される。

22・23は器面の状況は異なるものの、胎土からすると3・7の資料と同一個体のものと考えられる。

24は小破片のため確言はできないが、碗形の可能性のある胴部資料である。5mm前後の厚さを有し、上部へ薄くなっていく。器面および内部とも暗灰色を呈し、混入物に白色の微砂粒を密に含む。表裏面とも比較的滑らかな仕上げとなっている。

第27図25～28および第28図29～34に底部の資料を示した。いずれも小破片のもので、底径は不明である。全て壺形の底部と考えられる。ほとんどが直線的に立ち上がっていいくもので、30は開き気味になるものである。また、31は若干内側に弧を描きながら立ち上がっていいく。32は底面を若干削り上げ底状にするものである。

註1 「カムイヤキ古窯跡群II」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 伊仙町教育委員会 1985年3月

註2 白木原和美「類須恵器の出自について」『法文論叢』第36号 熊本大学法文学会 1975年

註3 「喜友名山川原第6遺跡」「喜友名遺跡群」宜野湾市文化財調査報告書第5号 宜野湾市教育委員会 1984年

第7表 須恵器出土一覧

(単位:mm)

挿図番号	部 位	調整具の痕		器 厚	層 位	挿図番号	部 位	調整具の痕		器 厚	層 位
		表 面	裏 面					表 面	裏 面		
第26図1	口 線	なし	あり	4	3	第27図18	胸	なし	あり	7	表採
〃 2	口 線	なし	なし	9	5	〃 19	胸	なし	あり	8	5
〃 3	口 線	なし	なし	8	5	〃 20	胸	あり	あり	4	4
〃 4	口 線	なし	なし	12	4	〃 21	胸	あり	あり	12	5
〃 5	口 線	なし	なし	8	4	〃 22	胸	あり	あり	11	5
〃 6	胸	なし	あり	7	3	〃 23	胸	あり	あり	13	2
〃 7	胸	あり	なし	9	4	〃 24	胸	なし	なし	4	5
〃 8	胸	なし	あり	8	5	〃 25	底	あり	なし	5	5
〃 9	胸	あり	あり	5	2	〃 26	底	あり	あり	8	4
〃 10	胸	あり	あり	7	5	〃 27	底	なし	なし	7	3
〃 11	胸	あり	あり	8	3	〃 28	底	不明	不明	9	3
〃 12	胸	あり	あり	7	4	第28図29	底	なし	なし	10	4
〃 13	胸	あり	あり	7	3	〃 30	底	なし	なし	8	3
〃 14	胸	あり	あり	6	5	〃 31	底	あり	あり	9	3
〃 15	胸	あり	あり	5	5	〃 32	底	不明	不明	8	3
第27図16	胸	なし	なし	6	3	〃 33	底	不明	不明	7	5
〃 17	胸	あり	あり	7	5	〃 34	底	不明	不明	5	

リ. 沖縄産陶器

3370点余りと最も多く得られている。施釉陶器（上焼き）と無釉焼き締め陶器（荒焼き）に大別される。前者は碗形のものが主体で、後者は壺・カメ類のほか摺り鉢などが多い。層位的には第3層で最も多く得られている。以下、それぞれの概略について述べる。

a. 施釉陶器

施釉される釉色に灰釉・白釉・黒釉・鉄釉など数種みられるほか、内面と外面に異なる釉色のものを施釉するものなどが見受けられる。量的には灰釉が多く得られ、白釉・黒釉の順となっている。以下、釉色別に略述する。

灰 釉

いわゆる湧田焼きと呼称されるグループである。ほとんど碗の資料であるが、鉢になるかと思われるものや蓋の資料もそれぞれ2点確認されている。特徴的なものを第29図に示した。以下に簡記する。

・碗

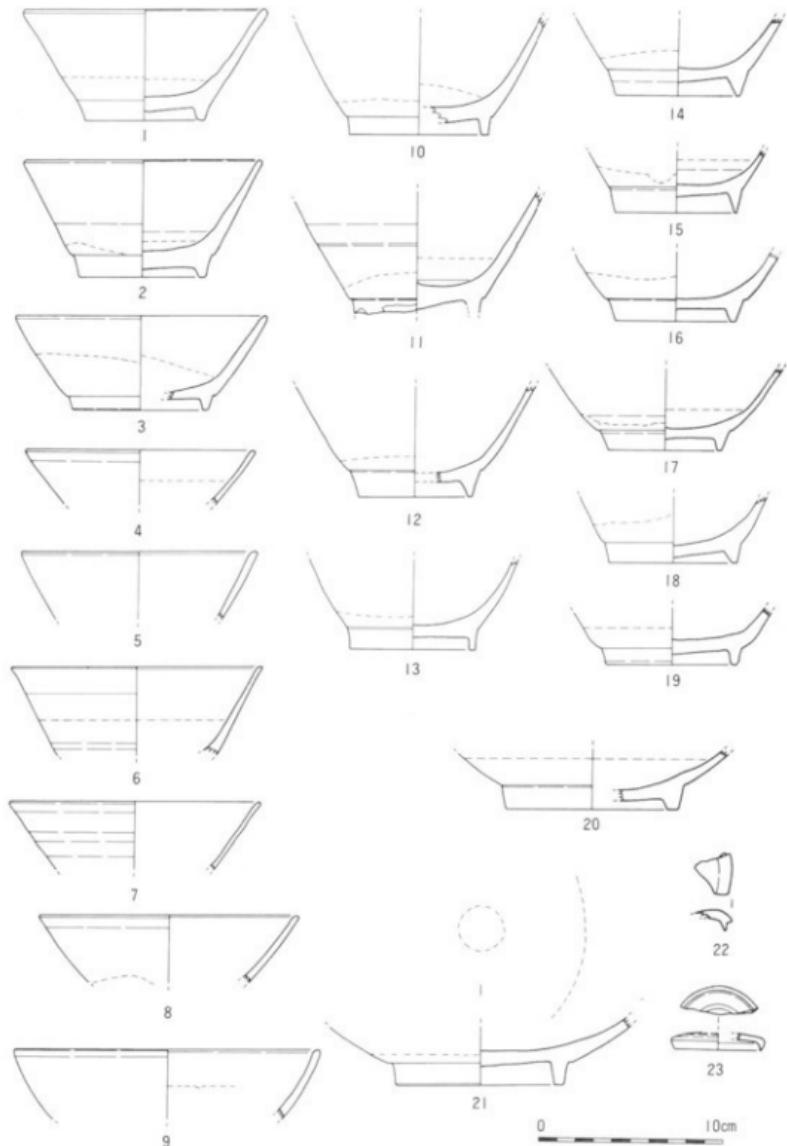
ほとんど本種に含まれるものである。破片の資料ばかりであるが、口縁部から底部まで接合できたものも3点あり、それらについては推定復元を試みた。その3点を含め、口縁部および底部の資料から大き目のものを第29図1~19に示した。特徴のことについてみていく。

まず器形をみると、高台脇から直線的に開きながら口縁部に至るものが主流であるが、腰部が若干丸味を帯びるもの（19）も見受けられる。また、体部から口縁部にかけては外側へ反る感じのものが多くみられるが、9は僅かに外側へ膨らみ気味になっている。内面をみるとほとんど底面からゆるやかなカーブを描いて体部へ向かうものであるが、19はコーナーをつくる感じのものである。口縁部はほとんどが舌状に仕上げ、6のように平坦にするものは少ない。

高台は逆台形状につくるもの（1~3）や方柱状につくるもの（10~13）、逆三角形状につくるもの（14~15）など数種見受けられる。後二者のものはやや高くつくり出している。疊付けは平坦にしているが、19のように疊付けの外側を斜位に面取りするものも見受けられる。

次に大きさをみると口径は13cm前後のものが普通のようで、9のように16cmを越すものは希のようである。高台径は6~7cmぐらいのものが一般的のようであるが、19のように8cmを越すものも見受けられる。高さの判明するものは3点だけであるが、6cm程のもの（1・2）と5cm程のもの（3）がみられる。これからすると1・2に示した大きさのものが多くつくられたようであるが、3のような比較的浅いものもつくられたようである。

釉は緑色味のある灰褐色を呈す透明なもの（3・12・13・16・17）が本来的なものかと考えられるが、黒味の強いもの（8・9）や白っぽいもの（2・5・6）などが見受けられる。ま



第29図 灰釉陶器（碗：1～19、鉢：20・21、蓋：22・23）

た、11は白濁色を呈し、剥げ落ちた部分も見受けられる。釉は薄く施され、内外面とも体部下半まで施釉し、以下を露胎にするものが多い。10は鉄釉が、19は体部と同じような釉が内底面の中央付近に施されている。4・9は内面の施釉範囲が体部上半までであり、他の資料と若干異なる状況を示す。

底部の資料をみると焼成の際の理由からか、外面より内面の方の露胎部を広くしているようである。また、内底面や高台置付け周辺には砂粒の溶着など重ね焼きの痕跡を残すものが多く見受けられる。胎土は灰白色のやや細かな素地のものが多く、白っぽくなつたもの（2・14）や橙褐色を呈すもの（9・11）などもみられる。

・鉢

20・21に示す2点で、底部の資料である。高台は方柱状にしっかりとつくり、20は低く、21は高くつくりだしている。21は置付けの外面を若干斜位に削っている。2点とも置付けは平坦にしている。現資料からすると高台際から直線的に外側へ開いていくものようである。碗の資料よりも開きが強い。両者とも高台径は約9cmである。

21は内底面のほぼ中央に鉄釉を円形状に施している。20は器色が橙褐色を呈し、釉が白濁色となっているが、胎土や釉調・施釉の状況などの諸特徴は碗とはほぼ同じようである。両者とも高台置付けに砂粒の付着する部分がみられる。20は内底面に指痕も認められる。

・蓋

22・23に示す2点で、いずれも小物の蓋のようである。22は返しがつくもので、23は縁を折り曲げたものである。23は推算径の算出ができ、約5cmを測る。22は表面に灰色味の強い釉を施釉しており、胎土は灰白色のやや細かい素地である。23は緑色味のある灰白色の透明釉を全面に施釉し、胎土は灰白色の細かな素地である。

白 瓷

いわゆる壺屋焼きと呼ばれるもので、白土化粧を施したあと透明釉を施釉するものである。420点得られており、第3層にその主体がある。器種的に明確なものは碗の資料だけである。また、第29図21は釘彫による文様の一部が認められるものの、他はほとんど無文の資料である。全形の窺えるものは2点（第29図1・12）だけであるが、得られた資料をみると大きさにより小碗と碗の2種に分けられるようである。特徴的なものを第30図に示した。以下、それぞれの特徴について簡記する。

・小 碗

第30図1～17に示したもので、全形の窺える2点および他の資料から大体口径が8cm前後、底径が4cm前後、高さが4.5cm前後の大きさになるかと推察される。得られたものをみると外体部を丸くスムーズにつくるもの（1～11）と約1cm幅で面取りするもの（12～17）が見受けられる。どちらも全釉のあと置付けの部分を削って調整し、内底面を蛇の目状に釉剝ぎするとい

う似たような技法を用いている。

このような技法から若干外れるものが1と15である。1は全釉のあと疊付け部の調整を行なっているのは同じだが、内底面は釉剥ぎされていない。15は内底面の状況は同じだが、外底面は露胎となっている。

器形をみると外体部が丸くスムーズになるものは腰部から外側へ開き気味に口縁部へ向かうもので、1は直口、2～4は口縁部上端が若干外反するものである。4点とも口唇部は舌状につくる。1は灰釉を施するなど、灰釉碗の名残を若干留めているものかと考えられる。底部資料からすると腰部は脹らまないようである。高台は疊付けの方へやや細くなるようにつくり、疊付けは丸味を持って成形されている。

外体部を面取りするものも全体的な形状は前者と同様である。外反口縁で、口唇部は尖るものが主流のようである。

ほとんどのものが内底面の釉剥ぎ部に重ね焼きの際の溶着物が認められる。また、11は他の資料に比べ、釉剥ぎの部分が広くなっている。

・碗

第30図18～25に示すものである。推定口径の算出できた18や底部の資料からすると、口径が15cm前後、底径が6cm前後の大きさのものである。全体的な器形は小碗のものとほとんど同じようである。ただ、口縁部をみると18・19は玉縁状につくっており、18は直口状で口唇部が尖り、19は若干外反し口唇部を丸くつくるものである。20は直口口縁で肥厚せず、口唇部が尖るものである。口縁部については異なる形状を示すものも見受けられるようである。

文様が施されるものはほとんどみられないが、21は外体面に文様の一部が認められるものである。釘彫りにより施文されているが、構図は不明。

施釉状況も小碗とほぼ同様で、内底面を蛇の目状に釉剥ぎし、疊付けの部分も釉を搔きとつて調整している。21・24は釉剥ぎ部に重ね焼きの際の溶着痕が明瞭に認められる。23は釉剥ぎが丁寧ではなく、釉剥ぎ部に部分的に釉が残る。25は他の資料に比べ釉剥ぎ部の径が小さくなっている。

黒釉

360点近く得られている。ほとんど破片の資料で、全形の窺えるものは見受けられない。得られた資料からすると碗・壺・瓶・急須・香炉・火舎などが確認でき、器種的に比較的バラエティーに富んでいる。量的には碗及び壺・瓶類が多く、合わせて90%以上を占める。層序的な面からみると、第3層で最も多く、上位3層で約90%である。特徴的なものを第31図1～23に示した。以下、器種別に簡記するが、香炉・火舎は小破片のものばかりで今回は割愛した。

・碗

最も多く得られているもの小破片のものばかりで、全形の窺えるものは見受けられない。

底部の資料で大きなもの 2 点を第31図 3・4 に示した。3 は高台径が 6.4cm、4 は推算高台径が約 6.5cm である。高台際で明瞭な段をつくる。高台はやや内側に入り、疊付けの方へ若干細くなる。疊付けは平坦に仕上げている。腰部が若干丸味を持って立ち上がるようである。

軸は内外面とも体部下方までの施釉である。そのため高台・外底面及び内底面は無釉である。しかし、内底面には鉄釉様のものが薄く塗られており、蛇の目釉剥ぎの感じをだしている。

・鉢

量的には多くない。口縁部の資料を第31図 5 に示した。小破片のため大きさは知り得ない。底部から直線的に開く器形のようで、上端部が J 字状に外反している。口唇部は平坦にし、外傾する。内面の口縁部上端を若干斜めに面取りするように仕上げている。軸は破片の全面にみられるが、かなり剥げている。内面の口縁部上端に胎土目の付着が認められる。

6 に示したものは破片のため確言はできないが、高台際からの立ち上がり部の開き具合からすると、盤になるかと考えられるものの底部資料である。高台は逆三角形状に高くつくり、疊付けは平坦に仕上げている。疊付けの両側の角がとれ丸味を持つ。軸は外面が高台脇まで、内面が体部下端まで施されている。内底面及び高台脇から高台・外底面は露胎になっている。

・壺・瓶類

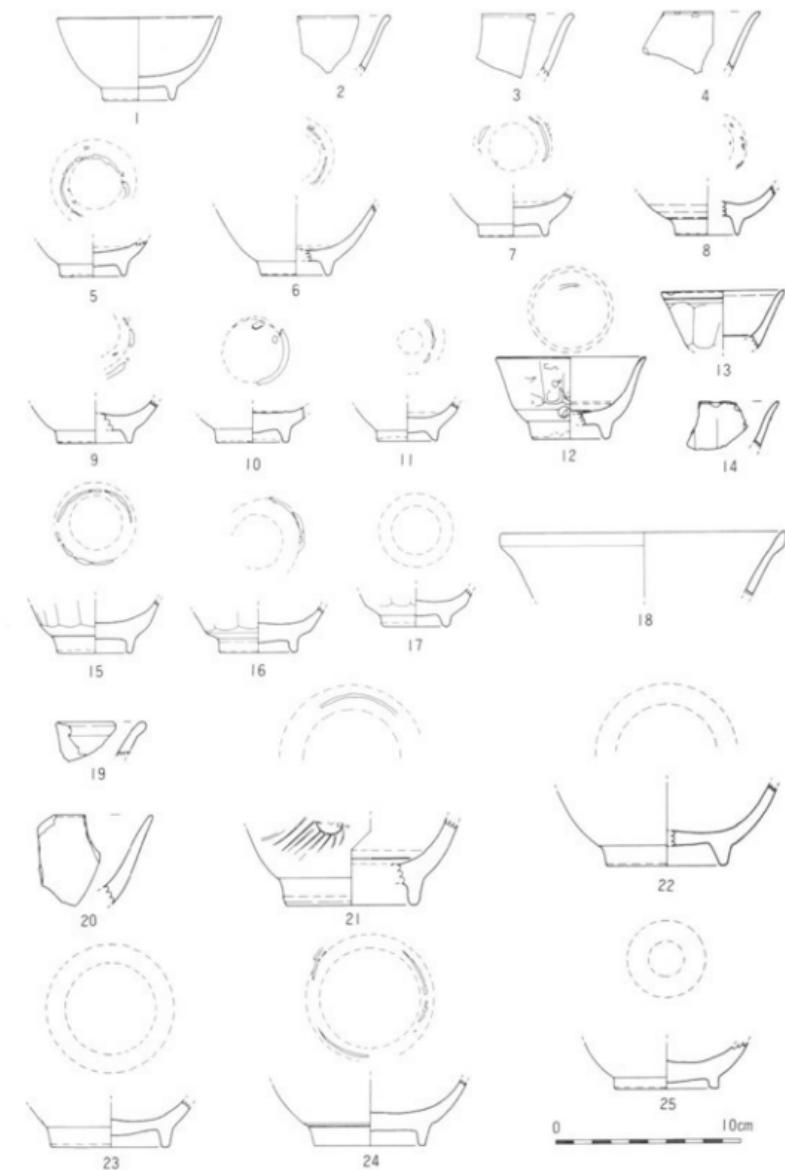
比較的多く得られている。特徴的なものを第31図 1・2・7~17・21・22 に示した。これらの資料をみると、器形や大きさにかなりバラエティがみられるようである。施釉の状況をみると外面にだけ施され、内面は無釉になる。しかし、2 は内面も施釉されている。また、外面は全面に施釉されるわけではなく、底部資料からすると体部下方までの施釉で、以下は露胎にしている。口縁部をみると 7・8 のように内側まで施釉するもの、9~11 のように口唇部の軸を剥ぎ取るものなどが見受けられる。口縁部・底部を中心みていく。

7~11 は口縁部の資料で、その形状に違いが認められる。即ち、口縁部上端が外反し頸部がしまるものの (7・8)、短頸のもの (9・10)、明瞭な頸を有さないもの (11) などである。これらをもう少し細かくみると 7・8 の外反するものは口縁部の内側まで施釉し、口唇部は舌状につくる。8 は破片のため器形などは窺えない。ただ、器厚が 7 より厚く大き目のものになるかと推察される。

7 は肩部の下方までの状況がわかるもので、口縁部が外反し、頸部でつまり、肩部がやや張る器形である。以下は不明。口径は約 4 cm、頸径が 2 cm、肩の張る部分の径が約 7 cm で割と小さなものようである。

9・10 は短頸で肩の張るもののように、9 の推算口径が約 9 cm、10 の推算口径が約 6 cm である。2 点とも口唇部は平坦に削り、露胎にしている。9 は口縁部上端も僅かに削り、露胎部をつくっている。両者とも蓋のつくものかもしれない。

11 は口縁部から肩部の方へハの字状に開くもので、ナデ肩のようである。推算口径は約 5 cm である。本資料も 9・10 のように口唇部を平坦に削り、露胎にしている。非常に薄くつくって



第30図 白釉陶器（小碗：1~17、碗：18~25）

いる。

12は茶入れ壺のような小型のものの資料かと考えられる。胴部資料で下半部は露胎になっている。底部の状況などは不明。

21・22に示したものは胎土・釉調などから、同一個体になるかと考えられるものである。肩部と体部下端に稜を有するもので、体部は直線的になる。円柱状の器形になるようで、高台をつくる。口縁部と高台部が欠損しており、口縁部及び高台の形状については不明。体部の推算径は約9.5cmで、高さは9cm前後と推定される。釉は体部まで施され、下端の稜から高台部にかけては無釉のようである。

底部の資料を1・2・14～17に示した。いずれも立ち上がり部を若干残すだけの資料で、高台を有するものとベタ底のものがみられる。量的には前者のものが多く、後者のものは僅少である。高台を有するものをみると低い高台をつくる。豊付けは平坦であるが、水平に仕上げるものと内傾してつくるものがみられる。また、1は豊付け外面を若干斜めに面取りしている。2は高台際の稜が他の資料に比べて不明瞭である。

5点とも高台径の推算が可能で、1が約4cm、2・13が約7cm、14が約6cm、15が約8cmである。比較的幅のある大きさを示す。2・15は施釉の下端に釉溜まりがみられ、13は高台外面や外底面に釉が流れている。

16・17はベタ底の資料で、16は推算底径が約7cmを測る。17は16より小さめのものである。2点とも底面から丸味を持って立ち上がっていき。外面だけの施釉のようであるが、底面から約1cmは露胎にしている。

・手水鉢

第31図18に示したもので、推算口径は約11cmである。口縁部上端が内側に鍵状に折れ曲がるもので、口唇部は尖る。口縁部から底部の方へ直線的にすぼまるものである。破片の全面に施釉されている。

・急須

第31図19に示すもので、足を有す底部の資料である。他遺跡の例からすると三足のものかと考えられる。小破片のため詳細は不明。本資料からすると外面だけが施釉の対象になり、外底面や内側は無釉のようである。

・蓋

第31図20に示すものである。半分近く残るものであるが、摘みがついたかどうかは判然としない。表面に施釉し、縁は削って調整している。縁の方からやや盛り上がる感じで中央部へ向かい、中央付近を平坦に仕上げている。かえりの部分は丁寧につくり、推算径が約8cmを測る。壺の蓋になるかと考えられる。

第31図23に示すものは推算口径が約4cm、底径が4.5cm、高さが3.4cmと小型のものである。底面から約5mm直線的に立ち上がり、そこから弧を描いて口縁部に至る内湾器形である。口唇

部は平坦に形成し、内傾する。底部はベタ底で、糸切り痕が残る。内底面は中央部へ傾斜する。外体面下方から外底面を除き全軸。内体面に軸の掛からない部分もみられる。

鉄 軸

量的には多くない。ほとんど破片の資料で、碗・火舎・香炉などが見受けられる。碗は小破片のものばかりで、あえて図示しなかった。火舎・香炉の資料を第31図24・25に示した。24は火舎の口縁部で、推算口径は約11cmを測る。口縁部から直線的に底部へ向かうよう、筒形になるものかと考えられる。口唇部は平坦であるが、やや内側に傾く感じである。口縁部の内側には平面形が三角形の突起を有すが、何個付されたかは不明。軸は外面と内面の口縁部に施釉され、口唇部及び内面の口縁下約3.5cm以下は無釉のようである。外面は体部下半の状況は判然としない。口唇部には煤の付着も見受けられる。

25は香炉の底部資料である。腰部に稜を有する筒形を呈すものである。高台際から腰部にかけては斜位に仕上げている。高台は低く、内側をゆるやかなカーブを描くように浅く削っている。豊付けは平坦にしている。推算高台径は約8cmで、外体面には文様が配される。軸は外面の腰部まで、腰部以下及び内面は無釉である。

掛け分け

ここで扱うものは外面と内面で施釉される軸が異なるもので、今回得られたものは外面が黒釉で内面が白釉、外面が鉄釉で内面が白釉の2種である。量的には前者がおおいものの、出土量は多くない。以下に略述する。

・ 黒釉×白釉

確認できた器種は碗と鉢である。特徴的なものを第31図26～31に示した。26～30は碗の底部の資料である。いずれも底径の推算ができる、それからすると6cm前後のもの（27・28）と4cm前後のもの（26・29・30）がみられ、2種の大きさのものがあったかと推察される。また、器形的にも27は高台脇から直線的に開きながら立ち上がっていくようであるが、他はやや丸味を持って立ち上がってしていくものである。高台はいずれも逆三角形状につくるが、豊付けを平坦に仕上げるものと若干丸味のあるつくりものが見受けられる。

施釉の状況をみると外面は26・27が高台脇までの施釉で、高台及び外底面は無釉となっている。28～30は全面施釉で、高台豊付け部だけを釉剥ぎして調整している。内面をみると30だけが全釉で他の4点は蛇の目状に釉を搔き取っている。

31は口縁部上端が逆L字状に外反する鉢の口縁部資料であるが、小破片のため詳細は判然としない。

・ 鉄釉×白釉

本資料も量的には多くない。碗と皿の2種が確認できた。いずれも外面は黒釉を施したあと

に鉄軸を掛けている。特徴的な3点を第31図32～34に示した。32・33は碗の資料である。32は全形の窺えるもので、推算口径が約9cm、高さが4.8cm、推算高台径が4cmを測る。33は底部の資料で、推算底径は約4cmである。大きさからすると2点とも小碗の部類に入るようである。

32は高台を逆三角形状につくり、脛付けは丸く仕上げている。腰部はあまり脹らまず、丸味を持って立ち上がり、口縁部上端が僅かに外反する。全軸で、脛付けの周辺の軸を搔き取って調整し、内底面を蛇の目状に釉剥ぎしている。

33は高台を逆三角形状にやや厚くつくる。脛付けを釉剥ぎして調整し、外底面は無釉している。内面は灰釉のようで、胎土も細かく32よりも良質なものようである。

34は皿の資料で、全形の窺えるものである。高台は逆三角形状に低く厚みのあるつくりで、安定感がある。高台際からゆるやかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部は平坦に仕上げている。推算口径が約12cm、高さ4.3cm、推算高台径が約6cmを測る。外面は高台脛付け周辺を除き全軸、内面は底面を蛇の目状に釉剥ぎしている。口唇部は内面と同じような釉が施釉されている。内底面と脛付け部には焼成の際の溶着痕が認められる。

b. 無釉焼き締め陶器

1600点近く得られている。器種的には壺・甕類と掘り鉢が主体で、他に鉢や香炉などが若干見受けられる。第3層で最も多く得られ、第2・第4層と続く。この3層で全体の80%近くの出土である。得られたものの中には、施釉したものも若干含まれるが、胎土や焼成などからここで扱うこととした。特徴的なものを第32図～第35図に示した。以下に概略を述べる。

壺・甕類

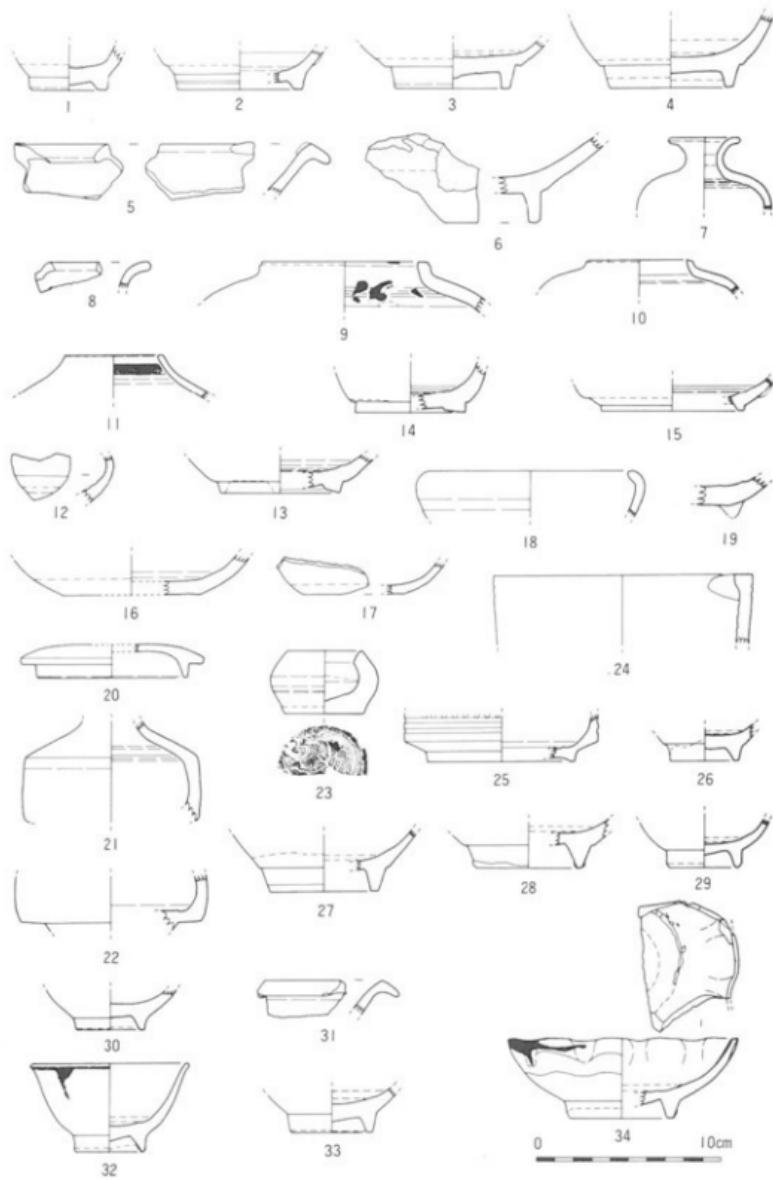
特徴的なものを第32図～第34図に示した。以下、特徴的なことについて概要を記すが、底部については一括して扱った。

第32図は頸部が綺まる壺・瓶類の資料である。全形の窺える資料はみられず、ほとんどのものが破片の資料である。15に示したものが口縁部を欠失するものの、頸部から底部までありほぼ全体の様子がつかめるものである。

1～12は口縁部の資料で、2以外は口径の推算可能なものである。これらをみると大きさにかなりバリエーションがみられ、大型（1～3、10・11）、中型（4～9）、小型（12）に分けられるようである。大型のものは20cm前後、中型のものは13cm前後、小型のものは10cm前後である。全体形の窺えるものがないので、ひとつの目安として考えておきたい。

次に器形についてみると。口縁上端部に特徴が表れるようで、大きくみると口縁部を玉縁状にし、口唇部を丸くつくるものと、口縁部を方形～長方形状につくり、口唇部が平坦に幅広くつくられるものに大別できるようである。いずれの形状を示す資料もさらに細分可能であるが、今回は大まかな違いを示すに止めておく。

これを大きさ別にみると大型のものは玉縁状のものが3点、長方形状のものが2点である。



第31図 黒釉陶器（1～23）、鐵釉陶器（24・25）、掛分け（26～34）

中型のものは玉縁状のものが2点、長方形状のものが4点で、小型のものは長方形状を呈す。これからすると玉縁状のものは大型のものに多かったかと推察される。

また、ほとんど頸部をしっかりつくるものであるが、1は口縁部直下から肩部の方へ向かうもので、頸部が判然としないものである。頸部から口縁部にかけては外反気味のものが主流のようであるが、10・11はやや内傾気味に立ち上がる。

文様はほとんどみられないが、10は肩部に沈線が廻るようである。また、1はなにかのマークのようなものが見受けられる。1～3・8・9は厚味のあるもので、他は比較的薄いつくりのものである。6は黒味のある釉が施され、比較的光沢を有している。

13～15は瓶になるかと考えられるものである。13・14は胴上部までの、15は底部まである資料であるが、3点とも口縁部を欠失している。いずれもナデ肩であるが、13・14は膨らみがあり、15はあまり膨らまない。15は逆三角形状の低い高台をつくる。13・14に比べ15は厚く、雑なつくりである。それぞれ若干異なる大きさのようである。13・14は肩部に沈線を数本廻らすようである。13・15は黒味の強い釉を外面に薄く施している。

第33図16～23に示したものは水甕になるかと考えられる資料である。16～18は口縁部の、他は胴部である。これらの資料をみると口縁部の形状にいくつかあり、頸部が若干しまり、胴部があまり膨らまず、スムーズに底部へ向かう器形が想定される。

口縁部の3点をみると、いずれも口唇部を広く平坦にしているが、16は逆台形状に、17・18は逆L字状につくっている。16は肥厚部下端に2本の沈線がみられ、頸部にはヘラにより階段状に沈線が廻る。17・18は口唇部の外側寄りに沈線を1本廻らしている。3点とも推算口径の算出ができ、16は約30cm、17は約35cm、18は約29cmを測る。

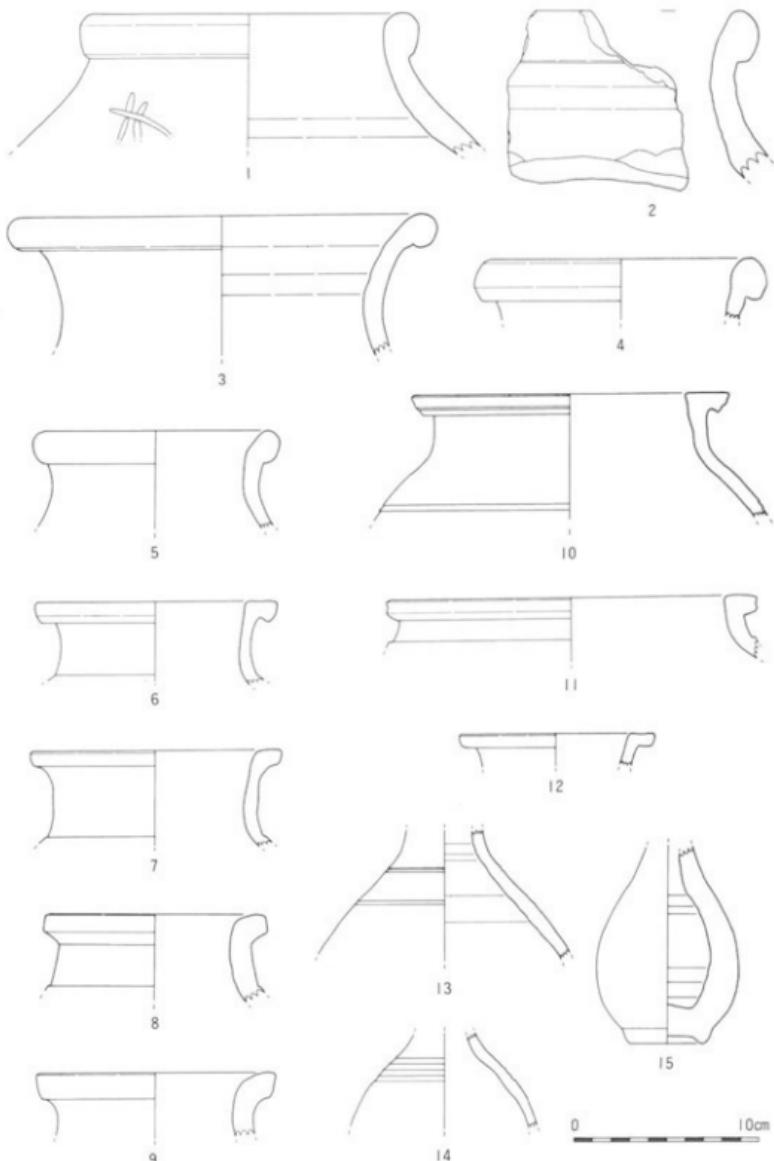
文様は沈線文と凸帯文の組合せで胴下半部まで施し、19・21からすると文様の下端は一対のやや扁平な凸帯文のようである。即ち、横位沈線文を数条施し、その下方にラフな波状文を配し、何ヶ所かに円盤状のものを貼りつけ、一対の横位凸帯を廻らし文様帶としている。

第34図に示したものは底部の資料である。破片のためどの器種のものか判然としない。立ち上がり部の形状からすると、直線的に若干開きながら胴部へ向かうものとやや膨らみを持って立ち上がっていくものの2種認められる。24～34は前者のもので、35～38は後者に属す。34を除き推算底径の算出ができる、前者のものは比較的バリエーションのある大きさをしめすが、後者のものは10cm前後の大きさを示す。

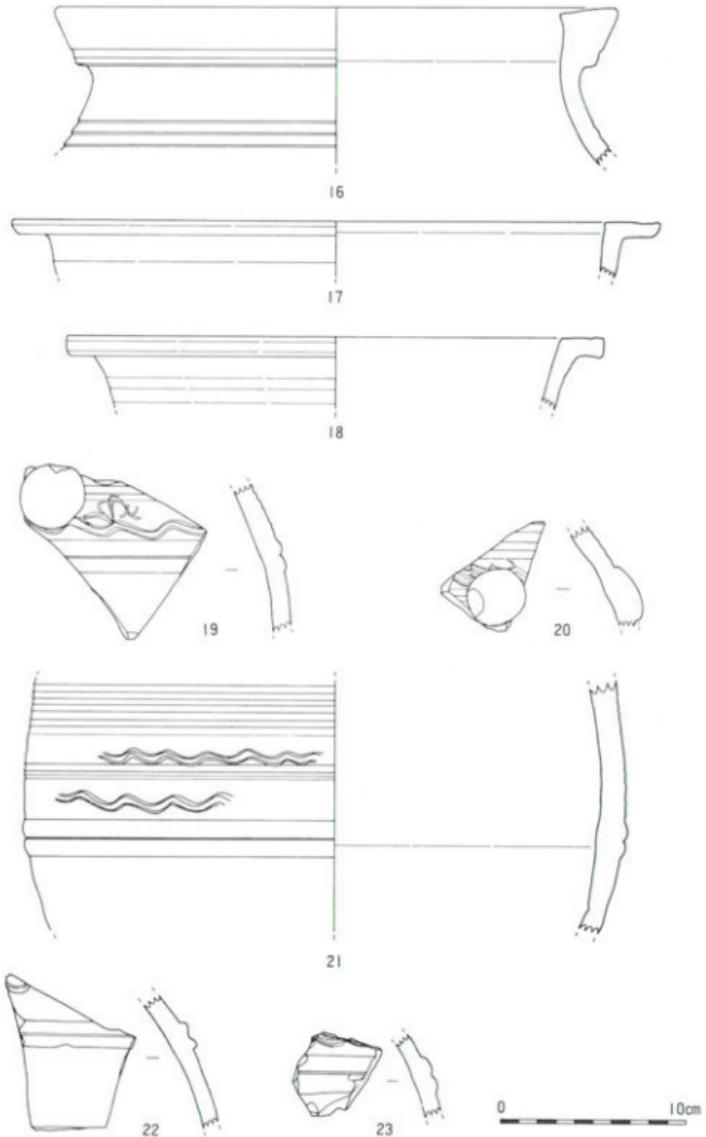
ほとんどのものが底面部は細かな凹凸が著しい。29は内底面の立ち上がりを階段状につくっている。また、32は粘土の接合部から剝がれており制作の様子を窺わせる資料である。

鉢

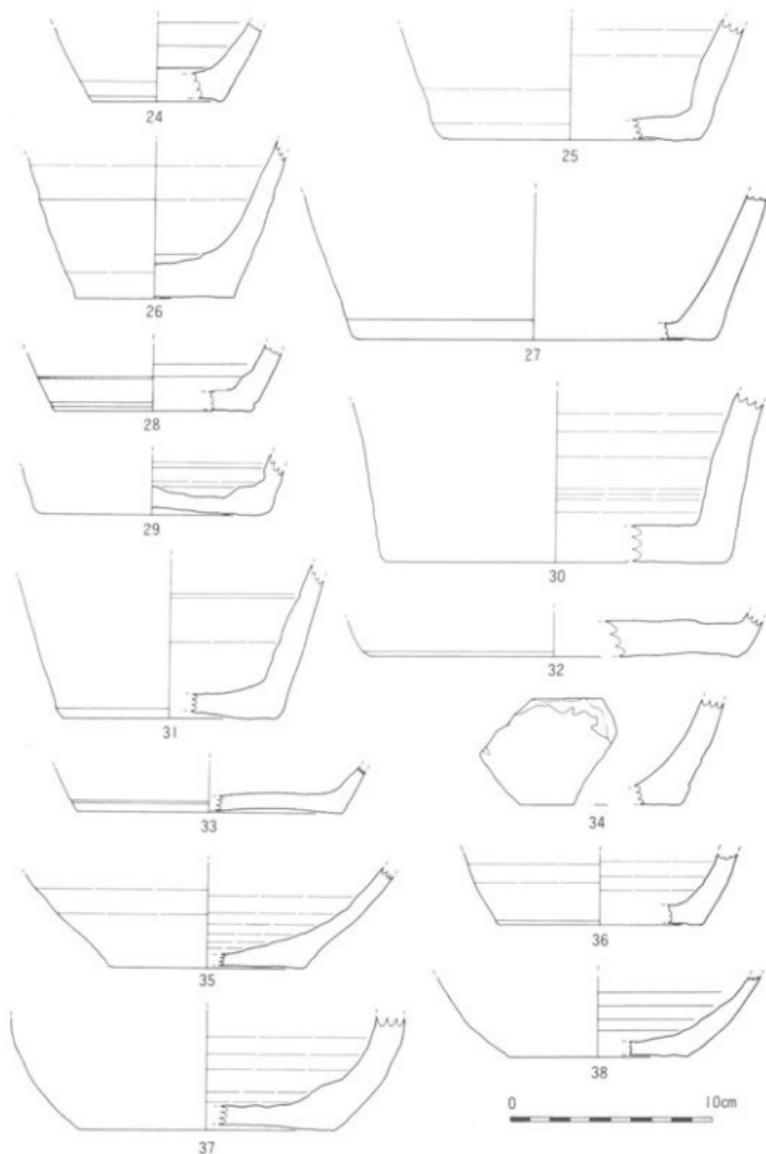
量的には僅少である。手水鉢、こね鉢と考えられるものが見受けられる。特徴的なものを第35図39～42に示した。39は手水鉢の口縁部で、底部を欠く。口縁上端部が外側へ張り出し、口



第32図 無釉焼き締め陶器 壺・瓶類



第33図 無釉焼き締め陶器 水壺



第34図 無釉焼き締め陶器 底部

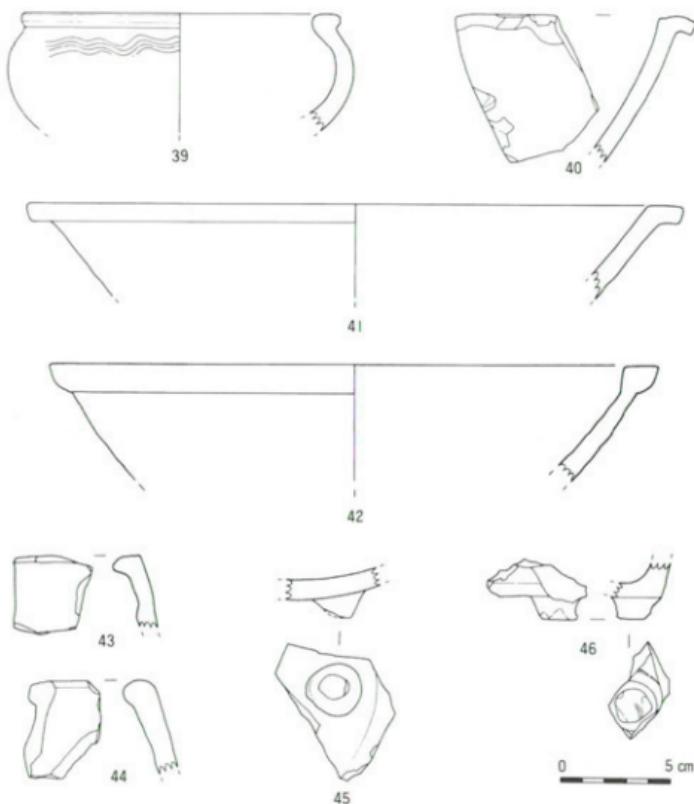
唇部が広くなる。その直下からゆるやかなカーブを描き底部へ向かうもので、全体的に丸味のある器形となっている。底部の状況は不明。推算口径は約15cmである。口縁直下には3本1組みの沈線による波状文をラフに施している。

40~42はこね鉢になるかと考えられるもので、器形的には後述の摺り鉢とほぼ同じようである。40・41は口縁部を逆L字状に折り曲げてつくり、42は方形状に成形している。40は口唇部の内側・外側に1本の沈線を廻らしている。

41・42は口径の推算ができ、41は約30cm、42は約28cmを測る。

香 爐

本種も量的には多くない。破片のものばかりで、全体的な器形についても判然としない。口縁部2点と底部2点を第35図43~46に示した。43・44は口縁部の資料で、2点とも内側に張り



第35図 無釉焼き締め陶器（手水鉢：39、こね鉢：40~42、香炉：43~46）

だして口唇部を広くしている。口唇部は43は平坦にし、44は丸く仕上げている。口唇部直下から若干外側へ膨らみ気味に胴部へ向かう。

45・46は脚を有す底部で、小破片のため詳細は不明。脚の形状をみると45は逆三角錐状に貼りつけられたもので、46は45の脚を半分から切った感じのものである。

摺り鉢

270点余り得られている。第3層で最も多く、第4層まで90%以上を占める。近世の時期のものと考えて差し支えないものと思われる。ほとんど破片の資料で、全形の窺えるようなものは見受けられない。しかし、口径及び底径の推算可能なものや比較的大き目の破片などから今回得られた資料のある程度の特徴をつかむことができたものと考える。

ほとんど沖縄産のものであるが、第39図36は胎土や成形技法などから他地域からもたらされた可能性も考えられる。

得られた資料をみると、暗～黒褐色の器色を有すものと橙褐色の明るい器色を有すものに大別できるようである。前者をa種、後者をb種とする。量的には後者の資料が圧倒的に多く、本遺跡の主体をなす。特徴的なものを第36図～第39図に示した。以下、種別に簡記する。

a種

第36図1～11、第37図15～19、第38図20・23・24、第39図28～31・33・35に示すものが本種に含まれるものである。第39図のものは底部の資料である。

まず、器形的な面からみると底面から直線的に外側へ開きながら口縁部へ向かうものと外側への開きがほとんどなくほぼ直方向で口縁部に向かうもの（第38図23・24）がみられる。ほとんどは前者に属するものである。口縁部のつくりにバリエーションがみられるが、口縁上端を外側へ折り曲げるよう外反させ、口唇部を広くつくるという似たような特徴が認められる。

後者に属す第38図23・24をみると、23は口縁外反部はスムーズであるが、24は口縁外反部の外面を凹面に成形しその下部に稜を設けている。

前者に属するものをみると口縁部近くで直方向に立ち上がる（第36図2・3）、外反部直下に凹面を形成しその下部に稜を設ける（第36図5・7・8、第37図15）、下部の稜の直下にさらに凹線様のものを廻らす（第36図4・6、第37図16・19、第38図20）、外反部直下までスムーズにする（第36図9～11、第37図17・18）などが見受けられる。

外反部のつくりもかなりバリエーションがみられる。ほとんどが口唇部を平坦にするものであるが、やや丸味を持って仕上げるもの（第36図6）も1点だけみられる。前者のものには口唇部を水平方向にするものと内傾するものがみられる。また、内面の口縁部が若干凹面を形成し、上端が内側へ突出した感じになる（第36図5）も見受けられる。第36図8からすると注ぎ口がつくものようである。

底部はベタ底のようで、第39図31・33は中心部へやや凹む感じで仕上げられている。この2点は比較的底面が滑らかであるが、他は凹凸がみられる。

大きさについては全形の示せるものがないので判然としない。ただ、推算口径の算出できたものからみると28cm前後のものが7点と最も多く、24cm前後のものが4点、18cm前後のものが2点で、12cm前後と35cm前後のものがそれぞれ1点づつである。20~30cmぐらいのものが普通で、後2者のものは例外的なものと考えられる。

推定底径の判明する6点をみると、いずれも10cm前後である。高さは不明。

文様の施されるものは僅少で、ほとんどが無文の資料である。有文の資料はいずれも口唇部だけが施文の対象になっており、第36図2・3は櫛描きによる波状文が、第38図23・24は外側寄りに1条の沈線文を廻らしている。

内面の櫛目は口縁部直下の約2cmはナデ消される。また、櫛目は底部から搔き掲げるが、上方で比較的間隔が開くもの（第36図2~5など）と間隔を開けず密に施すもの（第38図23・24など）がみられる。

・ b種

第37図12~14、第38図21・22・25・26、第39図27・32・34・37に示すものである。全体的な形状はa種と大差ない。第37図12~14が底面から直線的に開くもので、第38図25・26がやや直方向に立ち上がりしていくものである。

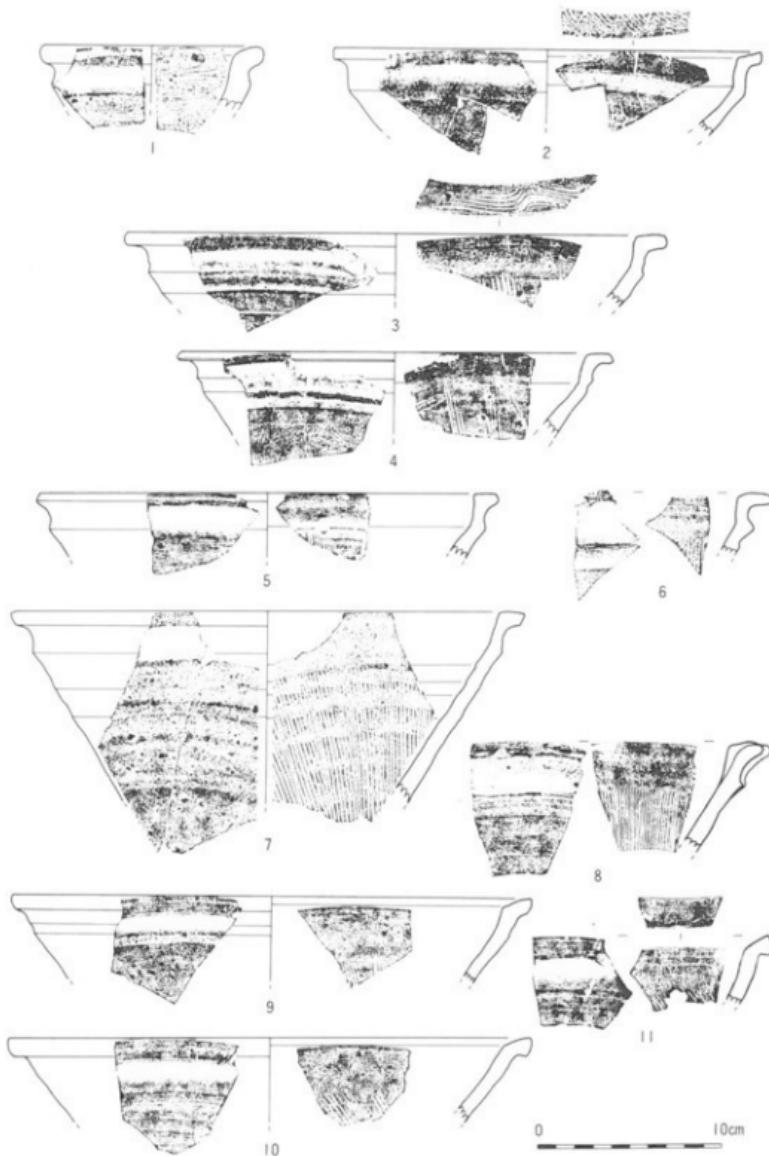
外反部のつくりも同様で、第37図12・13は外面を凹面にし下部に棱を設けるもので、14は外面を凹面にするが稜は有さない。第38図25・26は外面下部の稜の名残なのか、外反部直下に僅かな段を設けている。第38図21は内面の口縁部が内湾する。第38図25は注ぎ口の資料である。

底部はベタ底のようであるが、第39図34は唯一の甚簡底の資料である。他のものに比べて丁寧なつくりである。

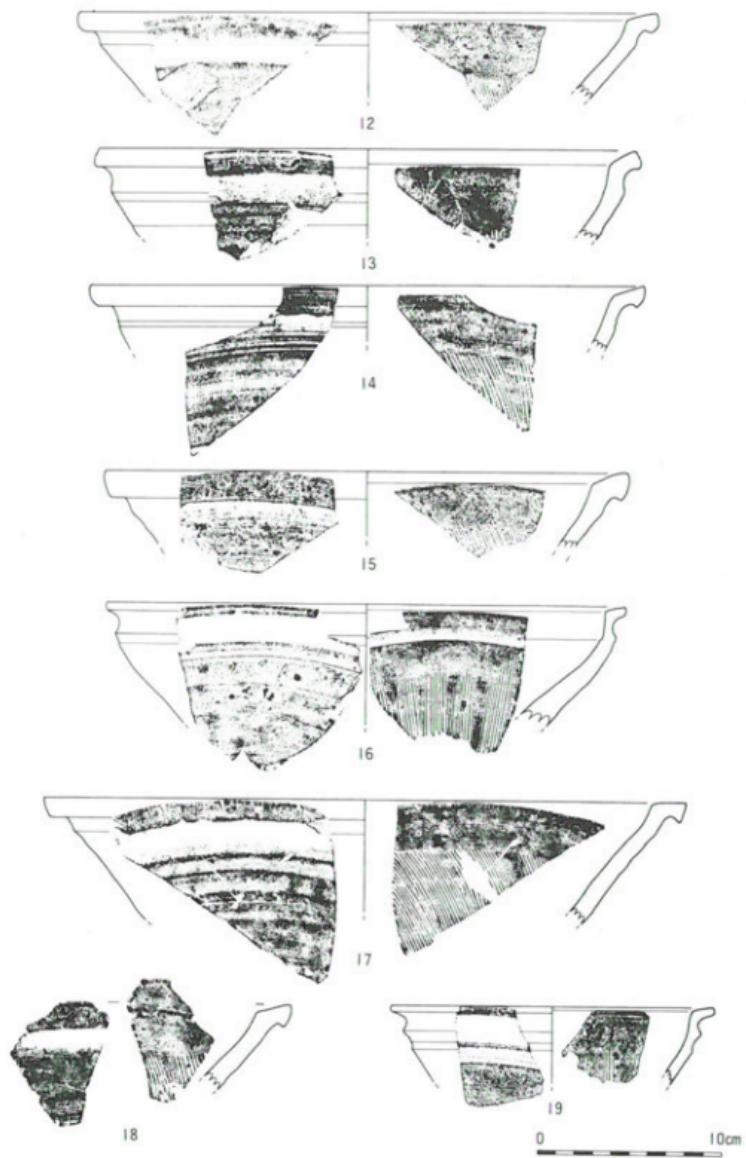
本種も大きさは判然としない。第37図12~14は推算口径の、第39図27・32・34・37は推算底径の算出できたものである。それからすると口径は30cm前後、底径は10cm前後でa種とほぼ同じような大きさを呈す。

本種もほとんど無文であるが、第38図21・22・25・26の4点は口唇部の外側寄りに1条の沈線を廻らすものである。内面の櫛目は第38図21のように口縁部近くまで搔き掲げるものもみられるが、ほとんどはa種と同様口唇部下約2cmはナデ消している。第37図14、第38図25をみると櫛目は密に施されている。

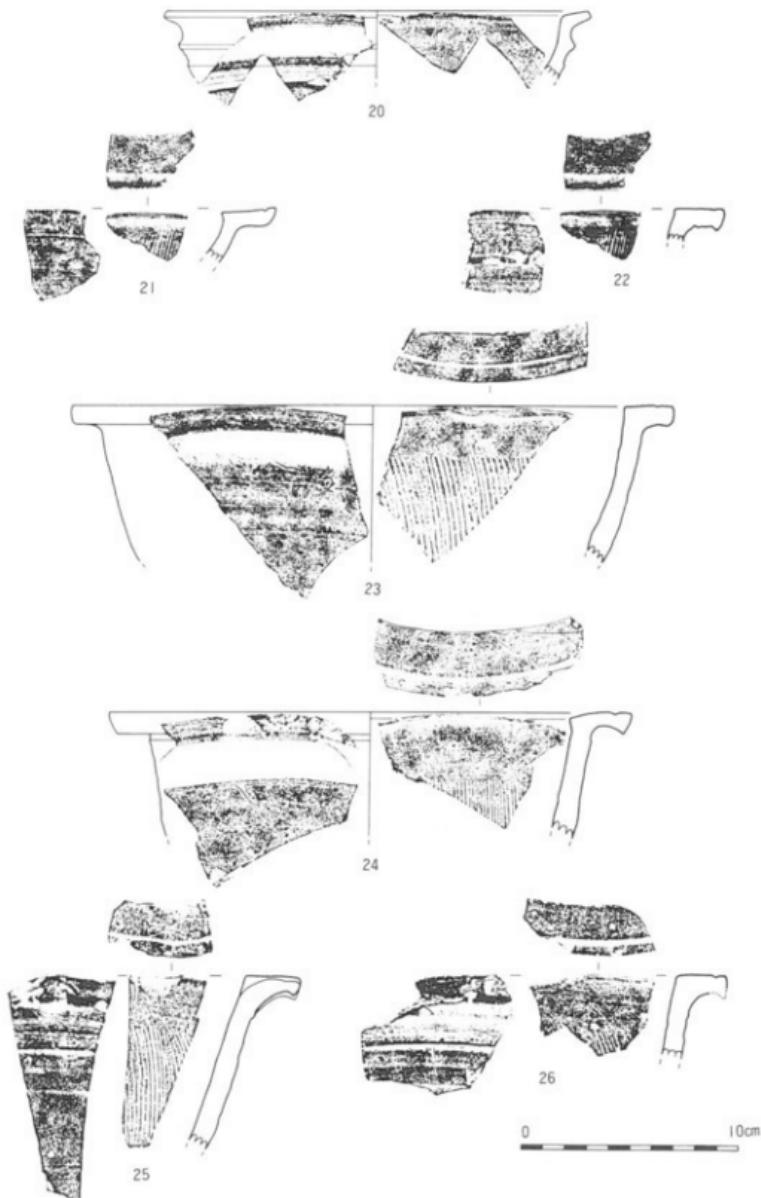
第39図36は胎土や成形技法などが他の資料と異なり、他地域からもたらされた可能性が考えられるものである。胎土は砂質で、精選され細かい。器色はやや色褪せた褐色を呈す。ベタ底で、底面に糸切り痕が認められる。その後なにかで外周を擦ったのか非常に滑らかな手触りである。器形的には底面からの立ち上がり部と底面から約2.5cmの2ヶ所で角度をかえて立ち上げている。内面の櫛目にも他資料と異なる感じを受ける。推算の底径は約9cm。第3層から得られている。



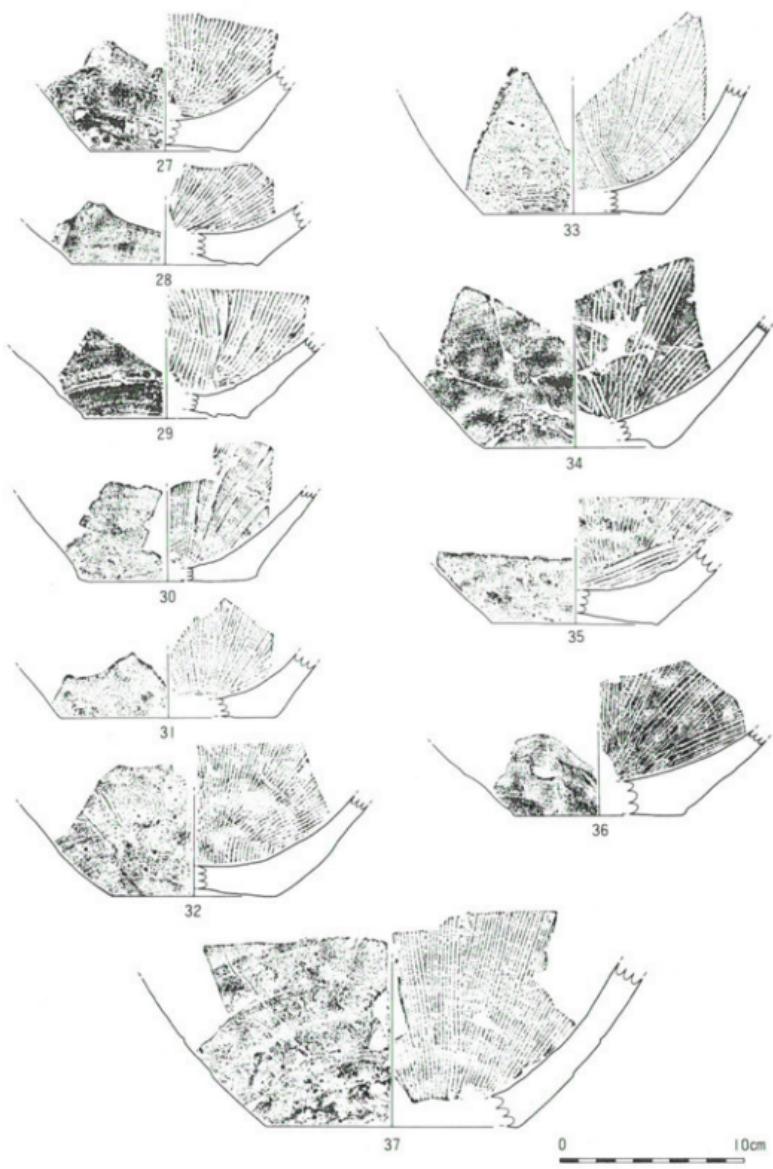
第36図 挖り鉢 a種



第37図 摺り鉢 (a種: 15~19、b種: 12~14)



第38図 摺り鉢 (a種 : 20・23・24、b種 : 21・22・25・26)



第39図 挖り鉢 底部 (a種: 28~31・33・35、b種: 27・32・34・37、不明: 36)

ヌ. 土 器

今回の調査で850点余り得られている。しかし、小破片のものばかりで全形の窺えるようなものは見受けられない。得られた資料のほとんどはグスク系土器と呼称されるものの範疇にはいるものであるが、第40図に示す3点はグスク時代以前のものである。似たような状況が豊見城村の伊良波東遺跡（註1）や北谷町の砂辺サーク原遺跡（註2）などからも報告されている。今回得られた資料を下記のように分類してみた。

第I類—沖縄先史時代後期（註3）に属するもの

第II類—いわゆるグスク系土器とされるもの

第1種—滑石が使用されるもの

- a. 混入物として使用されるもの
- b. 仕上げとして器面に塗布されるもの

第2種—滑石が使用されないもの

- a. 石灰質の砂粒が多く混ぜられ、器面がボーラスを呈すもの
- b. 石英や長石・輝石などの鉱物類の混入が多く、器面がザラザラするもの

以上のように分類してみた。量的には第II類第2種aが圧倒的に多く、主体をなす。特に注意されるものは第II類の第1種bのグループである。西原町の我謝遺跡（註4）などに類例の報告がみられるものの、類例報告の少いものである。今後注意していきたい資料のひとつである。類別の出土状況は第8表に示すとおりである。特徴的なものを第40図～第43図に示した。以下、類別に概述する。

第I類

底部だけが4点出土しており、3点

を第40図1～3に示した。1は尖底、
2は乳房状尖底、3はくびれ平底である。
図示しなかったものはくびれ平底の
小破片である。1は破片のため形状
は判然としない。混入物として石英粒
を密に含むほか、輝石や石灰質の砂粒

第8表 類別出土状況

層 序	類 別	第I類	第 II 類				合 計
			第1種a	第1種b	第2種a	第2種b	
第 1 層					5		5
第 2 層					32	8	40
第 3 层	1				44	13	57
第 4 层	1	1	1	2	132	43	176
第 5 层	2	6	3	2	109	33	146
合 計		4	7	5	638	181	835

さらに黒色粒などが見受けられ、器面の手触りがザラザラする。器面の手触りの感じは第II類の第2種bと同様であるが、それに比べると焼成が悪く脆い感じである。また、混入物の組成も若干異なる。外面は暗褐色を呈し、内面は黒褐色を呈す。器厚は10mm前後と厚い。

2は底面から若干丸く立ち上がり、内側へ僅かにくびれ、そこから外側に開きながら胴部へ向かうもので、典型的なものに近い。胎土は細かく精選され、石英の微砂粒を主体に赤色粒な

どが散見される。器面は滑らかで、器色は暗褐色を呈す。器厚は6mm前後である。

3は立ち上がり部でゆるやかに内側へくびれ、それから外側へ開きながら胴部へ向かうものである。底面部の外側への張り出しは強くない。底径の推算は約5cmである。器面は両面ともナデ調整が施されている。器色は暗褐色を呈すが、表面は裏面より明るい色合である。胎土は精選され泥質で、石英の微砂粒を多量混入する。器厚は7mm前後である。

第II類

本類は滑石を使用するものとそうでないものの2種に分けられる。前者を第1種、後者を第2種とすると、量的には第2種が圧倒的である。それぞれa・bに細分される。特徴的なものを第41図～第43図に示した。以下、種別に略述する。

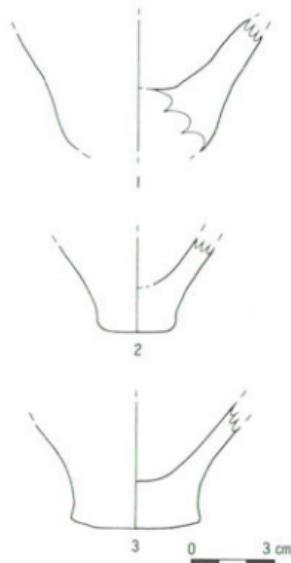
第1種

12点確認できた。口縁部5点と底部1点が含まれる。全形の窺えるようなものは得られていないが、口縁部資料からするとほとんど鍋形のようである。これらの資料をさらに細かくみるとa：胎土に混ぜるもの、b：表面に塗布するものが見受けられる。量的にはあまり差がみられない。第41図4～11に示すもので、4・5・9～11はaの、6～8はbの資料である。

aに属する4・5・9～11の中4・5は口縁部の、9・10は胴部の、11は底部の資料である。4はほぼ直口状を呈し、5は若干内湾気味のものである。口唇部は2点とも比較的平坦に仕上げており、特に5は両側へ若干張りだす感じで幅広くなっている。器面はナデ調整を施しているが、わりと雑な仕上げである。器厚は8mm前後である。

9・10は胴部の破片で、9は下端部に凸帶状のものがみられるものである。喜友名山川原第6遺跡（註5）や真志喜石川第2遺跡（註6）

などで報告されている鍔つき鍋の可能性が考えられる。器面はナデ調整が施されており、器厚は10mm前後と厚い。器色は橙褐色を呈す。10は6mm前後の厚さのもので、裏面に線状のものが雜にみられる。線状のものは図柄のようにもみえるが判然としない。器面はナデ調整が施され、



第40図 第1類

器色は暗褐色を呈す。

11の底部は底面からの立ち上がり部のカドがそれほど明瞭ではなく、丸味を帯びる。若干外側へ開き気味に立ち上がる。器面はナデ調整が施され、器厚は約8mmである。本資料は底面からの立ち上がり部に直径5mmほどの小孔（円形）が焼成後に穿たれている。外面や底面部に目立つ削り痕などを考え合わせると、なんらかの細工を加えようとしたものかと考えられる。

bに属するものを6～8に示した。いずれも若干内湾気味のもので、口唇部は比較的平坦に成形している。6は平面が梢円形状の瘤状把手を縱方向に貼りつけるもので、把手の上端は口唇部に合わせている。瘤状把手は短径が約3cm、長径が約4cmで厚さ約1cmとしっかりしたもので、両側は直線的になっている。把手の外面は中央部が若干凹む。

3点とも滑石粉を塗布するため、器面は丁寧なナデ調整が施されている。7の外面は塗布された滑石粉が比較的残るが、6・8はかなり剥げ落ちている。また、3点とも内面はほとんど剥げ落ちている。この種のものは水洗いの際に強く洗いすぎると滑石粉が剥げ落ちることも考えられ、量的にはもっと多くなるものと考えられる。

いずれも胎土は精選され泥質で、混入物に石英や赤色粒などが見受けられる。器厚は8mm前後である。

第2種

本類の主体をなすもので、いわゆるグスク系土器と呼ばれるものである。本種も胎土・混入物や器面の状況から次の2者に分けられる。

a：胎土は精選され泥質で、石灰質の砂粒を多く混ぜる。器面は滑らかな仕上がりであるが、アバタ状を呈すものとそうでないものがみられる。

b：胎土は精選され泥質で、石英や長石・輝石などの鉱物類を多く混入している。混入物が器面に露出し、手触りがザラザラするもの。

の2者である。量的にはaが圧倒的に多く、bは若干の出土であった。器種的にはaが鍋・壺・碗の3器種が、bは鍋・壺の2器種が確認できた。また、第42図22に示すものは大きな瘤状の把手になるかと考えられるもので、注意される。以下、a・bに分けて器種ごとに略述する。なお、器種は口縁部で主に確認しており、底部についてはそれぞれの最後にまとめた。

・ a種

鍋 形

第41図12～19および第42図20～22に特徴的なものを示した。12～20は口縁部の資料である。ほとんど内湾気味のものであるが、18はほぼ直口状のものである。他遺跡出土のものを参考にすると平口縁になるものと思われるが、12・19は破片右側が上方に向いており、山形口縁になるものかと推察される。ただ、その部分で破損しているため、形状は不明。また、何ヶ所に設

けられたのかも不明である。

口唇部は平坦につくるものが主流であるが、13は尖る。口唇を平坦につくるものはほとんどが内傾しており、水平になるものは19・20の2点である。後者の2点は他の資料に比べ口唇部を幅広くつくる。

12・19の2点は推算口径の算出ができる、12が約23cm、19が約29cmを測る。12・13は器面が比較的ボーラスになるが、他は滑らかな器肌を有す。ほとんどナデ調整が施されるが、16・19の内面には擦痕が消えきらずに残る。全体的なつくりからすると、19・20は他の資料より丁寧である。器色は12・13が色あせた感じの肌色、14・16が赤褐色、15は黒褐色、17は暗茶褐色、18は暗褐色、20・21は橙褐色を呈す。

22は石鍋模倣土器と呼ばれる縁の把手を有す胴部破片である。把手の形状は判然としない。暗褐色を呈し、両面ともナデ調整が施されている。23は断面・上面観とも半楕円状の厚みのある把手である。貼りつけ部から剝がれており、底部のようにもみえる。沖縄本島ではあまり例をみない資料である。胎土は泥質で、赤色粒が多く混入されている。比較的丁寧につくられており、器色は暗黄褐色を呈す。下方は煤けて黒褐色を呈している。

壺 形

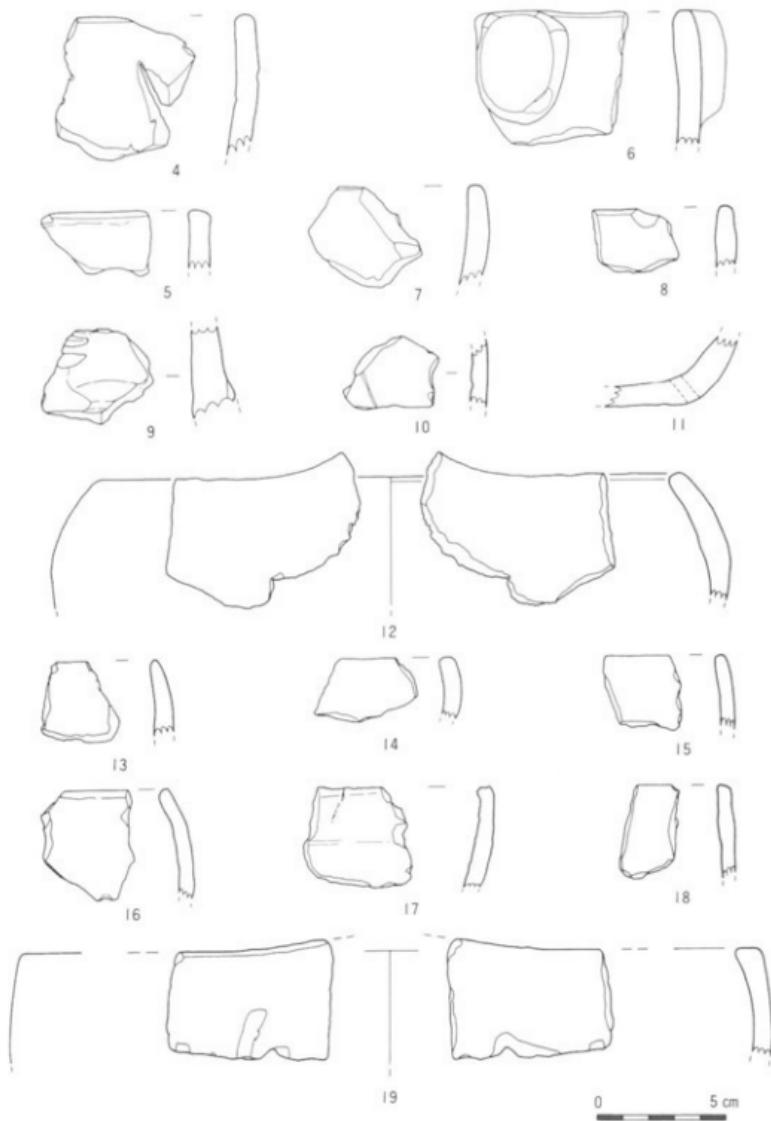
6点を第42図23～28に示した。頸部が1cm前後と短く、若干外反気味になるものが多い。28は頸部がやや長く(2cm前後)、ほぼまっすぐに立ち上がるるものである。また、23は頸部が非常に短く、口縁上端をつまみ上げた感じのものである。口唇部は23・28は尖り気味になるが、他は平坦な感じで成形している。28だけが口径の推算ができる、約17cmを測る。

器面はナデ調整が比較的丁寧に施されるが、23は擦痕が、28は指頭痕が消えきらずに残る。胎土は泥質で、23・25は混入物の石灰質砂粒が器表面にみられるが、他は認められない。器色は23が表面は黒褐色で裏面は赤褐色、24・25は暗褐色、26は色あせた肌色、27・28は暗茶褐色を呈す。全体的な状況から23は他の資料と異なる感じを抱かせる。

第42図29～31、第43図32・33に示したものは、底部の資料である。底面から外側へ開きながら立ち上がるもので、32だけがその部分の稜が明瞭である。32は他のものに比べ、底部の凹凸が著しい。30を除く4点が底径の推算ができる、29は約11cm、31は約12cm、32・33は約13cmを測る。胎土は泥質で、混入物の肉眼観察は困難であるが、32は内面に混入物の石灰質砂粒が露出している。器色は29・32が赤褐色、他は暗褐色を呈す。

碗 形

本器種になるかと考えられるものが4点あり、第43図34～37に示した。34は口縁部、他の3点は底部の資料である。34は内湾気味のもので、口唇部は平坦に成形している。器面はナデ調整が施されており、器色は暗褐色を呈す。胎土は泥質で、混入物の肉眼観察は困難なものである。底部の3点はいずれも底径の推算が可能なもので、3点とも7cm前後である。35は底面から外側に開きながら立ち上がるもので、36・37は底面から若干まっすぐに立ち上がり、そこか



第41図 第II類 鍋形(第1種a : 4・5・9~11、第1種b : 6~8、第2種a : 12~19)

ら開き気味に胸部に向かうものである。わりと雑なつくりで、35・37は暗褐色、36は暗茶褐色を呈す。

• b種

量的に少なく、鍋・壺が確認できた。特徴的なものを第43図38～43に示した。38は鍋形の口縁部、39・40は壺形の口縁部、41～43は底部の資料である。以下に簡記する。

鍋 形

第43図38に示すもので、内湾気味のものである。口唇部は平坦につくるものの、両側の角がとれ丸味のある形状を示す。両面ともナデ調整が施され、器色は赤褐色を呈す。7mm前後の器厚を有す。

壺 形

39・40が本器種のもので、39は頸部が外反気味になり、40は若干内傾するものである。39は推算口径が約14cmを測る。39は2cmぐらいの頸部を有すもので、40は1cm程度の短い頸部のものである。口唇部は39が尖り気味になるもので、40は舌状を呈す。両者とも丁寧なナデ調整が施設されている。器色は39が暗褐色、40が表面は黒褐色、裏面は赤褐色を呈す。

41～43に示すものは底面から開きながら胸部に向かう底部の資料で、42はやや立ち気味になる。いずれも底径の推算ができ、41・43は約11cm、42は約9cmを測る。安定感のある平底である。底面からの立ち上がり部は42が不明瞭な稜を有すが、41・43は丸味を持つ。41は底面部まで5mm前後の厚さである。3点とも器面はよくナデられている。器色は41・43が橙褐色を呈し42が灰褐色を呈す。42は外面に赤褐色を呈す部分も見受けられる。

註1 「伊良波東遺跡」豊見城村文化財調査報告書第2集 豊見城村教育委員会 1987年3月

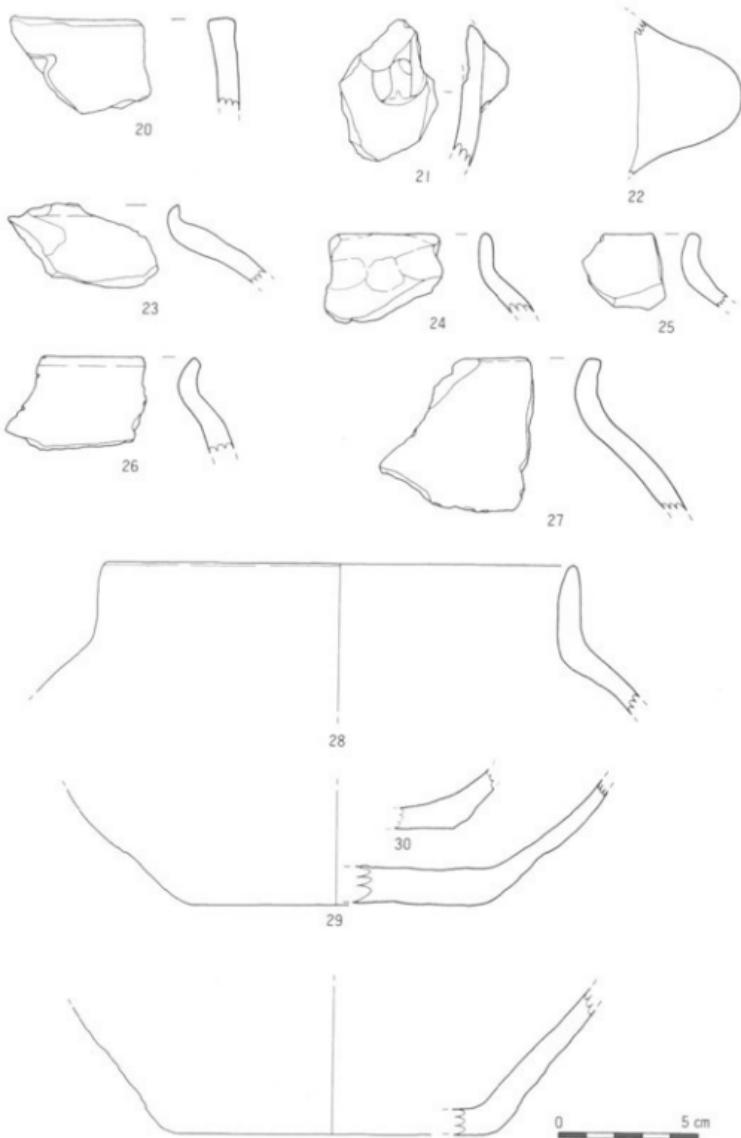
註2 「砂辺サーク原遺跡」沖縄県文化財調査報告書第81集 沖縄県教育委員会 1987年3月

註3 高宮 廉衛「南島考古雑誌(1)」南島考古No11 沖縄考古学会 1991年9月

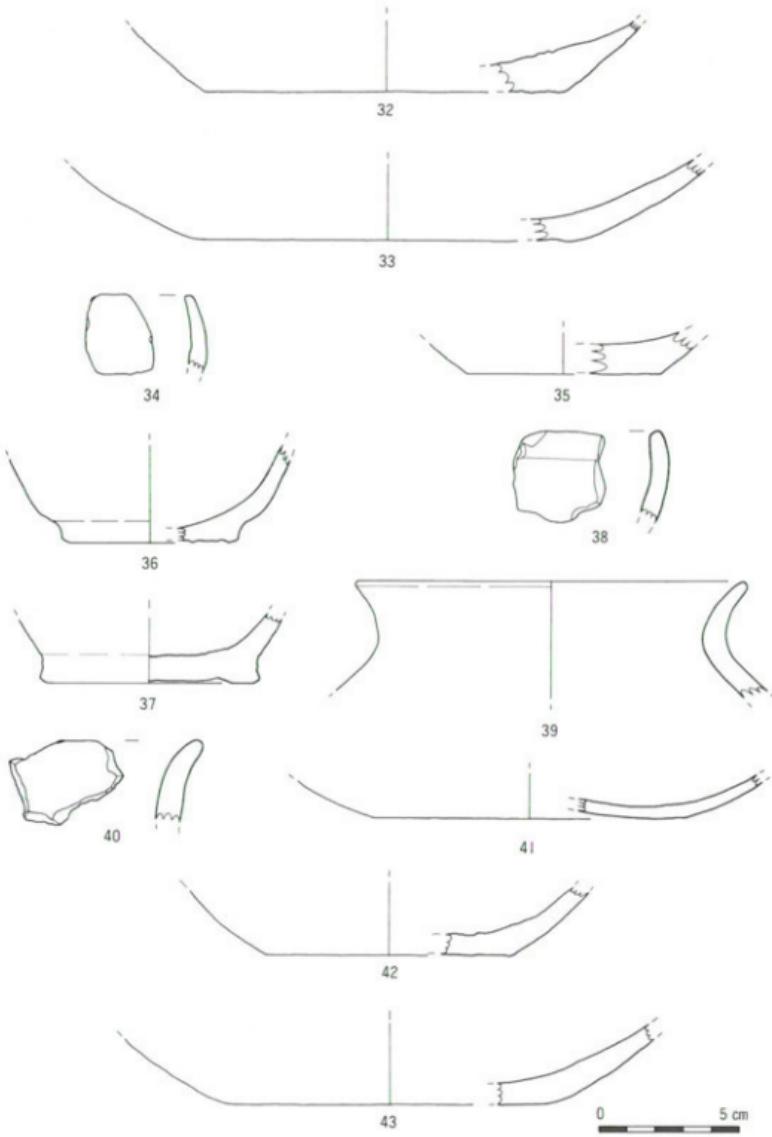
註4 「我瀬遺跡」西原町文化財調査報告書第5集 西原町教育委員会 1983年

註5 「喜友名山川原第6遺跡」「喜友名遺跡群」 宜野湾市文化財調査報告書第5集 宜野湾市教育委員会 1984年

註6 「直志喜石川第2遺跡」「じゃな1」宜野湾市文化財調査報告書第12集 宜野湾市教育委員会 1989年3月



第42図 第II類第2種a (鍋形: 20~22、壺形: 23~31)



第43図 第II類 第2種a : 32~37、第2種b : 38~43

ル、陶質土器

近世の時期の遺跡からわりと出土するもので、ロクロ成形により仕上げられたものである。壺屋あたりでアカムヌーと呼ばれていたようで、その名の通り器色が赤～橙褐色を呈すものが多い。

ほとんど小破片の資料であるが、第44図1は全形の窺えるものである。器種的には鍋・火舎・手水鉢・瓶・急須の5種が確認できた。量的には鍋が圧倒的に多く、他は僅少であった。

特徴的なものを第44図～第46図に示した。以下、種別に略述する。

鍋

最も多く得られている器種である。ほとんど小破片のものであるが、第44図1に示すものは全形の窺える資料である。身と蓋の資料が得られているが、後者は少ない。身の資料をみると5mm前後の薄さで仕上げられたものが多く、施釉するものとそうでないものが見受けられる。前述の全形の窺えるものは前者のものである。量的には無釉のものが圧倒的に多く得られている。蓋で施釉されたものは見受けられない。特徴的な17点を第44図に示した。

身の資料を1～12に示した。1～4は施釉するもの、5～12は無釉のものである。1は全形の窺えるもので、推算口径約16cm、外反部内側の推算径は約14cm、高さ13.3cmを測る。器形は口縁部が「く」字状に外反し、胴部はゆるやかに丸味を持って膨らみ、胴下半部で若干すぼまり、そこからゆるやかな弧を描きながら底部に至る。底部はゆったりした丸底で、逆三角形状の足（1cm前後の高さ）が3個付されている。外反部以下は金魚鉢のような球形をなす。

「く」字状に外反する口縁部は口唇部外側の角が丸く成形され、断面が三角形状を呈し、尖り気味の口唇部をつくっているように見える。外反部の内面は若干凹面を形成し、蓋受けの機能を有しているものと考えられる。外反部内側の稜は削り落とされている。また、外反部の外面には外耳の付された痕跡があり、首里城跡（註1）や豊見城村の伊良波西遺跡（註2）出土のものを参考にすると、2ヶ所にブリッジ状の外耳が付されるようである。本資料は口縁外反部に垂直に近い感じで復元してみた。

施釉は内面の胴上部から以下と外反部内面から外面の胴中央付近まで行なっている。そのため、内側の外反部から胴上部の間と外面の胴中央付近以下は無釉となっている。釉は暗褐色の失透釉で、薄くかけられている。蓋受けの部分は施釉後、搔きとっているようである。器面は丁寧な調整が施され滑らかな器肌を有するが、ロクロの回転調整痕が残る部分も見受けられる。

器色は内面が淡茶褐色を呈し、外面は胴下半部に設けられた凹部の上方は黒灰色、下方は淡茶褐色を呈す。また、足の周辺には若干の煤の付着がみられる。

2～4は1と同じような特徴を有するものである。外反部内側は2・3は丸味を帯びて成形されるが、4は明瞭な棱を有す。いずれも口径の推算ができる、2が約16cm、3・4が約13cmを

測る。これからすると大きさに若干のバリエーションがあったかと推察される。2・3は外面に沈線様のものがみられるが、混入物の移動した跡の可能性も考えられる。4は外耳の基部が残る。3・4は1・2よりやや黒味の強い釉を施している。

5～12に示したものは釉の施されないものである。器形的には1～4と同じように口縁上端が外反し、胴部がゆるやかに膨らむ球形状のものが想定される。ただ、胴下半部の資料がなく、底部に付される足については不明である。また、口縁外反部がより水平方向になり、屈曲が大きくなっているものが多い。

外反部の内側の凹面の位置をみると、5～7は端の方にあり、8～10は中央、11・12は内側寄りに設けられている。外反部の外面には2ヶ所にブリッジ状の外耳が付されるようである。外耳はやや下向きに貼り付けられるものが多いが、12は口唇部とほぼ水平方向に付けられている。いずれも口径の推算が可能で、11は約14cmと施釉されたものと同じような大きさであるが他は大体18～20cmと施釉されたものより大き目となっている。

器面はロクロによる調整痕を明瞭に残すものが多い。器色は橙褐色を呈すものが多いものの6・10は暗褐色を呈す。

蓋の資料で比較的大き目のものを13～17に示した。いずれも摘み部を高台状につくるものでその形状には若干のバリエーションがみられる。摘み部から縁部へ直線的に開きながら向かうもの（14）や僅かに弧を描く感じで向かうもの（15）などが見受けられる。5点とも摘み部の径の推算ができ、13・14が約6cm、15・16が約8cm、17が約5cmとなっている。

器面はよく調整されているが、ロクロ痕を残すもの（15）や削り痕を残すもの（17）などがみられる。身に比べるとやや厚目に成形されている。器色は17が橙褐色、他は暗褐色を呈す。

火 舎

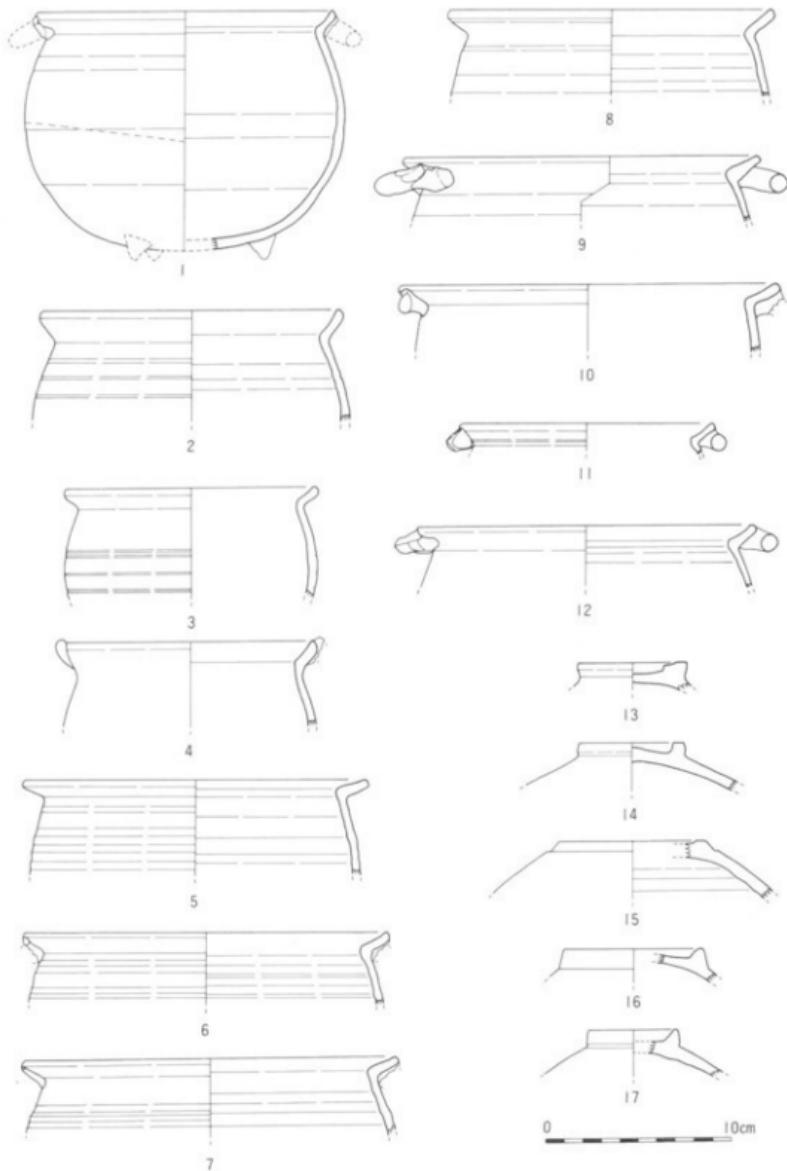
比較的多く得られているが、全形の窺えるようなものは見受けられない。胎土・成形技法・器色などの諸特徴は土鍋とほとんど同じであるが、厚目につくられるものが多いようである。口縁部の形状から下記のように分類してみた。

- a種一口縁部はスムーズで、内湾するもの
- b種一口縁部上端がやや水平方向に内側に折れ曲がるもの
- c種一口縁部上端が「く」字状に折れ曲がるもの

以上の3種で、量的にはa種が多く得られており、次いでc種・b種の順に減少する。特徴的なものを第45図18～31に示した。種別に簡記する。

a種

6点を18～23に示した。器形的な特徴からすると底部からゆるやかにカーブしながら口縁部に向かうもので、最大径は胴上部にくるようである。口唇部は丸くつくる。全体的に丸味のある形状をなす。外面の胴上部に有孔の把手（上面観は台形状）を貼りつけ、口縁部の内側に上



第44図 陶質土器 鍋

面観が三角形状の突起を付す。いずれも何個配されたか不明であるが、把手は2ヶ所に配されたものとして図示した。また、18は破片の左側口縁部に斜めに削られた痕がみられることから口縁部の何ヶ所かに抉りの部分を設けるものようである。底部は阿波根古島遺跡（註4）などからすると高台をつくるものかと考えられる。

大きさは完形の資料が得られていないので判然としない部分も多い。図示した6点とも口径の推算が可能で、18～20・22は13cm前後、21は17cm前後、23は12cm前後を測る。それからすると口径は13cm前後のものが普通につくられていたかと考えられる。最大径のある胴上部は口径より2cm前後膨らむようである。高さや底径などは判然としない。

器面調整は丁寧で、滑らかな仕上げとなっている。外面には白釉（？）を施した部分が線状にほぼ等間隔に配されるようであるが、ほとんどのものは剥げ落ちている。

b種

24・25に示したものが本種に含まれるものである。24は口唇部が若干広くなるように断面三角状に内側に突出させる感じのものであるが、25は口縁部上端を約1.5cm内側へ折り曲げたようにつくるものである。25は口唇部に僅かに段がみられ、外側を若干低くしている。24は推算口径が約16.5cmを測る。口縁部の形状を除けば、全体的な器形はa種に類似するものかと推察される。

c種

26～31に示すものである。底部から口縁部の方へ直線的に開き、口縁上端が「く」字状に折れ曲がるものである。仔細にみると若干の違いが認められる。26・27はカマボコ状になるもので、先端部は尖る。28・29折れ曲がり部の下端に段がつくもので、そこから口唇部にかけては平坦に仕上げている。30・31は折れ曲がり部が波打つ感じになり、口唇部は幅広くつくる。

阿波根古島遺跡などを参考にすると底部は平底のようである。また、31は折れ曲がり部の直下に把手の剥げ落ちた痕跡が認められる。把手が付されたものは阿波根古島遺跡などで報告されている。

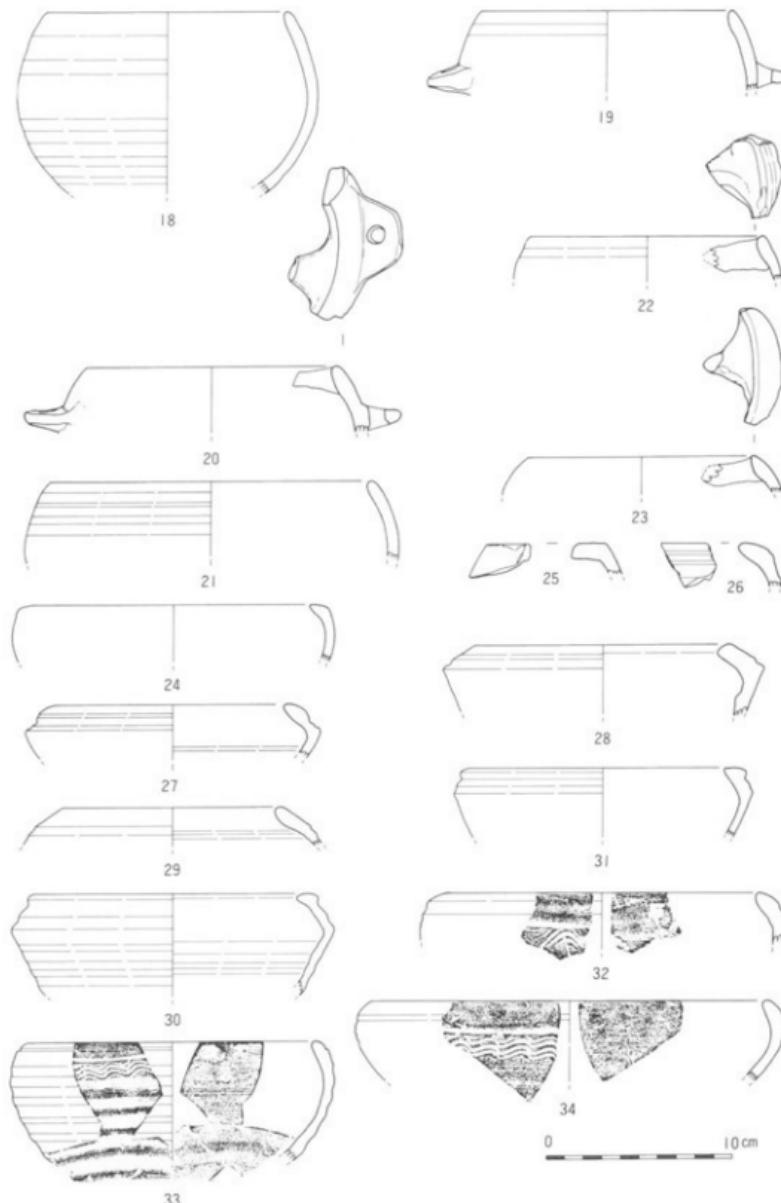
27～31は口径の推算ができ、27・28は約14cm、29は約12cm、30・31は約15cmを測る。口径の大きさだけを比べると、a種より若干大き目になるかと考えられる。高さや底径などは不明。

器面は滑らかに仕上げているが、ロクロ痕が明瞭に残る。29～31は口縁部の内側に煤の付着する部分が認められる。

手水鉢

量的には多くない。3点を第45図32～34に示した。いずれも口縁部近くで内湾するもので、32は口唇部が尖り気味になり、33・34は舌状につくる。3点とも推算口径の算出ができ、32は約17cm、33は約21cm、34は約16cmを測る。

いずれも口縁部には1本の横位沈線と櫛描き（4本1組）の波状沈線文が施されている。後



第45図 陶質土器（火舍：18~31、手水鉢：32~34）

者の文様を先に施し、その文様の上方に接するように沈線を廻らしている。32は沈線と口唇の間がやや窪むが、33・34はスムーズな曲線を描く。また、この沈線は口縁部にひとつのアクセントをついている。

33は文様の施用部位以下は凹凸が交互になるような成形になっているが、他の2点については判然としない。器面は滑らかに仕上げられ、器色は橙褐色を呈す。しかし、32は焼成が悪く表面が暗褐色、内部は灰褐色を呈す。

瓶

第46図35に示す1点だけ確認できた。口縁部が開き気味になる口～頸部の破片(約5.5cm)であるが、全体の器形は不明。口縁部内側で窪み部があり、その部分では薄くなっている。口唇部は尖り気味につくる。推算口径が算出でき、約6cmを測る。

急須

統て破片の資料で、全形の窺えるものは見受けられない。しかし、底部を除く各部位の資料があり、凡そ器形が想定できる。胴下半部で角になるほど折れ曲がり、そこから口縁部の方へすばまりながら向かうが、ほぼ直線的なもの(47)と若干内側へカーブするもの(45・46)などがみられる。頸部で若干膨らみ、口縁部はしまる。口縁部の上端を若干摘み上げるようにしておらず、口唇部は丸味を帯びる。

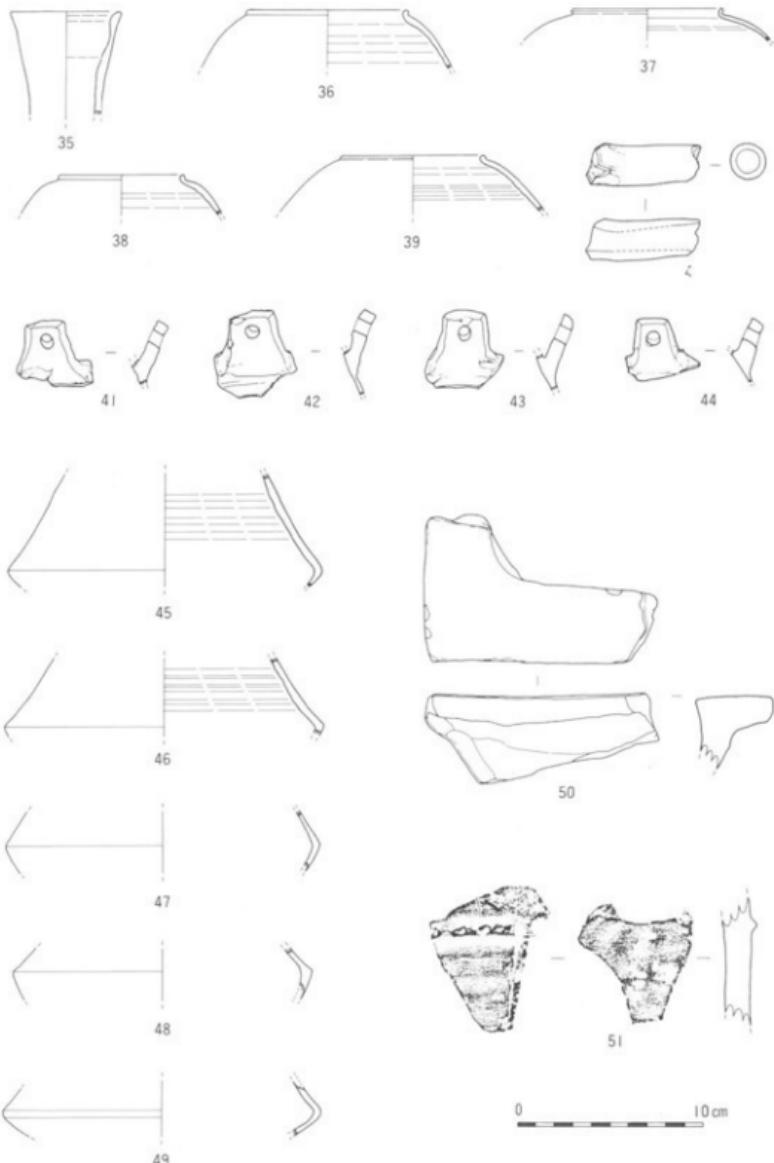
全体的な形状からすると算盤の玉状になるものと胸部が滑らかな逆S字状になるものが想定される。底部の形状については判然としない。また、40に示す注口は胴下半部の折れ曲がり部の上方に付されるようである。41～44に示す外耳は胴上部の2ヶ所に配されるようである。

大きさについては完形が得られてないので、判然としない部分も多い。36～39に示す口縁部はいざれも推算口径の算出ができ、38は約7cm、他の3点は8cm前後のものである。また、最大になる折れ曲がり部の径をみると、大体17cm前後を測る。これからすると口径は8cm前後、胴下半部が17cm前後になるものが普通であったかと推察される。高さについては不明。

器面は滑らかに仕上げられているが、裏面にはロクロ痕が残る。かなり薄くつくられている46～49は折れ曲がり部の下方に煤の付着が認められる。

註1 「首里城跡歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる造構調査」沖縄県文化財調査報告書第88集 沖縄県教育委員会 昭和63年3月

註2 「伊良波西遺跡」豊見城村文化財調査報告書第1集 豊見城村教育委員会 1986年



第46図 陶質土器（瓶：35、急須：36～49）、瓦質土器：50・51

ヲ. 瓦質土器

量的には僅少である。總て小破片のため明確に器種が判明するものは七輪・鉢の2器種である。特徴的なものを第46図50・51に示した。

50は七輪の口縁部破片である。方形～長方形状になると考えられるものであるが、全体的な形状や大きさなどは判然としない。口縁部は逆L字状に幅広くつくり(約4cm)、外縁を斜位に成形している。口唇部外側は明瞭な角をつくるが、内側はコーナー部を丸く滑らかにしている。口唇部は若干内傾気味に仕上げている。また、口縁部直下の状況をみると、角の部分を削り落としているのが見受けられる。

器面をみると内側は丁寧に仕上げているが、外側は成形の際の削り痕や擦痕様のものが残る。図の下辺右側には煤の付着も認められる。胎土は細かく、微砂粒(雲母など)を密に含むほか赤色粒なども見受けられる。器色は色褪せた肌色を呈し、器厚は12mm前後である。

51は鉢の胴部資料である。破片の上部に繩目様の凸帯が1条施されている。外面には横方向の擦痕がみられる。胎土は細かく泥質で、器色は暗灰色を呈す。器厚は13mm前後である。

ワ. 土製品

犬の置物が1点だけ得られており、第47図1に示した。首輪をした犬が座って玉を抱いており、玉の両面には桜の花と思われる図柄が描かれている。型合わせによりつくられたもので、ほぼ完形である。細かく精選された素地で、石英の微砂粒が散見される。高さは約3.5cmである。D-10第3層下部の出土。

カ. 貝製品

1点だけ得られており、第47図2に示した。夜光貝の背面を粗く打ち欠いたもので、研磨などの加工は見受けられない。グスク時代において夜光貝製貝匙が知られており(註)、本標品も貝匙の素材としての可能性が考えられ、ここに示した。最大長は約9cm、最大幅は約7cmを測る。D-4地山直上から得られている。

註 上原 静 「グスク時代遺跡出土の匙」『紀要』 第3号 沖縄県教育委員会文化課 1986年3月

ヨ. 骨製品

ハブラシの柄が2点得られている。第47図3・4に示すもので、2点とも全形は窺えない。3は柄の部分がほぼ残るもの、頭部からブラシ部は欠損している。中央部付近から頭部の方へは断面が半円状に厚みがあるものの、端部の方へは扁平状の仕上げとなっている。表側は丸味のある仕上げであるが、裏は平坦になっている。全体として反ったつくりで、末端部の方へ広くなる。全体的に光沢があり、末端部は劍先状に尖っている。現存長は約8cm。末端の近く

で約11mm、頸部付近で約5mmの幅を有す。B-7第3層の出土。

4は頸部近くの資料で両側を欠失する。断面が半円状を呈し、両サイドから同じように幅を減じ、細い頸部をつくる。裏側は平坦につくり、反りはみられず直線的に成形するものである。1とは形状の異なるものと考えられる。現存長は約4cm。幅は頸部が約5mm、柄部が約10mmである。表採品。

タ. 玉

ガラス製の丸玉が1点得られており、第47図5に示した。表面は風化が著しく、ザラメ状になり、ザラザラした感じになっている。青味のある色合のものであるが、光沢は完全に失われている。他の特徴については窺い得ない。直径9mm、孔径4mm、高さ8mmを測る。類例資料の報告は仲宗根貝塚（註1）や勝連城跡（註2）などのほか、比較的多く知られている。

註1 「仲宗根貝塚、第一・二次発掘調査概報」沖縄県文化財調査報告書第33集 沖縄県教育委員会 1980年3月

註2 「勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－」勝連町の文化財第6集 勝連町教育委員会 1984年3月

レ. 磨

1点だけ得られており、第47図6に示した。墨汁受けの部分と左側上部が欠損している。扁平な感じのもので、裏面は平坦で滑らかな仕上げとなっている。右側のコーナー部をみると斜めに切り落とされており、4つの角の仕上げの様子を示しているものと考えられる。使用面の中央付近は若干の凹面をつくる。本標品は首里城跡（註）報告のものに比べると幅広く、薄い部類のものようである。

現存の資料で長さ10cm、幅7.3cm、厚さ1.1cmを測る。粘板岩製。B-8第3層下部、出土である。

註 「首里城跡 欽会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査」沖縄県文化財調査報告書第88集 沖縄県教育委員会 昭和63年3月

ソ. 石製品

第47図7に示すもので、一辺が1cmの方柱状に成形されたものである。下端は欠失しており全長は不明。上部の2つの角は斜めに磨られ、角がとれるように調整されている。2面に明瞭に残る線状痕からすると、機械により方柱状に細長く切ったものかと考えられる。他の面をみると、その線状痕が消える部分がみられ、さらに手を加えるようである。つまり、本標品は制作途中の段階のものと考えられる。ろう石製で、現存長約7cm。D-4第3層出土。

ツ. 滑石

5点出土しており、いずれも滑石製石鍋の破片である（第47図8～12）。8は口縁部、9～11

は胸部、12は底部の資料である。口縁・胸部の資料は内・外器面を残しており、厚さの判明するものである。これらの資料をみると厚さ8mm前後の薄手のもの(8~10)、2cm前後の厚味のあるもの(11)が認められる。11は底部から立ち上がる部分のもので、細かな削り痕が縦方向に残る。本資料は破損面のひとつに研磨痕や溝状の沈線を設けており、二次使用を考えたものと推察される。

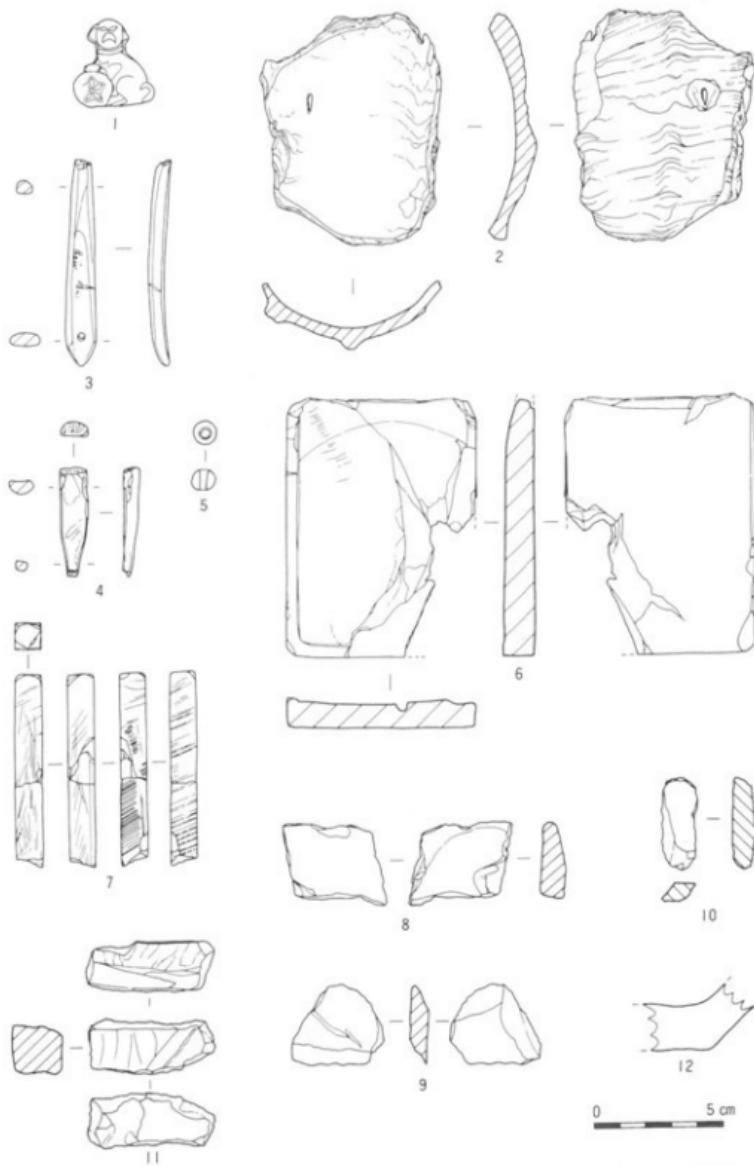
5は底部の資料であるが、小破片のため底径などは不明。底面からの立ち上がり部で若干すぼまり、外側へ開きながら胸部へ向かう。内面は外面よりもゆるやかなカーブを描く。立ち上がり部には縦方向の削り痕が認められる。厚さは1.5cm前後である。破片の左側破損部は磨かれしており、再利用を考えたものと思われる。9は第3層、10は第4層の出土で、他の3点は第5層から得られている。

滑石製品は本遺跡の南西側にある喜友名山川原第6遺跡(註1)で報告されている他、北谷町のサーク原遺跡(註2)や豊見城村の伊良波東遺跡(註3)などで報告されている。

註1 「喜友名山川原第6遺跡」「喜友名遺跡群」宜野湾市文化財調査報告書第5集 宜野湾市教育委員会 1984年

註2 「砂辺サーク原遺跡」沖縄県文化財調査報告書第81集 沖縄県教育委員会 1987年3月

註3 「伊良波東遺跡」豊見城村文化財調査報告書第2集 豊見城村教育委員会 1987年



第47図 土製品：1、貝製品：2、骨製品：3・4、玉：5、硯：6、石製品：7、滑石：8～12

ネ. 石 器

総数42点と比較的多く得られているものの、ほとんどが破片の資料で完形のものは少ない。また、本来の用途から転用されたものも見受けられる。今回得られたもので器種の判明するものは、たたき石・磨石・凹み石などの敲打器類のほか石皿・砥石など5種である。出土状況は第9表のとおりである。用途不明のものも含めた特徴的なものを第48図～第51図に示した。以下、器種別に概略を述べる。

・たたき石

特徴的なもの6点を第48図1～6に示した。1～4は本来の器種から転用されたもので、大きく重量感がある。2～4は破損品を再利用している。5・6は小型のもので、5は完形の資料である。法量などは第9表に示した。

1はその形状から大型の石斧を転用したものと考えられる。頭部から刃部の方へ漸次広くなっている。刃部および頭部に使用痕が明瞭に残る。刃部・頭部とも表面に剥離部がみられ、その利用頻度を窺わせる。表面は研磨されているものの、それほど丁寧ではなく、裏面は打削調整のままの部分を多く残す。両側面は滑らかに調整され、右側面がより丁寧に仕上げられている。左側面は手に持ったときになじむような感じで、若干の凹部が波状に見受けられる。

2・3は石皿のような大型の石器の破片を利用したものである。2は上端部と右側面は破損面をそのまま残す。表面は左側に研磨面がみられるものの、中央付近では研磨がそれほどでも

第9表 石器出土一覧

排 国 番 号	器 種	法 量				石 質	出土層位
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第48図1	たたき石	19.9	5.8	4.7	1,210	変輝緑岩	表 採
II 2	たたき石	19.0	7.5	6.8	1,470	砂 岩	第2層
II 3	たたき石	14.3	7.0	5.1	800	砂 岩	第2層
II 4	たたき石	12.0	7.8	7.4	1,300	花こう岩	第2層
II 5	たたき石	6.7	4.8	3.5	220	緑色片岩	第3層
II 6	たたき石	4.4	3.0	3.0	90	チャート	第4層
第49図7	磨 石	11.8	11.0	5.2	710	安山岩	第2層
II 8	磨 石	11.0	6.8	3.6	390	変輝緑岩	第3層
II 9	磨 石	16.0	10.7	6.4	1,580	砂 岩	表 採
II 10	砥 石	5.2	2.9	1.8	40	玢 岩	第5層
II 11	砥 石	5.4	3.6	1.1	30	玢 岩	第4層
II 12	砥 石	8.8	5.1	1.3	130	砂 岩	第3層
第50図13	凹 石	19.0	13.8	5.8	1,650	砂 岩	第2層
II 14	凹 石	17.2	9.6	7.6	1,880	砂 岩	第2層
II 15	石 皿	7.8	10.0	5.1	700	変輝緑岩	表 採
II 16	石 皿	10.0	13.1	4.3	800	砂 岩	第5層
第51図17	不 明	11.4	6.3	3.6	450	砂 岩	表 採
II 18	不 明	4.8	4.5	1.6	80	凝灰岩	第2層
II 19	不 明	4.3	1.4	0.9	20	粘板岩	第2層
II 20	不 明	8.3	8.2	1.3	490	緑色片岩	第4層

なく細かな凹部が多く見受けられる。裏面はやや下端部に近いところから先端部の方へ浅い凹面がみられる。破損面との角はとれ丸くなっている。下端部は両面へ細かな剝離が著しく、潰れの箇所も見受けられる。

3は右側面と上端部に破損面を残す。表面は若干の凹面をなし、その部分だけ磨面で滑らかになっている。他の面は角を丸くしているだけで、それほど手を加えてない。左側面には指がかかるほどの小さな凹みが3ヶ所にみられる。

4は凹み石の片断を使用したものと考えられる。表面に直径5cmほどの円形状の凹部がみられるが、左側は破損している。研磨面はほとんど見受けられない。下端部は両面に若干剝離、潰れている。

5は小型のもので、平面形は釣鐘状を呈す。表裏面は磨面になっており、他の4側面は敲打による潰れがみられる。右側面はそれほどでもなく、他の3側面は著しい。特に、上下端部は平坦になるほどの状況を示している。

6は敲打により丸味を帯びた面を有するものであるが、大きく破損しており全体の状況はつかめない。

・磨り石

3点を第49図7～9に示した。いずれも平面が梢円形状、横断面も梢円状を呈すものである。8は著しく破損しているものである。表面は滑らかな磨面を有し、側面には敲打面が見受けられる。右側面の下部は若干の凹部を形成するほどである。

7・9は8のような磨面はみられず、表面に敲打による浅い凹部を有す。2点ともほぼ円形状を呈しており、9はやや深い。7は裏面にもそれが見受けられ、不定形でやや広い範囲になる。7の表面は上端が、裏面は下端が大きく割れている。本品の使用頻度を物語るものである。また、右側面にも剝離面が見受けられる。

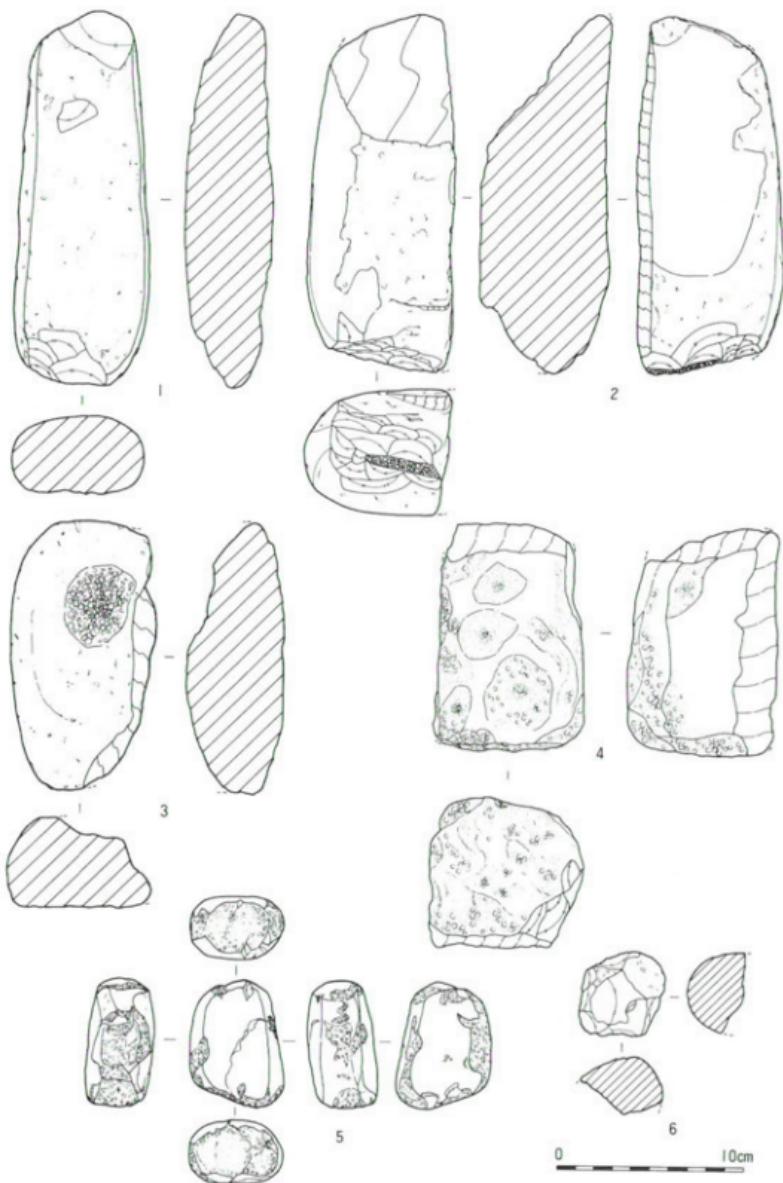
9は裏側が大きく破損しており、右側は節理面から割れている。左側の割れ面には敲打面が認められ、破損後も使用されていたことを窺わせる。上下端の一部においてはやや平坦な面をつくるほどである。

このような状況からすると、3点とも磨り石としてばかりでなく、他の用途にも用いられたものと考えられる。

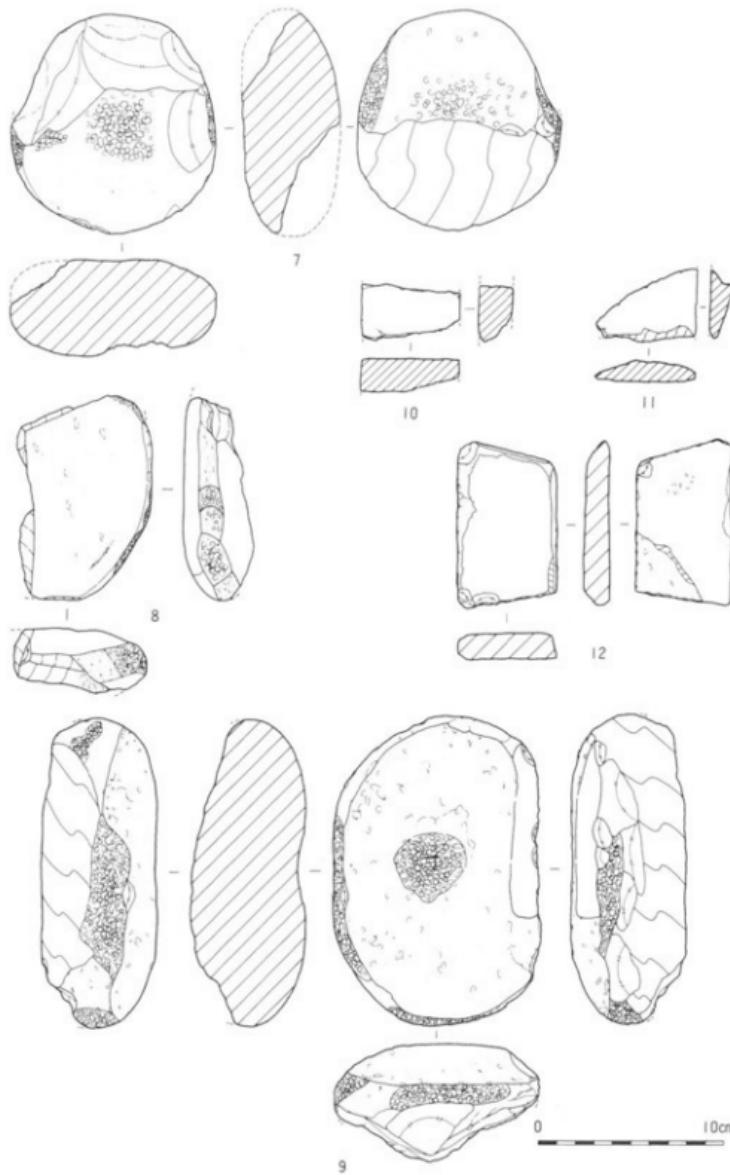
・砥 石

著しく破損したものばかりで、3点を第49図10～12に示した。10・11は同じ石質のもので、10は裏面をのこしている。約1.5cmの厚さであるが、本来の厚さなのか判然としない。2点とも両側面も使用しており、10はよりその頻度が高かったようである。

12は板状のもので、下端が破損している。他の3側面は自然面を残す。表面を主に利用して



第48図 たたき石



第49図 磨り石：7～9、磁石：10～12

おり、裏面は素材として割りとった面をそのまま残す。

・凹み石

2点を第50図13・14に示した。13は平面形が梢円形状を呈していたものと考えられる。左上部が斜め方向に大きく割れ、下端および右側面は細かい割れが広がり、残った形状は三角形状になっている。表裏面とも外周に若干の磨面がみられるだけである。表面には深さ約1cmの円形状の凹部が認められる。

14は表面の左下端に直径3cm前後の円形状の凹部を有するものである。深さは約1cmである。その周辺に若干の敲打面がみられるだけで、他にこれといった加工痕は見受けられない。

・石皿

第50図15・16に示すもので、2点とも著しく破損したものである。15は表裏面および側面とも滑らかな面となっている。下端のほうへ厚さを減じる。16は約4cmの厚さを有する板状のものである。裏面は割れ面のままで、表面と側面が磨面である。

・用途不明

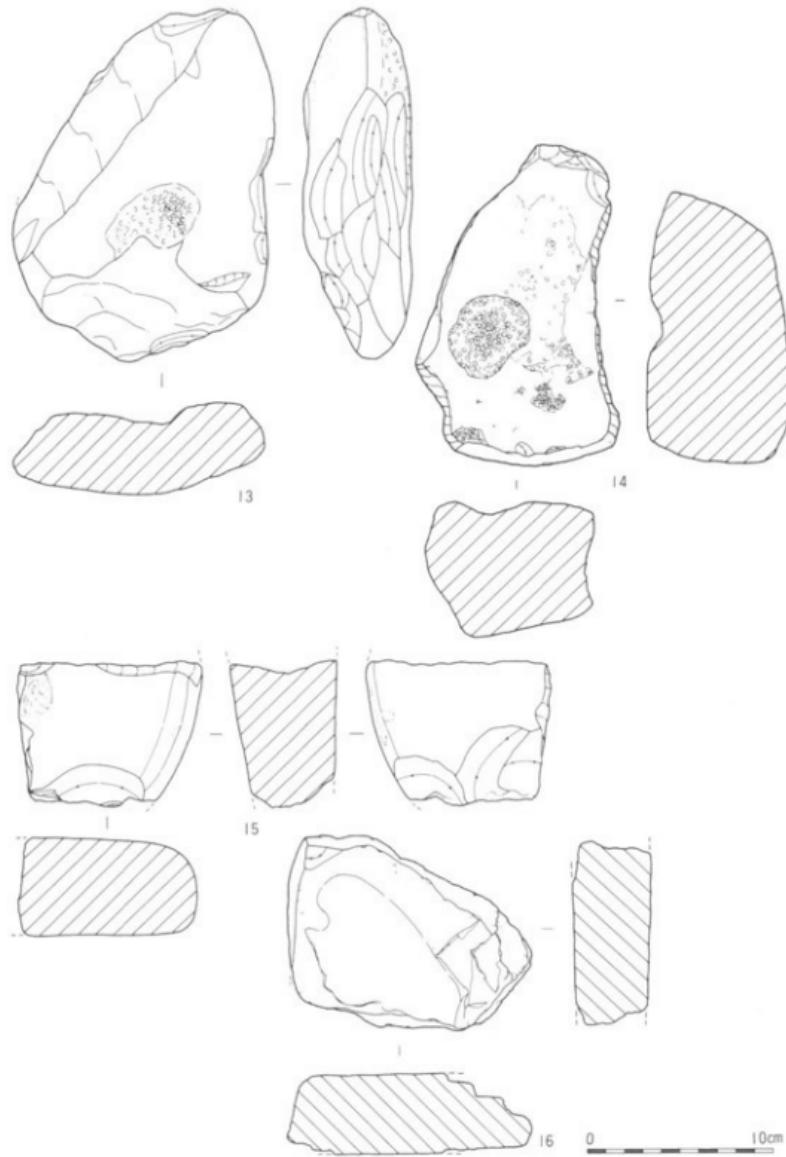
敲打痕や磨面を有するものであるが、用途が明確に判明しないものである。4点を第51図17~20に示した。17は下端の方へ厚く、広くなっているので、上端は破損している。右側面は上端近くで段差がつく感じで細くなっている。その部分は丁寧な研磨がなされ、相対する左側は横方向の凹線様のものが2本見受けられる。また、左側は凹線様のものから約2cm下方に若干の段差になる箇所が認められる。上端の4面に研磨が集中していることからすると、この部分をなにかに差し込んでいたのかもしれない。

下端は著しい敲打痕がみられるが、左側は一部に研磨面が認められる。表面には梢円形状の凹み部がみられ、深い凹みの所も見受けられる。裏面もほとんど敲打痕がみられる。

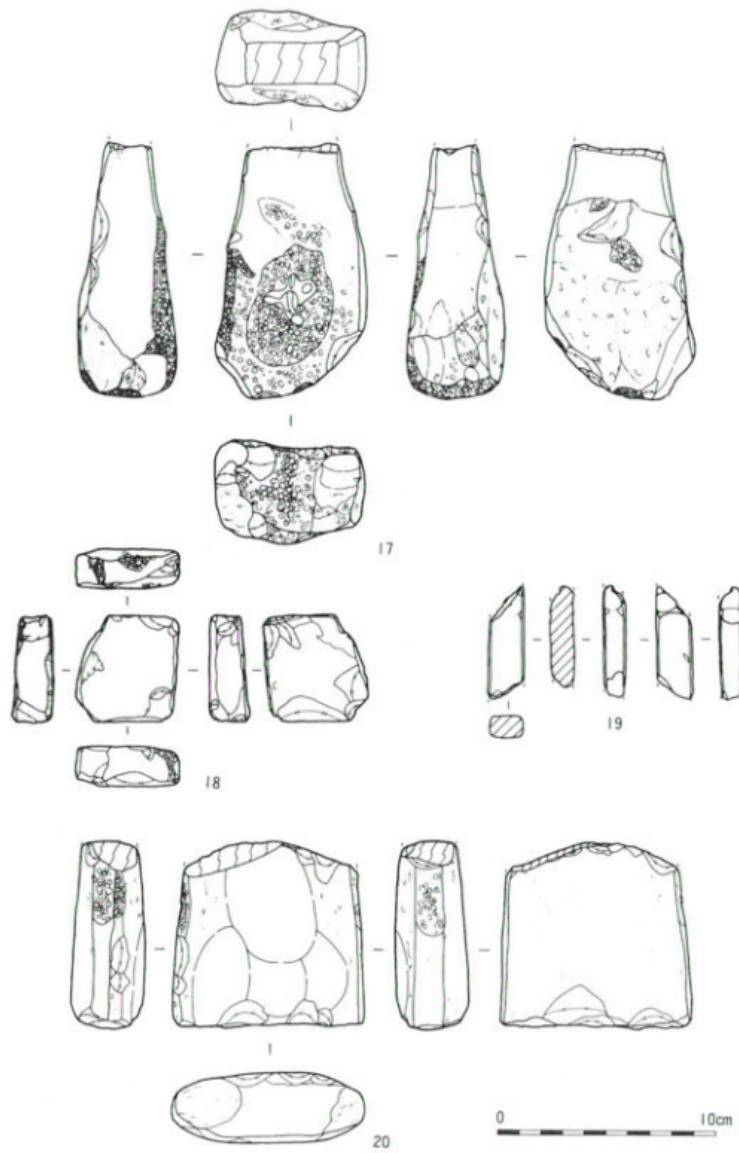
18は6面に研磨痕のみられるものである。台形状の平面形で、厚さは1cmちょっとである。研磨は丁寧であるが、比較的割れ面も多くみられる。上端と左側の側面は破損面を磨いているようであり、それからすると破損品を利用しているものと考えられる。

19は横断面を長方形状につくるもので、上・下端が欠損している。全体の状況からすると平面形は長方形状であったかと推察される。残っている4面とも丁寧に磨かれており、滑らかである。本資料の上端に溝状の凹線が廻っており注意される。

20は大型の石斧の破損品である。表裏面はよく研磨され滑らかな面で、両側面も丁寧に調整している。本資料の両側面の上端敲打による若干の凹み部が見受けられる。大型石斧の頭部および刃部を欠失するだけのものかもしれないが、破片の下端部破損面に若干の滑らかな部分が見受けられるのでここに示した。



第50図 凹み石：13・14、石皿：15・16



第51図 用途不明

ナ. 円盤状製品

本遺跡出土の円盤上製品は25点であった。器類を転用したものがほとんどで、中でも沖縄産の無釉焼き締め陶器が9点と多く得られている。器類以外の素材としては赤瓦を使用したもののが3点の出土であった。出土状況は第10表に示す通りである。

これまでの類例資料などをみると、本製品の持つ機能的な面にたいしては大きさ及び重量の持つ意味が特に注意されるものと考えられる。得られた資料を大きさの面から下記のように分類してみた。

A類一直径が60mm以上の大型のもの

B類一直径が40mm以上60mm以下の中型のもの

C類一直径が40mm以下の小型のもの

以上の3類で量的にはA類が6点、B類が11点、C類が8点となっている。

これを素材と利用部位からみるとA類は青磁碗の高台部を利用したものが2点、沖縄産施釉陶器の碗の高台部を利用したものが1点、無釉焼き締め陶器の胴部を利用したものが2点、底面部利用のものが1点である。

B類は青磁碗・皿の高台部を使用したものがそれぞれ1点、赤瓦を用いたものが2点、他は沖縄産の無釉焼き締め陶器の胴部を使用している。C類は白磁底面部を利用したものが1点、沖縄産施釉陶器小碗の高台部利用のものが1点、胴部のものが1点、赤瓦が1点、他は無釉焼き締め陶器の胴部が使用されている。

これらの状況からすると、それぞれの大きさのものが求められたものかと考えられる。制作

第10表 円盤状製品出土一覧

地図番号	類	素	材	部位	大きさ(mm)	重さ(g)	出土層位
第 52 図 1	A	青磁碗		高台部	84.5×—	95	第 4 層
〃 2	A	青磁碗		高台部	65.7×60.5	110	第 3 層
〃 3	A	沖縄産施釉陶器碗		高台部	72.2×69.4	75	第 2 層
〃 4	A	無釉焼き締め 壺		胴 部	70.1×67.7	85	表 採
〃 5	A	〃		〃	62.9×59.1	60	第 3 层
〃 6	A	〃		底面部	68.3×61.8	90	第 5 层
〃 7	B	青磁皿		高台部	56.1×55.8	50	第 4 層
〃 8	B	青磁碗		高台部	58.4×54.2	60	第 4 層
〃 9	B	無釉焼き締め 壺		胴 部	50.2×50.2	40	第 3 层
〃 10	B	〃		胴 部	44.9×43.8	30	第 2 层
〃 11	B	瓦		—	44.3×42.4	30	第 3 层
〃 12	B	瓦		—	45.8×45.4	35	第 3 层
第 53 図 13	B	無釉焼き締め すり鉢		胴 部	45.2×40.2	20	第 2 层
〃 14	B	〃		胴 部	43.2×38.7	35	第 3 层
〃 15	B	〃		胴 部	44.0×42.7	30	第 3 层
〃 16	B	〃	すり鉢	胴 部	40.6×35.9	25	第 3 层
〃 17	B	〃	すり鉢	胴 部	40.4×38.7	20	第 2 层
〃 18	C	〃	壺	胴 部	38.8×34.0	20	第 3 层
〃 19	C	瓦		—	36.3×33.6	20	第 3 层
〃 20	C	沖縄産施釉陶器小碗		高台部	35.8×33.7	15	第 3 层
〃 21	C	白磁小瓶		底面部	34.0×33.0	10	第 3 层
〃 22	C	沖縄産白釉陶器		胴 部	37.6×33.7	10	第 2 层
〃 23	C	無釉焼き締め 壺		胴 部	36.2×32.9	10	第 3 层
〃 24	C	〃	壺	胴 部	35.0×33.2	20	第 3 层
〃 25	C	〃	すり鉢	胴 部	32.0×28.0	10	第 2 层

方法については他遺跡の類例資料と同じよう、表裏からの細かい打削調整により形状を整えている。しかし、第52図6・第53図19のように粗い調整段階のものも見受けられる。使用痕などについては判然としない。第52図11・12及び第53図25は摩耗しており、割れ面が滑らかになっている。

本製品の用途については様々な説があるものの、これまでの報告（註1）や論文（註2）などで指摘されているような遊戯具としての可能性が高いものと考えられる。

A類は第52図1～6に示すもので、手のひらの中で使用するには重い感じがし、投げたり蹴ったりという用い方が適当かと考えられる。C類は第53図18～25に示すもので、机上あるいは盤上での使用などが考えられる。B類は第52図7～12、第53図13～17で、使う場合はどちらでも可能という中間的なものである。

註1 「首里城跡・歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査」沖縄県文化財調査報告書第88集 沖縄県教育委員会 昭和63年3月

註2 上原静「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『談谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 談谷村教育委員会・歴史民俗資料館編 1986年

ラ、煙管

完形に近いものや著しく破損しているものなど7点得られている。ほとんど雁首の資料で、吸い口の資料は1点だけ得られている。雁首の資料は古我地原内古墓（註1）の報告を参考にすれば、柱状形とパイプ形のものが得られている。前者の形状を示すものは1点だけで、他は後者に属する。また、材質からみると柱状形のものは石製で、パイプ形のものは磁器質、陶質および青銅製のものが見られる。以下に簡記する。

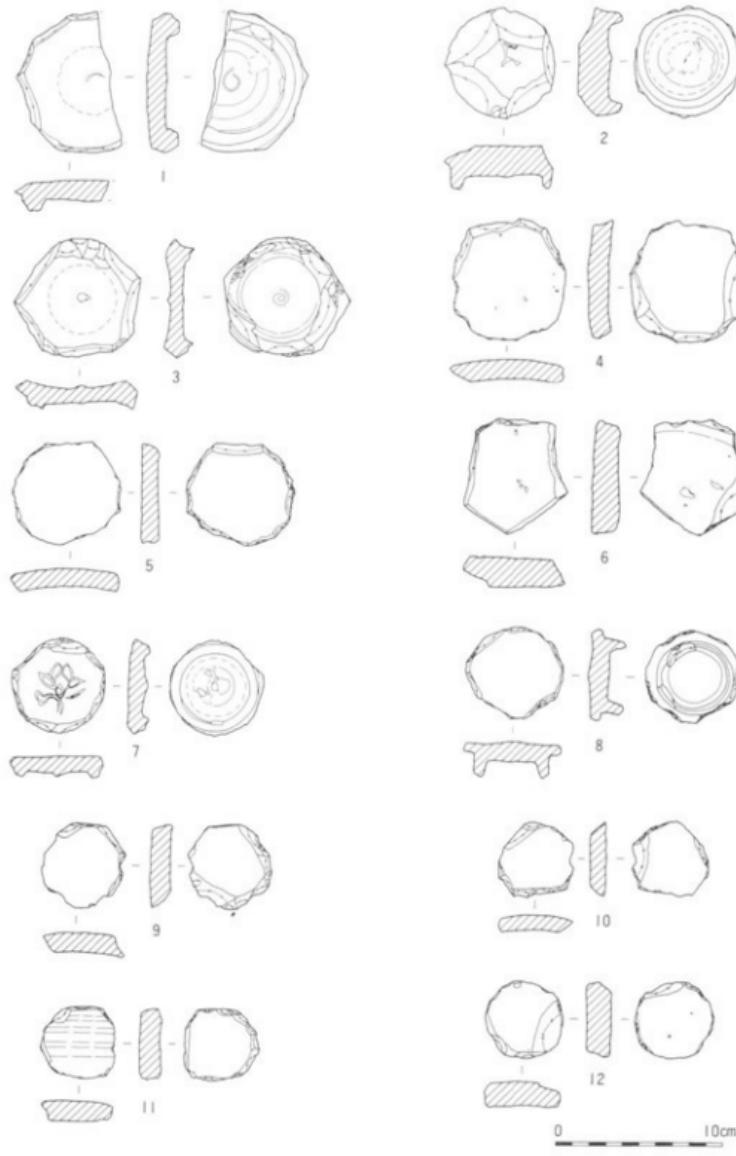
①柱状形

第54図1に示す1点だけ得られている。火皿部の上端や羅字接続部の周辺などが破損しているものの、全体的な形状が推測できるものである。上面観はほぼ円形状を呈し、火皿部の方へやや広くなる。表面は全体的に鉄分が付着しており、状況は判然としない。

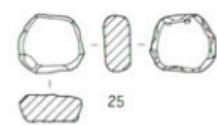
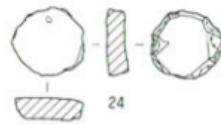
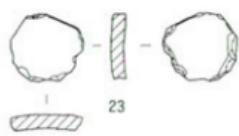
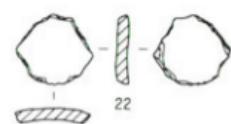
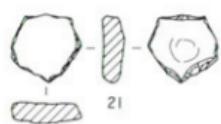
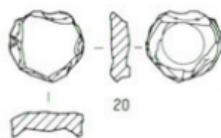
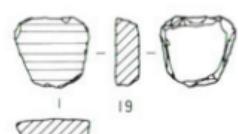
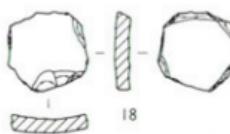
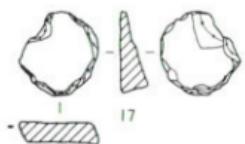
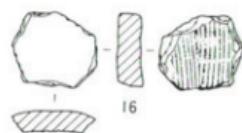
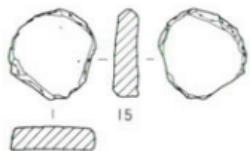
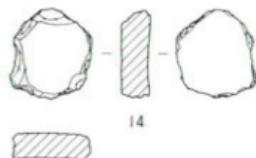
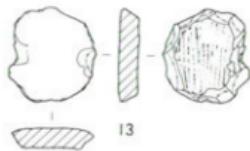
②パイプ形

第54図2～7に示す6点である。7だけが吸い口の資料で、他は雁首の資料である。材質からみると、前述したとおり磁器質、陶質、青銅製の3種見受けられる。

2は磁器質のものである。丸く膨らみを持ち、比較的短くつくっているため、ズングリとした感じのものである。丸く膨らんだ部分に羅字と同一方向への沈線が、ほぼ等間隔で密に施されている。縁がかった釉を全体に施すが、羅字接続部の周りは施釉後削っている。接続面は無釉。火皿部の周辺では細かな貫入が見受けられる。素地は白色のやや細かいものである。



第52図 円盤状製品 A類：1～6、B類7～12



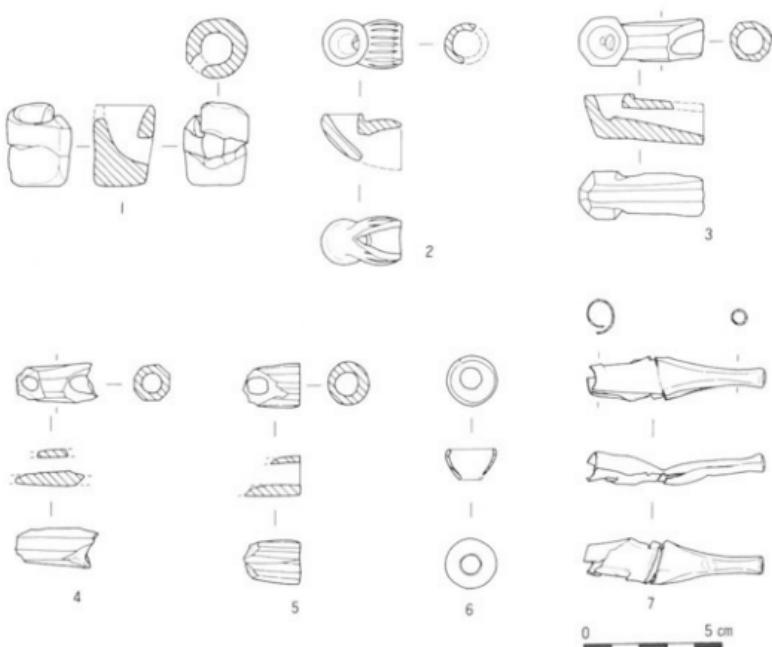
0 10cm

第53図 円盤状製品 B類：13～17、C類：18～25

3～5は陶質のものである。3は全体形の窺えるものであるが、4・5は破損が著しく全形は不明である。3は火皿部の上面観および羅字接続部を8角形に整形している。全体に自然釉がかかり、光沢を有す。数ヶ所に焼成の際の溶着物が認められる。羅字接続部の破損面をみると胎土は細かく、暗茶褐色を呈す。4は形状や胎土などの特徴が3に類似するものである。5は羅字接続部の部分が残るものである。細かい削りにより全体を調整し、円形状に仕上げている。胎土は細かく、茶褐色を呈す。

6・7は青銅製のものである。6は火皿部だけの資料で、上端部が内側へ折れ曲がるようなつくりとなっている。7は唯一の吸い口の資料である。全体形は窺えるものの、中央付近で折れ曲がっている。

註 「古我地原内古墓」—沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)— 沖縄県文化財調査報告書第85集 沖縄県教育委員会 1987年12月



第54図 煙管 柱状形：1、パイプ形（磁器製：2、陶製：3～5、青銅製：6・7）

ン. 鉄製品

第56図8に示す1点だけである。著しく鏽化が進み、一枚一枚板状に剥がれるような感じでひび割れが認められる。図の右側から左側へやや幅が広くなる。現資料からすると刀子様のものが想定されるが、先端部の破損や鏽の状況などにより明確にし得ない。現存長6.4cm、最大幅1.4cm、厚さは判然としない。第4層から出土している。

ウ. 青銅製品

簪が4点、鉗が1点確認されており、第56図に示した。2~5に示すものは簪の資料で、4は竿の中央付近から先端にかけて欠失している。これら資料の頭部形状をみるとほぼ円形のスプーン状を呈すもの（2・3・5）、細い楕円形でみみかき状を呈すもの（4）の2種みられる。後者のものは鏽の付着が著しく全体的な状況は判然としない。

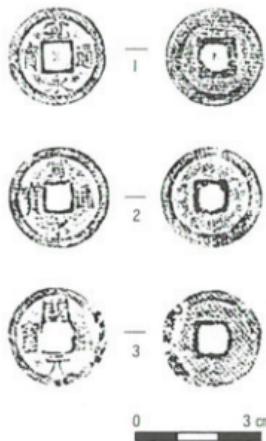
前者の3点をみると首部と竿部が六角形に面取りされ、その境目からそれぞれの稜は互い違いになっている。5は先端の近くが扁平に整形され、3は先端部が若干太くなっている。いずれも先端は尖る。長さはそれぞれ異なっており、2が一番長く全長が約13.5cmで、頭部から首部までの長さが約4.2cmである。3は頭部から首部までの長さは2とほぼ同じであるが、竿部が短くなり全長は11mm前後である。5は最も短く全長が8cm程度で、頭部から首部までの長さが約3cmである。2・4は第4層、3は表採、5は第3層下部の出土である。

7に示すものは鉗である。鎧の帶止め金具とされるもので、中央部分に径7mmの小孔が2個穿たれている。表面の状況については判然としない。若干湾曲している。第3層の出土。

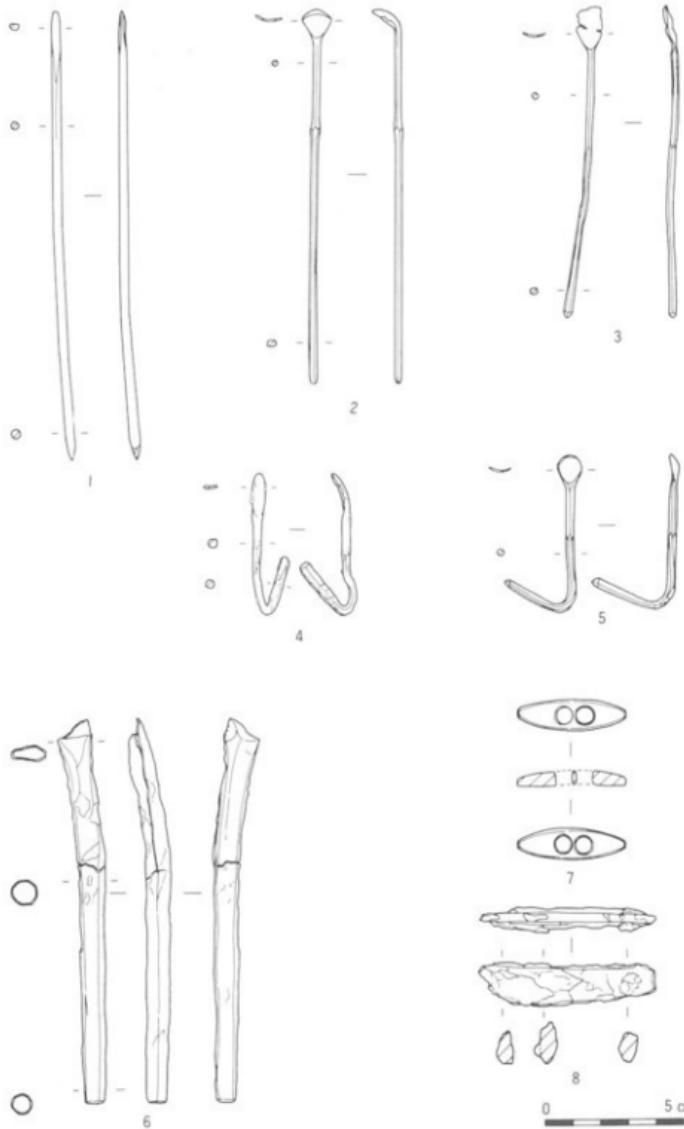
1に示すものは長さ16cm、径が約3mmの棒状のものである。上端は平たく整形され、下端は尖る。用途については判然としない。第3層下部の出土である。6は青銅製のキセルで、火皿部を欠失している。吸い口部の径は4mmで、中央部の径が8mmを測る。第3層の出土。

ヰ. 古銭

4枚得られている。寛永通宝（1636年初鋤）3枚と開元通宝（621年初鋤）1枚である。前者の1枚だけが半次品で、他の3枚は完形品である。いずれも文字ははっきりと読める。



第55図 古銭



第56図 青銅製品：1～7、鉄製品：8

ノ、貝類

本遺跡から出土した貝類は、25科56種類であった。土壤の性質上貝類の保存状態が悪く土中より取り上げてもすぐにぼろぼろに崩れる個体や、遺物の処理中に崩れてしまうものなどが多く全体に破片が多かった。

二枚貝に比較して巻貝類が圧倒的に多く、中でも外洋・珊瑚礁域の潮間帯中・下部（I・2・c）のマガキガイが全体の46.5%と他を大きく凌駕している。マガキガイに次いで、淡水産のカワニナが多く9.5%となっており、マガキガイとカワニナの2種を合わせて全体の50%をこえる数量となっている。

これらの貝類は遺跡の西側に広がる北谷前ース浜を中心として採集されたと考えられる。また、淡水産のカワニナが出土しているのは遺跡周辺が戦前まで湿地帯（北谷ターブックワアの一部となっており遺跡南側にカーなどもあった）であったことや、遺跡自体も泥湿地であったことなどから考え合わすと食用に費したものか疑問がのこる。

二枚貝については、特に破片が多く数量的に現すことの出来ない個体の方が多かった。

第11表の説明 生殖場所は以下の類系によった。

I : 外洋・珊瑚礁域	0 : 潮間帯上部 (I ではノッチ、III ではマングローブ林内)	a : 岩盤
II : 内湾・転石域	1 : 潮間帯中・下部	b : 転石
III : 河口干潟・マングローブ域	2 : 亜潮間帯上縁部 3 : 干潮 (I にのみ適応) 4 : 磯斜面	c : 泥、砂、礫底 d : マングローブ植物上 e : 河川礫底
IV : 淡水域	5 : 止水 6 : 流水	
V : 陸域	7 : 林内 8 : 林内・林縁部 9 : 林縁部 10 : 海浜部	

第11表 貝類出土状況

科	種	表	採	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	計	備考				
		定形 貝片	變形 貝片	定形 貝片	變形 貝片	定形 貝片	變形 貝片	定形 貝片						
①リュウテン	チョウセンサザエ				▲			▲	▲	I・3・c				
②	チュウセンサザエの葉			1					1	#				
③	ヤコウガイ				▲			▲	▲	I・4・a				
④ニシキウズ	サラサバテイ	1	▲	3	▲	2	5	▲	1	▲				
⑤	ニシキウズ					▲			▲	I・2・a				
⑥トウガタカワニナ	トウガタカワニナ	2		5			1	8		—				
⑦	ヌメカワニナ	1	▲	2		6		1	10	—				
⑧ウミニナ	イボウミニナ					1			1	III・I・c				
⑨オニノツノガイ	オニノツノガイ	1			1	4		▲	6	▲ I・2・c				
⑩	クワノミカニモリ	2	▲	4	8	2		1	1	▲ 18				
⑪	コダツノブエ			2		1		2	6	I・1・a				
⑫ソデガイ	オハグロガイ				1	3	1		5	I・2・c				
⑬	クジマガイ	2		▲	1	▲		1	4	▲ I・2・c				
⑭	ネジマガイ					1			1	I・2・c				
⑮	マガキガイ	1	10	5	10	▲ 5	87	1	4	1	3	15	▲ I・2・c	
⑯	ムカシモト					1		1	2		I・2・c			
⑰タマガイ	イトミガイ	1							1		I・2・a			
⑱	ヘソアキミガイ							1	1		I・2・a			
⑲タカラガイ	ハナビラダカラ	1			2				3		I・1・a			
⑳	ヒメホシダカラ					▲	1		1		I・2・c			
㉑	ホシキヌタ					1			1		I・2・a			
㉒オキニシオキニン						1	▲		1		I・3・a			
㉓	イトマキボライトマキボラ	2	1		1				4		I・2・a			
㉔イモガイ	キヌカツギ	1				▲			1		I・2・a			
㉕	クロミナシ					▲			▲		I・2・a			
㉖	コマグラライモ					1			1		I・2・a			
㉗	サヤガタイモ					1			1		I・2・a			
㉘	ヤナギシボリイモ	1							1		I・2・a			
㉙ナツメガイ	ナツメガイ					1			1		I・2・c			
㉚	イボアヤカワニナ					1			1		—			
㉛	カワニナ	1	3		16	4			2	26	IV・5			
計	巻	目	2	1	18	▲ 19	18	▲ 52	113	▲ 2	4	▲ 8	8	165
㉜陸産貝						1			1	▲ 2	▲	V 8		
㉝	シリマリマイマイ					1			1		#	—		
㉞	パンダナマイマイ			1				1	12	▲ 14	▲	#	—	
㉟	マルタニシ	1							1		#	—		
計	陸産貝		1	1	1	1			2	12	▲ 18		#	—
㉟フネガイエガイ								▲	▲		I・2・a			
㉟	リュウキュウサルボウ	A	▲			▲		▲	▲		H・2・c			
㉟	シモクラオリカシナオリガイ?								%		—			
㉟	ウミギクタウミギク科不明	Y	▲	Y	▲	▲		▲	▲		I・2・a			
㉟	リミヒメンガイ?								%		I・2・a			
㉟	キクザルヒレインコ?							▲	▲		I・2・a			
㉟	リクケイトウガイ								%		I・2・a			
㉟	ザルガイカワラガイ							▲	▲		H・2・c			
㉟	リュウキュウザルガイ								▲		I・2・c			
㉟	イタボガイニセマガイ								%		I・2・a			
㉟	ツキガイウラツキガイ								▲		I・2・a			
㉟	シャコガイシヤゴウ								%		I・2・c			
㉟	リシラナミ								▲		I・2・a			
㉟	ヒメジヤコ								%		I・2・a			
㉟	ヒレジヤコ	▲	▲						▲	▲	I・2・c			
㉟	マルスダレガイアラスジケマンガイ								%		IV・1・c			
㉟	アラヌメガイ								▲		I・3・c			
㉟	ヌメガイ								▲		H・2・c			
㉟	ツコウガイヒメニッコウガイ								%		H・1・c			
㉟	リュウキュウラトリ								▲		H・1・c			
㉟	スマガイスマガイ								%		H・1・c			
計	2校貝	目	%	▲ %	▲ %	▲ %	▲ %	▲ %	9%	▲				

オ. 脊椎動物遺体

今回の調査で得られたものはそれほど多くない。第2～第4層で多く出土しており、大半は近世の時期のものかと考えられる。第5層（グスク期）からはウシの出土が目立つ。得られた種は下表に示した通りである。今回の出土状況の大きな特徴として魚類や海ガメ類などがほとんど見受けられることがあげられよう。以下、今回得られた資料の概要について略述する。

出土した脊椎動物遺体種別一覧

I : 鳥 綱	I. Class Aves
キ ジ 目	Order Calliformes
キ ジ 科	Family Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus g. var. domestica</i>
II : 哺乳綱	II. Class Mammalia
a. 食 肉 目	a. Order Carnivora
イヌ科	Canidae
イ ヌ	<i>Canis familiaris</i>
ネコ科	Felidae
ネ コ	<i>Felis catus</i>
b. 海 牛 目	b. Order Sirennia
ジュゴン科	Family Dugongidae
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
c. 奇 跡 目	c. Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウ マ	<i>Equus caballus</i>
d. 偶 跡 目	d. Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
リュウキュウイノシシ	<i>Suslemcomystax riukiuensis</i>
ブタ	<i>Sus sp.</i>
ウシ科	Family Bovidae
ウ シ	<i>Bos taurus</i>
ヤギ	<i>Capra hircus</i>

1. 鳥類

ニワトリだけが確認されている。部位は第12表に示す通りで、残存状態はよくない。第3層以上から主に得られており、第5層の1点は上層から紛れ込んだものかと考えられる。

第12表 ニワトリ出土状況

部 位	右・左	層 序	表 採			第 1 层			第 3 层			第 5 层			合 計		
			右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
上 腕 骨	骨	体									1						1
大 腿 骨	遠 位	端									1						1
脛 骨							1										1
	骨	体									1						1
	骨 体	遠 位 部												1			1
中 足 骨	近 位 部	部	1													1	
破 片						1		1									2
合	計		1	1		1	1		3			1		1	5	2	

2. 哺乳類

量的にはそれほど多くない。ウシ、イノシシ、ヤギ、ウマ、イヌ、ブタ、ヒト、ネコ、ジュゴンなどが見受けられる。その中ではウシ、イノシシ、ヤギ、ウマなど割と大きなものが多く得られ、他は僅少である。

ヒ ト：第2層から歯が1点、第3層から上腕骨遠位部の資料が1点得られている。

イ ヌ：第4層から肩甲骨と脛骨が1点づつ、第5層から椎体が1点得られている。その他下頸骨が1点表採されている。

第13表 イヌ出土状況

部 位	右・左	層 序	表 採			第 4 层			第 5 层			合 計			
			右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	
下 頸 骨				1										1	
椎 体	環 椎														1
肩 甲 骨	遠 位 端							1							1
脛 骨								1							1
合	計		1			1	1					1	2	1	1

ネ コ：上腕骨が1点だけ第3層から得られている。

ジュゴン：肋骨が第5層から1点出土している。

ウ マ：量的には少ないが、どの層からも出土している。部位別の出土状況は第14表に示した。層位的には第4層まででほとんど得られており、近世以降の時期のものが多いとと考えられる。

イノシシ：第3層・第4層から多く得られている。ほとんど骨体や近位・遠位部の資料である。得られた歯の資料をみると若い個体のものようである。

ブ タ：第3層から環椎が1点、第2層から距骨が1点得られている。

ウシ：今回得られたもので最も多い。特に他種の資料に比べて第5層からの出土が目につく。歯の破片が半分以上である。四肢骨は各部位が見受けられるが、どの部位の資料も1～数点の出土である。骨体や近位・遠位部の資料が主である。歯の資料をみると比較的年齢幅がみられるようである。

ヤギ：ウシに次いで多く得られている。四肢骨は骨端のはずれる資料が多い。層位的には第2・第3層で約75%の出土である。歯の資料をみると本種も比較的年齢幅のある状況を示している。

第14表 ウマ出土状況

部位	右・左 層序		表 採		第1層		第2層		第3層		第4層		第5層		合 計			
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
下顎骨	下顎				1											1		
歯	切歯		2		1		4										7	
肩甲骨	遠位端											1					1	
橈骨	骨体											1					1	
	遠位端											1		2			3	
踵骨							1										1	
中手中足骨	遠位端							1					1				2	
指骨	中節骨												1				1	
合計			0	0	2	0	1	1	1	0	5	1	0	2	0	2	2	10

第15表 イノシシ出土状況

部位	層序		表 採		第1層		第2層		第3層		第4層		第5層		合 計			
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
頭蓋骨	頭頂骨												1				1	
	後頭骨												1				1	
下顎骨	I ₁					1							1			1	1	
犬歯	♂				1												1	
	i ₁ , dm _{3,4}								1								1	
	P ₃												1				1	
	P _{3+,4}								1								1	
	M _{1,2}											1					1	
	M ₂										1	(2)				1	(2)	
肋骨							3			3						1	7	
肩甲骨	遠位端												1				1	
上腕骨	遠位部						1										1	
	骨体							1	1								1	1
橈骨	骨体								1								1	
寛骨	近位上部									1							1	
大腿骨	近位骨端のみ				1								1	1			1	
	骨体				1				1	1	1			1		4	1	
胫骨	骨体				2				2		1					3	2	
中手・中足骨	骨体													1			1	
	破片			1		4					6		1		1		13	
指骨	基節骨			1													1	
合計			2	2	4	7	1	1	6	2	9	5	5	4	2	2	16	12

第16表 ウシ出土状況

部位	層序	表採	第1層		第2層		第3層		第4層		第5層		合計						
			右・左	右左不明	右・左不明	右左不明													
上顎骨	P ⁴			1						1			2						
	M ¹										1		1						
	M ²									1			1						
下顎骨	切歯						1	1					1	1					
	dm ₄								1				1						
	M ₁									1			1						
	M ₂				1	1				1	1	1	2	3					
	M ₃						1						1						
	遠位部					1							1	1					
	下顎枝								1				1						
歯	破片			2				3		3		11		19					
椎体							1	1					2						
	仙骨												1						
肋骨	破片							2					2						
肩甲骨						1							1						
上腕骨	近位部								2		1		3						
中手骨			1								1		1						
大腿骨	近位骨端									1			1						
	近位部		1										1						
	遠位部								1		1		1						
脛骨	遠位端			1									1						
	骨體				1	1							1	1					
踵骨								1					1						
距骨			1					1					2						
中足骨	近位端破片							1					1						
指骨	中節骨							1					1						
	末節骨						1						1						
合計			3	1	2	5	2	2	3	8	3	5	3	4	4	11	15	17	28

第17表 ヤギ出土状況

部位	層序	表採	第1層		第2層		第3層		第4層		第5層		合計		
			右・左	右左不明	右・左不明	右左不明									
上顎骨	dm ⁴						1						1		
	P ⁴							1					1		
	M ¹									1			1		
	M ²			1									1		
	M ³							1					1		
下顎骨	dm _{2, 3, 4}							1					1		
	dm _{2, 3, 4} M ₁									1			1		
	M ₃		1	1	1							2	1		
肋骨	遠位、脊端はずれ骨					1							1		
肩甲骨	遠位、脊端はずれ骨						1						1		
上腕骨	遠位遠位、脊端はずれ骨						1						1		
	遠位端							1					1		
	遠位、脊端はずれ骨					1	1	1					1	2	
尺橈骨	近位、脊端はずれ骨					1	1	1					1	1	
	近位						1						1		
	近位、脊端はずれ骨						1	1	1				1	2	
	遠位、脊端はずれ骨							1					1		
中手骨			1	1									1	1	
大脚骨	近位、遠位、脊端はずれ骨									1			1		
	近位												1		
脛骨	骨體				1	1		1					1	2	
中足骨					1	1	2						3		
踵骨						1				1			2	1	
指骨	基節骨			3		1							4		
合計			1	1	4	6	7	4	9	7	1	3	19	17	8

第5章 調査の成果と今後の課題

今回の調査は米軍の隊舎建設に係るもので、事前調査により建設予定地の南半部に遺物包含層が確認され、発掘調査はこの部分を対象とした。調査の進展に伴い遺物包含層が予想以上に厚く堆積していること、赤土の地山面にピット群が確認されるなどの成果により調査期間を予定より若干延長して実施した。その成果については前章までに述べたとおりで、ここではその成果についてまとめるとともに若干の問題点についてふれてみたい。

まず最初に遺跡について考えてみたい。本遺跡一帯は南東側にあるトゥンヤマを中心に形成された集落（フルヤシチ）があったところとされる場所で、事前の試掘調査で今回の調査対象区まで遺跡の延びが確認され、本調査によりその裏付けがなされた。つまり、今回の調査区はトゥンヤマ北麓に形成された集落の一部になると考えられる。堆積層の状況からすると遺跡のはずれではなく、周辺部へさらに広がるものと思われる。

発掘調査の結果、地山面及び堆積層が南西側への傾斜を示すことから本遺跡は丘陵の中腹あたりに形成されたものと考えられた。最下層のグスク期の層が傾斜に沿って南西側へ厚く堆積しており、さらに調査区外へ延びている。グスク期の層はトゥンヤマの西側付近に広がるものと想定され、最初の集落はその一帯に形成されていたかと推察される。今回の調査区南側にはその時期の遺構検出の可能性が考えられる。

その次の時期はグスクの時期の層を覆うようにみられ、その間には両時期の遺物が混ざり合う層がある。グスク期のあとに近世の時期の集落が営まれたことを示すものである。グスク期の層は上方から流れ込んだ堆積層とみられるが、近世の層のものは地山面にピット群が検出されなんらかの建物のあったことが判明している（第8図・第9図）。

北側（上段）と南側（下段）に分けられ、上段は西側に、下段は東側にピットが集中するようである。これらピット群の中で平面形が把握できたものではなく、建物の形状や規模などは明確にできなかった。また、ピットの中には遺物（沖縄産陶器や陶質土器が主）の出土するものや方形状に掘り込まれたもの、円形状のもの、礫がつまたものなどが見受けられた。上段はそのままの地盤であるが、下段は斜面を削って平場造成しており、段になる部分には石灰岩礫を配し土留めとしている（第8図）。

A-9グリットで検出された溝状遺構もこの時期のものかと考えられ、それからすると第5層を掘り込んだピットの可能性も考えられるが、発掘中には特にそれと判るような状況はみられなかった。近世の層を覆って青灰色の耕作土がみられ、その上部は隊舎建設の際の造成層である。青灰色土の上面では空カンやビンなども出土している。

今回の発掘調査により確認できた堆積層は以上のようない状況であった。本遺跡の展開の様子

の一端が窺えたものと考えるが、詳細の部分の状況については今後の調査に委ねるところが多い。また、本遺跡の周辺には同じような時期の遺跡も多く(第1図)、これらの遺跡との関係も留意していかねばならない点であろう。

次に遺物についてみよう。第4章で述べたようにバラエティに富んだ内容である。外国産や本土産の陶磁器などからすると、13世紀前半頃から18・19世紀頃までの幅広い時期のものが得られている。しかし、遺物の全体的な状況から考えると、本遺跡が生活圏として定着してくるのは14世紀以降のようで、17・18世紀頃がピークにあったかと推察される。今回の調査により本遺跡一帯は、古い時期から集落のあったことが裏付けられた。

外国産の輸入陶磁器はほとんどが中国産のもので、青磁・白磁・染付・褐釉陶器・緑釉・三彩・瑠璃釉などが得られている。後三者は1点づつの出土であった。三彩の資料は小破片のものであるが、最近、豊見城村内から発見された水注(註1)や、阿波根古島遺跡(註2)などで報告され注目される資料となりつつある。瑠璃釉の資料は全形の窺える杯で、西表島の上村遺跡(註3)などに類例の報告がみられる。タイ産の鉄絵陶器が数点得られており、合子の資料が確認されている。比較的類例資料が多いもので、宮古の住屋遺跡(註4)などから報告されている。

青磁は碗・皿を主に盤・壺・瓶・香炉などの器種が得られている。割花文の碗や皿、鍋蓮弁文などの古手のものも若干見受けられるが、14世紀後半～15世紀頃のものが主体をなしている。白磁は碗・皿・杯・瓶の4器種が確認されている。後二者は僅少であった。玉縁口縁碗や口禿皿など古い時期のものも含まれるが、主流は17世紀頃のものである。染付は器種的には碗・鉢・皿・杯・合子・壺などが確認されている。碗が圧倒的に多く得られている。16世紀以降のものがほとんどで、特に17～18世紀のものが多い。

本土産のものは肥前系のものを中心に唐津系・伊万里系の焼き物が確認できた。これまで古我地原内古墓(註5)などのように墓およびその周辺からの採集例が多く、器種的にも瓶類や小杯などにかたよった状況であった。しかし、松田遺跡(註6)などの古島遺跡や国学・首里孔子廟跡(註7)のような生活圏の遺跡の調査により碗・皿・盤などの日用雑器類の報告も多くなり、17・18世紀頃にはかなり入り込んでいたことがつかめつつある。

須恵器は破片ばかりで、量的にも僅少であった。ほとんどカムイヤキ古窯跡(註8)からもたらされたものと考えられる。特に耳付きの胴部(第26図8)は注目される。また、第27図24は碗形になるかと考えられる。

沖縄産陶器は最も多く得られている。施釉陶器(上焼き)と無釉焼き締め陶器(荒焼き)が得られている。地元産の陶器であり早くから窯跡の分布状況や出土品の紹介などがなされている(註9)。しかし、考古学的に注目されてきたのはつい最近のことと、近世の遺跡の調査例が急増し、発掘資料も増えてきたことによる。特に県庁舎建設に伴う湧田古窯跡の調査は本格的な窯跡の調査として注目され、地元の陶器に目を向ける契機になった調査でもあった。

それ以後、生産地（窯跡）や消費地（古島遺跡など）の調査が相次ぎ、近世の時期の沖縄の様子がより細かく研究されるようになってきた。

土器はグスク系のものがほとんどであるが、若干貝塚時代後期系のものが含まれる。伊良波東遺跡（註10）やサーク原遺跡（註11）などでも同じような状況があり留意される。グスク系土器では滑石を塗布するものが注目される。我謝遺跡（註12）などで報告されているが、類例の少ないものである。滑石利用の面からも注意される資料である。

陶質土器は多く得られている。伊良波西遺跡（註13）や首里城跡（註14）などのほか古島遺跡からよく出土するもので、この時期の特徴的な遺物のひとつである。第44図に示すような鍋類が多いものの、鉢・火舎・急須など器種的にも豊富である。鍋は口縁部に施釉するものと無釉のものがあり、前者は後者よりやや小さめのものが多い傾向にあった。

滑石製石鍋の破片が若干得られており、石鍋がもたらされたものと考えられる。これらの破片には二次使用を考えた痕跡がみられるものもあり、注意されよう。石器は敲打器類がほとんどで、大きなものが目に付いた。円盤状製品は20点余りの出土で、特に目新しいことはみられなかった。他の製品は出土量が僅少であり、判然としない部分も残った。しかし、本遺跡の様子の一端を窺わせるような製品である。

以上、今回の調査の成果についてまとめるとともに、若干の問題点についても触れてきた。本遺跡の展開の状況や周辺の同じ様な時期の遺跡とどのように関わっていたのかなど判然としない部分も残った。米軍基地内にある遺跡の場合、旧来の環境が著しく変化しているところが多い。今後も場加の傾向にある基地内の諸開発に伴う調査における留意点のひとつといえよう。

註1 「豊見城村の遺跡」 豊見城村文化財調査報告書第3集 沖縄県豊見城村教育委員会 1988年3月

註2 「阿波根古島遺跡」 沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会 1990年3月

註3 「上村遺跡」 沖縄県文化財調査報告書第98集 沖縄県教育委員会 1991年3月

註4 「住居遺跡」 平良市文化財調査報告書第2集 沖縄県平良市教育委員会 1992年3月

註5 「古我地原内古原」 沖縄県文化財調査報告書第85集 沖縄県教育委員会 1987年12月

註6 「松田遺跡」 沖縄県文化財調査報告書第76集 沖縄県教育委員会 1986年3月

註7. 上原静・島袋洋「国宝・首里孔子廟跡の調査」「文化課紀要」第7号 沖縄県教育委員会文化課 1991年3月

註8 「カムイヤキ古墳跡群II」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会 1985年3月

註9 「國跡 沖縄の古宮」 やちむん会10周年記念 やちむん特別号 やちむん会 1979年

註10 「伊良波東遺跡」 豊見城村文化財調査報告書第2集 沖縄県豊見城村教育委員会 1987年

註11 「北谷町砂辺サーク原遺跡」 沖縄県文化財調査報告書第81集 沖縄県教育委員会 1987年3月

註12 「我謝遺跡」 西原町文化財調査報告書第5集 沖縄県西原町教育委員会 1983年

註13 「伊良波西遺跡」 豊見城村文化財調査報告書第1集 沖縄県豊見城村教育委員会 1986年3月

註14 「首里城跡」 沖縄県文化財調査報告書第88集 沖縄県教育委員会 昭和63年3月

図 版



図版1 発掘区近景（上：北東側より、下：北側より）



図版2 上：発掘区南東側のトゥンヤマ、下：発掘区から北谷城を望む



図版3 層序（上：A—8・9東壁、下：D—7～10西壁）



図版4 発掘風景



図版5 発掘風景



図版 6 作業風景



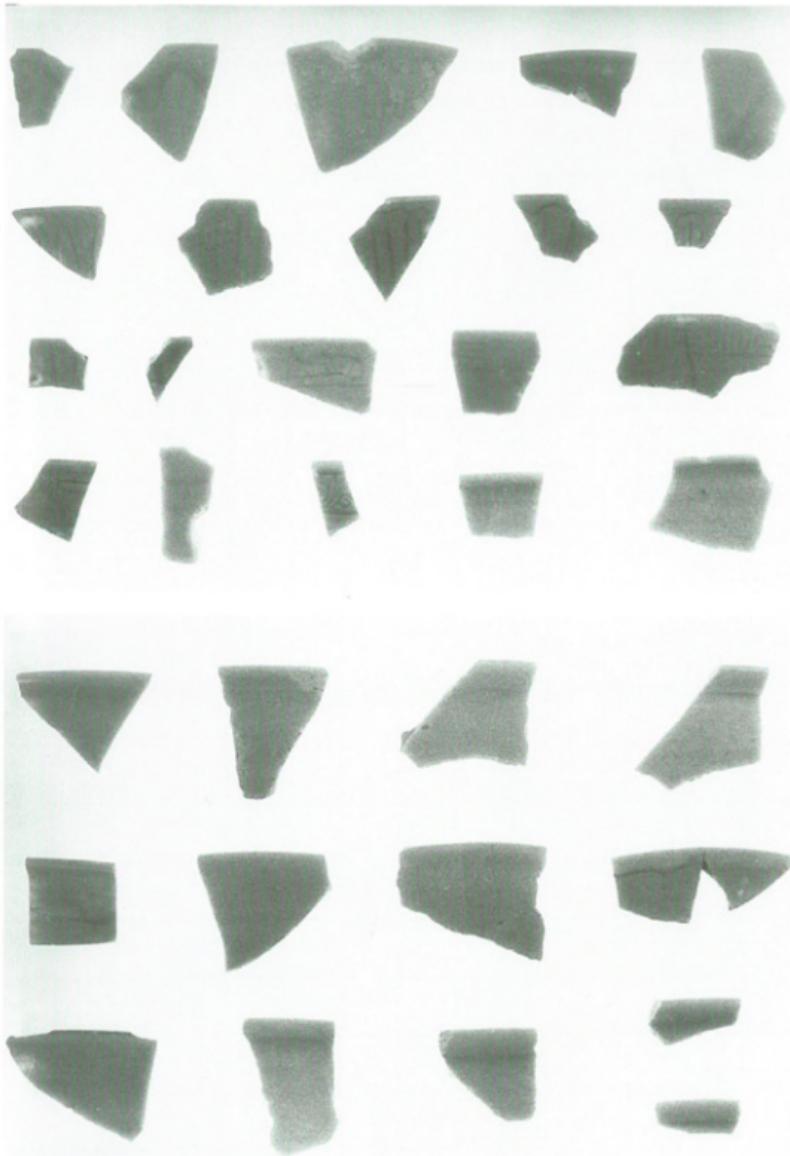
図版7 A・B-9 ライン検出の溝状遺構



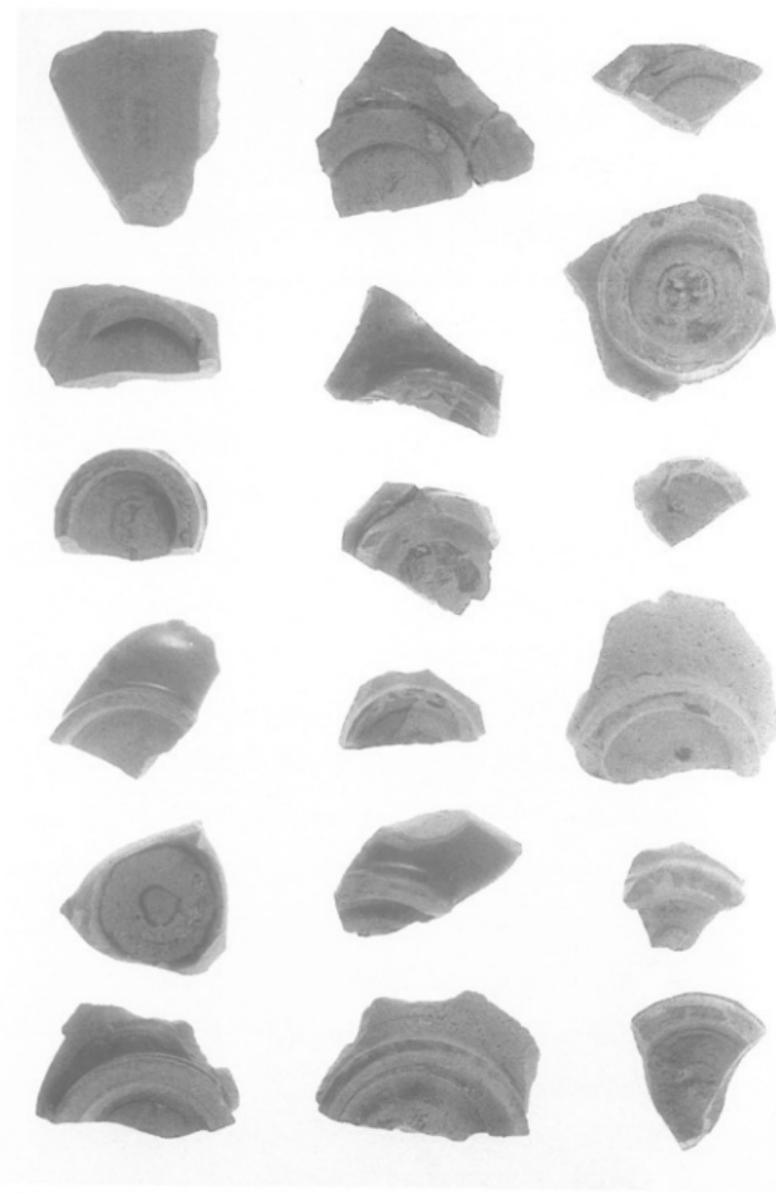
図版 8 上：ピット群と土留め石積み、下：土留め石積み



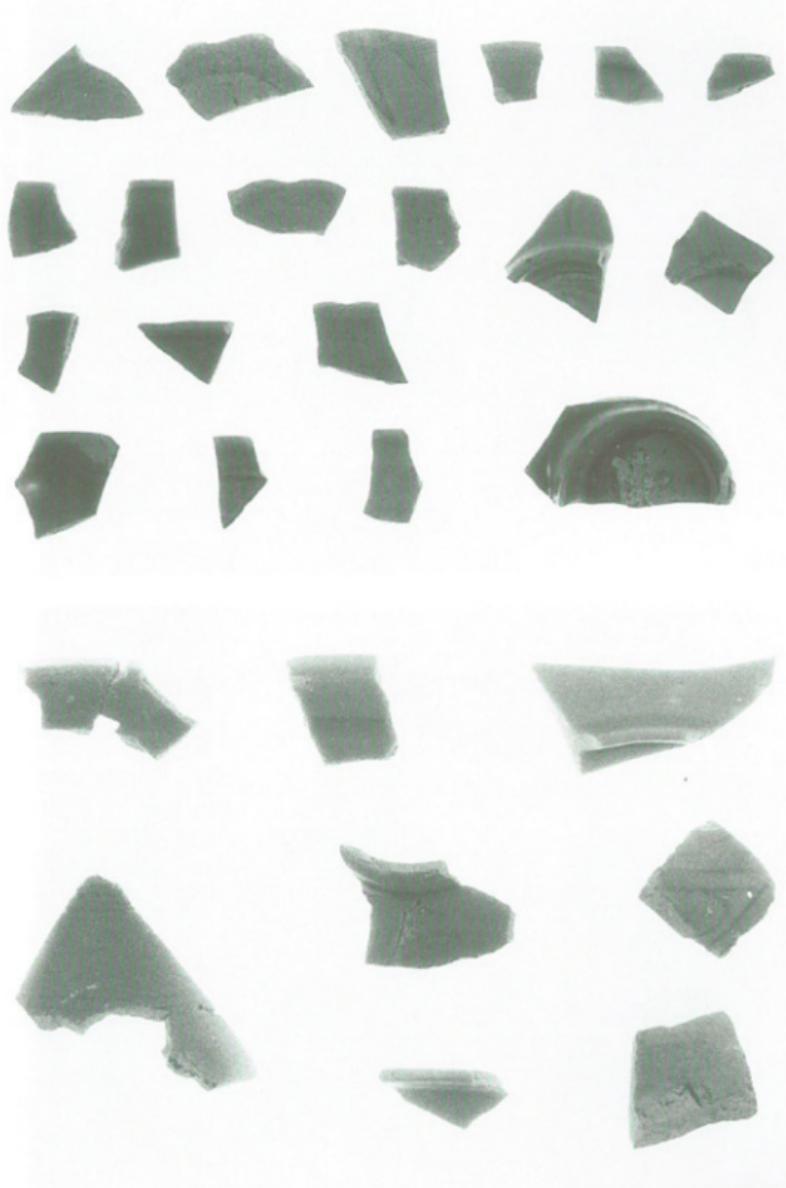
図版9 上：1～3ラインのピット群、下：6～8ラインのピット群



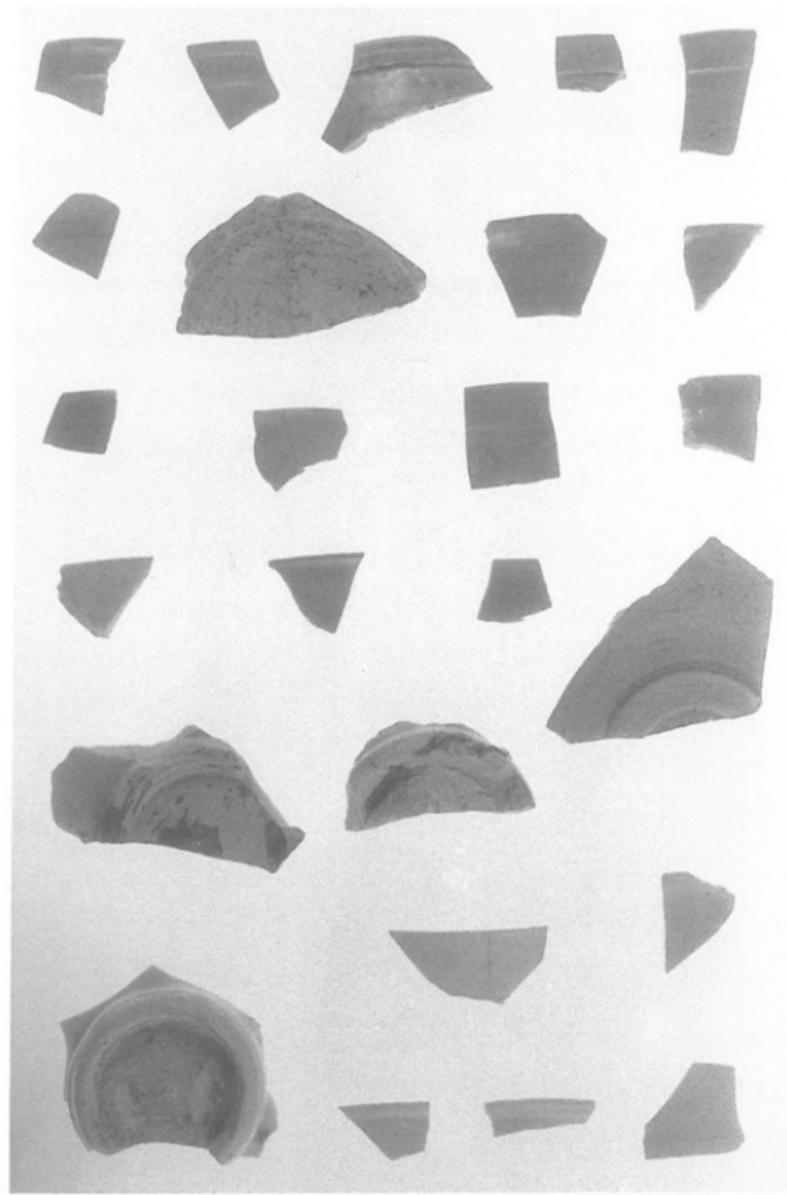
図版10 青磁碗（上：第1類～第4類、下：第4類～第6類）



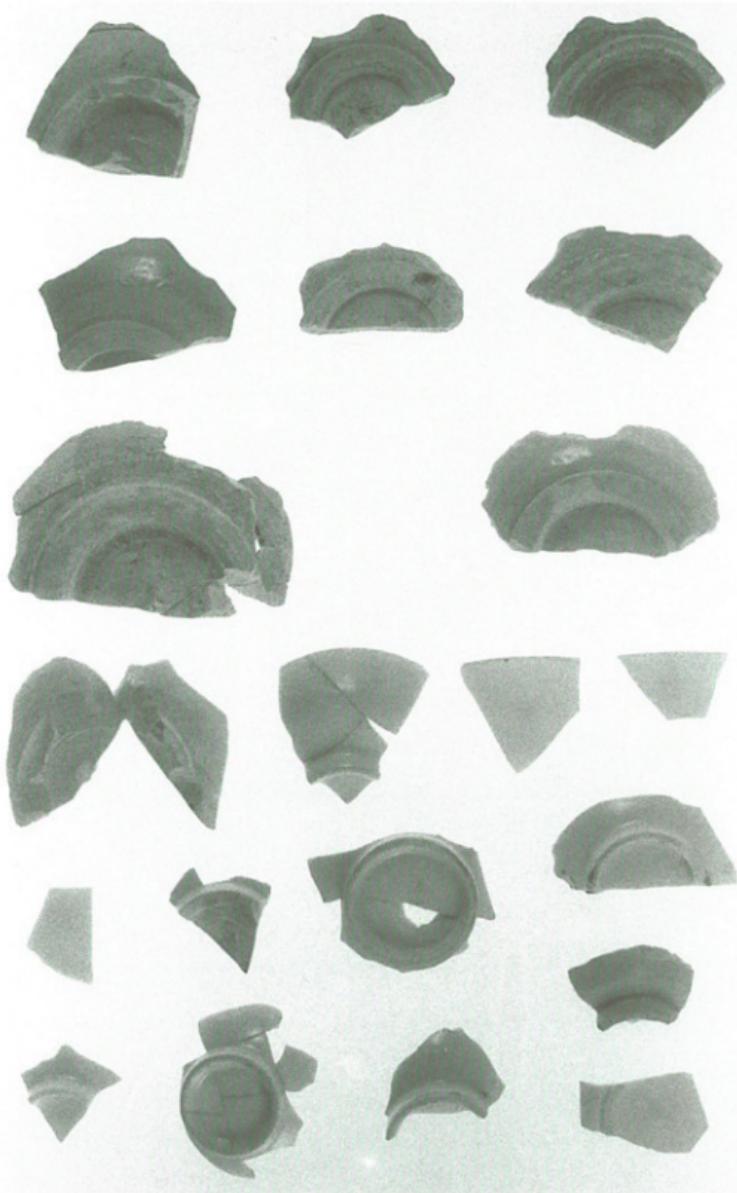
図版11 青磁碗 底部



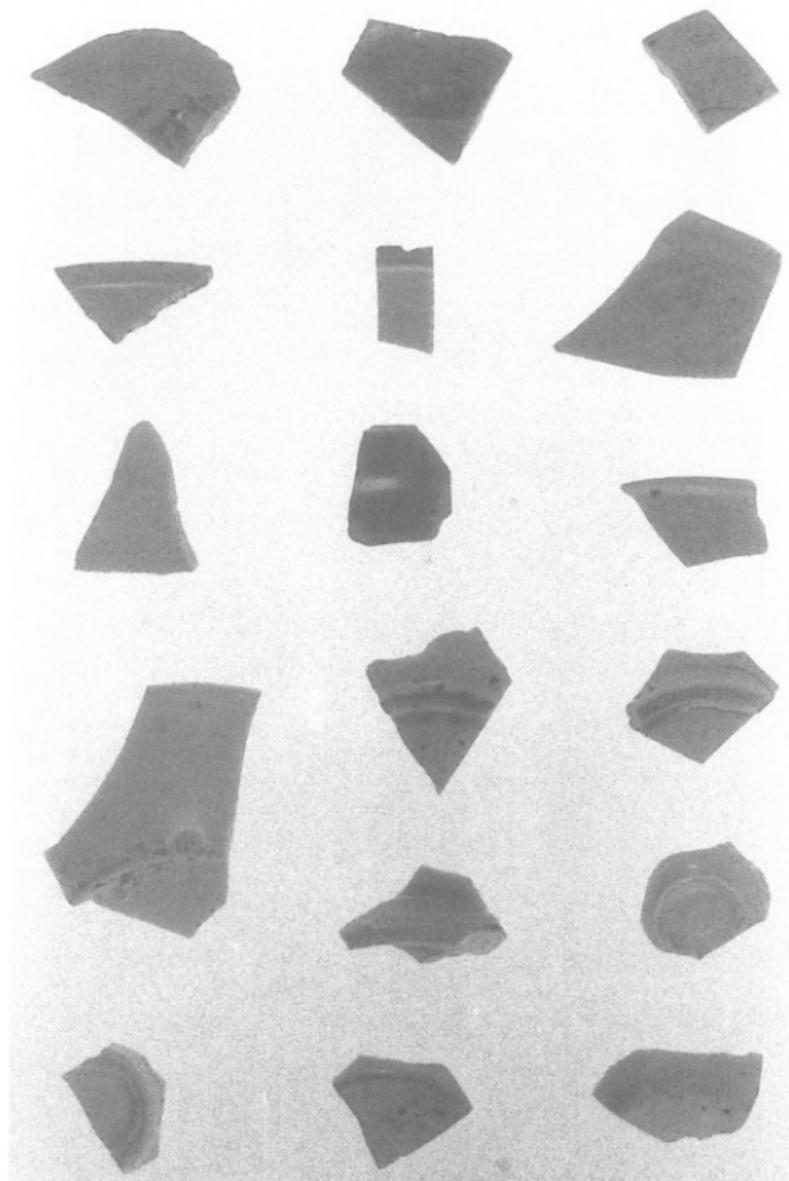
図版12 上：青磁皿、下：青磁盤・壺・香炉



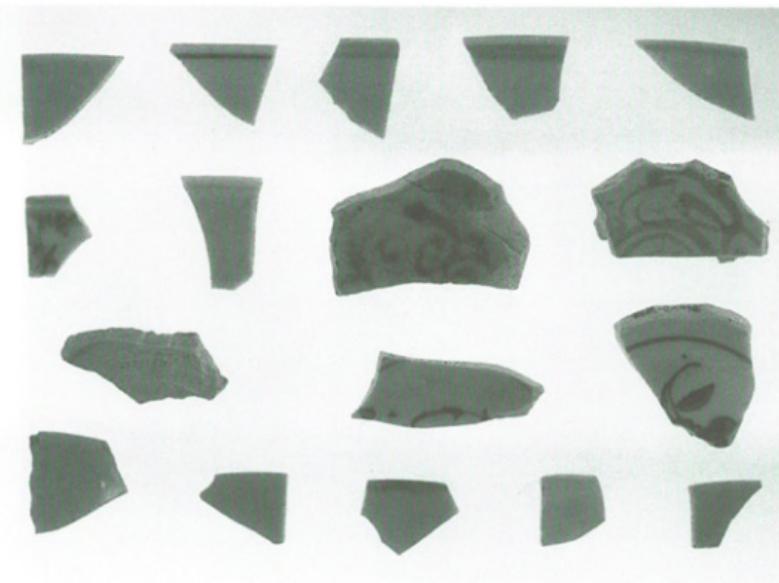
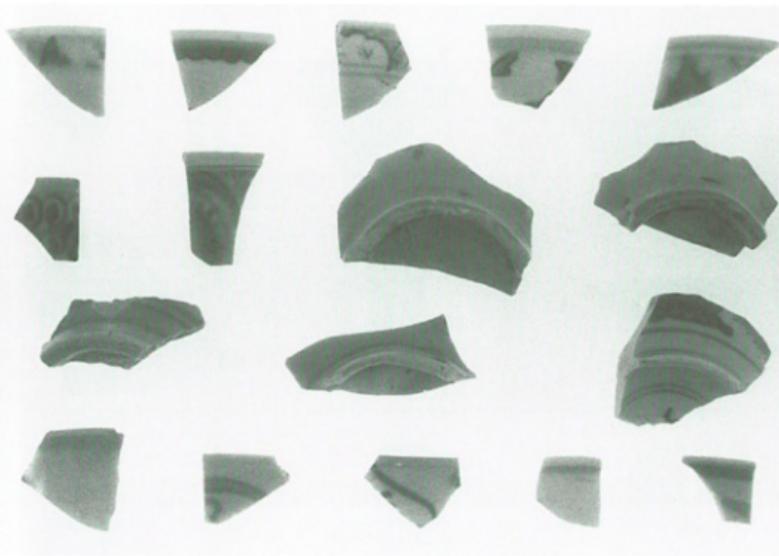
圖版13 白磁碗 (a、b、c)



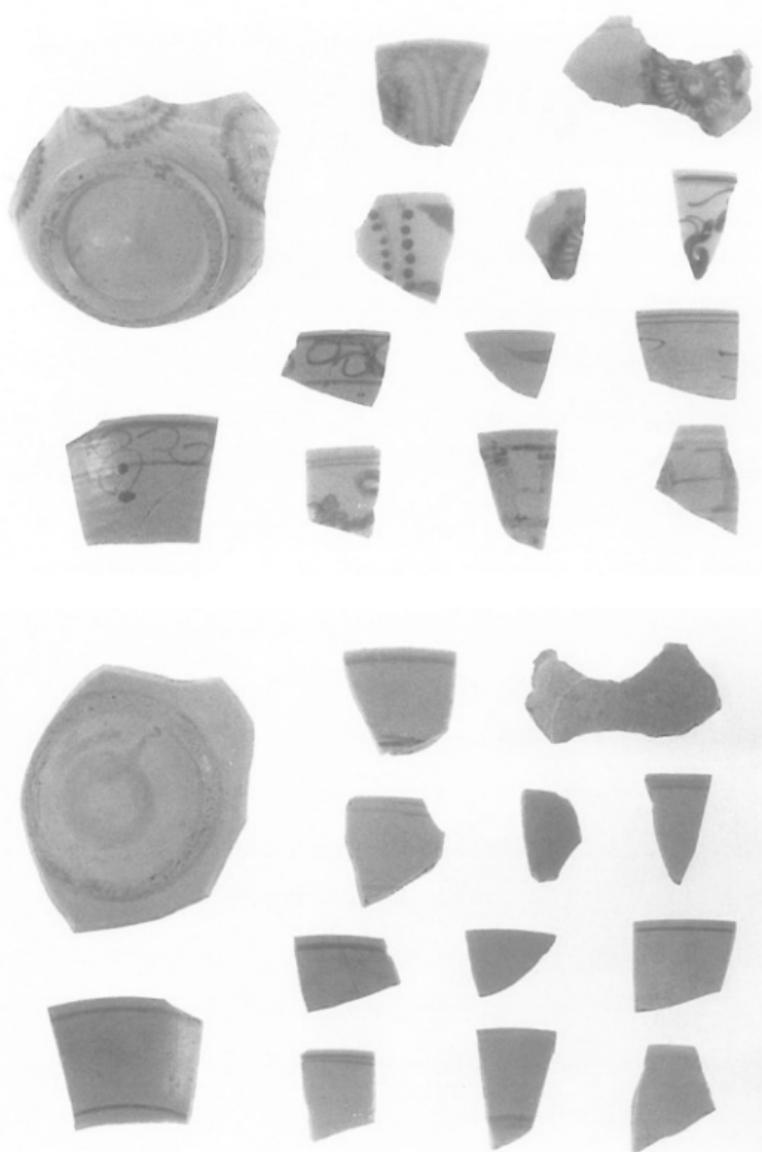
図版14 白磁碗d



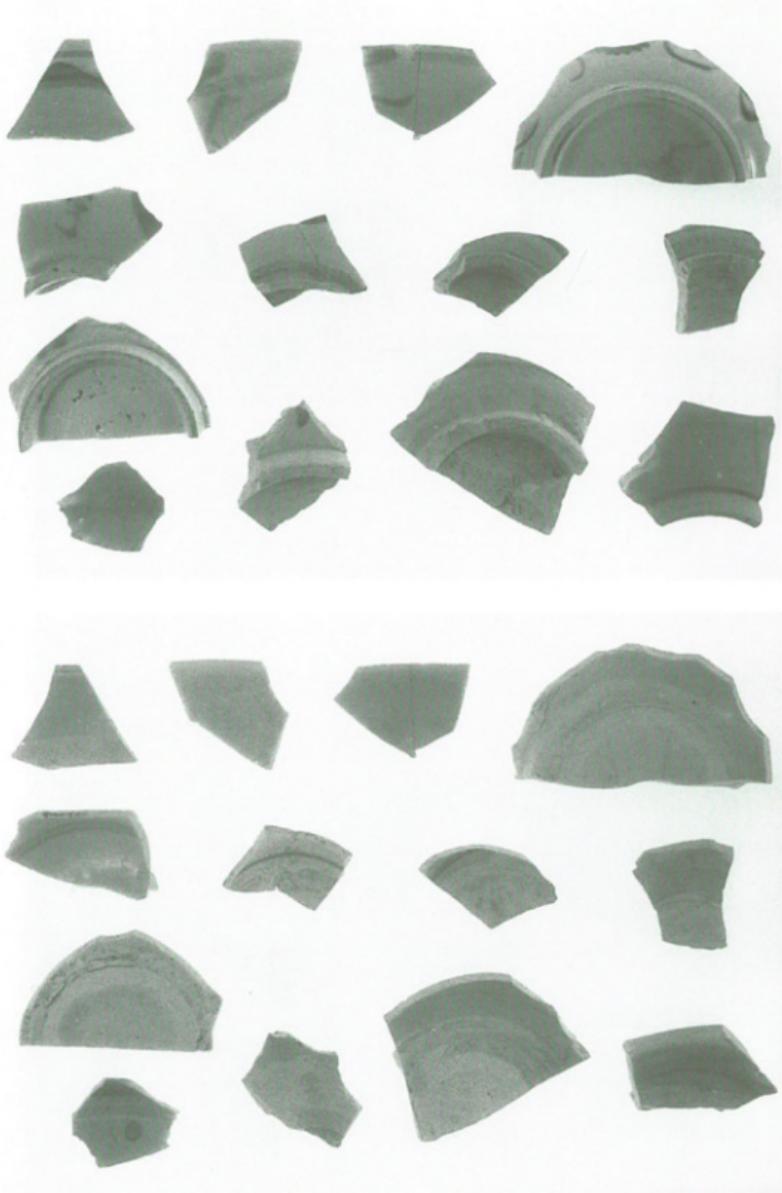
圖版15 白磁皿、杯、瓶



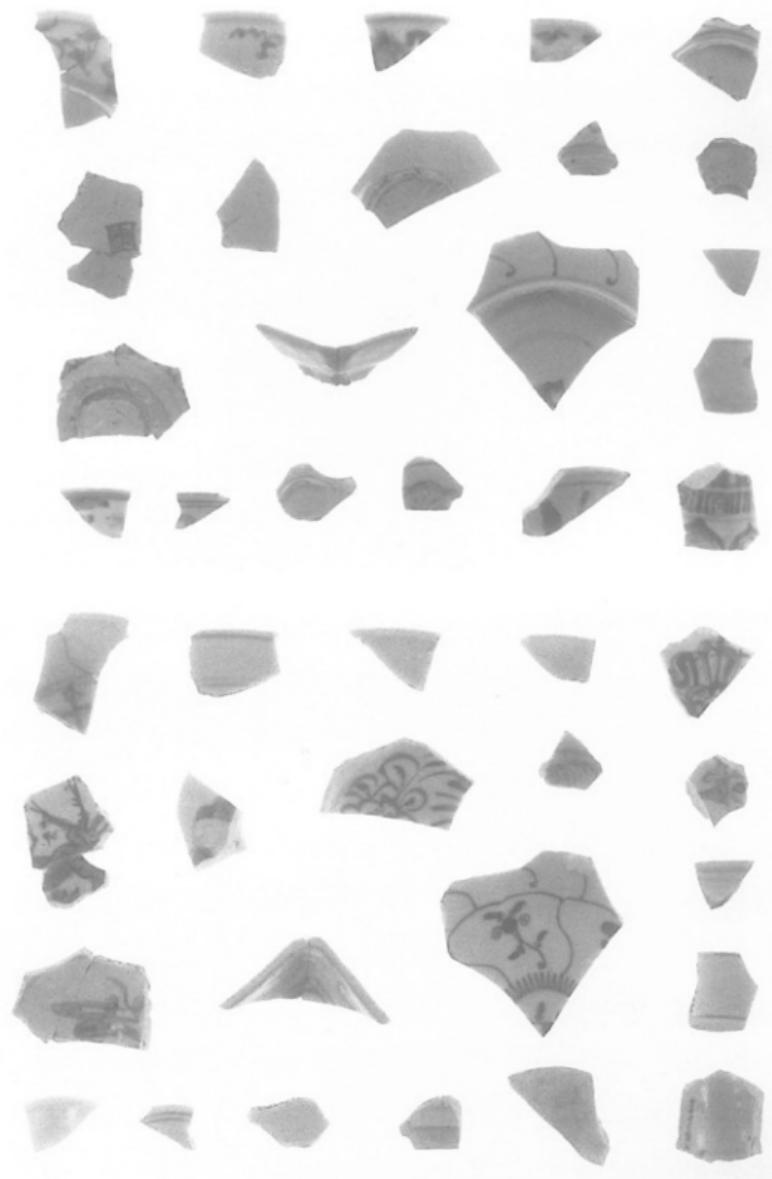
図版16 染付碗 a種、b種（上：外面、下：内面）



図版17 染付碗 c 種（上：外面、下：内面）



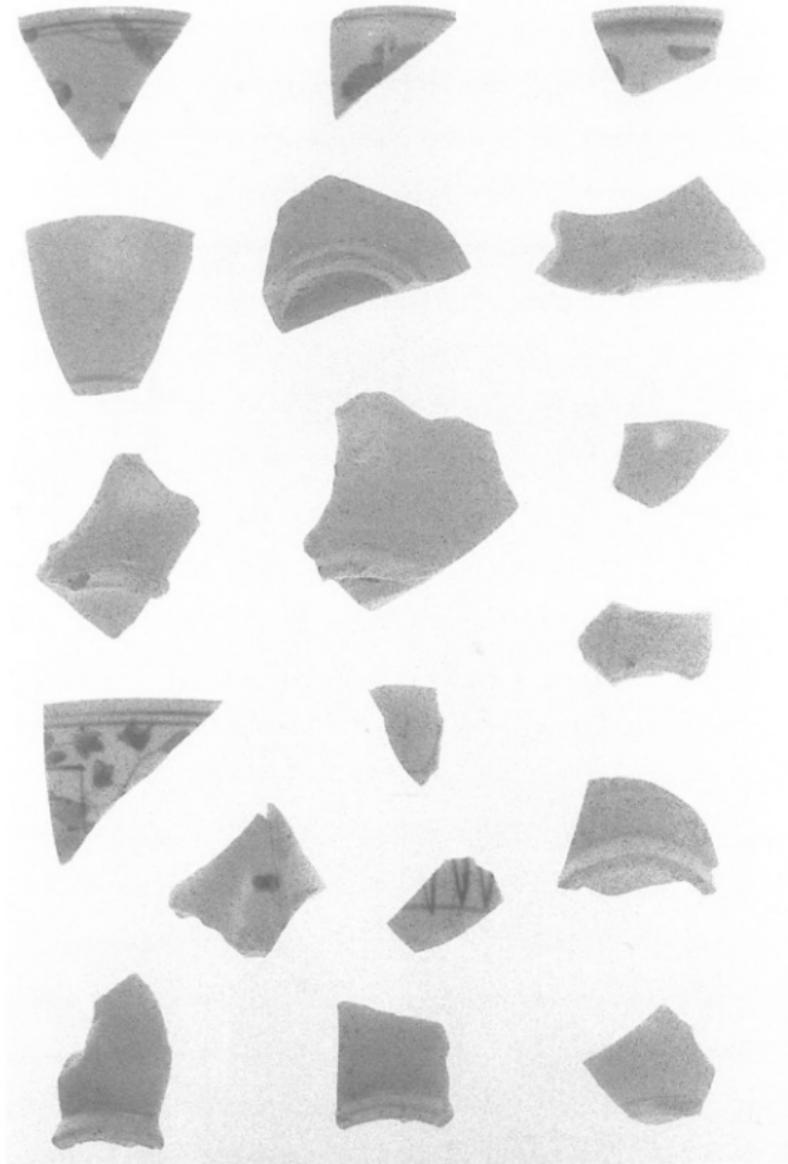
図版18 染付碗、鉢（上：外面、下：内面）



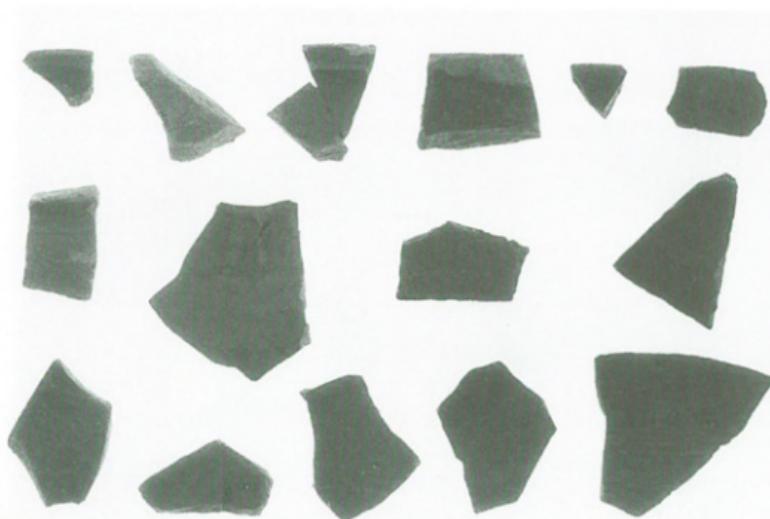
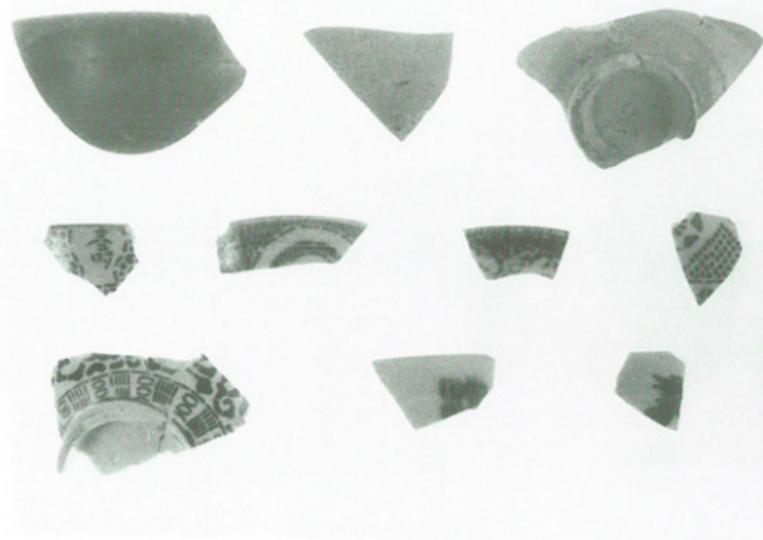
图版19 染付碗、皿、杯、合子、瓶（上：外面、下：内面）



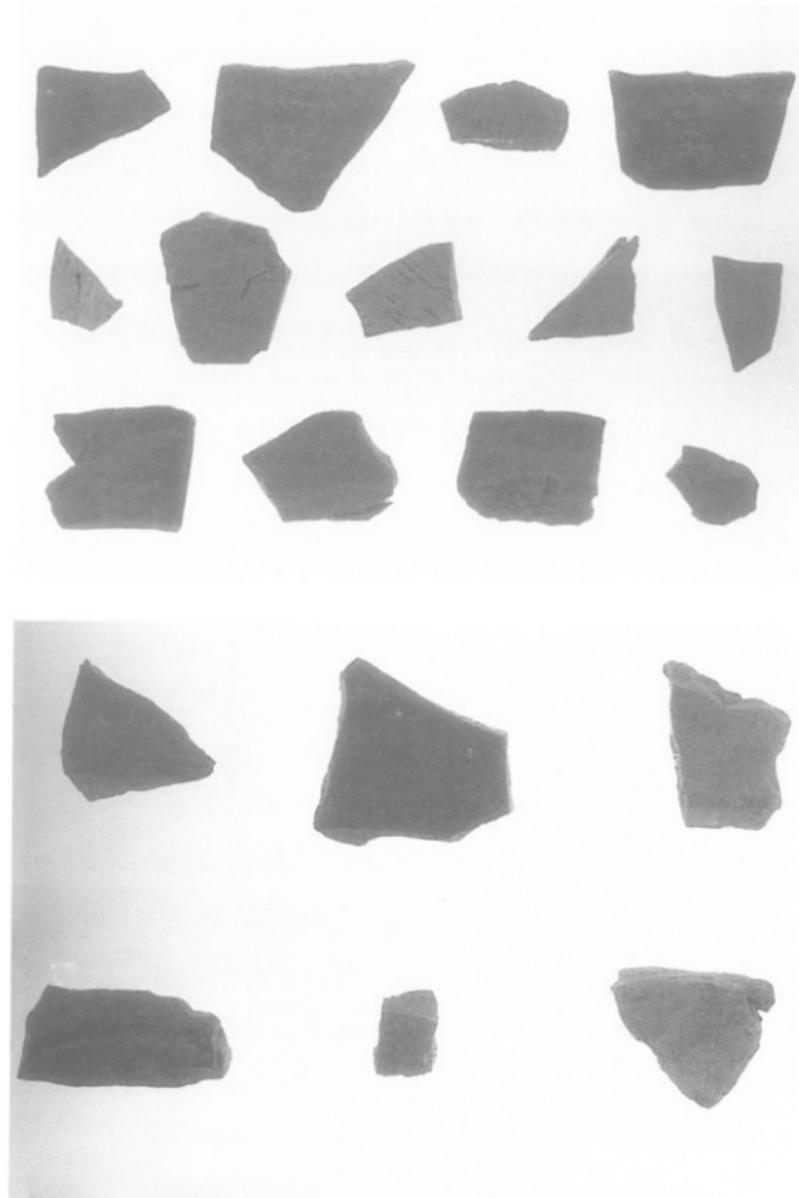
図版20 上：褐釉陶器、下：瑠璃釉・三彩・緑釉・タイ産鉄絵



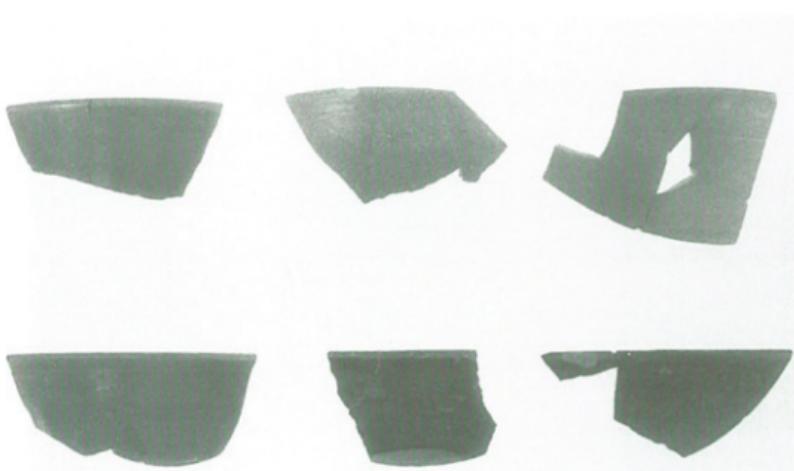
图版21 肥前系・伊万里系



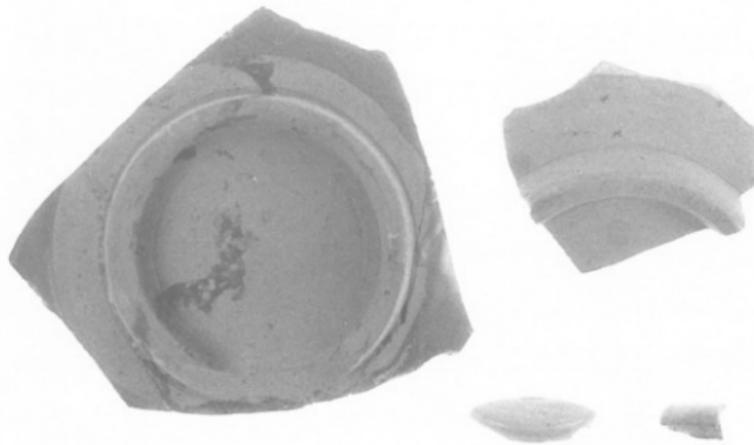
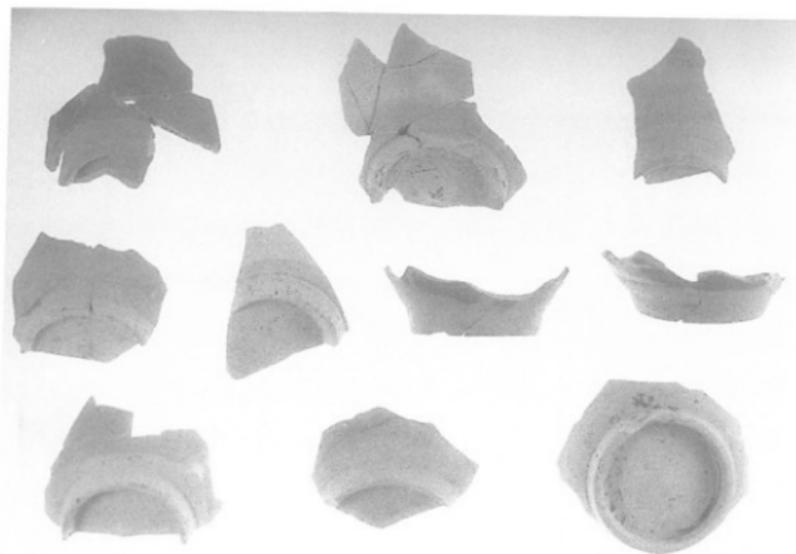
図版22 上：唐津系・肥前系、下：須恵器（口縁部・胸部）



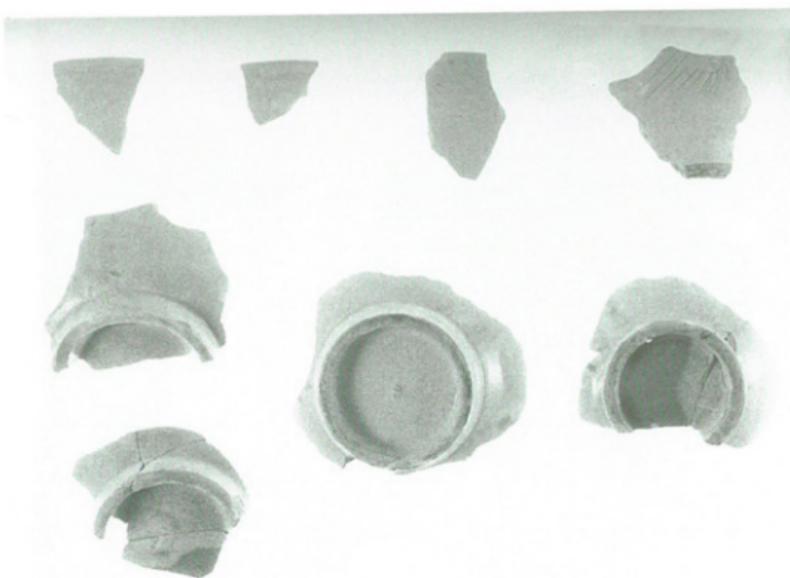
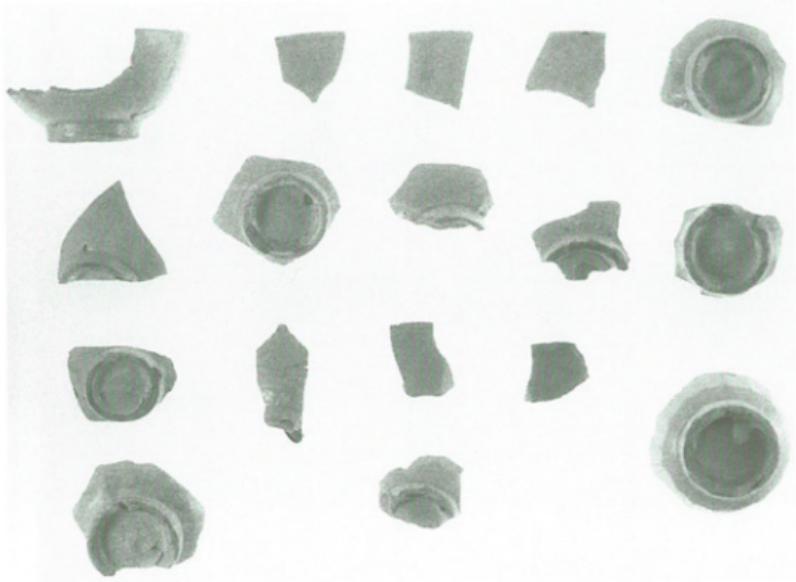
図版23 須恵器（上：胸部・底部、下：底部）



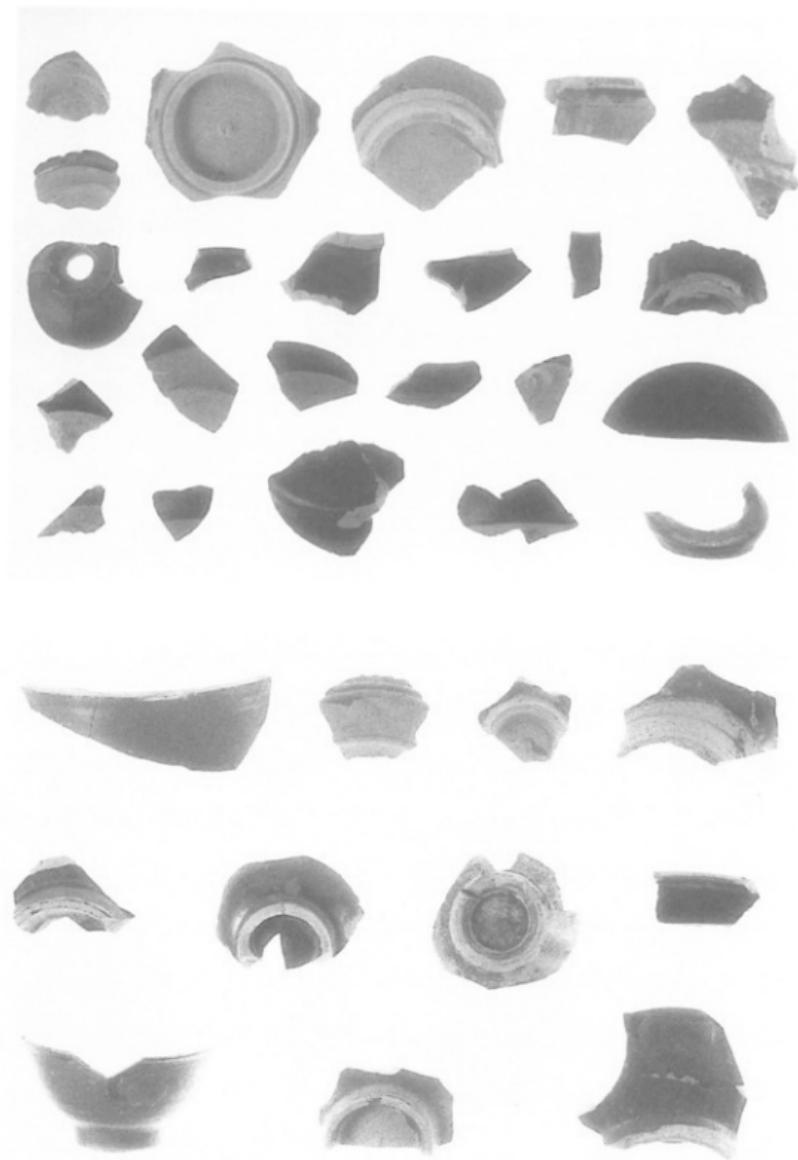
图版24 灰釉陶器碗（上：復元資料、下：口緣部）



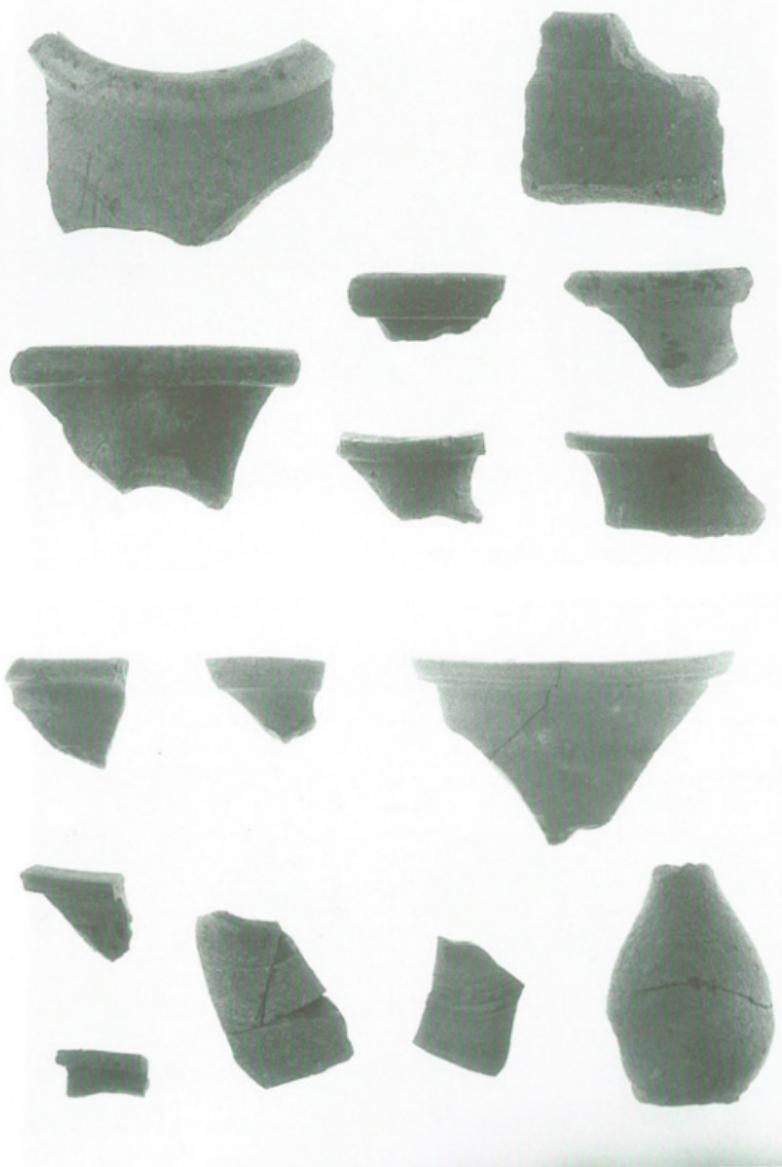
圖版25 灰釉陶器（上：碗底部、下：鉢底部・蓋）



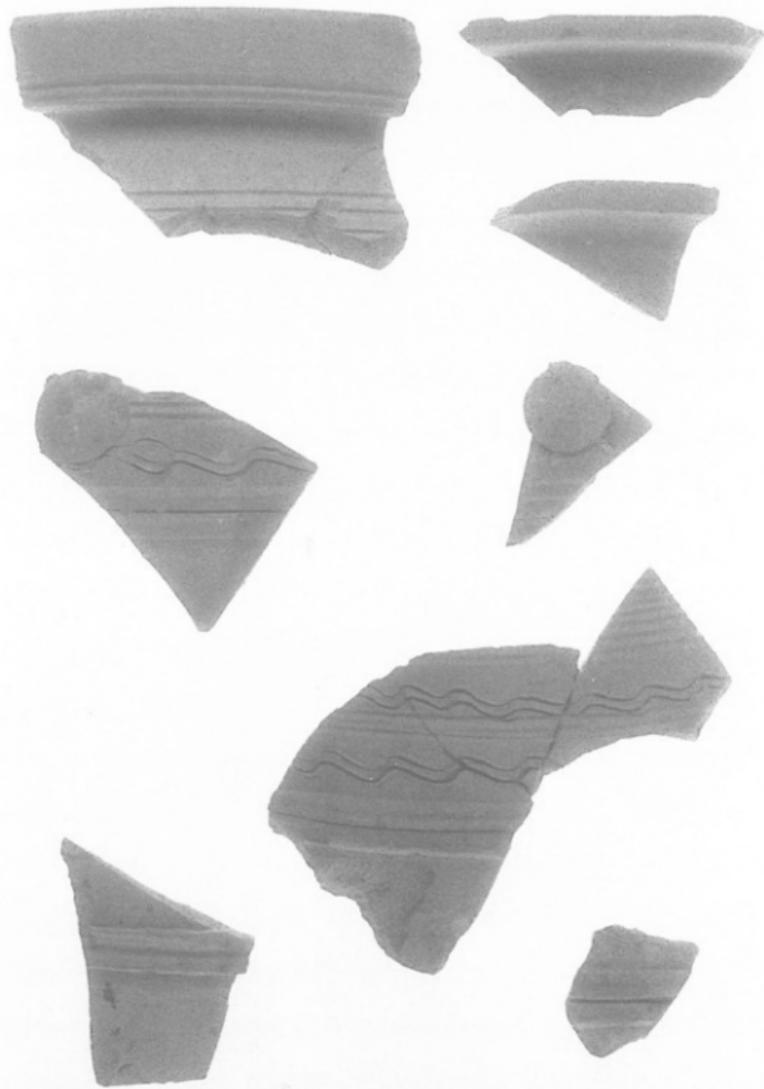
図版26 白釉陶器（上：小碗、下：碗）



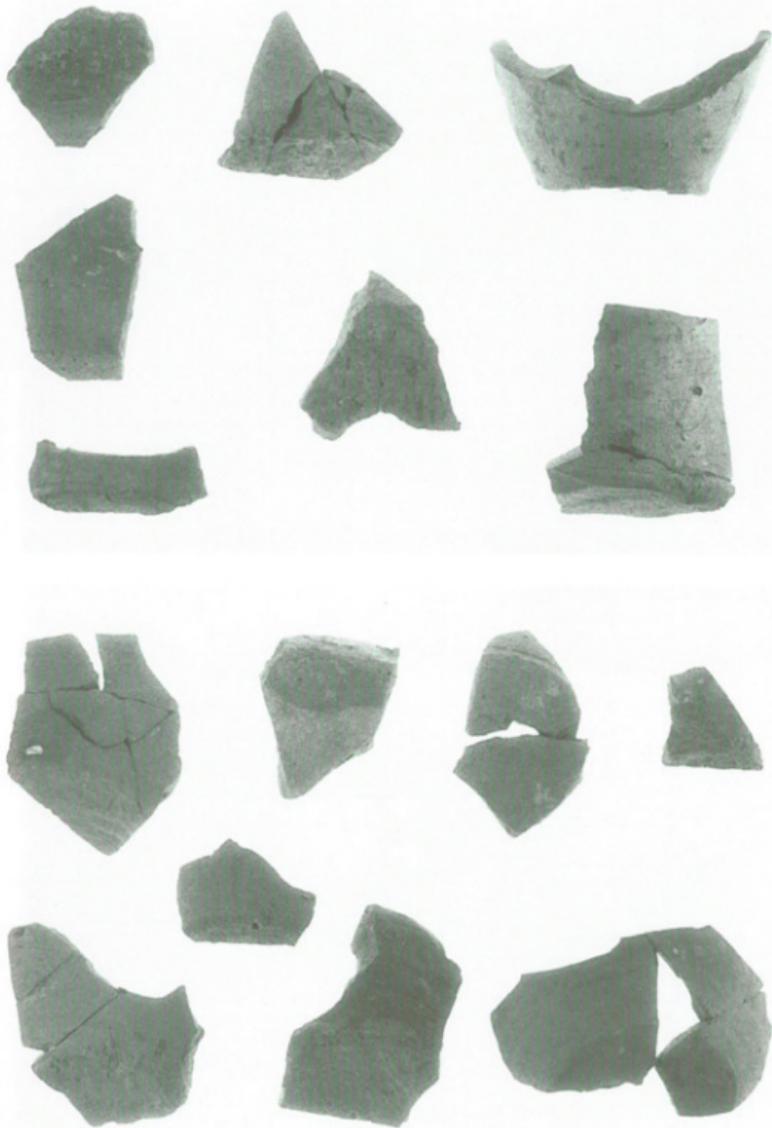
図版27 上：黒釉陶器、下：鉄釉陶器・掛分け



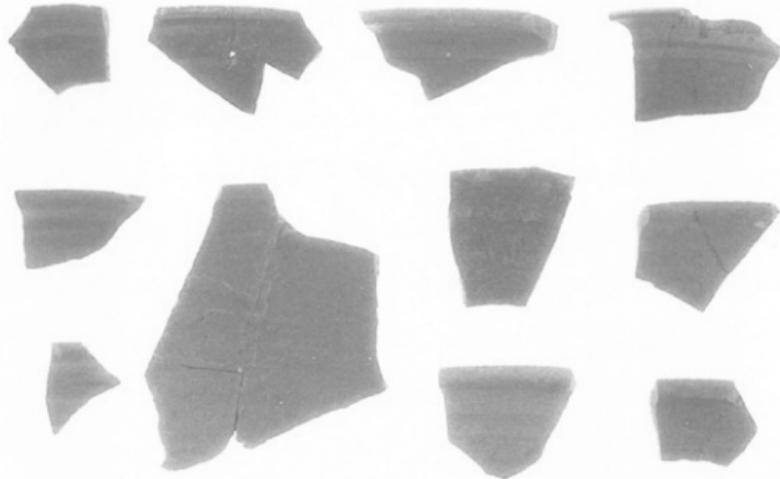
図版28 無釉焼き締め陶器 壺・瓶類



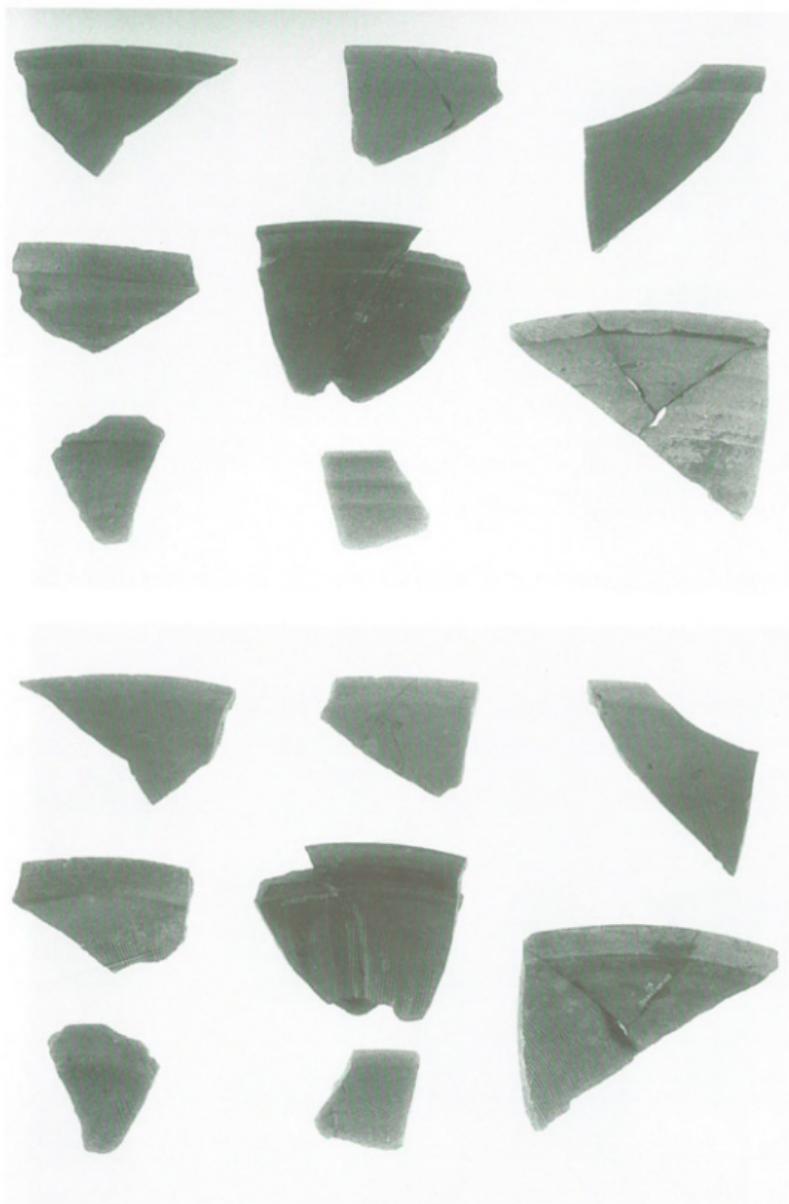
図版29 無釉焼き締め陶器 水壺



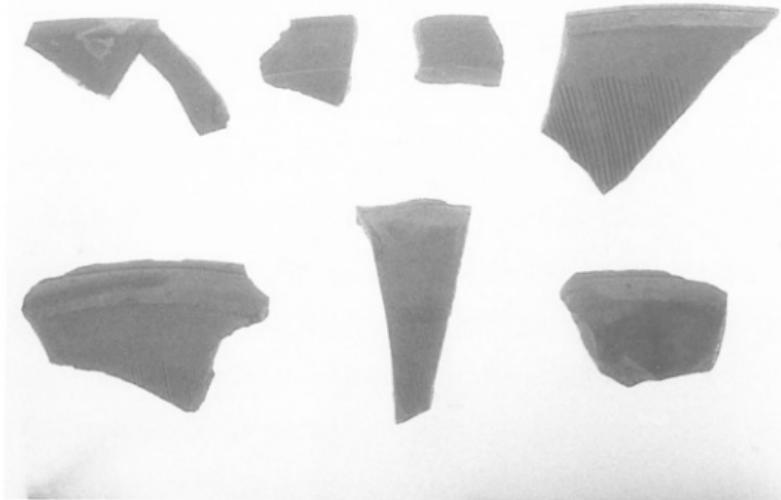
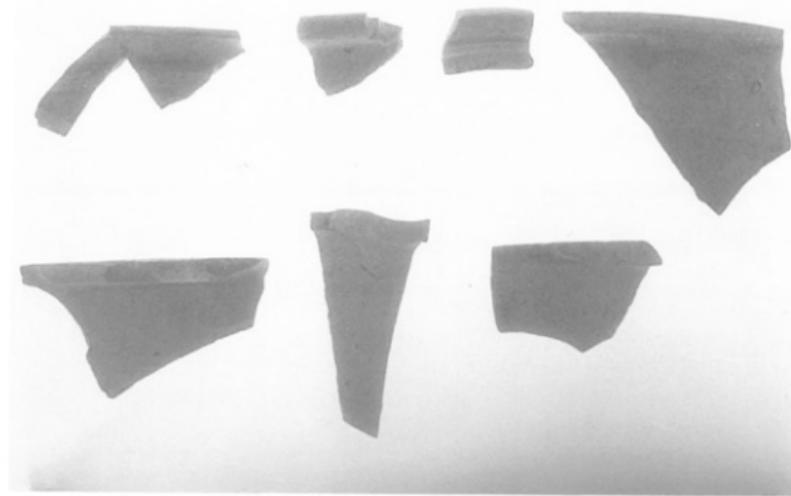
図版30 無釉焼き締め陶器 底部



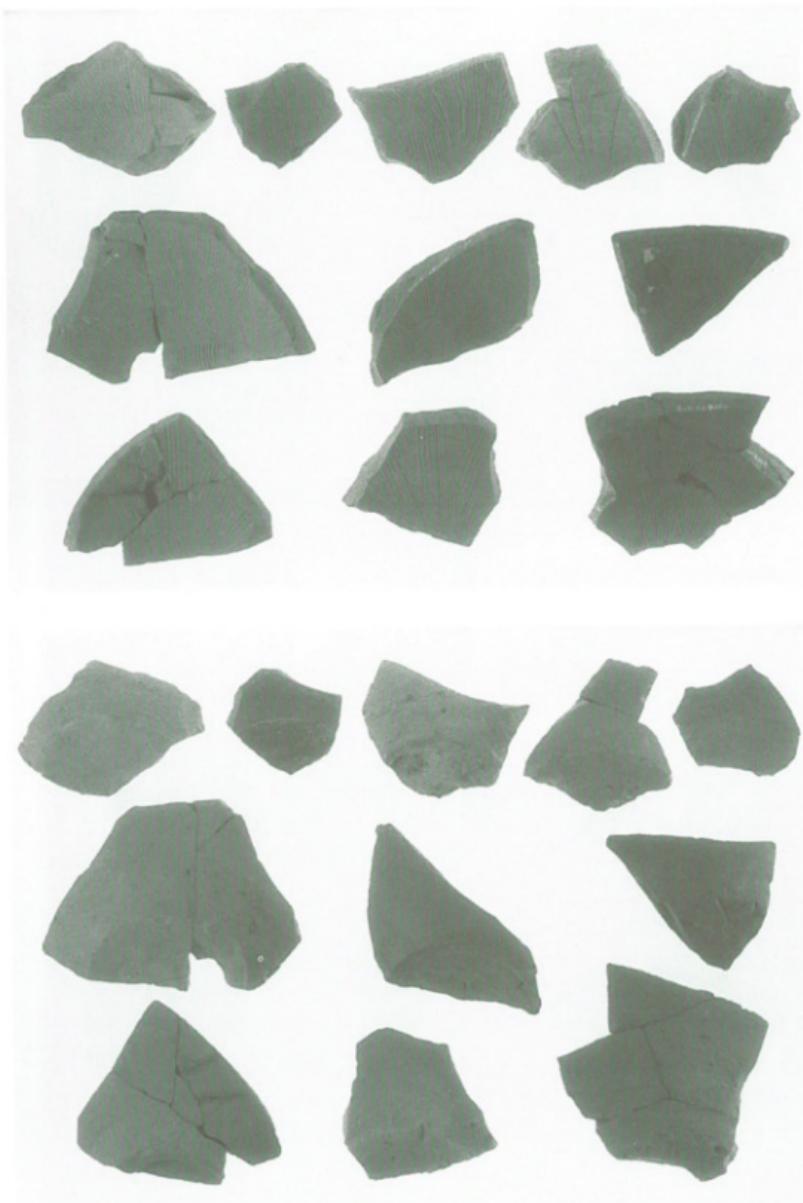
図版31 上：無釉焼き締め陶器（手水鉢・こね鉢・香炉）、下：摺り鉢 a種



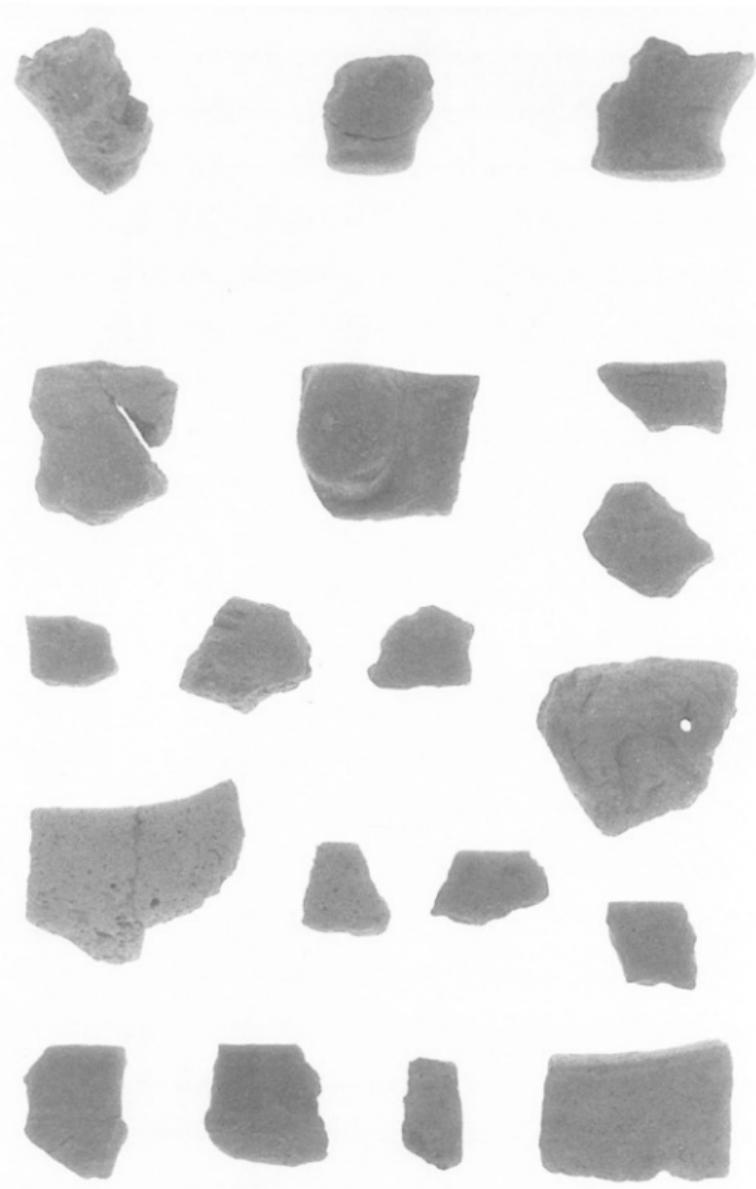
図版32 摺り鉢a種・b種（上：外面、下：内面）



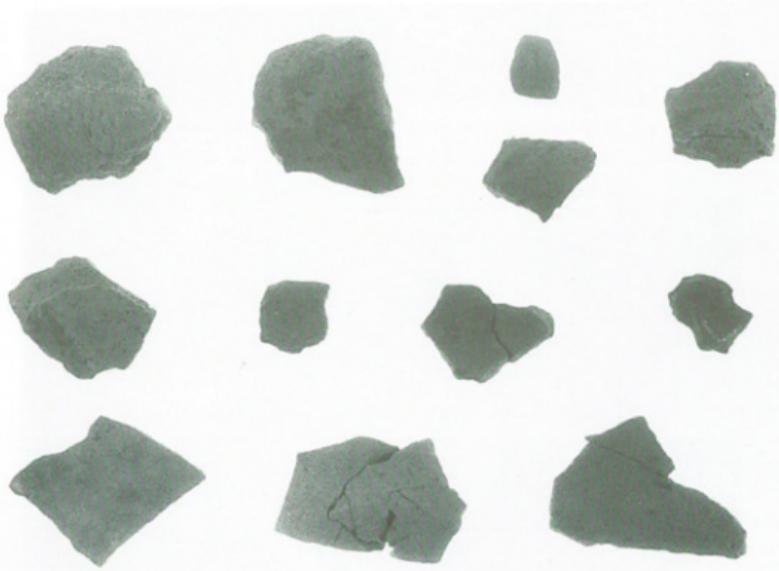
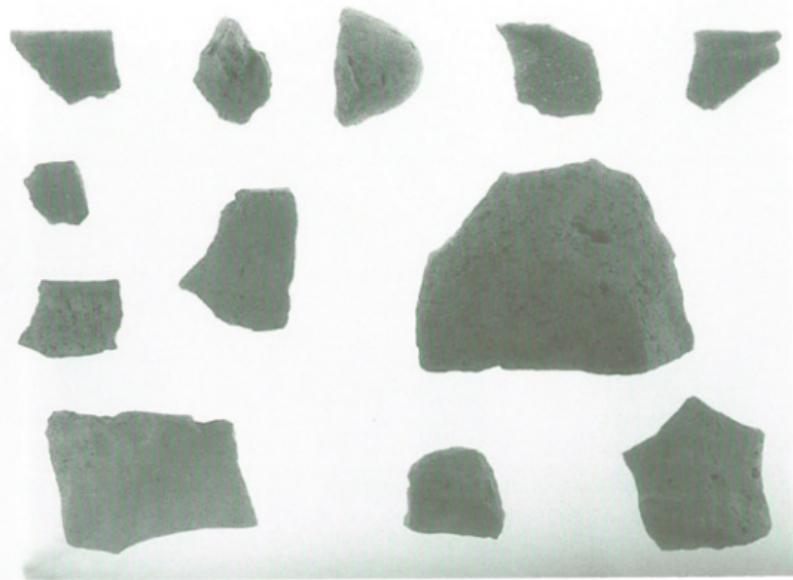
図版33 摺り鉢a種・b種（上：外面、下：内面）



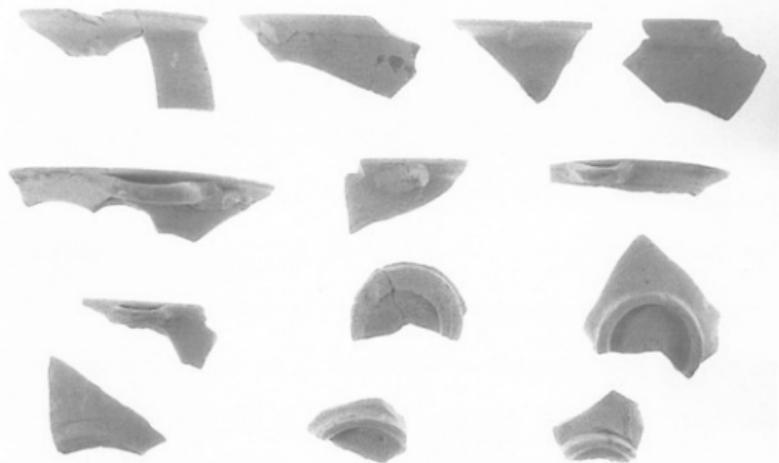
図版34 掘り鉢底部 a種・b種・不明（上：外面、下：内面）



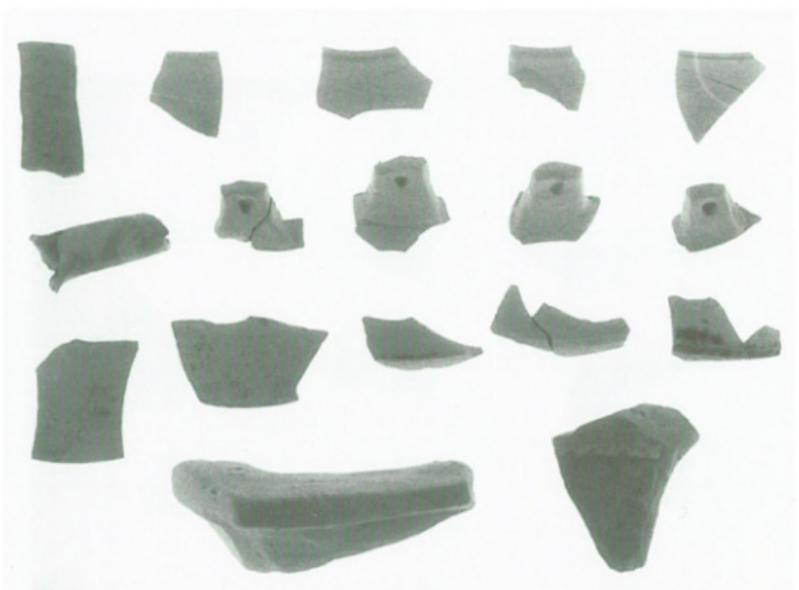
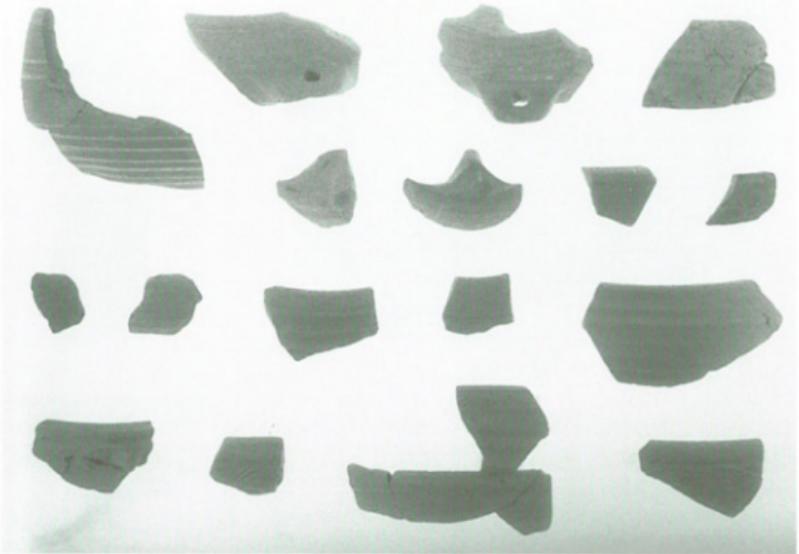
図版35 土器 第Ⅰ類・第Ⅱ類



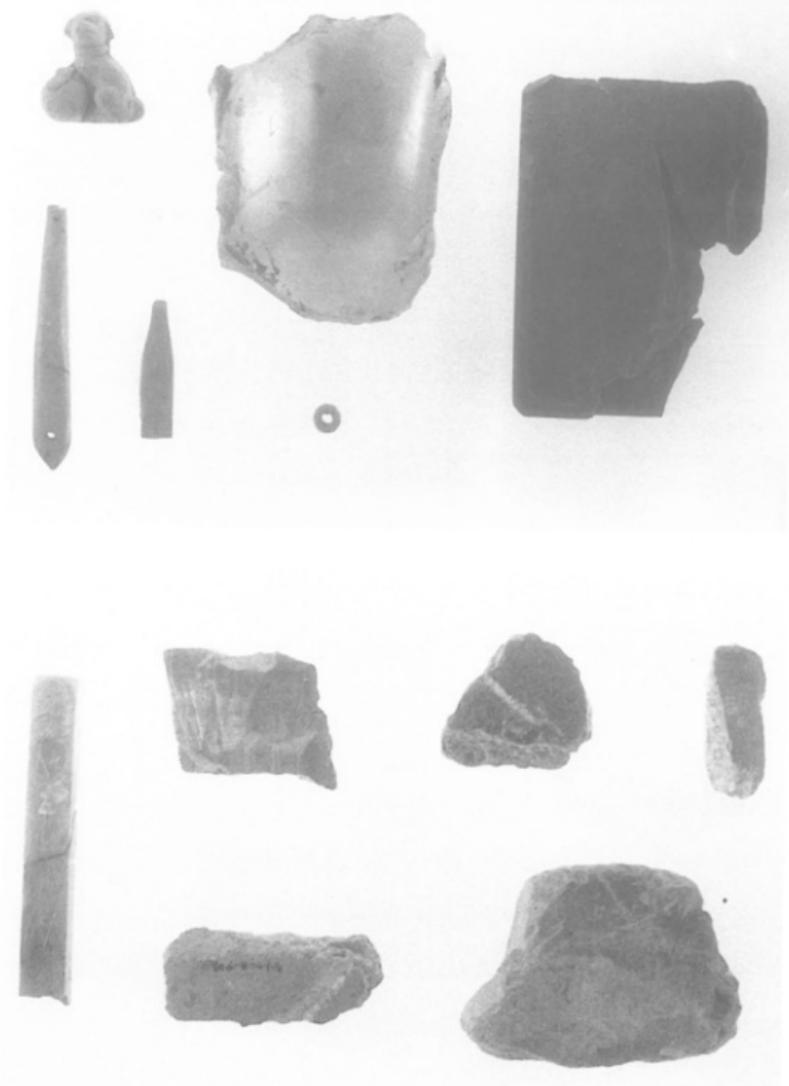
図版36 土器 第II類



図版37 陶質土器 鍋



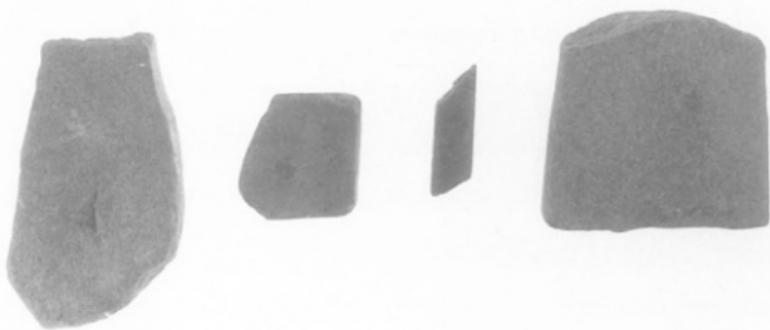
圖版38 上：陶質土器（火舍、手水鉢）、下：陶質土器（瓶・急須）、瓦質土器



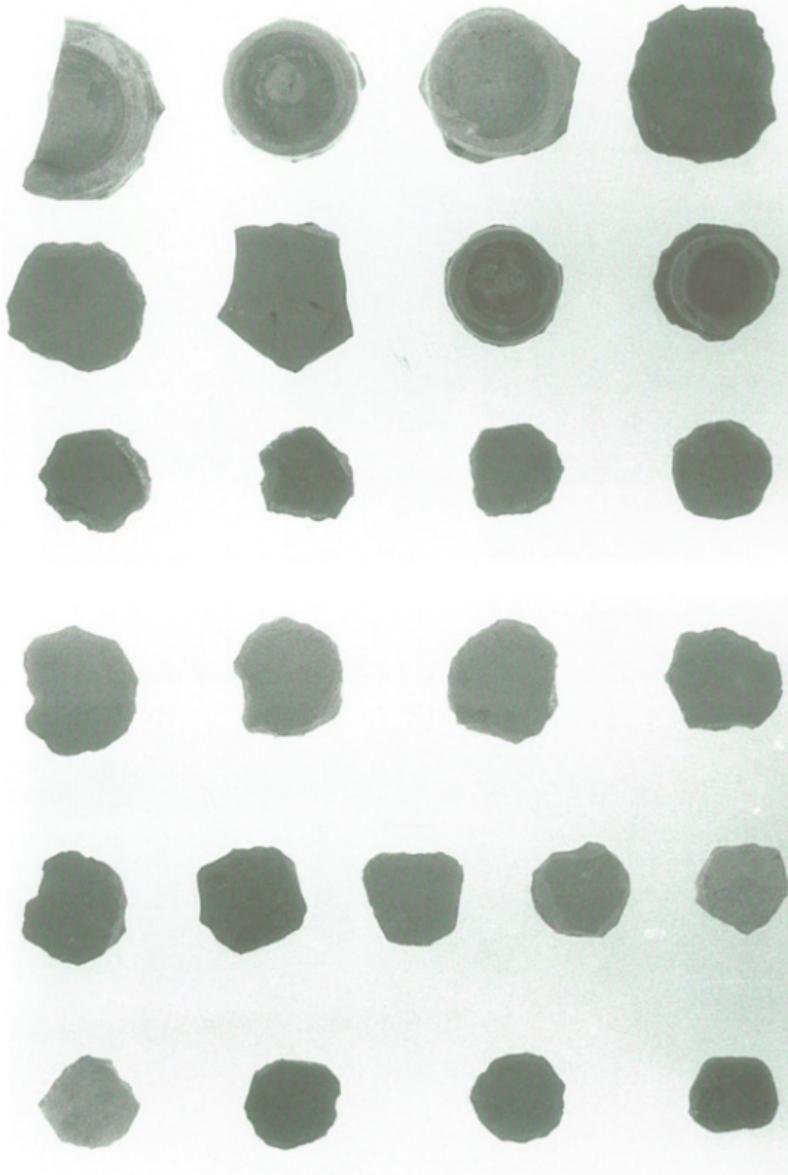
図版39 上：土製品・貝製品・骨製品・玉・琥珀、下：石製品：滑石



図版40 上：たたき石、下：磨り石・砥石



図版41 上：凹み石・石皿、下：用途不明



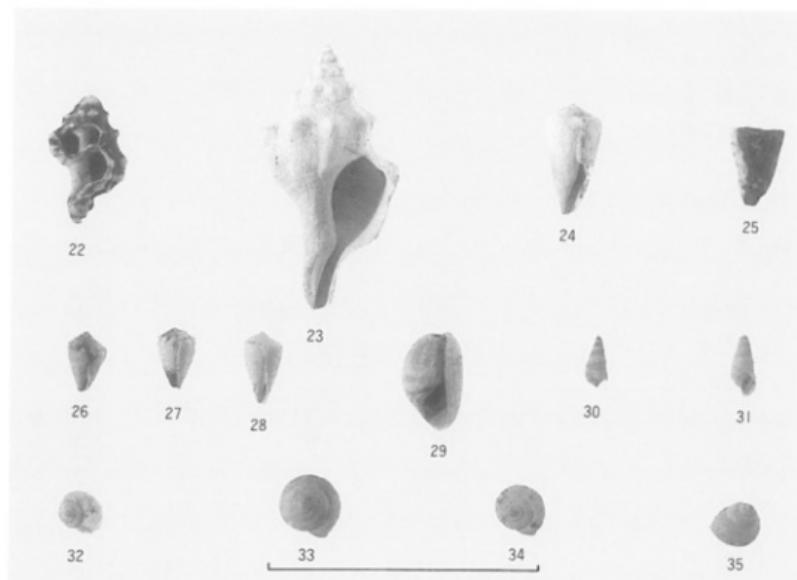
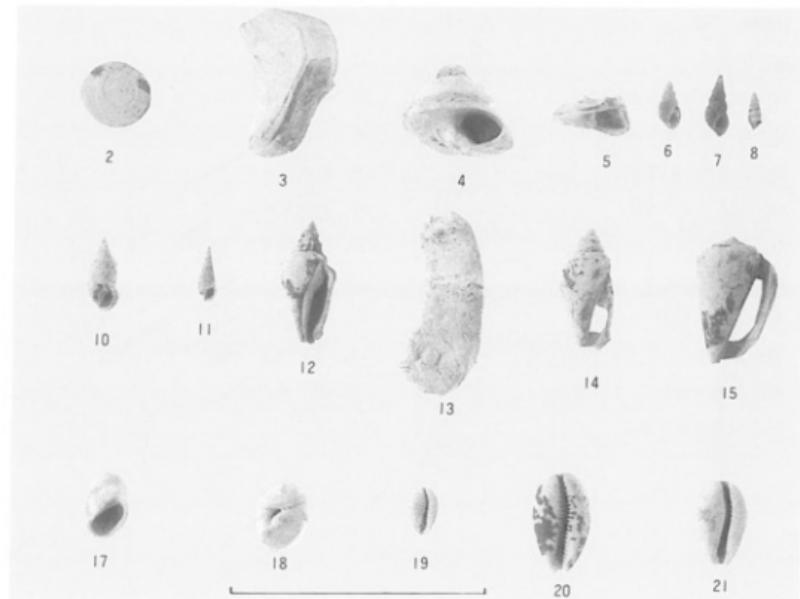
図版42 円盤状製品



図版43 上：煙管、下：青銅製品、鉄製品、古銭

図版44

- | | |
|----------------|------------------|
| 2. チョウセンサザエのふた | 12. オハグロガイ |
| 3. ヤコウガイ | 13. クモガイ |
| 4. サラサバティ | 14. ネジマガキ |
| 5. ニシキウズ | 15. マガキガイ |
| 6. トウガタカワニナ | 17. トミガイ |
| 7. ヌノメカワニナ | 18. ヘソアキトミガイ |
| 8. ウミニナ | 19. ハナビラダカラ |
| 10. クワノミカニモリ | 20. ヒメホシダカラ |
| 11. コゲツノブエ | 21. ホシキヌタ |
| | |
| 22. オキニシ | 29. ナツメンガイ |
| 23. イトマキボラ | 30. イボアヤカワニナ |
| 24. キスカツギイモ | 31. カワニナ |
| 25. クロミナシ | 32. オキナワウスカワマイマイ |
| 26. コマダライモ | 33. シュリマイマイ |
| 27. サヤガタイモ | 34. パンダナマイマイ |
| 28. ヤナギシボリイモ | 35. マルタニシ |



図版44 貝類

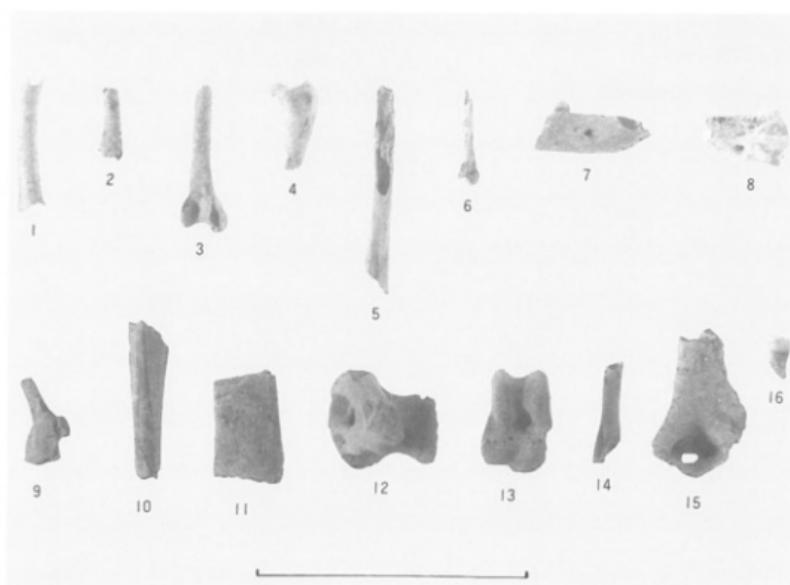
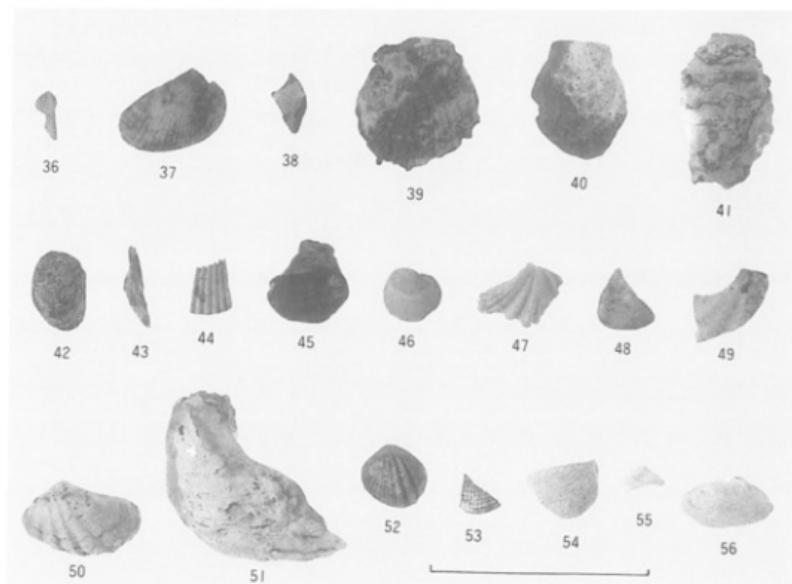
図版45 (貝)

- | | |
|----------------|-------------------|
| 36. エガイ | 47. シャゴウ |
| 37. リュウキュウサルボウ | 48. リュウキュウシラトリ |
| 38. カイシアオリガイ | 49. シラナミ |
| 39. ウミギク科不明 | 50. ヒメジャコ |
| 40. ミヒリメンガイ | 51. ヒレジャコ |
| 41. ヒレインコ | 52. アラスジケマンガイ |
| 42. ケイトウガイ | 53. アラヌノメガイ |
| 43. カフラガイ | 54. スノメガイ |
| 44. リュウキュウザルガイ | 55. スノメイチョウシラトリガイ |
| 45. ニセマガキ | 56. マスオガイ |
| 46. ウラキツキガイ | |

ニワトリ

- | | |
|----------|-------------|
| 1. L中足骨 | 11. 肋 骨 |
| 2. L胫 骨 | イノシシ |
| 3. R大腿骨 | 12. 環 椎 |
| 4. L ハ | 13. L距 骨 |
| 5. L上腕骨 | ネ コ |
| 6. R ハ | 14. R上腕骨 |
| イヌ | 人 骨 |
| 7. R下顎骨 | 15. R上腕 (♀) |
| 8. 環 椎 | 16. 菌 |
| 9. L肩甲骨 | |
| 10. R胫 骨 | |

ジュゴン



図版45 上：貝類、下：獸骨類

図版46 ウマ

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 切歯 | 6. LP ₄ |
| 2. RP ² | 7. LM ₁ |
| 3. LP ³ | 8. LM ₂ |
| 4. LM ¹ | 9. LM ₃ |
| 5. LM ³ | |

1. R肩甲骨

2. R桡骨

3. 中手骨（左右不明）

4. R踵骨

5. 中手・中足骨

6. 中節骨

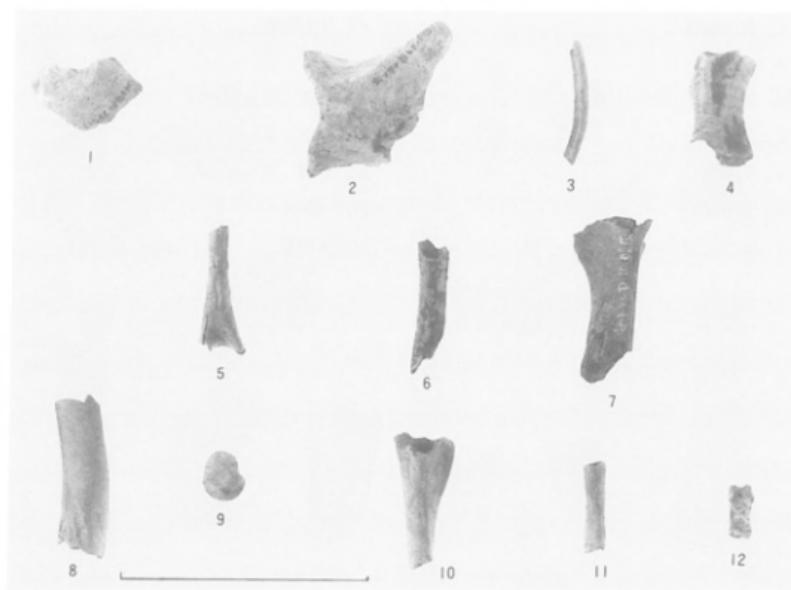
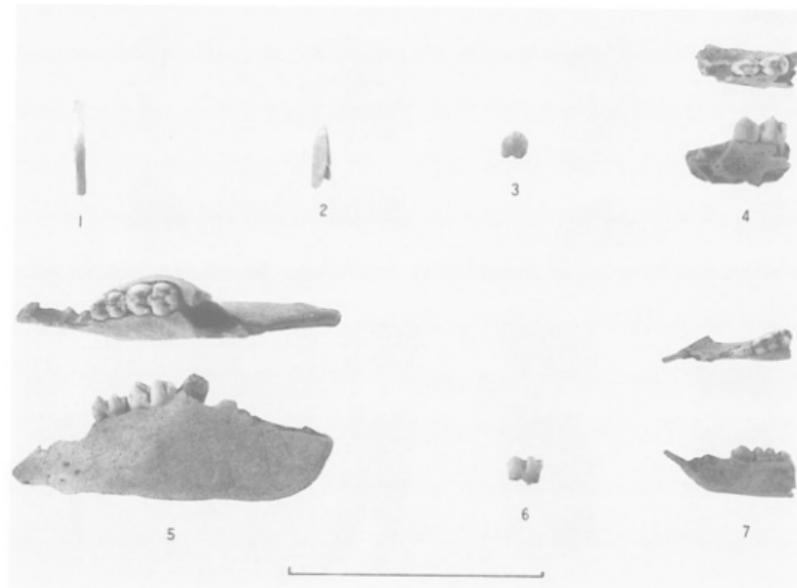


図版46 ウ マ

図版47 イノシシ

- | | |
|-----------------------|---------------------------------------|
| 1. I ₁ | 5. M _{1,2} |
| 2. 犬歯♂ | 6. M ₂ |
| 3. P ₃ | 7. i _i , dm _{3,4} |
| 4. P _{3,4} ♂ | |

- | | |
|---------|------------|
| 1. 頭頂骨 | 7. R寛骨 |
| 2. 後頭頸 | 8. R大腿骨 |
| 3. 肋骨 | 9. リ 骨端のみ |
| 4. 肩甲骨 | 10. R脛骨 |
| 5. R上腕骨 | 11. 中手・中足骨 |
| 6. R桡骨 | 12. 基節骨 |

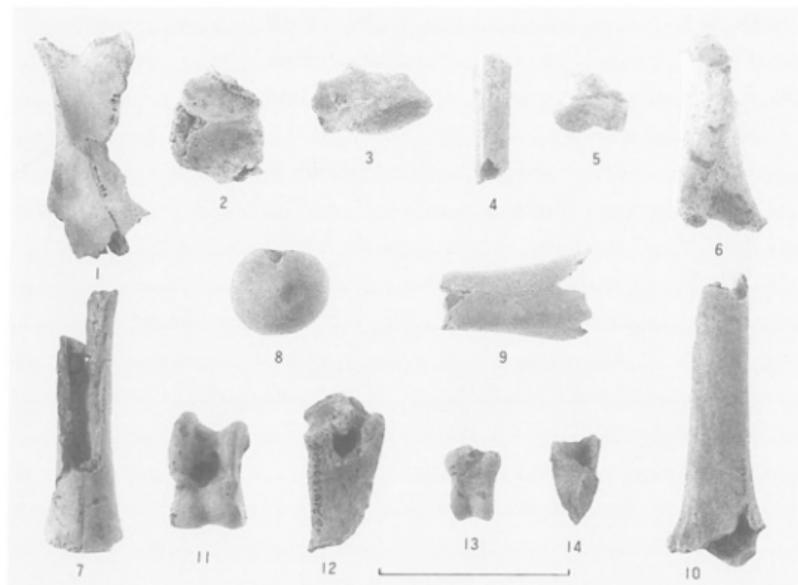
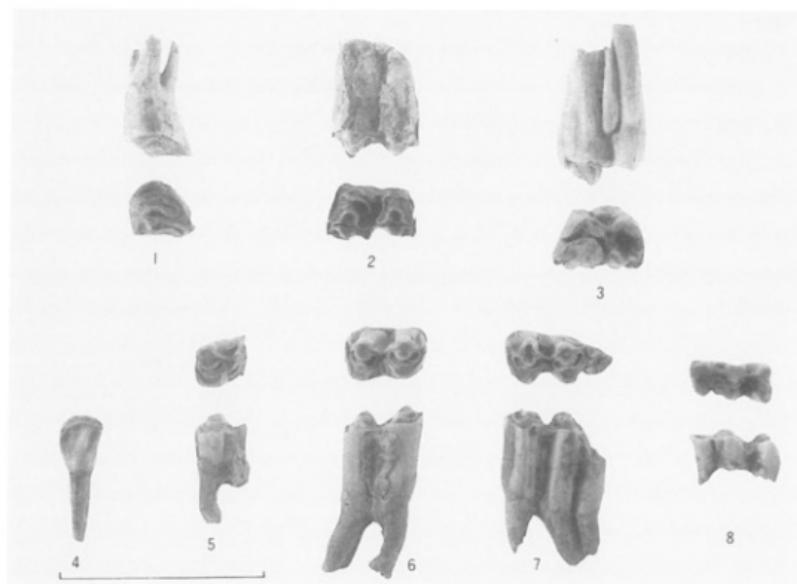


図版47 イノシシ

図版48 ウシ

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1. LM ¹ | 5. P ₄ |
| 2. LM ₁ | 6. RM ₂ |
| 3. LM ² | 7. LM ₃ |
| 4. 下顎骨 L C | 8. R dm ₄ |

- | | |
|---------|---------|
| 1. R下顎枝 | 8. R大腿骨 |
| 2. 椎体 | 9. L リ |
| 3. 仙骨 | 10. R脛骨 |
| 4. 肋骨 | 11. L距骨 |
| 5. R肩甲骨 | 12. L踵骨 |
| 6. L上腕骨 | 13. 中節骨 |
| 7. R中手骨 | 14. 末節骨 |



図版48 ウシ

図版49 ハサウエ

1. R P⁴

2. L M²

3. L M³

4. R M₃

5. dm_{3,4} M₁

1. 肋 骨

2. L肩甲骨

3. R上腕骨

4. R ハ

5. L ハ

6. R尺 骨

7. L ハ

8. R桡 骨

9. R ハ

10. L桡 骨

11. L中足骨

12. R大腿骨

13. L ハ

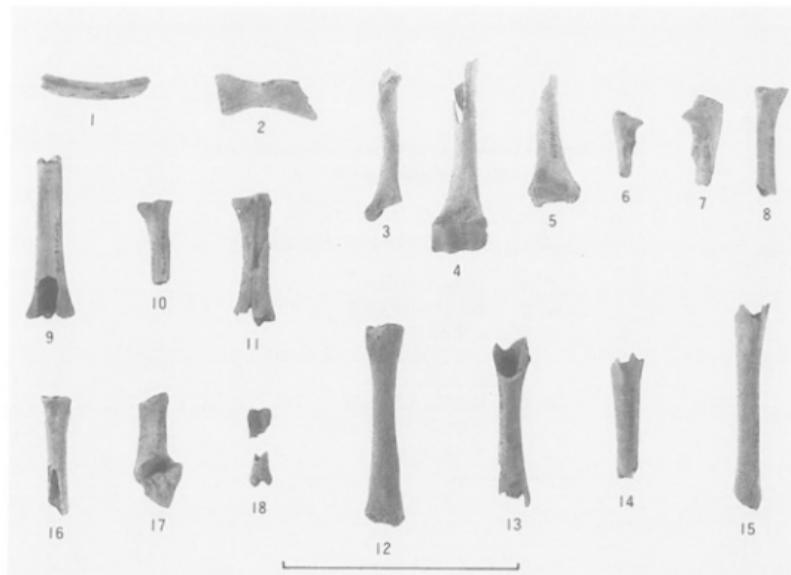
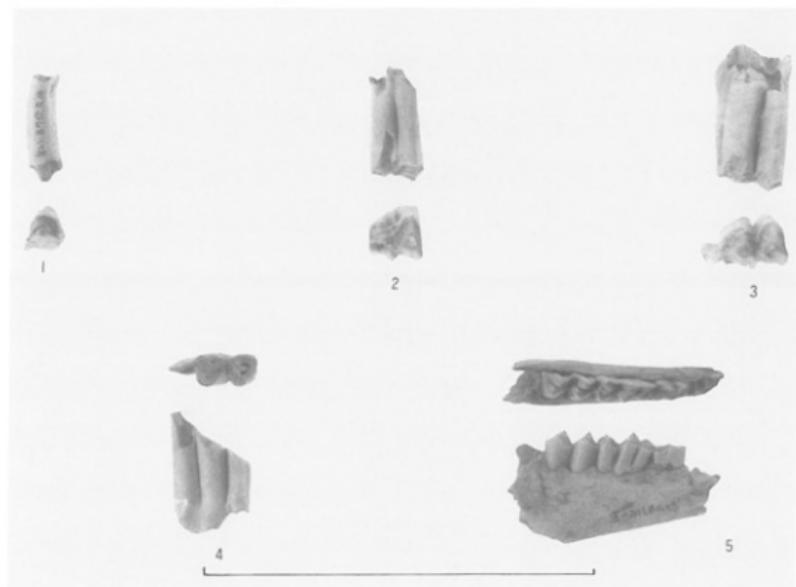
14. R胫 骨

15. L ハ

16. L中手骨

17. L踵 骨

18. 基節骨



図版49 ヤギ

沖縄県文化財調査報告書 第105集

安仁屋トウンヤマ遺跡

(一下級下仕官隊舎建設に伴う緊急発掘調査報告一)

発行年 1992年3月31日

編 集 沖縄県教育厅文化課

発 行 沖縄県教育委員会

〒900 那覇市泉崎1丁目2-2

TEL098-866-2731

印 刷 株式会社 近代美術

〒901-03 糸満市西崎町4-9-3

TEL098-992-4113㈹
